
トリックエンジェル

まーしゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリックエンジェル

【コード】

N2045M

【作者名】

まーしゃ

【あらすじ】

「二人のいたずら天使が、魔法使いの恰好をして別世界から現われて、最高のママと最高の科学者と最高のお医者さんを召喚して不治の病気の女の子を治す。」

これは院内学級にだけに伝わる秘密の物語「トリックエンジェル」。
この話を信じて特別小児病棟の難病の子供たちは辛い入院生活に立ち向かう。

病気と一生懸命戦う子供達とその家族、病院の医師、看護師、幼

稚園や学校の先生たち、そしてとんでもないいたずら娘たちが織り成すちよっぴり切なくて、ちよっぴり笑える物語です。

1 - 1・舞(まい) (前書き)

原因不明の不治の病に苦しむ舞。お医者様にも見放され、自宅療養を続ける舞。母も同じ病で夭折し、男で一つで舞を育てるあきら。しかし、無理がたたってあきらも病に倒れる。そして、急変する舞。雪の中、病院に急ぐ二人。しかし、二人は力尽きその場に崩れ落ちる。

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

1 - 1 . 舞 (まい)

神は本当にいるのか？ いるならなぜこんなに俺たちに試練を与えるんだ。

あきら：「舞、舞」

舞の手がだらりと下がる。おれも目の前が真っ白だ。ここで俺たちは終わるのか。

ひざを着き崩れ落ちた。

女性：「楠木さん、楠木さん、しっかりしてください。まいちゃんもすっかりして。だれか、だれかいませんか？ 助けてください」

遠くなる意識。車の音。誰かに抱かれている。温かい。

- - - - -

夢を見た。小さな女の子とどこか知らない場所を歩いている。どこに行くのだろう。このまま二人で。後ろから呼んでいる。女の人だ。何言ってるんだろう。行くなつていつているようだ。

冬子：「楠木さん行ってはだめです。」

目がさめた。

あきら：「ここは？」

冬子：「病院です。町外れの。」

あきら：「そうか。…う、舞は！」

冬子：「意識不明の重態です」

起き上がり行こうとするが思うように動かない。

冬子：「楠木さん、だめです。楠木さんも酷い熱です。肺炎を起こしかけてます。」

あきら：「舞に会いたい。どけ！」

冬子：「だめです。今は身体を治すことに専念してください。舞ちゃんは祐美子さんが見ています。第一、集中治療室ですから、病人の楠木さんが会うことはできません。」

冬子：「楠木さん無理すぎです。何でも自分で背負い込むのはだめです。冬子とっても心配です。」

あきら：「しかし、舞も心配だ」

冬子：「大丈夫です。意識はありませんが、今は小康状態です。最悪の事態は脱しました。」

それを聞いた俺は再びベッドに身体を休め、眠りについた。

次の日

祐美子：「あきらさん、調子はいかがですか？」

あきら：「ああ、だいぶ良くなりました。熱はまだありますが」

健一：「このばかやろう！舞を殺す気か。冬ちゃんが偶然見つけなければ二人とも雪の中で死んでたぞ」

あきら：「冬子が？」

祐美子：「ええ、倒れている二人をみつけて、助けを呼んで。そのとき偶然、この病院に勤めている草薙先生という方が車で通りかかって、助けてくれたんです。」

あきら：「そうだったのか。それで、舞は？」

祐美子：「相変わらず意識不明です。」

あきら：「そうか。」

健一：「後で冬ちゃんが見舞いに来る。御礼をちゃんといっとくんだぞ。」

祐美子：「私たちは、舞のそばについています。だから安心して身体を休めてください。」

健一：「あきら、俺たちは家族だ。一人で背負い込むな。」

二人が出て行く。

冬子は、この秋くらいからうちにちよくちよく来て夕飯を作ってくれたり、舞と遊んでくれていたりした。

まるで妹のように可愛がってくれた。舞を懐柔するが目的といった。

でも、毎日のように来てくれるようになり、幼稚園のお迎えまでお願いするようになって、俺自身が冬子に懐柔されつつあることに気づいた。

和恵が生きていればきつとこんな感じの家庭になったんだと思いつながら。

でも、罰があたった。舞が和恵と同じ病気になったのは、俺が幸せを望んだからだ。

和恵と結婚して幸せを望んだからだ。舞との幸せな生活を望んだからだ。

冬子との生活を望んだからだ。冬子を遠ざけていればこんなにはならなかったのに。

そう考え、冬子を遠ざけた。

冬子：「楠木さん、調子はどうですか？」

あきら：「ああ、だいぶ良くなった。」

冬子：「それはよかったです。」

あきら：「助けてくれてありがとうな。」

冬子：「えへへ」

あきら：「でも、どうしてあんなところにいたんだ？」

冬子：「楠木さんちに行こうとしてたんです。」

あきら：「来るなと言ったはずだが。」

冬子：「響子ちゃんが家に来たんです。それで、こういったんです。『自分の思いをぶつけないと後悔するぞ』って。なんだかとても説得力のある言い方でした。」

あきら：「…」

冬子：「それで、判ったんです。私、舞ちゃんと楠木さんのそばにいたいって。それで、断られてもいいからいすわるうって思っただんです。」

冬子：「そうしたら二人が倒れていて冬子びっくりでした。」

あきら：「俺にかかると不幸になるぞ。おまえも一時は大分苦労したんだ。また、不幸になることなんてないぞ。」

冬子：「不幸なんて思っていないですし、もし、それが不幸でも、それが人生です。冬子、後悔したくないです。」

あきら：「そうか。」

冬子：「まず、身体を治してください。からだの調子が悪いと悪い方向ばかり考えてしまいます。治ってからゆっくり考えましょう。」

あきら：「そうだな。」

冬子：「それでは、冬子今日は帰ります。」

冬子は同じ高校の1学年下だった。和恵の幼馴染で高校時代、俺と和恵と冬子の3人でよくつるんで遊んでいた。

冬子は高校卒業後、調理師学校に進み、東京のホテルでコック見習を行っていたが、周囲の人間や上司と合わずこの街に戻ってきた。料理の腕はいいのだが、人見知りで周囲への気遣いに疲れてしまい、失意の中この前の秋戻ってきた。

夕方、響子が見舞いに来た。舞の幼稚園の先生で俺の高校のクラスメートである。

響子：「やつほー、元気？　ってそんなわけ無いか」

あきら：「だいぶ元気になった。」

響子：「そっか、元気にならないとからかいようがないからな。」

あきら：「勘弁してくれ。」

響子：「冬ちゃんちにこの前いったんだ。」

あきら：「ああ、冬子から聞いた。」

響子：「大事にしてやれよ。いい子でしょ。」

あきら：「おまえなあ。」

響子：「和恵ちゃんも冬ちゃんなら許してくれるよ。和恵ちゃん

とあきらと冬ちゃん、で高校のとき何時もつるんでたじゃない。」

あきら：「……」

和恵は微熱が続く原因不明の病気になり、無理をして舞を生んだ時に天国に召された

まだ、元気だった高校時代、和恵と俺と冬子はいつも一緒にいた。俺と和恵の仲を取り持ってくれてのも冬子だ。和恵と冬子はまるで姉妹のようだった。

響子：「私もつくづくお節介だよね。自分の思いを貫ければいいけれど、大人になって、周りが見えるようになってだめだね。冬ちゃんみたいないな一途さがうらやましいわ。」

あきら：「????」

響子：「そうそう、今度つかさがこの町にやってくる。この病院で看護婦やるから、仲良くしてね。」

あきら：「つかさが？ 久しぶりだな。懐かしい人がくるのはうれしいな。」

つかさは響子のいとこで、何回かあったことがある。

響子：「まいちゃんも早く治るといいね」

あきら：「ああ」

響子：「大丈夫だって、信じてれば必ず治るって。パパがそんな元気がないとダメだぞ。」

あきら：「ああ」

響子：「じゃ、またね。元気出しな。」

- - - - -

相変わらず、舞は目を覚まさない。

自分は退院の日を迎えた。

今日は俺もまいの集中治療室に入ること許された。

冬子も入ろうとしたが、止められた。

看護婦：「ご家族以外の方は。」

あきら：「冬子は家族だ。入れてやってくれ。」

看護婦：「そうですか。それならどうぞ中に」

冬子のはつとして俺の顔を見た。そしてうれしそうに微笑んだ。

祐美子さんと健一が待っていた。祐美子さんと健一さんは死んだ和恵の両親だ。

あきら：「まい……」

祐美子：「手を握ってあげてください。」

あきら：「ああ」

温かい。

祐美子：「死んだらこの温かさは感じられません。これだけでも感謝しましょう。」

あきら：「ああ、そうだな。前向きに考えよう。」

健一：「先生が話をしたいそうさ。家族に聞いて欲しいそうさ。」

嫌な予感がする。だが、逃げるわけには行かない。

あきら：「ああ」

4人で向かう。

面談室で先生が待っていた。

山田：「主治医の山田です。」

祐美子：「お世話になってます」

俺も頭をぺこっと下げる

山田：「ほかならぬ舞ちゃんのことです。現在、小康状態が続いていて命の危険はひとまずないのですが。」

皆黙って聞いている

山田：「今のままでは、目を覚ますことは難しいと考えています。正直申し上げまして、原因不明で私には手の施しようがありません。」

ある程度覚悟していた言葉だった。

あきら：「意識がないとしても生きてけるんですよ。余命3ヶ月とかそういう話じゃないですよね。」

山田：「ええ、そういう話じゃないんです。色々手を尽くしてありますが、ただ、長くなりそうです。」

祐美子：「はい、先生にはいつも感謝しています。ありがとうございます。」

あきら：「まいをどうか宜しくお願いします。」

そういうしかなかった。何年もたって意識を取り戻すこともある。今あせつてもしょうがない。俺は自分に言い聞かせた。

.....

2、3日した後、我々4人は山田先生に呼ばれた。舞は相変わらず意識不明が続いていた。

山田：「ご紹介したい方がいます。」

草薙：「草薙です。宜しくお願いします。」

草薙先生。俺と舞が道で倒れたとき助けて車でこの病院に運んでくれた先生だ。

あきら：「その節は大変お世話になりました。なんとお礼を言っていないやら。それに、ご挨拶が遅れて申し訳ございません。」

祐美子：「本当でしたら私たちのほうからご挨拶に行かなければならないものをわざわざお声かけ頂いて恐縮です。」

草薙：「いえいえ、とんでもございません。実はあのあと私用でちよつと病院を休んでおりました。ご挨拶が遅れて申し訳ございませんでした。」

結構若い割にはしっかりした先生だ。だけどどこことなく憂いがある。

草薙：「それで、今日みなさんをお呼びしたのは、ほかならぬまいちゃんの病気のことです。」

あきら：「はい」

草薙：「山田先生に話を聞いて、越権行為だと思つたのですが、実はアメリカに研修に行ったとき、よく似た症例の患者さんの治療に携わっていました。」

健一：「ほう。」

草薙：「まいちゃんはラインベルク症候群のような気がします。」

祐美子：「はあ。ラインベルク症候群？」

草薙　：「このごろ学会で話題になり、私もその研究をアメリカで行ってまして日本に帰国したばかりなんです。」

健一　：「それで、どこの疾患なんですか」

草薙　：「脳です。脳の下にある脳下垂体のホルモン分泌異常です。」

祐美子：「原因がわかったって言うことですか。」

草薙　：「根本となる原因はわかりませんが、何らかの理由でホルモンバランスが崩れて、本来、ばい菌とか病気とかに働く免疫が自分の身体を攻撃しているんです。」

あきら：「間違いないんですか。」

草薙　：「ほぼ間違いないでしょう。そこで、ご相談です。この病気に対して対処的な治療法があります。免疫の攻撃を抑える薬があります。」

ステロカイドというのですが、少し、副作用の可能性もあります。そのため、大量投入はできないのですが試してみませんか？」

あきら：「お願いです。まいを助けてください。副作用は怖いですが、まいが治るなら試してください。お願いします。」

祐美子：「治る可能性があるということでしょうか？可能性は低いのでしょうか？」

草薙　：「ええ、もちろん絶対とはいいません。でも、奥さんも亡

くされ、同じ病気で娘さんも苦しんでいる。医師として放って置けないでしょう。全力を尽くしたいんです。」

あきら：「あ、ありがとうございます」

俺はこの先生を信じることにした。

.....

翌日から草薙先生の下で治療が始まった。少しずつ薬の様子見ながら投入している。

しかし、舞は目を覚まさない。

草薙：「呼びかけてあげてください。肉親の方の声で気づくこともあります。」

あきら：「ああ」

手を握り、と「まい」呼びかける。しかし、反応はない。

草薙：「あせらず、ゆっくり時間をかけていきましょう」

あきら：「まい...」

このつらい日々はいつまで続くのだろうか？ 弱気になる自分を奮い立たせるため期待をもてることを考え始めた。

あきら：「まい、目を覚ましたら何をしたい？」

そのとき、ふと思った。

．．．冬ちゃんと温泉

あきら：「そうだ！」

舞が病気で倒れる前、俺達3人は温泉旅行に行くことを約束していた。

舞は冬子と温泉旅行に行くことをすごい楽しみにしていた。しかし、その願いは舞の病気でかなえられなかった。

俺は冬子呼んだ。そして頼んだ。冬子はよろこんで受けてくれた。

冬子は舞の手を握り、こう呼びかけた。

冬子：「まいちゃん、冬子と一緒に温泉いきましよう」

舞が反応した。そしてゆっくり目を開けた。

まい：「冬ちゃん」

あきら：「まいー！」

まい：「パパ。ここはどこ？」

舞は意識をとりもどした

俺はその日泣きつづけた。

集中治療室から一般病棟に移った。だが、大部屋でなく個室だ。感染症が怖いかららしい。

そして、熱が完全に下がったわけではない。入院が続く。

草薙：「まいちゃんの免疫力を少し下げることによって、病状の悪化を防いでいると考えてください。しかし、そのため、ちよつとした病気でも重症化してしまいます。つまり、風邪でも命取りになる可能性があります。」

草薙：「そのため、このクリーンフロアでの治療を当面続けたいと思います。」

このクリーンフロアには、舞のほかにも何人か入院している。その中で、舞と同級生の女の子が隣の病室にいる。丸山美鈴ちゃんだ。舞とはすぐ仲良くなった。

まい：「美鈴ちゃんは、いつから病院にいるの？」

美鈴：「お正月終わったくらいから」

まい：「じゃあ、私と一緒にくらいなんだね。」

美鈴：「でも、まいちゃん、ここに来たの一週間くらい前じゃない？」

まい：「うん、それまでは集中治療室にいたんだって。意識不明だったから。」

美鈴　：「まいちゃん、私よりも重いんだね。それで、頑張ったんだね。これから二人で頑張って、早く退院しようね。」

まい　：「うん、頑張る」

まだ、「頑張る」という言葉が禁句になっていない二人だった。

美鈴ちゃんは怪我をすると血が止まらなくなったり、病気になるとなかなか治らなくなる病氣らしい。そのため、まいと同じく感染症を恐れてこのフロアにいる。

このフロアに入るには許可が必要で、ちゃんと消毒して入るのはもちろん、マスクの着用も義務付けられる。また、風邪などをひいたら入れない。

- - - - -

まい　：「早くおうちに帰りたいな。冬ちゃんのハンバーグが食べたい。幼稚園にも行きたい。響子先生にも会いたい。」

もうすぐ3月だ。卒園式も近づいている。

冬子　：「まいちゃん、頑張りましょう。お熱下がったら退院できるって草薙先生も言っています。」

まい　：「でも、しんどい。本当に早く治らないかな。それに病院のご飯おいしくないし。」

舞は微熱が続いており、少し元気になったとは言えつらそうだ。

冬子：「あとで、カップヌードル買ってきて上げます。先生には内緒だけ。」

舞は生ものを食べてはいけない以外は食事制限はない。だから、果物とかお鮓とかは食べられない。でも、加熱した食べ物なら大丈夫だ。

本当はカップヌードルみたいなものは良くないのだろうが、黙認されている。結構、このような環境ではおいしいらしい。

あきら：「まい、後で響子先生がお見舞いに来てくれるって。」

まい：「本当？　楽しみ〜」

しばらくすると響子がお見舞いに来た。つかさも一緒だった。

響子：「やつほ〜」

つかさ：「楠木さん、ご、ご無沙汰しています。」

まい：「せんせい〜」

舞が駆け寄る。

響子：「元気になったわね〜。あ〜、でも、お熱まだあるみたいね。」

まい：「うん、お熱あるけど元気だよ」

あきら：「響子、つかさ、忙しいのにわざわざ来てくれて悪いな。」

そつだ、つかさは会つゝの初めてだよな。黒木冬子さんだ。」

冬子：「黒木冬子です。宜しく願ひします。」

俺の影に隠れるように挨拶をする。

つかさ：「つかさです。初めまして。いつも響子ちゃんからお話聞
いてます。」

まい：「ねえ、パパ、この人誰？」

あきら：「ああ、もしかしてまいもつかさのこと初めてか？ 響子
先生のいとこのつかさだ。」

つかさ：「まいちゃんよろしくね」

まい：「よろしく願ひします。でも、響子先生と良く似てる。」

あきら：「髪の毛以外はそっくりだ。あと、性格は違つがな。つか
さのほうはおしとやかで、響子のほうは凶暴だ。」

響子：「ん？ なんか言つた？」

あきら：「いや、別に」

つかさ：「響子おねえちゃん。病院なんだから。それに今日の目
的。」

響子：「そうそう、幼稚園のみんなが作つてくれたんだ」

そういつて千羽鶴を袋から出した。よく見ると、鶴の形がまちまちで、いびつなものもある。

響子：「みんながまいちゃん病気が治るのを祈って折ってくれたんだ。まだ、園児だからきれいには折れてないけどね。」

結構、こういうの俺は馬鹿にしていた。そんなものもらって何がうれしんだと。作るほうもただの偽善だと。

でも、こうやって実際もらってみると、人の温かい心に触れたようで涙がでてくる。

響子：「それと、何人の子は手紙を書いてくれた。もう、ひらがなが書ける子もいるんだ。4月からは小学生だからな。」

響子は手紙の束を舞に渡した。

まい：「ありがとう。」

満面の笑みで手紙を読み始めた。

つかさ：「楠木さん、あの、た、大変でしたね。」

あきら：「まあ、一時期に比べれば落ち着いたよ。まいも少し良くなってきた。」

つかさ：「でも、看病とか大変ですよね。」

あきら：「まあね。基本夜も一緒に付き添って寝てるからな。でも、毎日は大変なんで、祐美子さんと冬子と3人で交代で付き添っている。」

つかさ：「お仕事は？」

あきら：「ああ、元の職場に復帰したよ。何とか社長にOKしてもらった。健一さんに『仕事して収入を安定させるのも看病のうちだ』っていわれてね」

つかさ：「そうですか。よかったです。だいぶ落ちかれましたね。私も4月から、こちらで勤務します。よろしくおねがいたします。

「
後ろで、響子が冬子をからかっている。」

冬子：「例え、響子ちゃんのお願いで、楠木さんは渡しません。楠木さんはもう私のとりこです。」

響子：「じゃ、まいちゃんもらおうかな」

冬子：「まいちゃんはもつとダメです。もしもどつちかといわれたらなくなく楠木さんあきらめませぬ。でも、まいちゃんは冬子の大事な宝物ですから上げられませぬ。」

つかさ：「響子おねえちゃん・・・」

響子：「あはは、冗談よ。あきらもまいちゃんもあなたのものよ。」

「
昔の仲間が集まってこう話していると、やっぱり、昔の楽しかった頃を思い出す。そして、今、まいが加わり新しい風が吹き始めた。立ち止まっていけない。」

UJU

1 - 2 院内学級（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

1 - 2 院内学級

3月に入った。

舞の病気は一進一退を繰り返している。

草薙：「少し、長期戦を覚悟してください。」

祐美子：「長期戦とはどれくらいでしょうか？」

草薙：「半年、一年、あるいはそれ以上かも」

あきら：「そんなにですか？」

草薙：「少しずつ良くなっています。しかし、抜本原因のホルモン異常を治すことができないため、対処療法になってしまっています。強力な薬で押さえ込むことも可能なのですが、その薬を使うとさらに副作用が強くなり、将来後遺症を残す可能性も出てきます。正直、副作用のせいで今の状態より悪くなります。」

あきら：「どんな副作用なんですか？」

草薙：「倦怠感、高熱、吐き気、脱毛、下痢、おなかや背中痛みを伴います。」

あきら：「うわ」

草薙：「しかも、投与を止めるとぶり返す可能性があります。そのため、治療そのものがつらいものになります。なので、私はお勧

めしません。」

祐美子：「わかりました。」

- - - - -

3月に入り、学区の小学校の先生が来た。4月からの小学校の話をしたいとのことだった。4月から舞も小学生だ。だが、このままでは入学は無理だろう。当面休むしかないと考えていた。土曜日の夕方、俺と舞で話をきいた。

あきら：「院内学級？」

先生：「ええ、院内学級です。」

あきら：「なんですか？ それ。」

先生：「この病院には小学校の分校見たいのがあります。病気で普通の小学校に通えない子供たちが通います。」

そういえばテレビで見たことがある。

先生：「それで、舞ちゃんをそちらに通わせたらいかがかと思ってお伺いさせていただきました。」

あきら：「はあ。病気なのに学校に行かないといけないのですか？」

先生：「もちろん、調子の悪いときに行く必要はないです。出席できるときに通えば構いません。」

あきら：「病気でつらいのに、さらに勉強でつらくなるのはどうかと。」

先生：「いいえ、院内学級は決してつらいところではありません。勉強だけでなく、色々な遊びなんかもやります。友達もできます。院内学校に通ってた子は入院したときは院内学級に通うのが楽しかったと言っています。」

あきら：「そんなものなのか」

先生：「それに、院内学級に通えば普通の学校同様出席扱いになりますので。」

あきら：「なるほど、留年しなくてすむわけだな。」

先生：「まあ、小学校は留年しないですけどね。それで、もし良かったら今度、院内学級を見ませんか？」

あきら：「舞、どうだ、見てみるか？」

まい：「うん、見てみる」

先生：「では、院内学級の先生に連絡しておきます。明後日の月曜日にやっていますので見てみてください。」

あきら：「はい、ありがとうございます。先生も休日わざわざありがとございました。」

.....

月曜日、会社に有休をもらって院内学級を見学させてもらうことになった。

冬子も昨日話したら興味があるといって付いてきた。

院内学級をのぞいてみると3人の子供と先生が中にいた。

先生：「こんにちは、舞ちゃん。舞ちゃんのお父さんとお母さん。木ノ内と申します。」

この頃はいちいち弁解するのも面倒なので夫婦と間違われてもそのままにしている。

あきら：「楠木です。宜しく願いします。」

冬子：「冬子です。宜しく願いします。」

冬子が半分俺の影に隠れながら挨拶をする。冬子も別に否定しない。舞は何か言いたそうだが、やっぱり、それについて否定しなかった。

木ノ内：「この学級には本当は今3人通ってる子がいるんですが、今日は一人だけなんです。」

いや、3人いるだろう。俺の怪訝そうな顔をみてか先生が話を続ける。

木ノ内：「女の子二人は実は新一年生になる子で今日は見学なんです。」

ああ、舞と同じなんだ。

舞　：「あ、美鈴ちゃん」

美鈴　：「あ、舞ちゃん、こんにちは。」

木ノ内：「あら、あら、二人はもうお友達なのね。それじゃあ、他のふたりを紹介するわ。」

木ノ内：「この子がかのんちゃん。」

先生が車椅子の女の子を紹介する。

かのん：「こんにちは。かのんです。舞ちゃん仲良くしてね。」

木ノ内：「舞ちゃんや美鈴ちゃんと同じ新1年生です。そして、この子がたかしちゃん。今度2年生になります。3人より一つお兄ちゃんだよね。」

たかし：「こんにちは、舞ちゃん。俺、たかしていうんだ。よろしくな。」

舞　：「楠木舞。みんな宜しくお願ひします。」

木ノ内：「はい、みんな上手に挨拶できましたね。」

木ノ内：「それじゃ、お勉強に戻りましょうか。たかしちゃんはそのドリルの続きね。女子達は、うーん、今日はご本を読んであげましょうか？」

たかし：「せんせーい、それだったら俺が3人に話を聞かせてあげ
るよ。ドリル厭きた。」

木ノ内：「そうね。お願いしようか」

たかし：「よっしや〜」

たかしは本を持ってくるかと思ったら、なにやらノートを持ってき
た。そのノートを元に話を始めた。

話の内容は童話ふうの悲しい人魚の話だった。けどいわゆる人魚
姫の話でなくその内容は今まで聞いたことのない話だった。

3人の女の子は食い入るようにたかしの話をきいた。
俺も思わず、じっと聞き込んでしまう内容だった。

先生が俺たちに耳打ちする。

木ノ内：「あの話はたかしちゃんが作った話なんです。とてもよく
できてるでしょう。」

正直、1年生が考える内容とは思えない。

木ノ内：「彼の夢は童話作家になることなんです。こうやって、院
内学級にだけ伝わる話を作っていきたくて言っています。」

あきら：「なるほど、これは将来が楽しみだ。すごい才能だ。もし
かして天才との出会いってやつじゃないか。将来みんなに『実はあ
の有名な童話作家だけど小学校2年の時から知ってるんだぜ』って
自慢できそつだ。」

木ノ内：「ええ、そうなるといいですね。」

心なしか先生の表情が曇ったように見えた。

たかし：「というお話。みんな面白かった？」

かのん：「うわ〜」

かのんが拍手をする。ふたりも拍手をする。悲しいお話だと思ったけど最後はハッピーエンドになる話だった。

かのん：「他にもお話聞かせて〜」

美鈴：「もっと聞きたい〜」

たかし：「舞ちゃんも聞きたいか？」

舞：「うん。」

たかし：「よし、次の話は黒猫ニャーゴの話だ。」

つづく

1 - 3 ・黒猫ニャーゴ

みんな、黒猫ニャーゴの話知ってる？

ええ、知らないの？ そっか。 うん。どうしよっかな。

この話は秘密にしておいてねって言われたんだけど今日はみんなに特別に教えてあげる。

黒猫ニャーゴは捨てられてたんだ。生まれてまだろくに乳離れしてないうちにね。

え？乳離れってわかんない？ お母さんのおっぱいをまだ飲んでるってあかちゃんって言う意味だよ。

みんなの中にもまだ飲んでる子がいるんじゃないかな？ あはは、もうさすがにいないか。

その黒猫ニャーゴは他の兄弟と一緒にダンボールに捨てられてたんだ。

だけど、他の兄弟たちはみんな子供たちに拾われていったんだ。

最後に残ったのは黒猫ニャーゴだったんだ。実はニャーゴは片目がつぶれて見えなかったんだ。

それをみんな気味悪がつて最後まで残ったんだ。

そのうち雨が降ってきて、そしてお腹も減ってきた。寒さとひもじさに我慢できず、「ニャーニャー」なっていたら、一人の女の子がニャーゴの前に現われたんだ。その女の子は背は高いけどやせていたんだ。

「おまえも一人ぼっちなの？」

「ニャーニャー」

「そうか。じゃあ一緒に帰ろう。」

そうやって黒猫ニャーゴは拾われていったんだ。

女の子は小学校1年生で入学したばかりだったんだ。それで、クラスには保育園で一緒だった子もいなくてひとりだったんだ。それにちよつと、いたずらばかりする子で、女の子からもちよつと浮いていたんだ。つまり、友達ができなかったんだ。

その女の子にはお父さんがいなかったんだ。お母さんひとりと女の子ひとりの家族だったんだ。つまり母子家庭ね。お母さんはだから、普段の日は仕事に行ってたんだ。

女の子は学校が終わると友達と遊ぶこともなく、誰もいない家で毎日一人ですごしてたんだ。とってもさびしかったんだね。

黒猫ニャーゴを家につれて帰った女の子は早速、雨にぬれた身体を拭いてあげ、冷蔵庫から牛乳を出したんだ。それをお皿にあげてニャーゴに上げたんだ。

「おまえの名前何にしようか？」

女の子がそういうと黒猫ニャーゴは「ニャー、ニャー」って答えたんだ。

「そうか、決めた。ニャーニャー言うからニャー子だ。でもおまえ男の子だよな。じゃあ、ニャーゴだ。」

そうやってニヤーゴは名前とご主人様が決まったんだ。

女の子は次の日からニヤーゴといつも一緒だった。でも、学校には連れてけないから女の子が学校に行っている間はお留守番。それで帰ってくると一緒に遊んでたんだ。ニヤーゴも女の子が大好きで、女の子が帰ってくると一目散に飛んでくる。そして、

「ニヤー、ニヤー」で甘えるんだ。

「はい、はい」そういつて女の子は牛乳を冷蔵庫から出してうれしそうにニヤーゴにあげるんだ。

そのあとは、ニヤーゴを抱いてテレビを見たり、宿題をしながらお母さんの帰りを待つ。それが女の子の日課なんだ。

え？ 宿題ってなにかだって？ 小学校では嫌な先生が時々家でも勉強しなさいってプリントとかだすんだよ。みんな嫌なんだけど怒られるからしぶしぶやるんだ。でも、院内学級は宿題でないから安心だよ。

土日は家の近くの公園に二人で遊びに行くんだ。

「ニヤーゴだって外で遊びたいよね。」

普段は家の中ばかりだったから、ニヤーゴがちよつとかわいそうに思えてきたんだ。

ニヤーゴを離してあげると大喜びで駆け回っていたんだ。そんなニヤーゴを見てるだけでも、女の子は楽しかったんだ。

夕方になるとニヤーゴを連れて帰る。そしてお母さんと一緒に晩御飯。

それが女の子とニヤーゴの生活だった。一人ぼっちで寂しかったのがうそみたいに楽しい生活になった。

そんな、ある日、ちょっと遠くの公園に遊びに行ったんだ。

「ニヤーゴ、今日は探検だよ。」

そうやって、新しい公園でいつものようにニヤーゴを離してあげる。ニヤーゴは知らないところに来たせいか、女の子の側を最初は離れなかった。

だけど、そのうち、慣れてきて、あちこち動きまわり始めたんだ。

やがて、公園で遊んでいた男の子たちが女の子に気づいた。

「おい、おまえ見かけないやつだな。」

「何、一人であそんでるんだ。」

「こいつ、知ってる。同じクラスの女の子だけど友達いないんだぜ。」

「すげーやせつぼっち。ちゃんと食べさせてもらってるのか？」

「こいつんちお父さんがいないからきつと貧乏なんだぜ。」

「きつと、お母さんから嫌われてるんだぜ。こんな子産まなければ良かったって。」

女の子は我慢していたけど、とうとう我慢できなくなって泣き出してしまった。

「やーい、泣き虫、泣き虫。」

「なによ、このチビデブ！ あんたなんかにお母さんのこと言われたくないわ。」

「なんだと〜 このやる〜 ぶん殴ってやる。」

そうやって男の子が女の子を殴ろうとしたそのときだった。

「うわ〜、なんだこの猫」

ニャーゴが殴ろうとした男の子に踊りかかって、顔を引つかいた。だけど、男の子はニャーゴを捕まえて、地面に叩きつけた。

「こら〜、女の子をいぢめるな〜」

今度は公園のはじのほうから別の女の子の声がした。その女の子とお母さんらしき人が走ってくる。

「うへ、しおんだ。やべー。逃げるぞ」

くもの子を散らしたように一目散に男の子は逃げていった。

「大丈夫？」

助けに来たショートカットの女の子は女の子を覗き込んだ。

「ありがとう、でも、ニャーゴが。動かない。」

黒猫ニャーゴは倒れたまま動かなかった。お腹を大きくへこませたり、膨らましたりして息をしているが、目は閉じたままだ。

「大変、すぐお医者さんに連れてかなきゃ。ママ、近くに病院ない？」

「うーん、動物病院はこの街にはないです。隣町まで行かないと。」

「わかった。すぐ連れてこよう。一緒においで。」

女の子はニャーゴを抱いて、助けてくれた女の子とお母さんとタクシーに乗って、隣町の動物病院に向かった。

「ニャーゴ。頑張るのよ。」

女の子はニャーゴに声をかける。でも、さっきよりニャーゴの呼吸が小さくなってきている。

「早く、お医者さんに連れてかないと。」

でも、今日は休日。1軒目はお休みだった。2軒目にタクシーを向かわせる。

2軒目について、やっぱりお休みだったが、無理言ってあけてもらう。

「先生、お願いします。ニャーゴを、ニャーゴを助けてください。」

先生はニャーゴを診療台に載せ、聴診器をニャーゴにあてる。

そして、首をふった。

「お気の毒ですが。」

ニヤーゴはもうお腹も動かなくなっていた。

「ニヤーゴ、死んじゃったの？」

先生も助けしてくれた女の子のお母さんも顔を伏せる。

「そんな、そんな」

女の子は泣き出した。声がかかるまで泣いたんだ。そして、助け
くれた女の子も一緒に泣いてくれた。

.....

少し落ち着いてから

「ありがとう。助けてくれて」

女の子は助けしてくれた女の子に御礼を言った。

「ううん、ごめんね。猫ちゃんは助けられなかった。ごめんね」

「ううん、あなたが悪いんじゃないし。でも、私またひとりぼっち

.....

女の子はうつむいて話す。

「あれ、あなた確か同じクラスの子だね。いつも一人でいる子。」

ねえ、お友達になろう！ 私もクラスに知ってる人少なくてさびしかったんだ。」

えっ！ という顔をして女の子が顔を上げる。

「うん」

「わたし、しおん。よろしくね。」

「わたしはポッチ。よろしく。」

そうやって女の子は小学校で初めて友達ができただ。それから二人はずっと仲良しで一緒に遊んだりするようになったんだ。友達もいっぱいできて、さびしくなんてなくなったんだ。

でも、ふと時々思い出すんだ。私の大好きな友達。黒猫ニャーゴのことを。

1・4・プレゼント(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の施設名、一部の物理法則はフィクションです。

1・4・プレゼント

黒猫ニヤーゴの話が終わった。

俺は思わず目頭を抑えた。子供たちも涙を流している。最後はちょっと救われるが悲しい話だ。

冬子とは隣を見てみるといない。
いつのまにか子供たちに混じって座って聞いている。

たかし：「今日はここまで。また、今度聞かせてあげるね」

かのん：「え〜、もったときかせてよ〜」

たかし：「だめだめ。いつぺんに聞いたら疲れちゃうでしょ。代わりに折紙折ってあげる。」

たかしは折紙を折ってみんなにあげる。

冬子：「たかしちゃん、すごいです。どうやって折るんですか？
冬子にも教えてください。」

他の女の子三人も「うんうん」とうなづいている。

たかし：「じゃあ、教えてあげよう。特別だよ。」

「わ〜い。」子供3人と大人一人が喜ぶ。

あきら：「すいません、先生。すっかり、うちのも混じって遊んでしまつて。」

木ノ内：「いえいえ、院内学級には子供たちの精神状態を落ち着かせる目的もあるんですよ。普段つらい入院生活をちよつと忘れさせてあげる。そうやって、これからのつらい治療にも立ち向かえるようになれるんです。」

木ノ内：「それに、ああやってたかし君も人に教えることにより、自分もしっかり覚えていく。これも教育の一つです。」

そうか、この学級は知識を詰め込む場所ではないんだな。なんか、本来の学校の姿に近いんじゃないのか？

あきら：「でも、中には親御さんの中には『こんな生ぬるいんじゃないめだ』とか言い出す人はいないんですか？」

木ノ内：「いいえ、いないですね。やっぱり、今最重要なのは子供の病気を治すこと。そう思つてらっしゃる人ばかりです。」

あきら：「そうですよね。馬鹿な質問でした。」

そうだ。まず、舞の身体が治るのが先だ。まったくだ。

そんなこんなで見学が終わり、解散となった。そして4月から院内学級に入学する方向で手続きをもらつたこととした。

病室への戻り際にたかしが舞に声をかける。

たかし：「そうだ、舞ちゃんに渡すものがあるんだ。お近づきの印。」

「

舞　：「うん？」

たかし：「お昼ご飯食べ終わったら、ロビーにおいで。」

そういつてたかしは病室に戻っていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

お昼ご飯を食べ終わると私はロビーに向かった。クリーンフロアを出るとそこはロビーになっている。ここと院内学級の教室だけが、私たち4人がクリーンフロア以外行くことができるエリアだ。

すでにたかしが待っていた。となりに美鈴もいた。

たかし：「お、舞ちゃん来たな。」

舞　：「うん。おまたせ」

たかし：「じゃあ、約束のプレゼント。一種のおもちゃなんだ。」

たかしにいちちゃんが手作りの箱を私にくれた。となりの美鈴がにっこしている。

たかし：「あけてみて」

舞　：「？」

私は言われたとおりそくと開けてみる。すると

ビヨーン。中から何かが飛び出した。

舞　：「わ！」

たかし：「あははは。びっくり箱。気に入ってくれたかい？」

そう笑いながら、病室に戻っていく。

舞　：「ひど〜い。」

美鈴　：「たかしにいちちゃん、お気に入りの子にはあのびっくり箱をプレゼントするの。別に悪気はないみたい。」

舞　　：「美鈴ちゃんももらったことあるの？」

美鈴　：「うん、もらったよ。手作りびっくり箱。やっぱり最初に会った日に。」

舞　　：「そうなんだ〜。」

自分で物語り作って読んでくれたり、自分で作ったびっくり箱で驚かしたり変な子。

舞　　：「でも、面白い人」

美鈴　：「うん。変だけど楽しい人だよね。」

これが私がたかしにいちちゃんに会ったときの第一印象だった。

UNU

1 - 5 ・桜祭り

4月に入り満開の桜が病院の窓からも見える。満開の桜といえば入学式のイメージだ。

院内学級でも入学式が行われた。といつても3人だけの簡単な入学式だ。それでも今年は多いらしい。入学式が行われない年もあるらしい。

俺も冬子と一緒に保護者として出席した。今日は式だけだから、そのあとは院内学級で、唯一の上級生のたかしちゃんと5人で遊んでいる。って、

すっかり、冬子も混じっている。今日は折り紙を作っているようだ。俺はそんな姿をほほえましく見ながら、午後に間に合うよう会社に向った。

- - - - -

お昼くらいになり、みんなが病室に帰っていく。

そのとき舞がたかしちゃんに呼び止められた。

たかし：「おまえのお母さん楽しいお母さんだな。なんか、子供と一緒に遊んでくれるいいお母さんだよ。」

舞　：「冬ちゃんのこと？　冬ちゃんはママじゃないよ。」

たかし：「え？」

舞　：「ママは私が生まれたときに天国に行ったんだ。冬ちゃん
はママとパパと私の友達。」

たかし：「そっか、悪いこと聞いちゃったな。」

舞　：「ううん、慣れてるから。ママがいないのも、それを聞か
れるのも。」

舞が少し寂しそうな顔でうつむいた。

たかし：「そっか。ごめんよ。」

たかしも声のトーンを落として応える。

舞　：「でも、ちょっと今日はみんながうらやましかった。みんな
は入学式お母さんきてたもんね。」

たかし：「ああ」

舞　：「私も会ってみたいなママに。どんななんだろう。」

たかし：「もし、ママに会ったら何をしたい？」

普通なら残酷な質問だ。でも、このやることが制限された病院で想像力を働かせて色々考えるのは楽しい遊びでもある。

舞　：「そうね。」

舞は外の桜の風景を見ながら考える。

舞　：「まずはママのご飯食べてみたいな。きつと優しくてあつたかい味がするはず。」

たかし：「おいしいじゃなくて、優しくてあたたかいなんて面白いね。」

舞　：「だって、おいしいのは冬ちゃんが作るご飯だから。冬ちゃんのご飯は世界一おいしいんだよ。」

たかし：「ご飯のほかには？」

舞　：「えっと、お花見に行きたい。」

たかし：「ああ、今の時期きれいだよね。」

舞　：「私ね、パパもお花見行ったことないんだ。だから、ママとパパとで行きたいんだ。」

舞　：「それでね、綿飴とかあんず飴とか焼きとうもろこし買ってもらって3人で桜並木の下を歩くの。途中にある射撃でパパに景品とってもらうの。それを見てママが『がんばれー』っていうの。」

たかし：「なるほどね。普通の生活のようでも楽しそうだな。そういうのっていいよね。」

舞　：「うん、うん」

二人とも窓の外を見ながら話をする。もしかしたら、もうこの病院を出て花見にいけないかも知れない。そんな不安を胸の奥に隠しながら。

.....

たかし：「舞ちゃん、この前の話だけどさ。物語にしてきたんだ。聞いてくれない？」

舞　：「え？　ママの話？　うわゝ、聞かせて」

たかし：「ああ、じゃあそこに座って。」

たかしは話し始めた。

.....

それは春のことだった。桜が満開でとてもきれいな時期だった。

女の子がコタツで丸まった。まだ、春だけどちよつと寒い時期だからね。

「だめよゝ。そのまんま寝ちゃゝ。もうすぐご飯よゝ。」

女の子は学校に入学したばかりで、少し疲れてたんだ。だから、うとうとしてたんだ。

「ほら、もゝ。風邪引くから寝ちゃダメよゝ」

ママが声をかける。でも、このママは継母なんだ。継母っていうのは女の子を産んだお母さんじゃなくて、後になってお父さんと結婚したお母さんなんだ。だから、女の子は本当はちよつと寂しくって、本当のお母さんに会いたがってたんだ。

そして、女の子はそのまま寝ちゃったんだ。

「ほら、ご飯できましたよ。起きてください。」

お母さんが女の子をゆすりながら声をかける。

「うーん。」

女の子は寝ぼけまなこで起き上がる。

「さあ、手伝ってください。」

部屋には仕事から帰ってきたお父さんと、食事の用意をしていたお母さんがいた。でも、ちょっと雰囲気が違う。

「ママ？」

女の子はげんそうにお母さんの顔を見る。

「どうしたの？」

お母さんが返事をする。でも、そのお母さんの顔はいつもと違う。いつも写真で見る本当のお母さんだ。

「お母さん…」

女の子はお母さんに駆け寄る。

「本当のお母さんだね。会いたかった。会いたかったの。」

「あらあら、どうしたんですか？ 急に。怖い夢でも見てたんでしよう。お母さんはいつもここにいますよ。」

それから、一緒にご飯を食べた。おばあちゃんが作る食事の味と一緒だ。

「おいしい。」

暖かくて優しい味だった。でも暖かくて優しい味ってなんだろう。なんだろうこのいつもと違った感じ。

それから、お母さんとお父さんと一緒に学校であったことをおしゃべりした。

一段楽した後、お父さんが言ったんだ。

「明日の日曜日、晴れたらどっかいかないか？」

女の子はすぐに言った。

「お花見」

「よし、3人でいこう」

次の日、3人でお花見に行ったんだ。出かけるときお母さんは女の子にピンクのワンピースを着せた。

「春らしいお洋服にしましょうね」

3人はお花見に出かけた。近所の大きな公園で毎年「桜祭り」をやっている。そこは出店もいっぱいあるところなんだ。

「何か食べたいものありますか？」

お母さんが声をかける。

「綿飴にあんず飴に焼きとうもろこし！」

「あらあら、欲張りね。お腹壊さないでよ。」

そういつつもお店を見つけると女の子に買ってあげた。

桜並木を歩いていると射的をやっている出店を見つけた。

「お父さん、やって、やって」

「え？ よし、やってみるか。何が欲しい？」

「あの奥にあるガラスの小さいビン。」

「む、難しいぞあれは。」

「お父さん、がんばれ〜」

お母さんがお父さんを応援する。

景品に玉はあたるけど、なかなか落ちない。あたるだけじゃダメで落ちないと景品はもらえないんだ。

「さあ、最後の一発だ」

お父さんは狙いを定めて引き金を弾く。

ことり。景品が落ちる。

「やった〜」女の子は大喜びだ。お父さんは女の子に景品を握らせる。

「ありがとう。お父さん」

いっばいはしゃいだ帰り道、すっかり疲れて眠くなった女の子はお父さんの背中にしよわれながら家路についた。

...

「ほら、こはんできたよ。起きて頂戴。」

「う〜ん。もうお腹いっぱい。」

女の子は目がさめた。

「もう、何寝ぼけてるのよ。今日は大好物のハンバーグですよ。」

女の子は起き上がりコタツの上を見る。おかずが所狭しと並んでいる。そして、お母さんを見る。いつもの継母のお母さんだった。パパもいつのまにか帰ってきていた。さっきは夢だったんだ。

「さあ、いただきますしょう」

「いただきます。」

みんなでいただきますをする。ハンバーグから手をつける。

「うわー、ママ料理上手ー。すごいおいしい」

「へへー。どうですか。自信作です。食後にイチゴもあるから楽しみにしてね。」

「うん」

「今日の学校はどうだった？ いじめられたりしなかった？ いじめっ子がいたらママに言うんですよ。やっつけてあげるから。」

「うん、大丈夫だよ。とても楽しかった。」

なにげないいつもの会話。

でも、女の子は思ったんだ。今のママも優しくって、料理が上手で面白くて、私を守ってくれる人。すごく幸せ。

ママごめんね。本当のお母さんじゃないみたいにして。やっぱり、ママが本当のお母さんだね。優しくってあったかいママ。夢じゃなくて本当にいるママ。

「ねえ、パパ、ママ明日お休みでしょう。お花見いこうよ。」

女の子はそうパパとママを誘ったんだってさ。

おしまい。

.....

- - -

たかし：「どうだった」

舞：「ありがとう。すごく面白かった。でも、私今の話を聞いてわかったことがある。すぐに伝えないと。教えてくれてありがとう。」

舞は病室に戻っていった。

たかしが微笑みながら見送る。

病室に戻ると、そこには冬子が座って雑誌を読んでいた。今日は冬子が当番の日だった。

舞：「冬ちゃん、お願いがあるの。」

冬子：「どうしたんですか急にあらたまって。冬子でできることでしたら何でもします。」

舞：「あのね、あのね。冬ちゃんに私のママになって欲しい。」

冬子：「え？ 冬子は舞ちゃんのママ代わりですよ。」

舞：「ううん、違う。ママの代わりでなくて本当のママになって欲しいの。もし良かったら、パパと結婚して家族になって欲しい。」

冬子のはっとして、そして舞を抱きしめた。

冬子「……ありがとう。舞ちゃん。ありがとう。」

へっへっ

1 - 6 ・トリックエンジェル

たかしが院内学級の部屋にみんなを呼んだ。今日は土曜日なので院内学級の授業はお休みだ。

私とかのんと美鈴がきた。

たかし：「今日は取って置きのお話をしようと思うんだ。この院内学級だけに伝わる秘密の話なんだ。ききたいかい？」

美鈴：「うん」

私もうなづいた

かのん：「どんなお話？」

たかし：「トリックエンジェルってお話さ。」

舞：「とりつくえんじえる？」

たかし：「ああ、『いたずら天使』って意味なんだ。」

かのん：「おもしろそう。聞かせて、聞かせて」

たかし：「よしわかった。じゃあ、大人しく聞いてるんだぞ」

3人はうなづく。

たかし：「ある世界に、そう、こことは別の世界だ。そこに二人の

子供の天使がいたんだ。ところが、その二人の天使はとつてもいたずらだったんだ。いたずらして人を驚かしてばかりいたんだ。」

舞　　：「悪い天使ね。」

たかし：「そう、悪い天使だ。でも、憎めないいたずらばかりしてたんで周りの大人もあんまりおこらないんだ。だからどんどん悪さをしちゃう。」

かのん：「たかしにいちやんみたい」

たかし：「あちゃ〜。俺ってそんなかよ」

美鈴　：「あはは。」

たかし：「その二人は天使のくせに魔法使いの帽子をかぶり、魔法使いのマントをおい、魔法使いの杖を持って魔法でいたずらするんだ。」

美鈴　：「魔法使いの帽子ってどんなの？」

たかし：「こんなんだよ」

たかしはその二人の姿が書かれた画用紙をみんなに見せた。黒くてふちがあつて、とんがつて、先がちょっと曲がつてるやつだ。

かのん：「はろういんでかぶる帽子だ」

たかし：「かのんはよく知ってるね。そう、ハロウィンで魔法使いの格好するときにかぶる帽子だ。」

舞　：「でも、天使なのにどうして魔法使いの格好してるの？
すこしお馬鹿なの？」

たかし：「とんでもない、その二人は学校でも1、2を争うくらい
頭がいいんだ。そうじゃないといたずらなんて思いつかないからね。」

舞　：「じゃ、どうして、魔法使いの格好してるの？」

たかし：「きつと、かつこいいファッションだと思っただんじゃない
かな。」

舞　：「ふぐん、へんなの。やっぱりお馬鹿じゃない？」

かのん：「それで、それで」

かのんが先をせがむ

たかし：「ふたりは、さんざん学校の先生にいたずらして、毎日笑
いながらすごしてたんだけど、だんだん飽きてきちゃってつまんな
くなっちゃたんだ。」

美鈴　：「ふぐん」

たかし：「それで、新しい刺激を求めて別の世界でいたずらするこ
とにしたんだ。」

舞　　：「飽きたんならいたずら止めればいいのに」

かのん：「舞ちゃん。それじゃお話続かないでしょ。それで、たかしにいちゃん続きは？」

たかし：「別の世界についた二人はひとりの女の子と出会うんだ。その女の子は家の中でベットでねていたんだ。そしてさっそくいたずらを開始するんだ。」

かのん：「どんないたずらしたの？」

たかし：「まずはびっくり箱」

美鈴：「それじゃたかしにいちゃんとおんなじだよ」

たかし：「へへへ。そうか？」

かのん：「続き」

かのんは私と美鈴がときどき話の腰を折るが気に入らないらしい。

たかし：「それ以外にも、いろいろなトリックをするんだけど、その女の子は笑ってばかりいるんだ。」

美鈴：「どうしてなの？」

舞：「もしかして、その女の子もお馬鹿？」

たかし：「舞ちゃん。そんなこと言っちゃダメだよ」

たかし：「でも、いたずら天使の二人もそこが不思議だったのだから、その女の子に聞いたんだ。なんでそんなにかしいのかって」

かのん：「ふんふん」

たかし：「そうしたら、その女の子は病気を患っていたんだ。だから、毎日苦しんでばかりいたんだ。だけど、自分を信じて頑張って治そうとしたんだ。友達もときどきお見舞いに来てくれるんだけど、悲しそうな目をしたり、目をそらして『頑張って』としかいわないんだ。もう、十分頑張ってるのにね。」

3人は目を伏せる。

たかし：「だけど、いたずら天使の二人は、ちゃんとその女の子のほうをみて、いろんなことをやってくれたのがうれしかたんだ。例えば、それがいたずらだったとしてもね。」

たかし：「その話を聞きたいいたずら天使たちはその女の子に質問したんだ。」

かのん：「なんて、なんて？」

たかし：「『お医者さんはどうしたの？』って。そしたら女の子は『この病気は治らないからって見放された』って答えたんだ」

美鈴：「・・・」

たかし：「そしたら、今度は天使たちは『お薬はないの？』って聞いたんだ。そうしたら、『この病気に効くお薬はないって言われた』と答えたんだ。」

かのん：「・・・」

たかし：「そうしたら最後に天使たちは『あなたが痛いときからだをさすってくれるお母さんはいないの』ってきいたんだ。そうしたら『お母さんは私が生まれたときに死んじゃった』って答えたんだ。」

舞　　：「・・・」

たかし：「二人の天使はすごいショックをうけたんだ。自分の才能にうぬぼれて、面白おかしく生きてきた自分が恥ずかしいと思ったんだ。」

たかし：「それで二人は相談したんだ。自分たちの力でこの女の子を治して上げることはできないかって。そして、よく考えた上で、一つの方法を思いついたんだ。自分たちは子供でまだ女の子を治せないけど、治せる人を魔法で呼び出すことはできるって。」

たかし：「そこで、二人は魔法を唱え始めるんだ。二人で向き合い、杖を　交差させてこう呪文を唱えるんだ『アイル、アイル、アイル、アイル、アイル、アイル、アイル、アイル』。そういつて世界一のお医者さんとお薬をつくる世界一の科学者と世界一優しいお母さんを召喚してしまっただ。それで、その3人が力を合わせて女の子を治しちゃっただ。」

たかし：「だけど、いたずら天使は力を使い果たしてしまっただ。もう元の世界に帰ることも、いたずらすることもできなくなっただ。うんだ。この召喚魔法は究極召喚魔法で一生に一度しかできない魔法だったんだ。それをきいた女の子は泣いて二人に謝ったんだ。後悔してないのかって。だけど二人はこういつたんだ。『なんで謝るの？かけがないの友達ができたのになんで後悔するんの？』って」

いつも間にか3人は泣いていた。すこしして落ち着いてから

かのん：「その後3人はどうなったの？」

たかし：「お話はこれでおしまい。その3人がどうなったかはだれも知らない。だって、このお話は昔のお話じゃなくて未来のお話だから、その先なんてだれもしらないんだ。」

たかし：「どうだった。今日の話はこれでおしまい。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

私はこの物語がたかしにいちやんの話の中で一番大好きな話だ。本当に起きるか起きないか、かのんと美鈴と3人でよく話した。

かのんと美鈴はこの話は本当に起る未来の話だと思ってる。でも、私はそこまでは信じていない。ちよつと無理がある。だから、私は物語として純粹に楽しんだ。

信じる信じないどちらにしても、私たち3人には忘れられない物語である。

つづく

1・7・カノープス(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

1・7・カーノープス

舞　：「冬ちゃん、ちょっとロビーに行って来るね。」

4月のある日の夕方、夕食の時間もすぎ、舞は比較的調子が良かったので病室を抜け出し、ロビーへと向かおうとした。美鈴とかのんを誘っておしゃべりでもしようかと思っていた。

美鈴の病室をのぞいてみるが美鈴は寝ていた。美鈴はこのごろ調子が悪く、いつも寝てばかりで、食事もありとれていないようだ。

舞　：「美鈴、大丈夫？」

舞が心配して声をかけると美鈴ちゃんのお母さんが微笑みながら返事をしてくれた。

お母さん：「心配してくれるのね。ありがとう。美鈴は大丈夫ですよ。ちよつと治療がしんどくて寝てるの。また、元気になったとき遊んでね。」

舞　：「うん」

次にかのんの病室に行く。かのんは横になって本を読んでいた。声をかけると「行く」と言っつて車椅子に座った。

かのんは心臓が悪い。だから、走るのももちろんダメだし、歩くのも控えなければならぬ。たかしにいちちゃんと仲がいいけど、びっくり箱をもらつていない。

「心臓に悪いからね。」と前に言つていた。

車椅子を押して、私はクリーンフロアのドアを開け、ロビーに出る。何人か付き添いのお母さんと子供たちがいたが、私たちと目が合うのを避けるようにしていた。最初のうちは戸惑ったがもう慣れた。

このクリーンフロア、ロビー、そしてロビーの隣の院内学級が私たちが行くことのできる世界だ。その奥の東棟や他の階は特別な診察とかがない限り行ってはいけないと言われている。

私は平べったいソファに腰掛け、かのんの方を向くと、かのんが首を横に振った。

かのん：「窓のところ行こう」

舞：「うん、いいけど。お外真っ暗だよ。」

そういつて私はかのんの車椅子を窓のところまで押していった。ここは6階なので昼間は見晴らしが良くてきれいだ。でも、夜じゃないにも見えない。

それでも、かのんは何かを探しているようだ。

かのん：「あれがおおいぬ座のシリウス。」

かのんが探していたのは星だった。

舞：「どれどれ？」

かのん：「あそこで一番明るく光っている青白い星。」

かのんが少し西の方角を示す。

舞　：「あ、あつた。あの明るい星ね。」

かのん：「その西のほうに4つの星が四角形になっているのが見える？」

舞　：「うん、四角の真中に3つ星が並んでる。」

かのん：「それぞれ、それがオリオン座」

舞　：「へへ、かのん良く知ってるね」

かのん：「へへ、オリオンは狩人なの。それで、さっきのシリウスのおおいぬ座がオリオンの飼い犬。」

それとこいぬ座もあって、それもオリオンの飼い犬なの。ほら、オリオンの左上に光ってる星があるでしょう。あれがこいぬ座の星。」

舞　：「どれどれ？ あ、あつた。きつとあの星だ。」

かのん：「シリウスとオリオンとこいぬの星を結ぶと三角になるでしょ。それが冬の大三角形」

舞　：「へへ、かのんすごい。何で知ってるの？」

かのん：「夜になるとひまだから。こんなことくらいしかやることない。それに私、外のこと知らないし。ねえ、犬に触ったことある？」

舞　：「あるよ。ペロペロなめられるとちょっと困るけど。」

かのん：「ねこは？」

舞　：「うん、ある。でも、犬と違って触ろうとするとすぐ逃げちゃう。」

かのん：「そうなんだ。舞ちゃんいいなあ。」

舞　：「かのんは触ったことないの？」

かのん：「うん。本当に小さいときはわからないけど、記憶があるのはこの病院のこのフロアだけ。外にいったことないの。」

舞　：「そっか．．．そうそう、幼稚園にね、うさぎとロバもいたんだよ。」

かのん：「うさぎはわかるけどロバって？」

舞　：「馬みたいにこゝんな大きいの。先生が飼ってるんだよ。最初はこれくらい小さかったのにどんどん大きくなっちゃたんだよ。」

かのん：「ねえ、おおかみは？　おおかみに食べられちゃったお友達とかいなかった？」

舞　：「え？　おおかみなんか町にいないよ。おおかみは動物園にいただけだよ。だれが町にいるなんていったの？」

かのん：「たかしにいちゃん。」

舞　：「はあ。たかしにいちゃんたら、かのが知らないことをいいことにうそついて。しょうがないなあ。」

かのかん：「おおかみはいないんだ。よかった。でも、舞ちゃんなんでも知ってるんだね。」

舞　：「え、そんなことないよ。でもさあ、今までそんなこと教えてくれるお友達はいなかったの？」

かのかん：「うん、いなかった。お友達ができて、そのうちみんなこのフロアから出て行っちゃうから。このフロアからでくと、もうみんなこなくなるし。」

舞　：「そうだね。みんな退院するところなくなるよね。」

かのかん：「まあね。」

かのかんが何か言いたそうな顔をしていたが、悲しそうに顔を下に向けて首を振った。

かのかん：「いちばんお友達で長いのはたかしにいちゃんなんだ。去年の夏くらいだから、もうすぐ一年。」

舞　：「そつかく、だから仲がいいんだね。」

かのかん：「その次が美鈴ちゃん、次は舞ちゃん。」

舞　：「幼稚園のお友達とかは？」

かのん：「私、幼稚園行ってないから。」

舞：「ご、ごめん」

少し気まずい雰囲気 flowed.

かのん：「ねえ、お願いがあるの。舞ちゃんは一生私の友達でいてくれない？ お願い。」

舞：「え？ うん、もちろん。よろこんで」

かのんはにこっとこちらを向く。そして

かのん：「じゃあ、一生のお友達記念にいい事教えてあげる。」

そういつて、車椅子から立ち上がり、窓に手をかけ背伸びをする、なにか探しているようだ。

舞：「大丈夫？ 立ったりして。」

かのん：「大丈夫よ。これくらいなら。あのね、さっき言ったオリオンとシリウスの間に空と地上の間ぎりぎりにとっても明るい星がみえるんだって。南極老人星っていうの。これが見えたら病気が治って長生きできるんだって。」

舞：「本当？ 私も探してみよう。」

そういつて二人は背伸びしながら一生懸命その星を探した。

後になって、星おたくの少女が馬鹿にしたようにいった。

「舞ちゃくん、カノープスは冬の星だよ。1月か2月。ただでさえ見つからないのに4月に見えるわけないよ。」

「ただ、そのころの私たちはそんなことも知らず一生懸命その星を探した。」

自分たちの病気が治ることを信じて。

つづく

1 - 8 特別小児病棟（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則等はフィクションです。

1 - 8 ・特別小児病棟

今年のゴールデンウィークは5連休だった。この五日間、俺と冬子は毎日デートをしていた。といっても行き先は舞が入院している病院だが。

舞は少しづつ良くなっているようだ。午前中は熱が下がっており、元気いっぱいだけど、夕方になると熱が出てくるというパターンを繰り返している。

前は一日中微熱だったのだから、それに比べれば治ってきてるといえるのだろう。

今日の午後は院内学級の子供のイベントだった。子供たちはこいのぼりを作っている。冬子も参加したかったようだが、子供たちの自主性を伸ばすのが目的なので、毎回でしゃばるのもどうかと思い、引っ張ってきた。

冬子：「冬子もこいのぼり作りたかったです。」

あきら：「だめだ。どうせ、お星様の格好をしたこいのぼりとか作るつもりだったんだろう。雰囲気ぶち壊しの上、教育上間違った知識を子供たちに植え込む。お星様は七夕までとって置け。」

冬子：「あきらさん、もしかして超能力者ですか？ どうして私の考えていることわかったんですか？」

わからないほつがおかしいと思うが。

冬子の星好きは筋金入りだ。高校のとき、冬子は俺達天文部に入部

してきた。部長の志穂先輩と俺と悪友の南しかいない3人の弱小天文部に入ってきたのが冬子だった。そのくせ、星のことなんてからつきし知らない。お星様の形が可愛いからが入部動機だ。

おかげですでに俺の家は星で占拠されている。星の形のぬいぐるみ、星の絵柄のバスタオル、星の絵柄ののれん、星の絵柄のエプロン……メジャーなデザインのため、探すのに苦労せず、あっという間に星が氾濫していった……俺としてはバターフライ星雲のカレンダーとか飾りたかったのだが。まあ、害はないのであきらめるしかない。

この5日間、病室で舞のお昼ご飯がすんだ後は、こつやつて二人で病院の中のレストランに来ている。ここで、大人二人は昼食を取る。安上がりで健康的なデザートとも言える。

冬子はハンバーグ定食を頼んだ。

あきら：「本当にハンバーグ好きだな。」

冬子：「ハンバーグ以外にもカレーとかオムライスとかお鮎とかグラタンとかラーメンとかも好きです。」

あきら：「基本、子供が好きなのばかりだな。」

冬子：「そういわれると冬子照れてしまいます。」

あまり、ほめたつもりはなかったんだが。

冬子：「そういつあきらさんも毎度毎度のチャーハンです。」

あきら：「俺も好きなんだ。一人のときは大体チャーハンだったしな。」

冬子：「あきらさんのチャーハンは栄養が偏りすぎます。今度、冬子を作ってあげます。それを食べたらあきらさん、もうメロメロです。」

あきら：「ほう、楽しみだな。どんなチャーハンなんだ。」

聞くだけ無駄と知っているが、一応聞いてみる。

冬子：「お星様チャーハンです。」

やっぱり。

あきら：「それはどんなチャーハンなんだ？」

冬子：「お皿に盛り付けるときにお星様みたいな形になったチャーハンです。」

要は星型の型ではめ込んだチャーハンだな。チキンライスとかにも応用できそうだな。

あきら：「そうか。材料はなんなんだ？」

冬子：「あきらさんが作るチャーハンと同じです。」

あきら：「ごめん、それだと栄養の偏り具合は同じだと思うが、違

うかな？」

冬子：「違います。愛情が入っています。絶対おいしいです。あきらさんは食べたくないですか？」

あきら：「もちろん、食べたい。」

巧妙に論点をずらしてきたな。だが、冬子の料理だ。まずはすがない。

冬子：「わかりました。今度作ってあげます。あきらさんは幸せ者です。」

否定はしない。

そうやって小さな幸せな昼下がりが過ぎていく。

そんなときだった。後ろの席から話し声が聞こえる。女の二人の会話だ。

女性A：「お子さん、どちらに入院されたんですか。」

女性B：「ええ、六階の東棟です。」

女性A：「ああ、良かったですね。西棟じゃなくて。」

女性B：「はい、西棟だったら不安でたまらなくなります。」

舞たち4人は西棟だ。

女性A：「そうですね。西棟は特別小児病棟。不治の病の子供たちが集まったところですからね。」

女性B：「はい、あそこに入ったら一生病院の中ですよ。さなければならなくなってしまう。」

ずっと身体の芯が冷えたような感じがした。「不治の病」「一生病院の中」その言葉が耳に残る。

あきら：「ちよ」

冬子：「今の話、本当なんですか？」

俺より早く冬子が後ろの二人に声をかける。

うしろの二人は「ハッ」とした顔をした。

女性A：「いえ、ただの噂です。」

女性B：「私たち、これで失礼します。」

いそいそとレストランから姿を消した。

冬子が真っ青な顔をしている。

あきら：「ただの噂だよ、気にするな。」

そういう自分もきつと情けない顔をしてるんだろうなと思った。

.....

- - -

祐美子さんにもこの話をしている。いろいろこの噂について調べてもらった。しかし、結果はあまりいい話ではなかった。

祐美子：「あまり、人様の病気の話をするのはどうかと思うのですが、私も気になってきいてみました。どうやら、たかし君は脳の病気、かのんちゃんは心臓病、美鈴ちゃんは白血病らしいんです。」

あきら：「白血病ってかかったら確実に死ぬ病気じゃないか！」

祐美子：「いえ、今はそうでもないんです。7〜8割は助かるんです。」

あきら：「でも2〜3割は天国か。」

祐美子：「それは後ろ向きな考えです。でも、4人の中では、美鈴ちゃんがダントツで一番症状が軽いそうです。」

あきら：「うそだろ。うそですよね祐美子さん。舞はもう治りかけてるじゃないですか。」

祐美子：「・・・あくまで噂です。私たちは信じましょう。」

その後、機会を見つけて俺は病院のPCで調べた。脳の病気も心臓病も5年生存率は5割をきっていた。ただ、肝心のラインベルク症候群は記述がなかった。データが少ないようだ。だが、助からない人がそれなりにいる事実は見つけた。

あきら：「あの、噂は噂じゃなく本当なんだ。」

俺は呆然とした。すっかり、治ってきていると思ったのは甘い考えだったのか。そして、例え治っても、今度は4人全員が退院できる可能性はうんと少ない。なんてことだ。

俺は、西棟6階のナースセンターにいるつかさをつかまえて、問いただした。

つかさ：「確かに、西棟はクリーンフロアですので難病の子が多いのは事実です。だけどいわゆる「不治の病」の子だけがいるとか、一生病院から出られないとか言うわけではないです。西棟から退院する子もいっぱいいます。」

つまり、西棟には不治の病の子も一生出られない子も退院できない子もそれなりにいるということが。

つかさ：「大丈夫です。舞ちゃんは治ります。絶対治ります。」

あきら：「ありがとう」

つかさが俺を一生懸命励ましてくれるのが痛いほどわかった。だが、つかさの性格を知っているからこそつらかった。つかさはどんな悪い状況で、根拠がなくても前向きに考える。

その夜、俺はこの話を冬子にも言えず、ろくに寝ることもできなかった。

親つて言うものは我がままだな。舞が意識不明のときは、ただ、死なないでこのままでもいいと思ったのに、今は退院できないと噂を聞いただけで不安にさいなまされる。

- - - - -

次の日、とうとう、舞の不満が爆発した。

舞　：「もう帰りたい。病院で大人しくしてるのやだ。毎日、ビデオとご本と寝るだけなんていや！」

舞　：「帰って遊びたい。お友達と公園に行ってブランコ乗ったり、滑り台滑ったりしたい！」

舞　：「パパ、冬ちゃん、いつまで病院にいるの？　もう、元気になった。帰ろう！」

あきら　：「舞、もう少しの辛抱だ。熱が出なくなれば退院できる。入院したときと比べてだいぶ良くなったじゃないか？　もうちょっとだ。頑張ろう。」

冬子　：「そうです。舞ちゃん、もう少しの辛抱です。頑張りましたよ。冬子も頑張ります。」

舞　：「もう、いつも頑張ってる。毎日毎日頑張ってる。なのにどうして治らないの？」

長期入院している子にいつてはならない言葉。「がんばろう」を安易に言ってしまった。そう、子供たちは毎日頑張って病気と戦ってるんだ。頑張つてないわけじゃないか。

泣き出した舞を冬子が抱きしめ慰めている。親なんて無力なものだ。舞の病気との戦いにただ応援するしかできない。

もうどんな言葉を言っても舞の心を落ち着かせることはできない。「欲しいものはないか?」「退院したら行きたいところはないか?」「いつも言っている言葉は無意味だ。今は冬子の胸で泣きたいだけ泣かせるしかない。」

本当にいつ退院できるんだろう。それ以前に不安がよぎる。本当に退院できるのだろうか?本当に治るんだろうか? 治ってもすぐに再発しないだろうか?

和恵も子供のころ体が弱く学校にいけない日々が長く続いたらしい。そして和恵は天国に召された。

舞が天国に召されるのは絶対に絶対に見たくない。だけど、和恵より悪い状況が将来を暗くさせる。

ラインベルク症候群は難病指定されている疾患だ。だから、あせってはいけない。少し、良くなったところでいつぶり返すかわからない。

だけど、出口の見えない俺たちの戦い。大人の俺たちでも消耗戦に入っているのに当事者で子供の舞はどれだけつらい思いをしているのだろうか。

結局、俺は舞にテイベアのぬいぐるみを頑張っているご褒美に買って上げた。これで少し気がまぎれたのだろうか。かのんちゃんと二人でテイベアを子供にそのままごと遊びを始めるようになった。

でも、根本的な解決になっていない。俺たちの出口にない戦いは続いていた。

- - - - -

.....

ある日、おれは意を決して、冬子と一緒に草薙先生に直談判することにした。

あきら：「先生、正直に言ってください。舞は不治の病なんですよか？」

冬子：「一生、病院の中なんでしょうか？」

草薙：「はあ？」

あきら：「俺たち覚悟ができています。どうか正直言ってください。」

草薙：「急に何を言い出すんだ。」

俺たちはこの前のレストランの話をした。そして、色々調べたらその噂があながちうそでないことがわかったことも話した。

草薙：「楠木さん。だめですよ。親御さんがそんな話信じちゃ。子供がすぐ親の表情見て不安がりますよ。」

あきら：「でも」

草薙：「まあ、心配なのはわかりますけどね。お二人の質問に一つ一つ答えていきましょう。まず、舞ちゃん是不治の病かという和不治の病です。」

あきら：「..」 やっぱり。」

愕然とする

草薙：「花粉症もある意味不治の病でしょ。それと一緒に。」

あきら：「はい？」

草薙：「根治することはできないという意味です。でも『寛解』
ってという言葉があるんです。根治できなくても病状を押さえ込んで、
普通に生きていくに支障のないところに持っていくことを『寛解』
といいます。舞ちゃんの病気はそこに持っていくことを治療方針と
しています。」

あきら：「えっとそれじゃ。」

草薙：「ええ、根治は難しいかもしれませんが寛解にはなるでし
ょう。事実上は治るということです。」

あきら：「でも、根治できないとなると将来何らかの制限とかでて
きたりするのでしょうか？」

草薙：「運動制限とかでしょうか？　そうですね。オリンピック
の選手とかは難しいかもしれませんが。例えば中学高校で部活を行う
くらいなら制限はないですよ。」

少しホッとす。

草薙：「それと冬子さんの質問のほうですがはずれです。一生病
院を出れないことはないです。」

冬子 : 「え？」

草薙 : 「週末の一時外泊を許可します。だいぶ良くなってきましたからね。」

冬子 : 「ええ！」

地獄から天国に一気に上ったような気分だ。

あきら : 「ありがとうございます。ありがとうございます。」

草薙 : 「まだ夕方になると微熱が出ますので無理は禁物ですよ。この病気は暖かくなると治るんですが無理はいけません。無理すると冬場ぶり返すかもしれません。」

あきら : 「はい。」

草薙 : 「ゆっくり、慌てずに一步一步前に進んでいきましょう。」

あきら : 「本当にありがとうございます。」

.....

舞 : 「うそ、本当に帰れるの？」

あきら : 「ああ、土日だけだけどな。月曜日になったらこの病院に戻ってこないといけない。」

舞 : 「うれしい〜」

冬子：「でも、無理はいけないと言われました。おうちに帰ってもうちの中で大人しくしてないといけません。」

舞：「うん、大人しくしてる。」

次の日、舞はほぼ5ヶ月ぶりに家に戻ってきた。

舞：「和恵ママ、ただいま。」

舞が和恵の写真に挨拶する。

舞：「お星様。」

舞がお星様のぬいぐるみを抱きしめる。その後、狭い家の中を一つ一つ確認して回る。

寝室、2階の部屋、お風呂場、おトイレ、ベランダ、押入れの中。

舞：「入院前と一緒に。」

あきら：「そりゃそうだ。何も変わらないよ。」

舞：「帰ってきたんだね。」

あきら：「ああ、帰ってきたんだ。」

少しして冬子が買い物から帰ってくる。

冬子：「ただいまです。」

舞　：「冬ちゃん、お帰りなさい。」

冬子　：「夕飯の材料買って来ました。今日はお星様ハンバーグです。」

舞　　：「待ってました！」

舞が大喜びする。

舞　　：「だって病院の食事まずいんだもん。」

まあ、確かにおいしくはないな。しかも冬子の料理に慣れるとその差に愕然としてしまうだろう。

冬子　：「舞ちゃんとあきらさんはそこで大人しく待っていてください。冬子がよりに腕をかけて作ります。」

あきら　：「腕によりをかけてだろ」

冬子　：「そうとも言います。でも、細かいこと気にするのは良くないことです。」

あきら　：「はいはい」

舞が面白そうに俺たちのやり取りを見ている。

舞　　：「こごやって、冬ちゃんの料理を3人で食べるの半年ぶり。」

あきら　：「ああ、そうだな」

冬子：「お待たせしました。自信作です。」

舞：「わ〜。」

あきら：「待ってました。」

みんなでいただきますをする。

舞がお星様ハンバーグに手をつける。そして、突然、立ち上がり、箸を落とす。

舞：「うそでしょ。」

冬子：「お気に召しませんでしたか。」

あきら：「ん？ いつもと同じだろ。」

舞：「こ、こんなおいしいハンバーグ今まで食べたことない！前食べたときと味が断然違っている！冬ちゃんレベルアップしてる。」

冬子：「ふふふ。女子三日会わざれば刮目して見よです。」

あきら：「それは女子でなくて男子だ。」

冬子：「そうとも言います。でも、細かいこと気にするのは良くないことです。」

あきら：「ああ、悪かった。確かにこの半年散々ここで料理の練習

してたからな。もともとの調理師学校での教育の上にさらなる努力が実ってるからな。」

冬子：「わかればいいです。」

冬子がふいと膨れながら言う。

舞：「冬ちゃん、おかわり！」

冬子：「はい、もりもり食べて、早く元気になりましょう。そうすれば毎日冬子のご飯が食べられます。」

舞：「うん！」

.....

その夜、舞は満足してさっさと寝てしまった。俺と冬子の二人になった。

あきら：「冬子、少し話したいことがあるんだけどいいかな？」

冬子：「はい？」

あきら：「実はな.....」

冬子：「はい。」

あきら：「実はな.....」

冬子：「はい。」

あきら：「いや、やっぱりいい。」

冬子：「途中で止めるのはだめです。」

あきら：「ああ、そうだな。」

俺は覚悟を決めた。

あきら：「実はお願いがあるんだ。」

冬子：「？」

あきら：「舞のママになってくれないか？」

冬子：「冬子、今でも舞ちゃんのママ代わりです。」

あきら：「いや、ママの代わりでなくてママになって欲しい。」

冬子：「それって・・・」

あきら：「ああ、こんな俺でよければ結婚して欲しい。」

一瞬、冬子がハツとした顔をする。そして見る見る顔を赤くする。

冬子：「はい。もちろん。はいです。冬子うれしいです。」

冬子が俺の胸に飛び込んでくる。

UJU

1 - 9 ・急性骨髄性白血病（AML）（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

1 - 9 ・急性骨髄性白血病（AML）

この頃はたかしにいちゃんとかのんと3人で昼と晩の病院食を食べている。場所はあの院内学級の部屋だ。

病院食は決しておいしいものではない。特にかのは厳しい食事制限がついている。塩分と水分を控えなければならない。

でも、みんなと食べる食事は一人で食べる食事よりもはるかにおいしい。おしゃべりしながら食べるとあっという間に時間がたつていく。

夕食後、かのとたかしにいちゃんとおままごと遊びをする。たかしにいちゃんはあんまり好きじゃないみたいで、少しするとロビーに行こうといい始める。消灯前の少しの時間ロビーに行くこととなった。

かのは前から車椅子だけど、このごろはたかしにいちゃんも車椅子だ。たつて歩くと時々ふらついて転んでしまうので、安全のため車椅子を使っている。そこで、ナースセンターのつかささんに頼んで、私とふたりでたかしにいちゃんとかのんの車椅子を押ししていく。

ロビーについて3人でおしゃべりしていると、東棟に入院している小さな女の子がお母さんと一緒にやってきた。

女の子：「ねえ、あの人たちなんで車椅子なの？」

女の子が私たちを指差していた。

母親　：「だめよ。ゆいちゃん。見ちゃダメ。」

心にずしんと重いものがのっかってきた。私たちって見てはいけな
い存在なの？ 私たち西棟の子供達はいつもこんな感じに見られて
る。

だから、つい大声で言ってしまった。

舞　　：「私たちって、見てはいけない存在なんですか？」

つかささんがナースセンターから飛んできた。

つかさ：「舞ちゃん」

そう言って首を振る

母親　：「さあ、行きましょう。ゆい」

女の子と母親は私たちに何も言わずに去っていった。ロビーにはつ
かささんと私たちだけが残る。たかしにいちゃんも悔しそうな顔を
してる。だけどかのんは違った。

かのん：「舞ちゃん、ありがとう。でも、こんなこと慣れてるわ。
だから気にしないで。」

舞　　：「でも・・・」

かのん：「つかささん、お願い、ロビーの電気消してくれない？
星が見たい。」

つかさ：「うん、いいわよ。本当はダメだけど。特別にちょっとだ

けならいいです。」

そういうと私たちを窓の近くに連れて行き、電気を消してくれた。かのんは窓の外を見て指を指した。

かのん：「ほら、あそこにひととき美しくオレンジ色の星があるですよ。あれがうしかい座のアークトウルウス。春の星座で一番明るい星。その右下に白い明るい星があるですよ。あれがおとめ座のスピカ。」

私とたかしにいちちゃんは星をさがす。何とか見つけられた。

かのん：「ここまでは簡単ね。そのスピカの右に4つ星が四角形に並んでるでしょ。あれが、からす座。」

たかし：「あ、あった。見つけた。ちょっと暗いけど。」

舞：「わたしも見つけた。でも、どうしてもカラスに見えないよ。」

かのん：「星座なんてそんなもん。でも、からす座は特別な。カラスって黒いでしょ。だから、夜空では見えないの。あの4つの星はカラスを夜空に打ちつけた釘が光ってるの。あれはうそつきカラスが罰として打ちつけられてるんだよ。」

たかし：「舞ちゃんも、あんまりうそつくくと夜空に釘で打ち付けられちゃうよ。」

舞：「わたし、うそつかないもん。打ち付けられるとしたら、たかしにいちちゃんのほうでしょ。」

たかし：「そつか。そつかもな」

そうやってたかしにいちやんが頭をかいた。かのんも笑っている。さっきのいやな事件を忘れさせてくれる。かのんだって嫌な思いをしただろうに。

でも、こうやって前向きに考える方法を知っている。

その後3人は寝る時間までかのんの星の話を聞いて、おしゃべりをしていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

夜、物音でふと目を覚ました。誰かの声が聞こえる。

付き添いで寝ている冬ちゃんを起こさないようにそっと病室をでる。

声は美鈴の病室から聞こえる。私は病室の入り口から中をのぞく。

美鈴：「背中が痛い、お母さん、背中さすって。」

母親：「はい、ここ？」

美鈴：「そこじゃない、もっとこっち。」

母親：「うん、そこ。うう、気持ち悪い。」

美鈴は洗面器を抱え込んでいた。

舞：「美鈴！ 大丈夫?!」

私は駆け寄ろうとした。だけど美鈴のお母さんが止めた。

母親　：「舞ちゃん、ありがとう。でも、大丈夫。心配しないでね。だから、今日は遅いから部屋で寝なさいね。冬子ママも心配するわよ。」

舞　　：「うそ、こんな状態で大丈夫なわけじゃない。今、先生呼んで来る。」

そう言つてナースセンターに駆け込む。まだ、つかささんがいた。

つかささんに事情を話して、先生を呼んでもらおうとした。だけど。

つかさ：「大丈夫。美鈴ちゃんは今病気と戦つてるの。一生懸命戦つてるの。だから苦しいけどがんばつてるの。」

舞　　：「だったら、なおさら先生呼んでお薬あげて助けてあげてよ。」

つかさ：「お薬のんだから、ああなの。」

舞　　：「うそ、お薬飲めば治るんだよ。楽になるんだよ。お薬飲んで苦しむなんて変だよ。」

つかさ：「美鈴ちゃんの病気を治すためにはとても強い薬を飲まなきゃだめなの。だけど、そのお薬は自分をも苦しめるの。おなかとか背中が痛くなったり、気分が悪くなったり。でも、それ乗り越えていくと、少しずつ確実に良くなっていくの。」

舞　　：「・・・」

つかさ：「だから、美鈴ちゃんは治ることを信じて、どんなに辛い治療も耐えて頑張ってるの。」

．．．頑張るってそういうことなんだ．．．

舞は自分が恥ずかしくなってきた。

．．．頑張るって退屈とかまずい食事を我慢することだと思ってた．
．．．

．．．私は美鈴のように薬でつらい思いをしてるわけじゃない。かのんのように厳しい食べ物の制限があるわけじゃない。ただ、病院で大人しくしてればいいだけ。つらい治療なんかもなく、好きなものを食べて、夕方ちょっと熱がでるのを我慢するだけ。そんなの美鈴たちに比べたら頑張ったっていえるの？．．．

．．．それなのに私はパパとか冬ちゃんに当り散らして。なんてわがままなの．．．

私はナースセンターから自分の病室に戻ろうとしたけど、そのまま、美鈴の病室に向かった。

美鈴のお母さんが否定の意味をこめて言った。

母親：「舞ちゃん、冬子ママが心配するから戻りなさい。」

私は首を振った。

舞：「冬ちゃんは一度寝たら朝まで起きないから大丈夫。今、私は美鈴を励ましていたい。それが私のできることだから。」

そういつて私は美鈴の手を握った。黙って手を握った。

美鈴　：「舞ちゃん・・・」

美鈴のお母さんもあきらめたようで、そのままにしてくれた。

美鈴はその晩、何度も背中をさすって欲しいと頼み、そのたびお母さんや私がさすってあげた。そうすると美鈴が安心して落ち着いてくれた。

そのうち、美鈴も痛みが和らいだのか眠ってしまった。美鈴のお母さんもそれを見て安心したのか私に言った。

母親　：「舞ちゃん、ありがとう。さあ、今日はもうだいぶ遅いから寝なさい。」

舞　　：「うん。」

そういつて、私は自分の病室に戻った。

次の日、私は少し寝坊しておきた。でも、冬ちゃんはまだぐぐぐ寝てる。

そつと起きだして、また美鈴の病室に向かった。美鈴はまだ寝ていた。でも、美鈴のお母さんはおきていた。そして、私と一緒に廊下に出て話をしてくれた。

母親　：「昨日はありがとうね。」

舞　：「ううん、たいしたことしてない。」

母親　：「舞ちゃんにはちゃんと話しておいたほうがいいわね。」

そうやって美鈴の治療のことを話をしてくれた。美鈴は病気を治すために、強い「メロ」という薬を使っている。この薬を使うと、吐き気や高熱やおなかや背中が痛くなってしまう。だけど、これを使うと悪い血がなくなっていくらしい。

舞　　：「私が使ってるステロカイドと一緒に？」

母親　：「それよりもうんと強い薬。」

舞　　：「でも、そんな強い薬使うと、体がもともと持っている菌をやっつける力が弱くならない？　免疫とかいっつもの。私もそうだから。」

母親　：「舞ちゃん、よく知ってるね。そうなの。だから二人ともクリーンフロアにいるのよ。」

舞　　：「あ、そっか」

母親　：「だけど、美鈴は舞ちゃんよりもばい菌をやっつけることができなくなるの。『骨髄抑制』っていうのよ。この『メロ』を飲んでるとそうなっちゃう。だから、飲みつづけると死んじゃうから、一端止めるの。そして、また、体力が回復したら、また始めるの。」

舞　　：「いつまで繰り返すの？」

母親：「これを5回。今、入院してから2回目なの。」

舞：「そんなに大変なんだ。知らなかった。」

母親：「でも、頑張れば必ず治る病気だから。私たちはそれを信じてるのよ。」

舞：「うん、こんなに頑張ってるんだから、きっと治る。私もそう思う。」

母親：「それで、もう一つ大事なお願いがあるの。」

舞：「？」

母親：「もう少ししたら、その骨髄抑制期に入るの。そのときは例え舞ちゃんでも病室の中に入ってはだめ。その間はすごく病気に移りやすくなっていて、舞ちゃんにはなんでもなければ菌でも、美鈴に移ったら大変なことになるの。だから、その間は待って欲しい。」

舞：「どれくらい？」

母親：「10日から2週間くらい。」

舞：「わかった。我慢する。でも、早くよくなって欲しい。また一緒に遊びたい。」

母親：「うん。少し、元気になったら遊んでね。でも、舞ちゃんの病気も早く治るといいね。」

舞　：「うん」

そう言っつて私は病室に戻っていった。

- - - - -

あきらら：「ええ？もう夜の付き添いいらないうつていうのか？」

舞　：「うん、いらな。一人で大丈夫。」

祐美子：「私たちに気を使つてるのなら、そんなことしなくてもいいのよ、舞ちゃん。」

舞　：「もうひとりで大丈夫。」

あきらら：「だつて、美鈴ちゃんもかのんちゃんもたかしちゃんもみんな付き添つてるじゃないか？」

舞　：「でも、大丈夫。私もみんなみたいに頑張りたい。」

冬子　：「舞ちゃんだつて十分頑張つてます。」

舞　：「ううん、私わかつたの。私わがままだつて。みんなのほうが頑張つてるのに、自分も頑張つてると思つた。こんなの頑張つてるうちに入らない。もう、おうちに帰りたいとかわがままも言わな。夜も一人で寝れる。」

祐美子：「でも。」

舞　：「もう決めたの。夜の付き添いじゃない。」

冬子　：「冬子は嫌です。冬子は舞ちゃんママです。さびしい想いはさせません。舞ちゃんがなんと言おうと付き添います。」

二人とも頑固だ。冬子もこうと決めたらどこでも動かないし、舞も和恵に似て絶対に折れない。結局、冬子に週一日だけ夜の付き添いをしてもらうことで舞も冬子も納得した。

あきら　：「舞、本当に大丈夫なのか？」

舞　　：「うん、大丈夫。心配しないで。パパ。」

そうして、週一の冬子の付き添いを除いて舞は一人で夜を過ごすこととなった。

だけど、これが後で大きな後悔となる。

つづく。

舞は夜、お手洗いにいきたくなくて目がさめた。

(コンコン、コンコン)

6月に入り、舞は夜になると咳が出るようになった。熱は夕方ちよつとだけ出るときがあるくらいだった。

舞　：「これくらい大丈夫。パパや冬ちゃんには心配かけられない。」

そう言つて、お手洗いに向かう。途中美鈴の部屋が見えた。でも、戸が閉められていて中に入れなかった。会えない期間に入っていた。

舞　：「美鈴だつて頑張ってるんだから、わたしも頑張らないと。」

そう言つてお手洗いに向かつていった。

- - - - -

草薙　：「このごろだいぶ良くなって来ましたね。時々夕方熱が出るけど、それ以外は症状がないので、だいぶ回復しているようです。7月には退院できると思います。」

あきら　：「本当ですか？　よかったです。」

俺は安堵のため息をついた。

草薙 : 「舞ちゃん、特に身体で変わったところはない?」

舞 : 「ない。」

草薙 : 「うん、いい感じですね。ところで楠木さん、今日ちょっと会わせたい人がいるんです。」

あきら : 「はい。どなたですか?」

草薙 : 「キャサリンです。私がこの間までアメリカに研修に行っていた時に一緒だった方です。今は製薬会社で研究員をしています。キャサリン。」

草薙先生がそう呼ぶと大柄な外国人女性が入ってきた。べらべらららっつと英語で話し掛けられたが、さっぱりわからない。何とか握手だけできた感じだ。その後キャサリンさんは草薙先生と楽しそうに話していた。

あきら : 「キャサリンさんは草薙先生の恋人ですか?」

草薙 : 「違う違う。なんでそんなふうになるかな。キャサリンは認可されたばかりの薬を持ってきたんです。」

あきら : 「ええ、そうですね? いい雰囲気でしたよ。」

俺はからかい半分ニコニコして言う。

あきら : 「で、何の薬なんですか?」

草薙　：「ラインベルク症候群の薬なんです。」

草薙先生は茶目っ気ある顔つきで話をしてくれた。

あきら　：「！」「！」

舞　　：「！」「！」

俺は舞とお互い顔を見合わせた。

草薙　：「どうです。驚いたでしょう。アメリカでこの前認可された新薬なんです。キロニーネという薬です。私はキャサリンとアメリカでこの新薬開発の研究をしてたんです。それで、新薬認可の報告と日本で苦しんでる舞ちゃんに会いに来たんです。」

キャサリンさんが舞に抱きついてほお擦りをする。

草薙　：「それで、どうですか？　この薬飲んでみませんか？　まだ、日本では認可されてませんが、アメリカでは認可されています。治験という形で投与することができます。」

あきら　：「えっと、副作用とかないのですか？」

草薙　：「まず、大丈夫です。アメリカで認可されていますから。でも、さすがに100%とは言い切れません。」

あきら　：「この薬を飲むと早く治りますか？」

草薙　：「ええ、7月には退院できると思います。」

あきら：「飲まないとどうなりますか？」

草薙：「今までどおりの治療となりますので7月には退院できると思います。」

あきら：「あまり変わらないんですね。」

草薙：「まあ、実はそうです。もう、ほとんど舞ちゃん治ってますからね。」

あきら：「だったら、今までどおりでいいです。少ないとはいえ、新薬ですから副作用が怖いです。」

草薙：「まあ、そうですね。私もそうおっしゃるだろうとは思ってました。」

草薙先生はちよつと残念そうな顔をして、キヤサリンさんと話している。キヤサリンさんもちよつと残念そうな表情をしている。でも、実験のために舞を使うのは勘弁して欲しい。この薬を飲まなければ助からないのなら別だが。

あきら：「でも、これで安心できます。万が一のとき助かります。」

キヤサリンさん草薙先生ありがとうございます。」

俺は二人に頭を下げた。キヤサリンさんも言葉はわからなくても、意味は通じたみたいだ。にっこり笑ってくれた。

草薙：「楠木さん、でも、気を許しちゃだめですよ。この病気は治りかけが危ないんです。突然一気にぶり返して、重症化することが多いです。そのとき命を落としてる人もいますので十分気をつけま

しょう。」

あきら：「ええ、わかりました。ありがとうございました」

草薙：「はい、何か気づいたことがあったらまた遠慮なく言ってくださいね。」

草薙先生とキャサリンはそう言って病室を出て行った。

.....

次の日、冬子と舞がナースセンターにやってきた。そして、例によってたむろしている草薙先生を見つけて話し掛けた。

冬子：「あの、キャサリンさんはいますか？」

草薙：「今日は、東京の学会のほうに行っていますよ。」

冬子：「そうですか。残念です。」

草薙：「キャサリンに用事ですか？ 伝えておきますよ。」

冬子：「あの、草薙先生の恋人を見た・・・じゃなくて、舞ちゃんのお薬を開発した人にお礼をしたくて。」

どう見ても興味本位に来たとしか思えない。

草薙：「・・・昨日も楠木さんに言いましたが、キャサリンとはそういう仲ではないです。」

冬子：「でも、あきらさんが、言っていました。』とてもきれいで仲良さげにしてた』って。」

草薙：「あのね。」

松井：「草薙先生には忘れられない人がいるんですよ。」

松井先生が会話に割り込む。

草薙：「おい。」

冬子：「え？どんな人なんですか？片思いなんですか？」

冬子が目をらんらんと輝かせて聞く。

つかさ：「松井先生・・・その話は。」

松井：「あ、すみません。」

冬子：「え？内緒なんですか？」

草薙：「内緒ではないんだが。」

草薙先生が松井先生にお前が責任持って話せと目で合図する。

松井：「実は婚約者を亡くされたんです。半年前、事故で。」

冬子：「え、す、すみません。冬子立ち入ったこと聞いちゃいました。」

草薙　：「いや、構わないよ。たまには思い出話をするのも良いだろう。それも供養だ。ちよつと湿っぽくなるが。」

松井　：「恋人の名は番井美雪さんとおっしゃいました。女神のような人でした。」

冬子　：「素敵なお人だったんですね。」

草薙　：「いや」

松井　：「全然」

冬子　：「いやって即答ですか？　女神なんですよね？」

草薙　：「一言で言つと、高慢ちぎ」

松井　：「葉に衣を着せない言動」

草薙　：「高ビ―」

松井　：「常に上から目線」

冬子　：「はあ」

松井　：「前の病院で一緒だったんですが、いつも『はあ？　あなたお馬鹿』とか『そんなこともわかんないの？　年いくつ？』とか『あのね。頭は生きているうちに使わないともったいないわよ。あんまりなさそうだけど。』とか『あなたは私に従えばいいの。ぐちゃぐちゃ言つと天罰くだすわよ』とか言われてました。」

舞　　：「うわゝ、すごい先生。」

松井　：「でも、草薙先生とはすごく相性良かったです。」

冬子　：「あの、いいところもあっただんですよ。」

草薙　：「ああ、すごい優しいかった。『あなた、そんなことも出来ないの？本当に困ったわね。信じられない。しょうがない私が何とかするからそこで見てなさい』といった感じの人でした。」

松井　：「腕も最高なりました。口の悪さとあいまって患者の家族にとんでもない暴言吐くんです。」

冬子　：「どんな感じですか？『治るか治らないかわかるわけないだろう』とかですか？」

草薙　：「いや、逆。『私が来たからには必ず治します。あなた達は治った後、どうやって遊ぼうか考えていればいいんです。』って感じ。」

冬子　：「すごい自信家なんですね。」

草薙　：「ああ、でも実際に治す。」

松井　：「いい人でしたよね。本当はこの春からこの病院に来るはずだったんですけど。」

草薙　：「代わりに役立たずの松井先生が来たって訳だ。」

松井　：「役立たずはないでしょう。」

松井先生は草薙先生の大学での後輩でもあり二人は仲がよい。

草薙：「きてくれれば、この小児科も周産期センターのように3次病院扱いだったかもな。」

舞：「3次病院？」

草薙：「ああ、重症よりもさらに危険性の高い重篤な患者を受け入れる病院のことだ。緊急手術が可能なところ。この病院では周産期センターつまり、産科と新生児科は3次病院扱いなんだ。まあ、最後の皆って感じだな。」

舞：「へ〜。すごいんだね。」

そのとき内線がなった。

つかさ：「草薙先生、周産期センターの八重山いちご先生から電話です。早産の恐れのあるお母さんの様態が急変して、緊急手術の準備をお願いしたいとのことですよ。」

ナースセンターに緊張が走る。

草薙：「おお、噂をすれば周産期センターから呼び出しか。わかった。すぐいく、そう伝えてくれ。」

つかさ：「PICUで待ってるそうです。」

草薙：「おう。じゃあ、冬子さん、舞ちゃん、この話の続きはまた別の機会に。それでは。」

そういつてあたふたとナースセンターを出て行く。

舞　：「草薙先生、頑張つて！」

草薙　：「おう！」

そう言つてエレベーターホールに向つていく。

つかさ：「松井先生も検診にいかないと。」

松井　：「はいはい。じゃあ、私もこれで。冬子さん、舞ちゃん。
良い週末を。」

舞　　：「はい。」

冬子　：「松井先生も頑張つてください。」

冬子と舞はそのまま一時外泊の準備をした。今日から週末は一時外泊だ。

冬子　：「さあ、舞ちゃん。準備ができれば家に帰りましょう。」

舞　　：「お〜」

舞はかのんちゃんとたかしちゃんに挨拶をして戻ってきた。

冬子　：「さあ、帰りましょう。舞ちゃん。」

舞　：「楽しみ」

なんだかんだいっても、舞はこの外泊を楽しみにしている。

冬子　：「今日はお客さんが来ます。」

舞　　：「だれ？」

冬子　：「誰だと思えますか？」

舞　　：「うん、うん、わかんない。」

冬子　：「響子先生です。」

舞　　：「え？　響子先生来てくれるんだ！」

舞は響子先生が大好きだ。幼稚園のとき2年間担任だったこともあって、すごくなついている。

家に着いて準備をしていると、あきらが帰ってきて、その後、響子先生が現われた。

響子　：「やほ」

舞　　：「響子先生〜！」

舞が響子に抱きつく。

冬子　：「冬子、会ったとたんに響子ちゃんに抱きつくのはショックです。」

舞　：「冬ちゃん、ごめんなさい。だって、久しぶりなんだもん。」

そういつて今度は舞は冬子に抱きつく。

響子　：「まあまあ、冬子も落ち着きなさいよ。舞ちゃんは冬子が一番好きなんだから。」

冬子と響子は舞の一件以来、急速に仲が良くなっている。だから、響子は冬子のことを「冬子」と呼び捨てるまでになっている。

あきら　：「おれよりも冬子の方が好きなのか？」

響子　：「あきら、男親ってそんなもんよ。あきらめなさい。」

舞　　：「パパも大好き」

今度は舞はあきらに抱きついてきた。

冬子　：「あきらさん、舞ちゃんに気を使わせてどうするんですか。あきらさん最低です。」

そう冬子は言いながらも笑っている。

響子　：「舞ちゃん、すっかりよくなったみたいね。」

舞　　：「うん、もう大分元気。お熱も時々しか出なくなつた。」

響子　：「じゃあ、退院までもうちよつとだね。」

舞　：「うん、このまま行けば7月には退院できるって。」

冬子　：「本当に良かったです。冬子うれしいです。」

そうやって舞にまた抱きつく。

響子　：「冬子もすっかりお母さんね。」

響子が笑う。

冬子　：「それじゃ、今日は退院の前祝で心をこめて料理します。期待して待っていてください。」

舞　　：「今日のご飯は何?」

冬子　：「鳥のからあげとしらすのテン普拉です」

響子　：「から揚げは家庭料理の定番ね。でもしらすのテン普拉ってあんまり聞かないわね。まあ、冬子の料理期待して待ってるわ。」

言葉では期待してるといっているが、口調は全然期待していない感じだ。俺は舞と顔を見合わせて互いににやっけて笑う。

夕飯の準備が出来た。

あきら　：「いただきます」

一同　：「いただきます」

料理ができ、さっそく響子が料理に口をつける。俺と舞が関心のないふりをしながら、こっそり目で見つめる。

いきなり響子が立ち上がり、箸を落とす。

響子：「なに？この料理？」

冬子：「鳥のからあげですが、響子ちゃんお口に合いませんでしたか？」

響子：「違うわよ。その反対。なんなのよこの味。」

俺と舞がハイタッチをする。

舞：「先生、びっくりしたでしょう。」

あきら：「想像してなかっただろう。」

響子：「正直驚いた。から揚げってカラッとあげるのが命だけど、それってとても難しい。こんなにカラッとあげられるんだ。」

響子は箸でつまんだから揚げを見つめる。

あきら：「冬子の料理センスは抜群なんだ。一度食べるとその味を再現出来ちゃうんだ。」

冬子：「冬子、練習もいっぱいしました。」

響子が今度はしらすのテン普拉に手をつける。

響子　：「うわ。何この味。から揚げは想像できたけど、これは想定外よ。あきら、あんたものすごい幸せ者だって気づいてる？」

あきら　：「ちよこつと、その日本酒飲んでみな。新しい発見があるから。」

響子が一口日本酒を口に含む。さらに口の中でうまみが広がる。

響子　：「完全に脱帽ね。参りました。」

- - - - -

夜になり、響子がそろそろお暇するといつので、俺はバス停まで送っていくことにした。響子と並んで歩く。

響子　：「それで、式はいつなの？」

あきら　：「え？　なんでわかったんだ？」

響子　：「あのね、冬子の左手の薬指見ればわかるわよ。」

あきら　：「そっか。10月だ。」

響子　：「冬子は全てを受け入れられたのね。」

あきら　：「え？」

響子　：「あきらの過去と現在と未来。和恵という過去、舞ちゃんの病気という現在、それを背負ってあきらと舞ちゃんと未来を歩

くことを決断したのよ。」

響子　：「私には結局そこまで踏み込めなかった。躊躇があった。全てを受け入れる勇氣はなかったわ。」

あきら　：「・・・」

響子　：「あ、今は独り言。忘れなさいよ、あきら。」

あきら　：「ああ」

ちよつどバスが来た。

響子　：「結婚式には私も呼んでくれるよね。」

あきら　：「もちろんだ。」

響子　：「でも、私は新郎側でなくて新婦側友人代表だからね。それで新郎をめちやくちやくき下ろすスピーチしてあげるわ。」

あきら　：「勘弁してくれ」

響子　：「あはは、冗談よ。じゃあね〜」

そう言って響子はバスに乗って帰って行った。

つづく

1・111・星の子しおん（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

1 - 111 ・星の子しおん

6月も終わりに近づき7月にもうすぐになるうとしていたある日。

相変わらず外は梅雨空であきもせず雨が降り注いでいた。

窓から外を見るといつぱい傘の花が咲いている。

(コンコン、コンコン)

咳も相変わらず続いていた。けれど、パパや冬ちゃんに心配かけるといけないので私は周りには黙っていた。

舞　：「少し、ベッドで横になろうかな。」

もう少し、ロビーの窓から外の傘の花を見ていたかったが部屋に戻ることにした。

途中、たかしにいちちゃんの部屋の前を通る。ふと、気になったので中をのぞいた。

たかし：「やあ、舞ちゃん。」

ベッドを起こしてビデオを見ていたたかしにいちちゃんが私に気づいて挨拶してくれた。

舞　：「大丈夫？」

心配そうに様子をつかった。

たかし：「うん、今日は少し調子がいいんだ。」

舞　：「良かった。」

舞は顔の表情を緩める。

たかし：「そうだ、舞ちゃん、ご本読んでくれないか？」

舞　：「うん、いいよ」

たかしにいちちゃんは、この頃は足だけでなく手もしびれるようになってきており、起きる事もできないし、本を持って読むこともできにくくなっている。

舞　：「どんな本がいい？　院内学級から取ってくるよ。」

たかし：「実は普通の本じゃなくて俺のノートの物語を読んで欲しい。たまには人に読んで聞かせるんじゃないかって、他の人が読んでいるのを聞きたいんだ。」

舞　：「わかった。」

そういうとベッドの隣の台からノートを持ってきた。たかしにいちやんの字でびっしり書かれた物語集だ。

舞　：「なにがいい？」

たかし：「黒猫ニャーゴ」

舞　：「うん、わかった。」

舞は朗々と読み始めた。たかしにいちちゃんは目を閉じて聞いている。読み終わるとたかしにいちちゃんは言った。

たかし：「舞ちゃんは読むの上手だな。まるでニヤーゴが本当にいるみたいだ。」

舞：「えへへ、次は何がいい？」

たかし：「星の子しおんをお願い。」

舞：「星の子しおん？」

聞いたことのない題名だった。

たかし：「一番最後にかかっている。」

ノートをめくると書いてあるところの一番最後にあった。

舞：「あ、あった。じゃあ、読むね」

たかし：「ああ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

星の子しおん

この話は、子供会のリーダー研修の時にお姉さんから聞いた話なんだ。子供会って知ってる？ 小学生になると地域の子供達が一緒になって夏祭りとかクリスマス会とかやるんだ。1年生から6年生まで一緒になってね。

そんな子供会がこの街にもこの街の周りの街にもいっぱいあるんだけど、いっぱいある子供会のなかから、何人かが選ばれて、みんなが集まってお泊り会をするんだ。それがリーダー研修会。

僕が行ったのは、春の研修会でキャンプだったんだ。みんなで、キャンプファイヤーとかやるやつ。

そのとき、高校生のお姉さんがボランティアで来てたんだ。名前は「かのん」みんなかのん姉さんと呼んでいたんだ。かのんねえさんは心臓が弱く、車椅子で生活していたんだ。

僕が「大変ですね」と声をかけると、きよとんとしてこう言ったんだ。「でも、昔は病院から一步も出られなかったの。病院の狭い窓からしか、外の世界が見られなかった。それに比べれば幸せよ。」そう、笑いながら答えてくれた。

僕はそのお姉さんが気になって、この研修会の間、車椅子を押す係になることを申し出た。

「それじゃあ、お願いしようかな。」そう言ってお姉さんは快諾してくれた。

「かのん姉さんはなんのボランティアなの」僕は不躰にもそう聞いてしまった。

「普段は近くの天文台でアルバイトしてるの。星を見るのが大好きなんだ。私、こんな身体でしょう。だけど、こんな身体でも星の解説はできるんだ。だから、今日みんなに星の話をしようと思ってね。」

「

「へ〜。僕、星ってそんなに詳しくないんだ。なんか面白そう。」

「キャンプファイヤーが終わったなら、みんなに星の話をするから、そのとき来てくれる？」

「うん。もちろん」

.....

キャンプファイヤーが終わり、お姉さんが星のお話をしてくれた。みんな、芝生の上に座ったり、寝転んだりしながら星を見ている。

「今、正面の三本杉の真上にずっと高く明るい星があるでしょう。あのオレンジ色の星。あれが牛飼い座のアークトウルウス。春の星の中で一番明るい星。よく一番星として夕方東の空に見える星です。」

かのん姉さんが話を始めた。

「そのしたの西、つまり右下のほうに白く輝く星があるでしょう。あれが、ふたご座のスピカです。そしてその2つの星と右側で三角形を結ぶように星があるでしょう。あれがしし座のデネボラです。」

「これが春の大三角形です。」

みんな、がやがやと話をしながら探している。でも、今日はちよつと天気がかすんでるのか、星がよく見えない。そのため、逆に見える星の数が少なく、その三角形がよく見える。

「かのん姉さん、見つけた」僕がそう答える。

かのん姉さんにはっこり笑って話を続ける。

「さつき言ったおとめ座のスピカの右側に4つ四角形に星が並んでるの見えるかな？」

僕たちは目を凝らして探した。他の子が「見つけた！」と叫んでる。僕も一生懸命探してみた。あつた。光に慣れると4つの星が光っていた。

「あれは、神様が『しおん』を夜空に打ちつけた時の釘が光っているんです。」

「しおん？」僕はかのん姉さんにきいた。

「ええ、しおんは神様ポロンの使い。まあ、お手伝いさんみたいな人ね。しおんとポロンは二人で暮らしていました。しおんは神様ポロンのお使いをするのが好きでした。本当はお使いが終わった後、『ありがとう』と頭をなでてくれるのがうれしかったんだけどね。」

「ところがポロンに恋人が出来ちゃったの。そうしたら、ポロンは恋人に夢中になってしまい、ちっともしおんの相手をしてくれなかったのよね。」

「それで、しおんはさびしくなっちゃったんだけど、ただの神様の使いと神様の恋人じゃ比べてもしょうがないって我慢してたの。でも、実はしおんもポロンのこと好きだったのよね。」

「ある日、ポロンの恋人が病気で寝込んでしまったの。だけど、ポロンは神様の仕事で一日中家にいるわけにはいかない。そこで、しおんが一生懸命恋人の看病をするの。」

「そうしているうち、恋人もだんだん良くなってきたの。でも、ポロンは恋人のことばかり、心配して、しおんが看病してくれてることに感謝の言葉もないのよ。」

「そうやって、看病のかいもあって恋人は大分良くなるんだけど、相変わらず、ポロンは恋人ばかり見ていて、しおんにねぎらいの言葉ひとつくれなかったの。」

「とうとう頭に来たしおんは、一計を案じたのよ。恋人が散歩に行ってる時にしおんは恋人のふりをしてベッドで寝るの。」

「そうして、ポロンが帰ったきたらこう言ったのよ。『私はもうだめです。今までありがとう』そういつて死んだ振りをするの。ポロンはわんわん泣いちゃうの。そうしているうちに恋人が散歩から帰ってきてポロンはびっくり。」

「それで、かんかに怒ったポロンはしおんを許さずに夜空に釘で打ち付けちゃったの。かわいそうにね。ちゃんと思いが伝わらなかったのね。この神話はこれでおしまい。」

お姉さんはふうとため息をついた。

「神様ひどくね？ ちよつと構った欲しかっただけなのに。まあ、ちよつと死んだ振りをするのは良くないけど。」僕はそう言った。

「そうね。でも、神話って大体こんな残酷なお話が多いわね。でも、

昔の人の考え方がわかって、それはそれで面白いけどね。」

その後、僕とかのん姉さんは二人で残って、星の話が続けた。

「ほら、天頂近くにあるのがおおくま座の北斗七星だよ。ひしゃくみたいな形してるでしょ。そのひしゃくのふちを伸ばしていくとこぐま座の北極星、逆にそのひしゃくの柄の先を伸ばしていくとさっきの牛飼い座のアークトウルウスとスピカにつながるの。」

「これが春の大曲線って言ってアークトウルウスを見つける方法なんだけどね。私はいきなりアークトウルウスを見つけるのに慣れるんだ。」

かのん姉さんはそう行った。

「でも、あきらかに北斗七星から見つけるほうが簡単だよ。どうして？」

僕がそう行った。

「病院の窓からは北天は見えなかったのよ。窓が南向きだったから。だから北斗七星を見たのは退院した後だったの。」

かのん姉さんはそう言った。

「入院する前は？ 見なかったの？」僕がそう言つと

「ものごころついたときには入院してたから。」そう答えた。

「大変だったんだね。つらかったよね。」

「うん、大変だった。でも、その病院には院内学級があつて、みんなとよくこうやって星の話をしてたの。そのときは楽しかった。」

「へ、そのみんなはどうしてるの?」

「退院して元気にやってるよ。時々会ってる。」

「そっか、そうだよね。みんな治ってよかったね。」

「うん。さ、今日は遅いから寝ましょう。あしたも朝早いですよ。」

「うん、あのさ、このキャンプが終わっても会えるかな? またかのん姉さんの話が聞きたい。」

「ええ、ぜひとも。私は週末になると町外れの天文台にいるから遊びにいらっしゃい。」

「うん、じゃあありがとう。かのん姉さん。」

「はい、おやすみなさい。」

.....

舞　　：「すごい、物語の中に物語がある。」

たかし：「ああ、作中作っていうんだ。ちょっと変わってて面白いでしょう。」

舞　：「うん。今までと雰囲気が違う。でも、難しいお話。」

たかし：「やっぱり？」

舞　：「特にしおんがなんでポロンが好きなのにいたずらするのかわからない。好きなら好きって言えばいいのに。」

たかし：「そっか。そうだよな。」

たかしにいちゃんが微笑みながら言う。

舞　：「かのん、喜ぶだろうな。自分の物語が出来たって。でも、高校生になってまで車椅子って言う設定に怒るかも。」

たかし：「何で、私だけ治ってないのよ！ってね。」

たかしにいちゃんが舌をぺろっと出す。

舞　：「あ、それと、この主人公の男の子、たかしにいちゃんです。たかしにいちゃん、かのんのこと好きだもんね。」

たかし：「さあ、どうだろう。想像に任せるよ。」

二人はそうやって色々物語について話をした。「星の子しおん」の話だけでなくその他の物語についてもあれこれ話した。最後にトリックエンジェルの話になった。

たかし：「トリックエンジェルって未来のお話じゃん。それで、一度しか魔法が使えないから一人にしか現われないよね。」

舞　：「うん。」

たかし：「それで、舞ちゃんと美鈴ちゃんとかのんの3人のうち誰に現われるかを考えたんだ。」

舞　：「え？　あんなの作り話じゃない。本当におきつこない。それに、3人のうち一人しか治らないみたいじゃない。」

たかし：「いや、そんなことはないよ。よくわからないけどきつと本当に起きると思う。それに、別にトリックエンジェルに治してもらわなくても治る方法もいくらでもある。だから、3人も治るよ。」

舞　：「うん、みんな治る。」

たかし：「それでね、なんとなくの予感なんだけど、トリックエンジェルは舞ちゃんの目の前に現われると思う。それがいつなのかはわからないけど。」

舞　：「うそだく。」

たかし：「きつとそうだよ。それでね、もし、トリックエンジェルがきて治っても、かのんや美鈴と遊んだり、励まして欲しいんだ。治るとみんな病院のことを忘れてここにはこなくなっちゃう。それじゃあ、かわいそう。」

舞　：「うん、トリックエンジェルの話は信じられないけど、もし、治っても遊びに来る。お見舞いに来る。たかしにいちちゃんと物語の話をする。約束する。」

たかし：「ありがとう。じゃあ、指切りしよう。」

舞：「指きりげんまんうそついたら針千本の〜ます。」

ふたりは互いの小指を結び、約束した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

何日かたち、週末の恒例の外泊となった。日曜日の夕方、冬ちゃんが料理を作ってる。私とパパは歌をうたって待っていた。

二人：「昔のどんな王様も冬ちゃんの料理は食べられない。」

冬子：「舞ちゃん、パパの真似をしてはいけません。へんなのが移ってしまいます。そうになったら冬子とても悲しみます。」

冬ちゃんは笑いながらそういった。

冬ちゃんの料理ができるのを待つ時間が私にとってすごく楽しい時間だ。

冬子：「お待たせしました。今日の料理は豚カツのブルーチーズソース添えです」

ふたり：「おお〜」

一同：「いただきます。」

舞：「おいしい〜。しあわせ〜。」

あきらら：「うめ〜。なんでこんなにうめえんだ。涙が出てくる。冬子、おかわり。」

冬ちゃんがパパにご飯のおかわりをよそって来る。

冬子：「舞ちゃんが帰ってくる週末は特によりに腕をかけて料理を作ります。よろこんでくれて冬子うれしいです。」

もう突っ込む気もおきないぐらい夢中で食べた。

そんな時、電話がかかってきた。冬ちゃんがでる。病院からみたいだ。

冬子：「つかさんからでした。舞ちゃんのことじゃないんですが、明日冬子だけでなくあきらさんにも来て欲しいとのことです。」

あきらら：「なんだろう」

冬子：「さあ、詳しいことは明日話すそうです。さあ、さめないうちに食べてください。」

．．．どうしたんだろう．．．

せつかくのおいしい料理で楽しい気分だったのに私は少し不安になった。

．．．
．．．
．．．

次の日、病院に戻るとパパと冬ちゃんがつかさんに呼ばれた。戻ってきたとき冬ちゃんが泣いていた。そして、私に近づいてぎゅっ

と抱きしめた。

舞 …「どうしたの？」

冬子 …「なんでもありません。冬子目にゴミが入りました。」

あきら …「舞。ちょっとお願いがあるんだ。いいかな？」

舞 …「いいよ。なに。」

あきら …「うん、たかし君に物語を読んで欲しいんだ。」

舞 …「いいよ。そんなこと簡単だよ。」

あきら …「じゃあ、パパと一緒にいこう。」

舞 …「うん。」

パパと一緒にたかしにいちちゃんの病室に入った。そこには透明なプラスチックのマスクをつけたたかしにいちちゃんがベッドで寝ていた。あのマスクは覚えてる。私がこの病院で目がさめたときにつけてたのだ。

あきら …「さあ、読んであげて。」

舞 …「でも、たかしにいちちゃん寝てるよ。」

あきら …「うん、でも、ちゃんと聞こえてるから大丈夫。」

舞 …「でもさ、やっぱりせつかくだからおきてからにしてあげ

ようよ。」

あきら：「うん、でも、目を覚ますためには読んであげないといけない。」

舞：「そうなの？　じゃあ、読んであげる。」

そういつて私はたかしにいちゃんの物語を引っ張り出し、ベッドの横で読み始めた。

その後、美鈴とかのんがそれぞれ来て、美鈴は院内学級から持ってきたご本を、かのんは星座の物語をたかしにいちゃんに話した。だけど、たかしにいちゃんは起きなかった。

舞：「今日はたかしにいちゃん調子悪そうだね。」

あきら：「うん、今日はたかしにいちゃんも疲れるからこれくらいにしよう。」

そういつて病室をでた。パパは会社にそのまま行った。

舞：「冬ちゃん、たかしにいちゃんどうしちゃったの？」

冬子：「ちょっと疲れてるだけです。舞ちゃん、冬子と一緒にたかしちゃんが元気になるよう神様にお祈りしましょう。」

舞：「うん」

数日間、私と、美鈴、かのんはそうやってたかしにいちゃんのベッ

ドの横でお話をしていた。

ある日、私が物語を話していたら、冬ちゃんとかかささんが病室に入ってきた。

つかさ：「舞ちゃん、たかしちゃん疲れてるから今日はこれまでにしてあげて。」

舞　　：「う、うん。」

3人で病室を出た。つかささんが冬ちゃんに何か話してる。

つかさ：「これからはご家族だけで。大切な時間ですから。」

冬子　：「はい。」

冬ちゃんと病室にもどると冬ちゃんは私を抱きしめた。ずっと抱きしめていた。

私にはつかささんの言っている意味がわからなかった。今日は七夕だっていうのに雨が降っていた。これじゃあ織姫は彦星に会えないと思った。

次の日、今朝は冬ちゃんのほかにパパも来ていた。

舞　　：「パパ、おはよう」

あきら：「ああ、おはよう」

でも、冬ちゃんもパパもなんか元気がない。

舞　：「みんなに挨拶してくる。」

そう言つてわたしは美鈴の病室、かのんの病室とめぐつた。美鈴はまだ寝ていたから、そくとしておいた。かのんは今日は診察で別の部屋に朝からいつてるとの事だった。最後にたかしにいちゃんの部屋に入った。

舞　：「あれ？」

そこには誰もいなかった。たかしにいちゃんもお母さんもお父さんも。

部屋にパパと冬ちゃんとかささんが入ってきた。

あきら：「舞、よく聞くんぞ。いいか、いいか、たかしちゃんは昨日の夜、天国に行った。」

舞　：「天国つて、和恵ママがいるところ？」

あきら：「そうだ。」

パパの両目から涙がこぼれてる。

舞　：「ねえ、天国にいくともう会えないよね。」

あきら：「そうだ。」

舞　：「うそでしょ。うそだよね。」

パパはだまつてる。

舞　　：「いや~~~~~」

私は大声をあげて泣いた。

そして、私はその日高い熱をだして倒れた。

つづく

1 - 1 2 ・梅雨の終わり（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

1 - 12 ・梅雨の終わり

草薙　：「なんですって！　ステロカイドの服用をやめてたですって！」

草薙先生が俺を大声でなじる。

あきら　：「だって、副作用があるって言ったじゃないですか？　だから、もうほとんど治ってるのに無理に飲ませる必要ないと。」

草薙　：「ああ、説明してなかった私も悪いですが、なんてことをあの薬の副作用は、急に止めると投与する前より悪くなるのが副作用なんです。もともと人間は体の中でステロカイドを作っているんですが、外部から与えるとサボって自分で作らなくなります。」

あきら　：「え？」

草薙　：「つまり、舞ちゃん入院前より免疫抑制力が落ちているんです。その状態で一気にラインベルグ症候群がぶり返して進んじやっただんです。」

あきら　：「ステロカイドをもう一回投与すれば？　何とかありませんか？」

草薙　：「ステロカイドの投与でどこまでできるレベルではありません。」

あきら　：「なんですか？　今まではステロカイドで治っていたじゃないですか。」

草薙　：「いいですか？　入院前の状況はじよじよに悪くなっていた状態でした。そして病状のピークは入院時です。あの時は人工呼吸器、強心剤などで乗り切りしましたが、あれはぎりぎりです。ステロカイドは回復を早める手段です。」

あきら：「・・・」

草薙　：「今回は一気に病状が進みました。たぶん、咳とか前兆があったのでしよう。それを見逃してしまい、また、ステロカイドをやめ、そして、たかしちゃんのショックで心のほうが参ってしまった。これだけ悪条件がそろってるんです。条件は入院前よりも悪いでしょう。」

あきら：「でも、まだ朦朧としてますが意識はあります。あの時とくらべたらまだましです。」

草薙　：「まだ、症状は急速に進行している状況です。このままいくと、状況はさらに悪化する可能性もあります。」

俺はなんてことをしてしまったんだ。悔やみきれない。自分の浅はかな判断で、また、舞を死の淵まで追い込んだ。昨日まであんな元気だったのに。

温厚な草薙先生が激怒している。もし、俺が草薙先生の立場なら、俺を殴り倒している。

状況が悪化する可能性がある？それは草薙先生の控えめな発言のはずだ。意識がなくなるのも時間の問題か。それどころか最悪のことを覚悟しろってことか。

冬子：「あの、先生、何とかして上げられないんですか？ 先生最初に会ったとき全力で治すって言うてくれたじゃないですか。」

草薙先生が首を振った。

草薙：「もう後は．．」

舞の力を信じるか、神の慈悲にすぎるか、どっちなんだ？

先生を含めて周りは助けようがない。祈るしかない。

どっちも同じか。俺は自嘲した。

草薙：「キャサリンが持ってきたキロニーネに託すしかありません。」

あきら：「え？」

冬子：「え？」

このときの俺たちの顔はきつと面白かっただろう。ものすごく情けないアホ面してただろう。

草薙：「例の治験薬です。楠木さんが無理の飲ませることはないだろうと言っていた薬です。」

あきら：「あの薬で治るんですか？」

草薙：「この状態だと病気の進行が早いかキロニーネが早いかの勝負になります。私はここは勝負時だと思いますし、今すぐにでも投与したい。後は楠木さんの決断次第です。」

あきら：「ええ、是非お願いします。お願いします。」

まだ、最後の切り札が残っていた。俺はそれに賭けた。

- - - - -

舞の点滴にキロニーネが入れられた。キロニーネが舞の身体に入っていく。

あきら：「舞、大丈夫か？」

舞がつつすら目を開ける。

舞：「パパ、ごめんなさい。おせきコンコンでたのに黙ってた。心配かけなくなかったから。だけど、もっと心配掛けることになった。ごめんなさい。」

あきら：「おまえが謝る必要はないんだ。悪いのはパパなんだ。パパが悪いんだ。」

おれは舞を手を握り謝った。舞はその手で俺の頭をなでた。

舞：「パパは悪くない。いい人。」

あきら：「舞」

- - - - -

草薙　：「今晚がヤマでしょう。今夜乗り切れればキロニーネが一気に効き出す筈です。後は舞ちゃんのがんばり次第です。」

そう草薙先生はおっしゃった。

俺と冬子はその夜、舞のベッドの横で舞の手を握り祈り続けた。

それしかできなかつた。

夜も遅くなつて、病室に女の子が入ってきた。俺達は遅いから寝るようにといったが、その子が頑として受け付けなかつた。そして一緒に舞の手を握ってくれた。一生懸命にぎってくれた。

そうやって眠れぬ夜を過ごしたが明け方くらいに俺達はいつのまにか眠ってしまった。

- - - - -

窓から差し込む朝日で目を覚ました。

窓の外ですずめが鳴いている。

舞　　：「パパ、冬ちゃん、美鈴どうしたの？」

私は目を覚まして周りを見回すとベッドの上にパパと冬ちゃんと美鈴が布団にかぶるように寝ていた。

舞　：「こんなところで寝ると風邪引くよ。」

3人が目を覚ます。

舞　：「ほら、しっかりおきて。」

パパと冬ちゃんが私に思いっきり抱きつく。

舞　：「痛いよ、二人とも。もっとやさしくしてよ。」

パパがガバって起きて病室を出て行った。草薙先生を呼んでる声が聞こえる。

舞　：「冬ちゃん、やっぱりパパ変な人だね。」

冬ちゃんは抱きついたまま離れない。

舞　：「冬ちゃんまで。美鈴も何泣いてるのよ。そうそう、美鈴が夢にでてきた。私とたかしにいちちゃんが二人で一つの傘をさして道を歩いてたら、後ろから美鈴がきたの。そして美鈴が大声で叫んでたの、それで、立ち止まってふりかえって聞いたんだけどよく聞こえなかったの。それでまた歩き出したら、今度は美鈴が私の手を握って、『行くな！』っていうの。そうしたら、たかしにいちちゃんが笑って、『えいっ』ていって傘から私を追い出すの。それでたかしにいちちゃん走っていっちゃった。私の傘持ち逃げして。それで私と美鈴が雨の中呆然と立ち尽くすの。ひどいよね。」

今度は美鈴が抱きついてきた。

舞　：「もう、美鈴まで。」

病室の入り口からかのんが顔を出してきた。後ろにつかささん、草薙先生、そしてパパもいる。つかささんに車椅子を押されてかのんが近づいてくる。

かのん：「舞のバカー！ どれだけ心配したと思ってるのよ。」

そういつてかのんはわんわん泣き出した。

そっか、私、危なかったんだ。そして、すっかり治ったんだ。

舞 夫。：「みんな、ごめんなさい。そして、ありがとう。もう大丈夫。」

草薙先生が診察してくれた。

草薙 夫。：「熱もないし、咳も出ていない。治っている。」

草薙 舞。：「ある程度は予測していたが、ここまで即効で効くとは思わなかったな。やはり、あのキロニーネは特效薬だな。一週間様子見て退院だな。」

あきら：「先生、ありがとうございます。なんて御礼をいつたらいいか。」

草薙 舞。：「いや、舞ちゃんが頑張ったんだよ。私は手助けしただけだ。」

冬子：「先生、かつこよすぎです。」

草薙：「そうそう、完治したわけではないので。定期的に診断が必要です。普段はキロニーネは飲まなくて良いですが、症状が出たら早めに診察を受けキロニーネを飲んでください。今度はちゃんといい付けを守ってくださいよ。」

.....

一週間後、退院の日を迎えることとなった。

舞：「かのん、美鈴、絶対にまた遊びに来るからね。」

かのん：「絶対よ。お見舞いじゃ許さないわよ。遊びに来るのよ。」

美鈴：「学校始つても院内学級に遊びに通つてね。」

舞：「うん、二人とも待つてね。あ、本当は待つてもらうのは良くないんだけど。二人とも早く良くなってねっていうのは白々しいから、やっぱり待つてね。」

二人とも笑つてる。

舞：「草薙先生もありがとうございました。先生は命の恩人です。」

草薙：「おう、もう泊まりに来るんじゃないぞ。遊びに来るのは構わないけどな。でも、こっちだって忙しいんだから邪魔すんなよ。」

舞：「つかささんもありがとう。」

つかさ：「退院おめでとう。舞ちゃん。やっぱり舞ちゃんにトリックエンジェルが来たんですね。」

舞　　：「え？」

つかさ：「だって、医者と科学者とお母さんが助けに来たじゃないですか。」

舞　　：「医者は草薙先生、科学者は、えっと、そっか、薬持ってきたキャサリンさん。でも、お母さんは？」

冬子　：「あの、舞ちゃん、これもらっていただけませんか？」

冬子が封筒を舞に差し出す。封筒には星の形をしたシールが一杯貼ってあった。

舞　　：「うん、でも、冬ちゃんこの封筒は何？」

冬子　：「結婚式の招待状です。」

舞　　：「え？」

冬子　：「もし良かったら、冬子とあきらさんの結婚式に出ているだけませんか？」

舞　　：「え？ ええー！ じゃあ？」

あきら：「ああ、冬子がおまえのお母さんになる。」

舞　：「本当？　本当？　信じられない！　パパ、冬ちゃんおめでと〜」。

舞があきらと冬子に交互に抱きつく

あきら：「ありがとう、さあ、新しい家族の生活の始まりだ。舞、まずどこ行きたい？」

舞　：「もちろん、冬ちゃんと温泉！」

梅雨の明けた太陽がまぶしかった。

第1章「院内学級編」完

1 - 1 2 ・梅雨の終わり（後書き）

これで第1章「院内学級編」がやっと完了しました。ここまで読んでくださった方本当にありがとうございます。

第1章作成の裏話とかは活動報告やブログに載せていきたいと思いません。

これからは少しペースを落として第2章「ボランティア編」に入ります。第2章は退院後の夏から秋にかけての舞ちゃんの話が中心になります。どうか宜しくお願いします。

短編シュリンプカレー（前書き）

この物語にでてくる料理方法はフィクションです。責任を負いかねますのでご了承ください。

短編シュリンプカレー

8月の暑い日の昼下がりのことだった。

冬子：「舞ちゃん、ザリガニ釣りいきましょう」

舞：「え？ ザリガニ？」

冬子：「はい、ザリガニです。釣った事ありますか？」

舞：「釣ったことないし、見たこともない。」

冬子：「舞ちゃん不憫です。ザリガニみたことないなんて。でも、安心してください。冬子が連れてってあげます。」

冬子は自分の家からうちに着いたとたん舞にそう言った。ほとんど毎日うちに来ている。というか、ほとんどうちに泊まっている。今日も、自分の家に荷物をとりに行って戻ってきたところだ。

冬子：「冬子はレベルアップしました。あきらさんの婚約者になったのです。だから、今まで見たいに、こそこそこの家に来る必要なくなりました。堂々とこれます。舞ちゃんも安心です。」

舞：「前から堂々と来てたと思うけど。」

冬子：「それでは、早速準備していきましょう。」

話を全然聞いていない。

舞　：「ええ？　今から？　海に行くにはちょっと遅い時間だよ。」

冬子　：「海には行きません。近くの小川です。」

舞　　：「ええ？　川にカニがいるの？」

冬子　：「ザリガニは海じゃなくて川にいます。冬子でも知ってます。」

ふたりは近くの用水路に向かった。

舞　　：「こんなところにいるの？」

冬子　：「いるはずですよ。冬子なんとなくわかります。」

舞　　：「釣り竿とかは？」

冬子　：「いらないます。この竹の棒とたこ糸で十分です。」

舞　　：「えさは？」

冬子　：「するめです。あきらさんと一緒です。もうこれでザリガニもあきらさんもメロメロです」

冬ちゃん、パパもするめで釣ったの？

冬子　：「はい、これが舞ちゃんの釣りざおです。」

竹の棒にたこ糸を結んだ釣りざおを舞に渡す。

冬子：「冬子やって見せます。見ててください。」

ちやぶん。するめを水の中に落とし、ゆっくり引く。すると、急に糸が張り出した。そくと冬子が引き寄せる。水の中から赤いものが出てきた。

舞：「わ！」

大きなはさみを二つ持ったえびが出てきた。

舞：「えび？」

冬子：「ザリガニです。」

冬子は網ですくってザリガニをバケツに入れる。

舞：「でも、格好はえびだよ。長いおひげ2本あるし。」

冬子：「はさみがあるからカニです。」

舞：「横に歩くの？」

舞はそくとザリガニに触ろうとする。ザリガニははさみを持ち上げ後ずさりする。

舞：「へへ、後ろに歩くんだけ。おもしろい。」

さらに捕まえようとして手を伸ばす。

舞　：「いたっ！　挟まれた」

冬子　：「舞ちゃん、気をつけてください。小さくても凶暴です。その凶暴さは響子先生といい勝負でしょう。」

響子先生と一緒に。それはちよつと怖い。

冬子　：「舞ちゃんもやってみるといいです。」

舞　　：「うん」

舞も釣りざおの先にするめをつけて水の中に落とす。すこしづつ引いていくと急に重くなった。

舞　　：「あっ」

冬子　：「あせらず、ゆっくり引くんです。そう、ゆっくりと。」

ザリガニが岸边まで寄ってきた。それを冬子が網ですくう。

舞　　：「とれた!」

冬ちゃんが釣ったやつよりちよつと小さい。

舞　　：「あ、落ちちゃった。」

ザリガニが土の上に落ち、はさみを上げて威嚇する。

舞　　：「どっしりよっし」

冬子：「背中がザリガニの弱点です。前からでなく後ろから手を伸ばして胴を両側から挟みます。」

冬子：「つかむまねを試してみせる。」

冬子：「舞ちゃん、頑張ってみましょう。」

舞：「うん」

舞が自信なさげに返事をして、そと背中から捕まえる。

冬子：「舞ちゃん上手です。初めてとは思えないです。」

舞：「えい」

捕まえたザリガニをバケツに入れる。

舞：「水は入れなくていいの？」

冬子：「大丈夫です。少しくらいなら水なくても生きています。」

舞：「へ〜。」

そうやって二人は何匹かザリガニを釣った。厳しい日差しも和らぎ、そろそろ夕方というとき、二人は切り上げて帰ることとした。

舞：「持ってかえって飼ってもいい？」

冬子：「うん、いいと思いますが、あとであきらさんに聞いてみましょう。」

舞　：「うん」

冬子　：「あ、冬子、いいこと考えつきました。舞ちゃん、家に帰ったら夕飯の買い物にいきましょう。」

舞　　：「いく。」

.....

買い物から帰ってきたころパパも帰ってきた。

舞　　：「お帰りなさい。パパ。」

あきら　：「おお、ただいま。舞、冬子。今日も暑かったな。」

冬子　：「暑かったです。お風呂沸いてるから先に入ってください。もうすぐ夕ご飯出来ます。」

あきら　：「おう、先に入らせてもらうぞ。」

冬子　：「じゃあ、ご飯の用意をしましょう。舞ちゃん手伝ってください。テーブルの上を拭いて、スプーンとサラダを並べてください。」

舞　　：「はい、冬ちゃん」

テーブルの上が片付けられ、料理が徐々に出来上がり、テーブルの上に載って行く。準備している間にパパがお風呂から上がってくる。

あきら：「お、今日はカレーか。例によってお星様カレーか？」

冬子：「違います。毎度毎度お星様ではないです。馬鹿にしないでください。」

あきら：「ああ、悪かった。で、今日は何カレーなんだ？」

舞：「シーフードカレー。」

あきら：「ほう、珍しいな。いつもならポークとかチキンとか肉のカレーが多いのにな。」

冬子：「今日は、なんとなくシーフードカレーにして見ました。」

あきら：「おお、たまには良いな。どれどれ。」

パパがカレーに手を出そうとする。

舞：「パパ、お行儀悪いわよ。みんながそろっていたいただきますしてからでしょ。まずは、ビールでも飲んで。」

そう言つて、舞は冷蔵庫から冷えたビールを持ってくる。

あきら：「ああ、悪い悪い。そうだな。みんながそろつてからだ。でも、ビールは先に飲ませてくれ。」

舞：「わかつてるよ。はい。」

舞がビールの栓をぎこちなく開けて、あきらのコップに注ぐ。

あきら：「か。娘に注いで貰うビールは最高だ。」

冬子：「あきらさん、おじさん臭いです。」

あきら：「うじ」

冬子：「さあ、準備できました。みんなで食べましょう。」

一同：「いただきます」

あきら：「やっぱり最高だな。仕事から帰ってきて、娘にビールを注いでもらい、妻の料理に舌鼓を打つ。文句なしだ。」

冬子：「まだ、冬子妻じゃないです。」

そう言って顔を赤らめる。

舞：「そうそう、今日、ザリガニ釣りしてきたんだよ。」

あきら：「ほう、いっぱい取れたか？」

舞：「いっぱい取れた。」

あきら：「はさみに挟まれなかったか？」

舞：「はさまれた。痛かった。まるで響子先生みだった。」

あきら：「あははは、それはすごく凶暴だな。」

舞　：「そういえば、ザリガニって食べられるの？」

冬子　：「食べられます。結構淡泊な感じでおいしいです。」

食べたことあるのか？　あきは心の中でそうつぶやいた。

舞　　：「パパは食べたことあるの？」

あきら　：「普通、あんなもの食べないよ。まあ、中には食べる人も
いるみたいだけど。」

舞　　：「ふん。私も食べたことない。」

舞　　：「でも、このカレーの海老おいしいね。なんかあっさりし
てる。」

冬子　　：「でしょ、ちょっと普通の海老とは違います。」

あきら　：「確かに、普通の海老と違ってくるくる丸まってないな。
なんの海老だ？」

冬子　　：「海老というよりカニに近いです。はさみを持つてる海老
です。」

あきらと舞がスプーンを落とす。

あきら　：「ま、まさか違うよな？　いくらつちが貧乏だからといっ
て！」

舞が慌ててザリガニの入ったバケツに向った。

冬子：「そのまさかです。」

舞：「パパー！ ザリガニの数が！」

あきら：「減ってるのか？」

舞：「ううん。同じだった。」

がつくり来るあきら。

あきら：「冬子、驚かすな。いったいこのカレーの海老はなんなんだ。」

冬子：「オマール海老です。前に大きなスーパーで冷凍オマール海老を売っていたので買っておいりました。それを今日ザリガニ釣ったこと思い出したんです。」

あきら：「・・・」

冬子：「まさか、あきらさん、ザリガニを入れたと思ったんじゃないですよね。」

あきら：「いや、その・・・」

冬子：「あきらさん、とっても、失礼だと思えます。冬子、釣ったその日の内に調理しないで。ちゃんと泥抜きします。」

ちょっと論点がずれてるだろ。あきはそう思った。

舞　：「パパ。ザリガニのおなかに卵がいっぱい！」

あきら：「ああ、8月はザリガニの産卵期だからな。ところで、そのザリガニ飼うのか？」

舞　：「ううん。最初は飼うつもりだったけど、赤ちゃん生むの頑張ってるのに飼っちゃ可哀想。」

あきら：「そうだな。明日逃がしてきて上げなさい。」

舞　：「うん、そうする。」

冬子　：「さあ、ご飯の続きを食べましょう。」

こうやって、にぎやかな楠木家の夏の一日が過ぎて行った。

おしまい

2・1・50日祭(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

2・1・50日祭

冬子：「明日は10時に日川神社の隣の会館ですね。はい、大丈夫です」

冬子が電話を切った。

あきら：「49日の法要もいろいろやり方があるが神社っていうのも変ってるな。」

冬子：「人それぞれです。神社でやる場合は50日祭っていうらしいです」

あきら：「ふぐん、そうなんだ。」

舞：「お友達関係は私と冬ちゃんだけ出席。あとは、家族と親族が中心。」

あきら：「ご家族もつらいだろうな。子供に先に逝かれてしまうのが何よりもつらい。パパも舞が天国にいきそうになったとき、どんなにつらかったことか。」

冬子：「でも、天国に行きそうになったのと、天国に行ったのは全然違います。」

あきら：「そうだな。」

舞：「後、草薙先生とつかさんも来るって。」

あきら：「そうか。」

早いものでたかしちゃんの49日の法要が行われる。舞は通夜にも葬式にも入院して出れなかったので、今回呼ばれた。そして、かのんちゃんと美鈴ちゃんはまだ入院していて、今回も出られない。

- - - - -

お母さん：「今日は皆さんお集まりいただきありがとうございます。正直まだ、息子の死をちゃんと受け入れられていません。でも、今日この50日祭で一区切りが付きそうです。息子はその短い、本当に短い人生の中で、ほとんど病気で戦っておりまして。ずっと、頑張っておりまして。でも、やっと頑張らなくてよくなったんです。ゆっくりと神様のところで休んでほしいと思ってます。」

周りからすすり泣きがもれる。私も涙でぐしょぐしょになった。

冬子：「舞ちゃん、たかしちゃんが悲しみます。泣いている舞ちゃんを見たら、どんなにたかしちゃん天国で悲しむでしょう。ここは笑顔みせましょう。」

舞：「そういう冬ちゃんだって泣いてるじゃない。」

ふたりでぐしゅぐしゅやっている。

50日祭の会食の席のときだった。たかしにいちちゃんのお母さんが冬ちゃんと私の席にやってきた。

お母さん：「今日はよくおいいただきました。お二人にはたかし

が生前本当にお世話になりました。ありがとうございます。」

舞　：「いえ、私たちのほうがお世話になってました。どれだけ、たかしにいちちゃんの物語に勇気付けられたか。」

お母さん：「ありがとうございます。時々思っています。何のためにたかしは生まれてきたんだろうって。ただつらい思いをするために生まれてきたのかって。」

冬子　：「・・・。」

お母さん：「でも、違うんですね。あの子はあなたたち院内学級の子供たちの心の中でしつかりと生きてるんですね。それがたかしが生まれて来た意味だったんですね。」

舞　　：「・・・。」

お母さん：「実は、たかしの遺品を整理していたら、こんなものが出てきたんです。そして、これを舞ちゃんに渡して欲しいと書いてあったんです。」

お母さんが一冊のノートを出した。

舞　　：「これは？」

お母さん：「はい、たかしが考えて書いた物語集です。」

受け取って中を見る。そこには、人魚水族館、黒猫ニャーゴ、桜祭り、トリックエンジェル、星の子しおんといった数々の物語がかかれていた。

舞　：「こんな大事なものもらっていいんですか？たかしちゃんの思い出がいっぱい詰まった。」

お母さん：「はい、それがたかしの望みですから。それに私たちが持っていても役に立ちません。物語は語り継がれてはじめて意味があります。」

舞　：「でも。」

お母さん：「それで毎年命日にこの物語を私たちに話してくれませんか？　そうすれば思い出がよみがえります。」

舞　：「ええ．．はい。わかりました。毎年行きます。」

お母さん：「ありがとうございます。」

お母さんは泣き崩れる。親戚の人が近づき慰め、席につれていく。

帰り道、舞は考えた。

（なんで、このノートをたかしちゃんは私にくれたんだろう）

（一番仲の良かったかのもんでなく、美鈴でもない、私に。）

（かのんや美鈴なら、今でも院内学級で周りの人に伝えていけるだろうに。）

舞　：「そうか。そういうことか。」

冬子　：「舞ちゃん？　どうかしました？」

舞　：「冬ちゃん、私、院内学級でボランティアやる。このたかしちゃんの物語をみんなに伝えていくの。たかしちゃんはそれを願ったの。だから退院まじかだった私にこのノートを託したの。」

冬子　：「冬子もその考えいいことだと思います。冬子も実は考えてました。院内学級のボランティアできないかと。一緒にやりましょう。」

舞　：「うん、つかささんや草薙先生にお願いして、無理やりでもボランティアさせてもらおう。」

冬子　：「舞ちゃん、頑張りましょう」

舞　：「お〜」

こうして冬子と舞は院内学級のボランティアをすることになった。

つづく。

2・1・50日祭（後書き）

お待たせしました、2章ボランティア編突入です。退院した舞が冬子と一緒に院内学級でボランティアを始めます。2章は3章へのつながりの位置付けで短編あわせて5話くらいを想定しています。ではでは。

2・2・学校（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

2・2・学校

新学期が始った9月の土曜日の昼下がり、院内学級の部屋で舞はかのんと美鈴とおしゃべりに花を咲かせていた。話題は舞が通い始めた学校についてだった。美鈴もかのんも学校には行ったことがない。

美鈴　：「学校楽しい？」

舞　　：「うん、大変。」

かのん：「やっぱり勉強が大変だよね。」

舞　　：「うん、勉強も大変。算数と国語の読むほうは院内学級でも勉強してたから何とかなるんだけど、漢字を書くって練習してなかったから、覚えるのが大変。」

かのん：「そうだよね。ここじゃ漢字書く必要ほとんどないもんね。ご本読むために漢字を読めるようにはなるけどね。」

院内学級の生徒は本とかに親しむ機会が多い。だから、文字を読むことはあまり苦にしない子が多い。

舞　　：「だけどね、本当に大変なのは勉強以外の色々なことなんだ。」

美鈴　：「勉強以外って遊ぶだけじゃないの？」

舞　　：「主に当番関係かな、日直とか掃除当番とか給食当番なんだ。最初すごい戸惑った。何していいかわかんないだもん。」

かのん：「うん、私も言葉聞いただけじゃわかんない。何をやる当番なの？」

舞：「例えば、日直って、授業が始るとき、『起立、礼、着席』ってみんなを代表して言ったり、授業の合間に黒板をきれいに消したりする係。そうそう、最初に授業を受けたとき、いきなり起立って言われてみんなが立ち上がったのはびっくりした。そんなの知らなかったんだもん。」

美鈴：「そうだよな。」

舞：「黒板消すのだって、黒板消しっていうかまほこ見たいのがあるんだけど、それもだんだんチョークを吸って消せなくなるの。そうしたら、先生が『クリーナー使ってきれいにしなさい』って言うんだけど、クリーナーが何でどう使うのかさっぱりわからない。」

かのん：「先生は教えてくれないの？」

舞：「聞けば教えてくれるんだけど、みんなが知ってるから、私も知ってると思って、つい最初に教えるのは忘れるみたい。どうも、1年生の一学期はそういう学校生活について教えてくれる時期みたいで、それを受けてないから勉強よりもそっちがつらいかな」

かのん：「なるほどね。」

舞：「つらいといえば、学校給食もつらいもの一つかな。」

美鈴：「なんで？ ご本とかでは給食が学校の中で一番楽しいとか書いてあるけど？」

舞　：「おいしくないの。病院食もおいしくないけど、給食も同じくらいおいしくない。病院食は病気を治すために身体にいいもの第一で作ってあるから仕方ないけど。給食は違うでしょ。それで、給食費とお金取るのよ。よくお金とってこんなもの出せるよなって思ってる。」

美鈴　：「え、学校に行っても病院食続くんだ。がっかり。」

舞　：「ごめん、希望を失うようなこと言っちゃったね。でも、がっかりしたのは私も一緒。それで、先生に『もつとおいしいものを給食に出すようにしてください。そうじゃなければ、昼ご飯家で食べるの許してください』ってお願いしたんだ。」

美鈴　：「そうしたら？」

舞　：「みんな、『同じ物を食べてるんだから我慢しなさい』って言われた。さらには、『この給食は給食室で手作りなんだからおいしいよ。』っていつて取り合ってくれなかったの。先生も長年給食食べつづけて味覚おんちになってるのよね。」

舞はこの時点では自分の舌がものすごく贅沢になっているのに気づいていなかった。冬子の料理の弊害がこんなところにてていた。

後日談として、数年後、やっぱり、給食の味に耐えられなくて、先生に直訴したら、「一生懸命、給食作っている給食室の人に失礼でしょ。だったら、自分で作ってみたら？」と怒られ、頭にきた舞が冬子をつれて、給食室に乗り込み、給食室の人と一緒に全校分の給食を作ったことがある。

そのときの給食は伝説の給食として語りつがれている。

美鈴　：「ところで、学校でお友達出来た？　いじめられてたりしない？」

舞　　：「うん、クラスに二人できた。ひとりはひかる。」

かのん：「ひかるちゃんって、時々舞をお見舞いに来てた子じゃない？」

舞　　：「うん、幼稚園も一緒だったから、前から知ってたんだけど。クラス委員で面倒見がよくってみんなの人気者。それで、学校に行き始めたら色々教えてくれるんだ。」

美鈴　：「舞ちゃん、良かったね。」

美鈴が微笑む。

舞　　：「あと、神崎さん。とても大人しい子なんだけど、優しい子なんだ。私の話とか色々聞いてくれるの。あんまりしゃべんないんだけど一緒にいるだけであつたかくなるような子」

美鈴　：「へ」

舞　　：「そうそう、神崎さんの名前みすずっていうんだよ。美鈴と同じ。」

美鈴　：「神崎みすず・・・なんか親しみ持てそう。」

舞　　：「じゃあ、今度聞いてみるよ。二人に会いに来ないかって。」

「

美鈴　：「うん、ちょっと恥ずかしいかな。」

かのん　：「うん。わかる。舞とかなら平気だけど、あんまり病氣のこと知らない子に自分の姿見せるのね。なんとなくね。」

舞　　：「そつかあ。そうだよ。大丈夫だとは思うけど。でも、もし、目をそらされて『頑張ってるね』とか言われるとへこんじゃうよね。」

美鈴　：「うん、当分はいいかなあ。」

舞　　：「でも、ひかるは来ると思うよ。ふたりとも治ったら、私と同じ小学校でしょ。だから、『クラス委員として当然行きます』とか言ってたし。」

かのん　：「ひかるちゃんかあ。まあ、ひかるちゃんならいまさらだし、いいかなあ。」

美鈴　：「まあねえ。」

かのん　：「ねえ、いじめっ子とかいないの？」

舞　　：「いるのよ。ゴンタってやつ。こいつも幼稚園一緒だったんだけど女の子をすぐいじめめるの。それで、大人しい神崎さんなんかすぐちょっかい出される。」

美鈴　：「こわい。」

舞　　：「でも、だいじょうぶ。ひかるがかばってゴンタに向かっ

て注意するから。それに女の子で団結してゴンタ達男の子と戦ってるの。ほんと、男の子って乱暴でしようがないのよ。」

かのん：「学校も大変なんだね。」

舞：「院内学級だといじめとか乱暴とかないからね。そういう意味でここはいいところ。」

かのん：「それで、退院したにもかかわらず、院内学級に入り浸ってるのね。木ノ内先生があきれてたわよ。出席率N01だとか。」

舞：「そんなことないよ。午後こつちに来るだけじゃない。」

美鈴：「こんなに来てたらつかささんとか草薙先生に怒られない？」

舞：「いちおうボランティアだから。」

かのん：「でも、一日私たちと遊んでるよね。」

舞：「そんなことないよ。小さな子達に絵本とかたかしにいちやんの物語読んでもん。それに、ほら、この頃紙芝居書き始めたんだ。これ見てよ。」

舞が自分で書いた紙芝居を見せる。

そこにはなにやら黒い細長いものが書いてあった。

美鈴：「あ、これ知ってる。図鑑に載ってた。ナマコでしょ。」

舞：「黒猫ニャーゴ・・・。」

かのん：「舞、頑張ろう。」

- - -
- - -
- - -

松井：「良く舞ちゃんのボランティア許しましたね。この病院のボランティアは原則中学生以上のはず。万が一、感染病持ち込まれたら厄介なのは。」

草薙：「まあ、ボランティアといっても友達と遊ぶだけだしね。美鈴とかのんが明るくなっていんじゃない。ただでさえ、たかしちゃんのことがあったわけだしね。それにこの小児病棟にはクリーンフロアがある。その出入りを厳格にすれば感染病を持ち込まれるリスクも減る」

木ノ内：「精神的なケアという意味では舞ちゃんが来てくれるのは助かります。やっぱり、あの子達不安ですからね。それに外の世界の生の情報も持ってきてくれます。」

松井：「まあ、病院という外から隔離された世界では、ああいう子も必要なんでしょうね。」

そう言って、3人はのんびりとナースセンターでお茶をすすりながら子供達を見守っていた。

つづく

2・3・結婚式（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

2 - 3 ・ 結婚式

空に雲ひとつない秋晴れの10月の日曜日。

会館から日川神社へ続く赤いじゅうたんが敷かれた特別な参道を一団がゆつくりと歩いていく。周りの参拝客はその一団を見ると足を止め、祝福の笑顔を贈る。

先頭を歩いているのは黒い紋付袴を着た若い男と、真っ白な白無垢に身を包んだ若い女性である。そのすぐ後ろにはドレスを着た小さな女の子がついている。そしてその後ろには留袖を着た女性、略式礼装を着た男性達がぞろぞろとついてきている。

舞　：「冬ちゃん、きれい。すごいきれい。パパもかっこいい。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

5月のある日だった。あきらは冬子を連れて、白石家を訪ねた。和恵の両親が営んでいるレストランだ。婚約したことを告げるためである。

健一と祐美子は我が子のように喜んだ。いつまでも、娘に引きづられて、自分の幸せを犠牲にしている義理の息子を見ているのはつらく、また、舞にも母親が必要であることを舞の入院で痛感していたからだ。しかも、再婚相手は、「この娘しかない。」と思っていた冬子だから文句のつけようが無い。

健一　：「ところで、結婚式はどこであげるんだ」

あきら：「いや、式は挙げないつもりです。舞も入院してますし。」

健一：「はあ？ 何考えてるんだ？ 和恵のときもそうだったが、今度もあげないつもりか？ あの時は二人とも二十歳そこそこの若造だったから許されるが、もう、一端の年だろ。そんな無責任なことをしちやいかん。それに秋くらいなら舞も退院してるだろう。」

あきら：「いや、お金も無いし。」

健一：「だったら、俺達が出してやる。息子の結婚式の費用くらい出してやるよ。」

あきら：「息子って。」

健一：「義理の息子でも息子には違いない。それとも何か？ 冬ちゃんと結婚したら、俺達と縁切るつもりか？」

あきら：「いや、いくらなんでもそんな不義理はししないで。ここまでお世話になりっぱなしで。」

健一：「じゃあ、決まりだ。結婚式は10月に行く。場所は日川神社だ。」

冬子の顔がパッと明るくなる。あきらはその顔をみて、これ以上の抵抗は無意味であることを悟る。

.....

神社での三々九度が終わると披露宴会場に向う。披露宴会場では色

々な人が待つていた。

響子　：「おめでとう。冬子。舞ちゃん。ついでにあきら。」

舞　　：「響子先生！」

舞が響子に飛びつく。

あきら　：「俺はついでかよ。」

響子　：「当たり前じゃない。結婚式なんて女の人のために行くものよ。男は刺身のつま。」

あきら　：「はあ。」

響子　：「冬子、今日は見違えるくらいきれいよ。ほんとあきらにはもったいないわね。」

冬子　：「響ちゃん、ありがとう。冬子誉められて感激です。」

そう言つて、顔を赤らめる。

南　　：「楠木！」

後ろから声がある。高校時代の友人の南だ。同じ天文部だった。

あきら　：「おう、南。来てくれてありがとう。」

南　　：「この果報者が。和恵ちゃんの次は冬子かよ。次から次へと純真な女の子を毒牙にかけやがって。まあ、でも、あきらと冬子

っていうのは自然だからな。最初からこうでもおかしくなかった。舞ちゃん、冬子面白いだろう。」

舞　：「とっても面白い。でも、とっても大好き。」

南　：「そうだろう、そうだろう。」

南は一人でうなづく。

その時、また、別の女性から声を掛けられる。

志穂　：「楠木、冬子、おめでとう！」

あきら：「志穂先輩！　忙しい中わざわざ起こしていただきありがとうございます。」

冬子　：「志穂先輩、お久しぶりです。」

冬子が志穂先輩に飛びつく。

志穂先輩は俺の一つ上の代で弱小天文部の部長をやっていた。あのときの天文部のメンバー全員が集まった。

志穂　：「舞ちゃん、お久しぶり。大きくなったな。でも、病気で入院してたんだってな。お見舞いにもいけずごめんね。」

舞　　：「ううん、もう、退院してるし大丈夫。志穂姉ちゃんが来てくれたのうれしい。」

大橋志穂先輩は普段むちゃくちゃ忙しく、こういう機会がないとな

かなか会えない。南は高校時代、志穂先輩に奴隷のようにこき使われていたが、卒業後もその状態が続いていて、南は今、志穂先輩の秘書をやっている。

そして、また、あきらと冬子に挨拶をしに男女が来た。今度は良く知っている人だ。

あきら：「草薙先生につかささん。せつかくのお休みなのにわざわざ来てくれてありがとうございます。」

草薙：「いえいえ。私もうれしいんです。こういうおめでたい席に呼ばれるなんて少ないですからね。職業柄、お葬式のほうが多くて。」

つかさ：「先生！ 何てこと言っんですか、縁起でもない！」

あきらと冬子は苦笑する。

つかさ：「そうそう、今日は舞ちゃんに特別なお客さんがきてるのよ？ だれだと思っ？」

それを聞いてあきらと冬子がにやにや笑っている。

舞：「え？ わかんない。だれ？」

そこに母親に車椅子を押してもらって女の子が近寄ってくる。

舞：「かのん！」

かのん：「舞ちゃん、おめでとう。舞ちゃんのパパ、冬ちゃんおめ

でとつじざいます。」

舞　：「え？　え？　なんで？　かのん病院にいないの？
どういうこと先生？」

草薙　：「今週は週末一時帰宅が許されたんだ。これから様子見ながら少しづつ退院に向って行く。それで、本人の希望で無理やり来たんだ。まあ、つかさんも私もついているから万が一のときでも大丈夫だ。」

舞　：「すごい。かのん、おめでとう。そして、来てくれてありがとう。すごいびっくりした。」

かのん：「えへへ。でも、私も今日は何から何までびっくりすることばかり。結婚式場も神社も初めて来た。空がこんなに青いのも初めて。そして、お友達と病院の外で会うのも初めて！」

かのんは興奮を隠し切れない。

そんなこんなで、時間がたち披露宴が始まる。大橋志穂の挨拶と乾杯で始まり、ケーキカット、友人達の挨拶が続く。かのんと舞は一緒にテーブルで食事をする。かのんの食事は式場の人をお願いして作ってもらった特別食だ。

響子の挨拶はさすがに先生だけあってうまかった。あきらを適当にけなしながらも、最後は二人を引き立て無事終了した。南は「みつつのふくる」の話をした。「芸の無いやつだ。」とあきらは思ったが、そんなことはおくびにも出さず、ニコニコしている。

お色直しをして、ドレス姿になった冬子を見て、出席者から感嘆の

声が上がる。「馬子にも衣装だね。」と毒づく南を志穂がどつく。

そして、ふたりによるキャンドルサービスが始まり、各テーブルに火をつけて回る。その幻想的な雰囲気には舞とかのんは大喜びをする。南は当然のようにロウソクの芯を水につけて妨害する。

南　：「楠木早くしろよ。みんなが待ってるぞ！」

南がニコニコしながらつぶく。

披露宴もあつという間に時間がたち、司会の方から「宴たけなわではございますが」と声がかかる。冬子とあきらに花束が贈られることになっている。プレゼントにはかのんと舞が選ばれた。舞が冬子にかのんがあきらに花束を贈呈する。

舞　：「冬ちゃんおめでとう。これからもよろしくね。」

冬子　：「舞ちゃん、ありがとうございます。冬子こそ宜しくお願いいいたします。」

冬子はそうにつこり笑いながら言った。

そして最後にあきらの挨拶だった。舞は二人の間に入る。

あきら：「皆さん、今日はお集まりいただきありがとうございます。一年前の俺は不幸のどん底でした。ちょうど今ごろ、天国に行った和恵の忘れ形見の娘の舞が原因不明の病に倒れました。それから、俺は看病に専念するため、会社を辞めて舞の看病をしました。この子だけは和恵のところに行かせてはならない。そんな思いで何

も見えない状態でした。だけど、そんな中、冬子が俺達を助けてくれて、そして、白石家の二人、黒木家のご両親にもずいぶんお世話になりました。」

あきら：「そして、それから一年、大きく変わりました。舞も無事退院でき、冬子とこうして結婚することができました。家族ができました。あの一年前には想像ができなっかたくらい、今、俺、幸せです。みなさん、ありがとうございます。」

あきらが目からでた汗をぬぐう。割れんばかりの拍手が会場を包んだ。そして、花嫁、花婿、舞が会場を後にする。BGMにはBUM Pの「天体観測」が流れていた。

おしまい。

2 - 3 ・ 結婚式（後書き）

2章の事実上のおしまいです。この後、短編と3章へ続くための2章最後の話が続きます。

短編クリスマスイブ（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

短編クリスマスイブ

小さな家の一室。部屋の隅には小さなクリスマスツリー。窓には折り紙を切って作った雪や星。そして部屋の真中にはコタツが一つ。

そんな慎ましやかな雰囲気の中で3人は聖夜を迎える。

舞　：「うわー、雪が降ってきた。」

あきら：「ホワイトクリスマスだな。」

冬子　：「冬子、感動しました。」

3人で迎える初めてのクリスマスイブ。まだまだぎこちない3人のイブ。

あきら：「社長がクリスマスケーキくれたんだ。」

あきらがデコレーションケーキをコタツの上に置く。

舞がロウソクを取り出しケーキに何本か立てる。

舞　：「冬ちゃん、ロウソクに火をつけて。」

冬子　：「はい。」

冬子はそのロウソクに火をつける。

舞　：「きれい。」

ロウソクの火が揺らいで幻想的な風景がかもし出される。

冬子：「さあ、ご飯にしましょう。」

舞：「うん！」

あきら：「待ってました！」

冬子：「その前に和恵さんにおすそ分け。」

冬子が和恵の写真の前に料理を置く。結婚したとき和恵の写真をしまおうとしたが、冬子が反対してそのまま置いてある。

舞：「今日の料理は何？」

冬子：「チーズフォンデュです。」

あきら：「え？ 全然チーズの匂いしないじゃん。」

冬子：「冬子の自信作です。食べてください。」

あきら：「ああ、遠慮なく」

舞：「いただきます。」

二人は早速串に刺さった料理をチーズに満たされた鍋に通して口に持っていく。

そして、二人とも、呆然として串を落とす。

「箸落し冬子」の本領発揮だ。

舞　：「ママ！　なにこれ?!」

あきら：「こんなうまいものが地上に存在するのか?!」

全然チーズ臭くなく、それでいてとってもクリーミーでまろやかな味が口の中に広がる。

冬子　：「昔、チーズは醍醐と言われてました。舞ちゃんとあきらさんはとっても幸せです。思わず冬子に感謝したくなるでしょう。」

舞　　：「ママ、私すごく感謝する!」

舞は普段冬子のことを「冬ちゃん」と呼ぶ。でも本当に感情が高ぶった時は無意識に「ママ」と呼ぶ。めったにないことだ。

あきら：「これが醍醐味か」

この前カレー鍋を食べたとき、これ以上のものは食べられないと思っていたがあっさり、いい意味で裏切られた。あきはそう思った。

冬子　：「どうです？　冬子に懐柔されましたか？」

舞　　：「うん。ママ最高!」

あきら：「ああ、こんな懐柔なら何度でもされたい。」

あきら：「冬子、俺からのお返しのおクリスマスプレゼントだ。受け

取っつけてくれ。」

冬子がプレゼントを受け取り、包みを開ける。

あきら：「プラチナのネックレスだ。受けとっつけてくれ。」

冬子：「あきらさん、これすごい値段しますよね。10万円は下らないはずです。」

あきら：「そんなの気にするな。冬子が俺たちに与えてくれた幸せに比べたら何百分の一だ。」

冬子：「あきらさんありがとう。あきらさん、もしかしていい人かも知れません。」

あきら：「何をいまさら。」

あきら：「舞、おまえにもプレゼントだ。60色の色鉛筆と新しい画帳だ。」

舞：「パパ、ありがとう。60色欲しかったんだ。」

舞は本当にうれしそうだ。

舞：「私からもパパと冬ちゃんにプレゼント。はい。」

舞は2枚の画用紙を二人に渡す。そこには二人の似顔絵がかかれていた。

冬子：「舞ちゃん、ありがとう。」

冬子は舞に抱きつく。

外の雪はだんだん激しさを増していく。

あきら：「これは積もりそうだな。」

そうあきらはつぶやいた。そして、

あきら：「こんな、何気ない生活がこんなに幸せとは・・・」

舞　：「うん。幸せ。」

3人の聖夜はこうやってふけていった。

おしまい

2・4・エッセンシャル(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

2 - 4 ・ エッセンシャル

にぎやかな結婚式も終わった10月のある日。

パパと冬ちゃんがグアムに2泊3日の短い新婚旅行に行っているときだった。

パパと冬ちゃんが新婚旅行に行っている間、私は祐美子おばあちゃん家に預けられていた。パパも冬ちゃんも一緒に行こうといってくれたが、ずっと看病してくれた二人へのお礼を込めて、二人で行ってもらった。

祐美子おばあちゃんの家は街の洋食屋さんをやっている。病院の近くで、病院の職員や先生達でにぎわっている。

昼飯時の喧騒が一段落し、祐美子おばあちゃんが私に声をかける。

祐美子：「おまたせ〜。舞ちゃん、何食べる？」

舞　　：「オムライス〜。」

祐美子：「はい。まってね〜。おじいさん、オムライス一つ。」

健一　：「おじいさん言うな。まだ、50台前半だ。」

祐美子：「でも、舞ちゃんのおじいさんには変わりないわね〜。」

二人の仲の良いやり取りを聞きながら、窓の外をぼんやり眺める。病院と反対方向にある花の丘公園が見える。

舞　：「ねえ、お昼食べたら花の丘公園で遊んできてもいい？」

祐美子：「いいわよ」。暗くなる前に帰ってくるのよ。」

舞　：「うん。」

- - - - -

ご飯を食べ終わり、私は公園に向った。この公園結構広い公園である。中に入り、奥にある大きな滑り台がある方へ向って歩いていた。そのときである。公園の端で私は呼ばれたような気がした。

「・・・舞ちゃん・・・」

そう呼ばれたような気がした。不思議に思った私はその場所に向った。端の方についてみると、

・・・コーン

何か耳鳴りのような音が聞こえるか聞こえないくらいの感じで鳴っている。

舞　：「何の音だろう？」

私は不思議に思った。その時だった。

ぐにゃり。

目の前の風景がかげろつのように揺らめき、気分が悪くなった。思わず目をつぶりうずくまる。

しばらくすると少し落ち付いたので目を開けてみた。

いきなり知らない部屋の中にいた。

少し広い部屋にベッドと椅子と本棚と小さな机がある。本棚にはイルカとシャチのぬいぐるみがある。本棚の上にはキャラクターものの時計があり、カチコチと音を立てている。時計は午後の2時を示していた。壁にはハムスターのアニメのカレンダーがかかっている。そして、机の上には少し小さめのピンクのノートパソコンと星座早見表が置いてあった。

まるで誰かの子供部屋のような感じだった。

天井にはシャンデリアがついていた。部屋の真中に行くと自動的に電気がついた。

舞　：「ここは、どこ？」

部屋の一面には窓があった。窓の外は緑の草むら、すぐ先には海が広がっていた。

舞　：「わく、きれい。」

私は窓の外の風景を見て思わずつぶやいた。

舞　：「誰かいませんか？」

私はドアを開けて部屋を出た。ドアを閉めたとき、ドアにはボードがかかっているのに気づいた。そこには「しおんのへや」と書かれていた。

舞　：「しおん？　どこかで聞いたことのある名前。誰だったろう。」

私は学校や幼稚園の友達を思い浮かべた。だけど、「しおん」という子を思い出せなかった。

私は家の中を探した。そんなに広い家でなく、似たような部屋がいくつもある平屋だった。でも、どこもさっきの部屋と違って人が暮らしている雰囲気のない殺風景な部屋だった。そして、誰もいなかった。

舞　：「誰かいませんか？」

私は家の外に出た。そこは海が見える大地の上にたっていた小さな家だった。家の横には風車がぼつんと立っていた。

海から風が吹いてくる。その風に緑の草がなびき、風車が回っていた。今は秋なのに春の風景だった

舞　：「誰かいませんか？」

でも、誰もいなかった。だけど、不思議と寂しさを感じなかった。

それどころかとても懐かしい風景だった。

舞　：「私、ここ知ってる。前に来たことがある。」

いつだったか覚えていない。でも、確かに記憶がある。

私は家の周りを少し散策して、私は家の中に戻った。なんとなくじたばたしてもしょうがない気がした。部屋の中に入り、あらためて部屋を眺めていた。時計はやっぱり2時を示していた。

舞　：「この前来たときどこか雰囲気が違う。」

私はそう思った。何が違うんだろう。前はもつとがらんとした部屋のような気がした。そして、何かが決定的に違った。そうだ、本棚だ。前は本棚に本なんかなかった。でも、今日は本棚に10冊くらい本がある。

舞　：「何の本だろう。」

私は絵本みたいな子供が読める本であることを期待していくつか手にとって見た。だけど、どの本も漢字と数字が並んでいるだけで、挿絵すらなかった。もちろん書いてある内容なんかわからなかった。一冊だけ表紙に書かれている文字の一部が読めた。

舞　：「何とかエッセンシャル。三条くるみ。くるみさんの本？」

何とかの部分はわからなかった。でも名前は読めた。三条くるみはお隣のお姉さんだ。今は外国にいるはず。

舞　：「でも、くるみさん本書いてたっけ。まあ、いいや、帰ってパパに見てもらおう。」

そういつて、リュックサックに本を詰めようとした。が、荷物がいっぱいに入らない。仕方ないから、中身をいくつか出して、本を詰め込んだ。

そうしているうちに、日が暮れ始めた。でも、帰り方がわからない。時計はまだ2時だった。

舞　：「この前はその後どうなったんだっけ。そうそう、冬ちゃんを迎えに来たんだ。でも、旅行中だし3日くらい帰ってこないかな。でも、しょうがない待ってよう。きっとこれ夢だよ。」

そう、私は半分あきらめて思った。

．．．コーン

部屋の隅からあの音が聞こえはじめた。わたしはリュックを持ってそこに近づく。そして

ぐんぐん。

風景が揺らいだ。慌てて目をつぶりうずくまった。

落ち着いてから目を開けるとそこはもとの花の丘公園だった。公園の時計は2時10分を示していた。

舞　：「やっぱり、夢？」

私は妙に納得して家路についた。

- - -

俺と冬子が新婚旅行から帰ってきた次の日だった。

舞　：「パパ、冬ちゃん」

あきら：「ん？　舞、どうした。」

冬子　：「舞ちゃん、どうかしましたか？」

舞　　：「また、不思議な風景の夢見た。」

あきら：「え？　またか。」

冬子　：「不思議な風景の夢？　冬子よくわかりません」

あきら：「なんというかな、それこそ夢の世界みたいなところだ。」

舞　　：「えっと、海が見える丘の上に家がぽつんと立っていて、人がだれもいないところ。」

冬子　：「そこで、何をするんですか。」

舞　　：「なにもしないの」

冬子　：「冬子、ますますわかりません。」

舞　　：「うん、ただそれだけなんだけど、前にもいったことがある気がする」

あきら：「実は、おれもその夢を見たような気がするんだ。一人でその世界に何日も暮らすんだ。そして最後に。」

冬子：「最後に？」

冬子が目を輝かせて話を聞く。

あきら：「冬子が迎えに来て、俺を救っていくんだ。」

冬子：「あきらさん、冬子を馬鹿にしていますね。いくら冬子でも、それくらいわかります。」

舞：「冬ちゃん、本当なの、私も同じ夢見てるの。」

冬子：「なるほど、冬子わかりました。冬子はふたりの夢の中でてくるくらい惚れられたんですね。冬子罪作りです。」

あきら：「いや、おまえのことだ、俺たちの世界に強引に割って入ってきたんだろ。おまえならやりかねない」

冬子：「あきらさん、失礼だとおもいます。冬子はそんなことできません。」

ふいとすねる。

舞：「あのね、あのね。ふたりとも聞いて。」

あきら：「ああ、話がずれてるな。」

舞：「今回はね、違うところが一つあったの。風景が違ったの。」

「
あきら：「え？　どんな感じだったのか？　今度は南国風になったのか？」

舞　：「ううん、前と同じ春の風景。えつとね、外の風景は同じだったんだけど、部屋の中が違ったの。ぬいぐるみとかが置いてあって、まるで誰かが住んでいるみたいだった。そしてね、本が何冊も置いてあったの。」

あきら：「へ〜。少しは娯楽ができて住み易くなったんだな。」

舞　：「それでね、難しい本ばかりだったんだけど、一冊だけひらがなの本があったの。『くるみ』って書いてあるの読めたの」

あきら：「ほう、中身は絵本かい？」

舞　：「ううん。漢字と数字ばかり」

あきら：「そうか〜。パパもちょっと読んで見たかったな。」

舞　：「うん、でね、持って帰ってきたの。」

あきら：「は？　夢の世界から本をかい？　それはいくらなんでも無理だ。」

舞　：「パパ、信じて。はい、これ」

舞が一冊の本を出す。

あきら：「おいおい、冗談だろ。」

俺は本を受け取る。

あきら：「『統一場の理論 著者 三條くるみ』なんじゃこりや？ 三條くるみって隣のくるみの本か？」

ぱらぱらとめくる。物理の本のようだ。所々に数式がかかれています。とりあえず、「はじめに」のところを読む。

あきら：「『この世界は時間は一次元だといわれてきた。しかし、それではブラックホール内の特異点や虚数時間などどうしてもうまく表せない。しかし、時間は一次元でなく二次元であると考えると無理なく解決できる。私はこの時間を 軸の時間と定義し、これに基づいて統一場の理論を説明する。』なんじゃこりや？」

冬子：「冬子もさっぱりです。」

要約版とかいてあるが、さっぱりわからない。だけど、「はじめに」の最後に書かれた文字を見て驚いた。

あきら：「この本を私のよき理解者でパートナーのしおんちゃん」と楠木詩音さんに捧ぐ。」

どういうことだ、確かにくるみは物理学者だ。でも本を書いていたっけ？ それに楠木詩音って誰だ？ うちには詩音なんていないぞ。

冬子：「冬子にも見せてください。」

あきら：「ああ。」

冬子に本を渡す。なんで、夢の中から本を持ってこれる？　なんで、くるみが本を書いている？

冬子　：「冬子びっくりしました。日本にもこんなすごい人いたんですね。」

と、著者紹介のところを俺に見せる

あきら　：「三条くるみ。日本で知らない人はいないだろう・・・最年少ノーベル物理学賞受賞者・・・アインシュタインの再来・・・現在スタンフォード大学教授。毎年秋から春にかけ日本に帰国する。毎年行っ郷里での講演会のチケットは現在日本で最も手に入らないチケットと言われている。」

くるみが毎年郷里に帰っている？　あの人は大学に行ってから日本に帰ってきたことなんてないぞ。それ以上にノーベル物理学賞受賞つて。今までくるみはおるか女性でノーベル物理学賞をとった日本人はいないぞ。

解説のところを読んでみた。読書感想文など書くときは解説だけ読んで書いたものだ。ここを読めば大体のアウトラインはつかめる。

あきら　：「この本の最後の4章に書かれていることは衝撃的な内容である。三条博士はこの世界とは別にこの世界とほぼ同じ世界があると予言している。この『対世界』には『ベクトル空間』を通じていけるはずであると書かれている。この話は『くるみちゃん』の23世紀のおとぎ話』として有名である。でも、是非私はそれが私の生きている間に実現して欲しいと願っている。」

俺と冬子は顔を見合わせる。

あきら：「そういえば、くるみが言っていたな。この世界はパラレルワールドという似た世界がいくつも連なって出来ているって。」

舞：「へへ。知らなかった。」

俺は、その本を斜め読みして最後の4章を読んでみた。

あきら：「うわー。すげー」

冬子：「どうしたんですか？」

あきら：「この4章、すごい内容を数式で証明している。信じられない。」

冬子：「なにが信じられないんですか？」

あきら：「パラレルワールドへの旅行が理論的に実現可能なことを数式使って証明しているんだ。」

冬子：「ありえないです。ちょっと見せてください。」

冬子が本を俺から取り上げる。一生懸命読んでいる。が、

冬子：「さっぱりわかりません。」

あきら：「俺だって数式のところわかんないけど、文章を追っていくとそう書いてあるとしか読めない。」

冬子：「うう。あ、またしおんちゃんがでてきた。」

本の裏表紙には本人と思われるサインが書いてあった。「親愛なるしおんちゃんへ 三条くるみ」

あきら：「しおんちゃん？ 誰なんだ？ でも、どこかで聞いたことがある名前だ」

ふと、たんすの上の写真立てに目が行った。和恵の写真が飾っている。

．．．この子が生まれたら「舞」か「詩音」って名前を付けたいです．．．

．．．どちらにするかはあきらさんが決めてください．．．

あきら：「うそだろ。」

俺は思い出した。そして、この瞬間、全てがわかった気がした。

あきら：「楠木詩音．．．そんなことありえない。」

俺はその恐ろしい自分の考えに身震いした。

第2章 完

2・4・エッセンシャル（後書き）

すいません。いきなりの超展開です。

3章はSFファンタジーっぽい世界になるので、「SFはちよつと苦手」という方はこのまま、「4章 淳・Iga腎症」に行かれると再び院内学級の11月の話から再開されます。

3章はもう一人の主人公詩音ちゃんの登場です。舞ちゃんと違い、何不自由なく育った詩音ちゃんは舞ちゃんに負けず劣らずのいい子のはず。だけど、世の中そうはうまくいかず、実際はとんでもない「いたずら娘」でした。次回は3章0話「詩音」です。3章は科学といたずらの世界です。

3・0・詩音(しおん)(前書き)

第3章「エンジンプロジェクト編」の初話です。舞ちゃんの話は第4章までちよっとお休みです。舞ちゃんにどっぶりっかりたい方は4章に。4章に飛んでいっても、違和感なく読めるようになるべくしております。

トリックエンジェルの世界観を楽しみたい方はぜひこのまま3章もお付き合いいただければと思います。

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3・0・詩音(しおん)

10月の末のことだった。小学1年生の娘の詩音が急に熱を出した。昔の和恵と同じ症状らしい。

慌てて、俺と和恵はいつもの町外れの病院に連れて行つた。

松井：「うん。風邪のようですが、風邪ではないみたいですね。とりあえず、検査してみましょうか。採血と尿検査かな。準備をお願いします。」

松井先生が看護師さんに指示をする。

松井：「検査結果は2〜3日後に出ます。そうだ、確か番井先生とも楠木さんはお知りですよ。土曜日に番井先生が来られるので先生にも見てもらいましょう。土曜日には結果も出るでしょう。うん、それがいい。予約入れておきます。」

松井先生は若い先生でどことなく頼りない。だけど、自覚しているみたいで自信のないときは、他の先生の意見も聞く。そういう意味では安心できる先生である。

- - - - -

土曜日になって再び3人で病院に行く。

番井：「はつきりとはわかりませんが自己免疫疾患の可能性があ

りますね」

和恵：「はい？」

番井：「ここ一年くらいで詩音ちゃんは輸血をしましたか？」

和恵：「いいえ、ここ一年どころか生まれてこの方輸血するよう大きな病気や怪我はしていません。」

番井：「そうですか。輸血したときに起きるGVHD、移植片対宿主病の症状に似ています。ただ、輸血をしていないとすると何らかの理由で自己免疫疾患にかかっていますね」

あきら：「なんなんですかそのGVHDとかいう病気は？」

番井：「拒絶反応って聞いたことありますか？」

和恵：「ええ、臓器移植したときなんかで、移植した臓器を身体が攻撃してしまう症状ですよ。」

番井：「はい。GVHDはその逆で、移植した方が元の身体を攻撃する症状です。輸血とか骨髄移植なんかで起きます。」

あきら：「だけど、詩音は移植も輸血もしていません。」

番井：「ええ、そこがわからないんです。ちゃんと調べてみないとわかりませんが、詩音ちゃんの白血球の一種であるリンパ球が突然変異か何かを起こして、詩音ちゃんの身体を攻撃しています。それをもとのリンパ球が迎え撃って戦っている感じですよ。この熱はそれが原因ですよ。」

和恵　：「ま、まさか白血病でしょうか？」

番井　：「いえ、違います。白血病は異物に対する攻撃ができなくなる病気です。詩音ちゃんの症状は逆に正常な自分まで攻撃してしまっ感じですよ」

あきら　：「あの、治らないのでしょうか？　このまま悪くなる一方なのでしょうか？」

番井　：「とりあえず、免疫を抑制するステロカイドをごく少量投与してみます。ちよっと副作用の可能性のある薬ですのであまり投与はしたくないのですが、このまま指をくわえるわけには行かないので。」

あきら　：「それで、治るんですか？」

番井　：「症状は治まります。しかし、根本治療にはなっていないので再発の危険性があります。」

あきら　：「何とかならないのですか？」

番井　：「うーん、もう少し良く検査して調べてみないとだめですね。」

あきら　：「そんな。」

和恵　：「あきらくん、先生を責めちゃだめです。他の先生だったら原因不明の治療方法不明だったところなのに、治療方法がわかっただけでもすごいことです。」

番井美雪。番井先生はこの病院に週に一度きてくれる。普段は東京の淳典堂病院の副院長をしている女医さんだ。この道では日本一の権威といわれている人だ。

普段ならなかなか見てくれないが和恵と一緒に昨年女の子を助けたことにより懇意になり、今回見てもらうことができた。

番井　：「とりあえず、治療を続けて見ましよう。来週またきますからそのときまた状況を見て判断しましょう」

あきら　：「はあ」

和恵　：「ありがとうございます。」

番井　：「あ、和恵さんだけちょっと残っていただけます？　ポツチちゃんの話もしたいので。」

ポツチは詩音のともだちで和恵が助けた女の子である。

あきら　：「じゃあ、先に詩音のところについてるね」

和恵　：「はい」

あきらが出て行く。

番井　：「和恵さん、確か子供のときこのような病気だったと聞いたのですが。」

和恵　：「はい・・・やはり、遺伝でしょうか？」

番井 : 「ええ、遺伝の可能性もあります。普通ならそう考えますが、ポツチちゃんの件を考えるとちょっと違うような気がします。」

和恵 : 「はあ、それでは何が原因なんでしょうか。」

番井 : 「唐突に聞こえるかもしれませんがたぶん『血』ですね。血を分けた娘とかそういう意味でなく、文字通り『血』です。やはり、和恵さんの血に何らかの原因究明のかぎがありそうです。」

和恵 : 「はあ」

番井 : 「そこをお願いなのですが血液を少しいただいただけませんか？採血して、調べてみたいんです。」

和恵 : 「ええ、私の血が原因究明にお役に立てるのでしたら。」

番井 : 「ありがとうございます」

和恵 : 「あの、もしかして私の血が詩音ちゃんを攻撃しているのでしょうか？」

番井 : 「まだそこまではわかりません。とりあえずわからないことが多いですね。もし攻撃しているとしても気にやむことはないです。不思議なことに詩音ちゃんは免疫を持っているようです。そのため、重症化しない。けれども全快しない。そんな状況です。」

和恵 : 「はあ。なんかよくわかりません」

番井 : 「お恥ずかしい話ですが、免疫学は奥が深くまだまだわか

らないことだらけなんですよ。」

番井先生でもわからないのならしょうがないものなのだろう。和恵はそう思った。

.....

あきら：「詩音、つらいかい？」

詩音：「つらくない。ここに来ると楽になる。でも、まだ、お熱ある。」

詩音は俺と本人の希望でここで検査を兼ねて入院することになった。自宅療養でもいいのだが、あの悪夢のことを考えて、念のため入院させている。

詩音：「それに去年よりもずっと楽。去年は本当にしんどかった。」

あきら：「去年？　去年は病気になってないじゃないか。」

詩音：「あの夢の話。熱が出て歩けなくなってた。」

あきら：「そっか。でも、あれは現実でなく夢だ。」

俺と詩音には共通の夢を何度も見ている。はつきり言って悪夢である。詩音が重い病気にかかっている夢だ。しかし、現実にはそんなこともなく、詩音は先週末までは元気だった。この夢は最初詩音が生まれる前から見ている。その夢での娘の名前は「舞」だった。和恵

は生まれてくる子に「舞」か「詩音」をつけたいと欲していた。そのため、俺は詩音に「舞」という名前を付けることに反対し、「詩音」にした。ゲンを担ぎたかったからだ。もともとこの夢は俺しか見なかったのだが、詩音が幼稚園の頃、「ベクトル空間」に行きだしてから詩音も見ることがようになった。

この夢は和恵は見えておらず、相手にしてくれない。しつこく言うよ
うなものでもないの、詩音と俺の内緒の話にしている。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

数日後。詩音にお見舞い客が来る。スラッとして背の高い、髪の毛の長いめがねをかけた女の子である。

ポッチ：「おす。詩音。死んじゃうんだって？」

詩音：「入院している人に向かってそういうこと言うのどうかな」

ポッチ：「だって、詩音が死ぬわけないじゃん。やっぱり、元気そうね。」

ポッチ。神崎美鈴。詩音の友達である。いつもふたりで一緒に遊んでいる。この二人はいつもいたずらばかりしていて大人達に目をつけられている。

詩音：「だいぶ治った。夕方になると熱が出るけど今は平気。でも、寝てるの飽きちゃった。ひま。なんか面白いことない？」

ポッチ：「そういうと思った。お見舞い持ってきたよ。」

そういつとポッチは缶でできたお菓子の箱を差し出した。

ポッチ：「開けてみな。きつと詩音に気に入ってもらえると思うよ。」

詩音は受け取ると、興味なさそうに少し身体から離してお菓子の缶をあけた。

ポーン。

中から何か飛び出した。びっくり箱だった。

詩音：「やっぱりね。ポッチのやることなんか大体わかつちやう。」

ポッチ：「ひどいな。せつかく週末一生懸命作ったのに。」

詩音：「入院している子のお見舞いにびっくり箱持ってくるほうがひどいと思うけど。」

ポッチ：「そうか、みんな喜ぶとおもうよ。」

詩音：「うそだよ。」

その後、二人は学校のこととかたわいのない話をした。そして、

詩音：「そうだ。いいこと考えた。ポッチ私の代わりにここで寝てて。私ちよつとお外行つて来る。」

ポッチ：「外つてどこ？」

詩音：「花の丘公園。お花摘んでくる」

ポッチ：「はいはい、ひまなのね。すぐ戻ってきてね。入れ替わるのばれたらまた怒られちゃう。」

花の丘公園は病院と詩音の家の途中にある大きな公園で、詩音のお気に入りの場所である。

詩音：「うん、よろしくね。すぐ戻る」

- - - - -

和恵：「詩音ちゃん、なにか欲しいものないですか？」

詩音は布団を頭までかぶっている。

ポッチ：「何もいらない」

和恵：「どうしちゃったんですか？普段ならアイス欲しいとかプリン欲しいとか言うくせに。それに頭まで布団かぶって。また、調子悪くなつたんですか？」

和恵は布団を少し剥いだ。できたのは詩音でなくポッチだった。

和恵：「ええ！ポッチちゃん！んもう。入れ替わったのね。すぐばれるようなことを。それでポッチちゃん、詩音ちゃんはどこ？」

ポツチ：「ごめんなさい。花の丘公園に花摘みに行った。」

和恵：「ええ、あんなところまで？ まったく。病気のくせにふらふら出歩いて。連れもどしてきます。」

和恵が詩音を探しに行った。

ポツチ：「あ、あ、ばれちゃった。詩音の自由時間もあつというまに終りね。」

.....

和恵：「詩音ちゃん。」

和恵が花の丘公園にいくと案の定詩音はいた。しかも気持ちよさそうに木陰の芝生の上ですやすや寝ている。

和恵：「まったくもう、外に出てこんなところで寝てたら治る病気も悪くなっちゃいますよ。ほら、おきて。戻りましょう。」

詩音：「ん。」

眠そうな目をして詩音が起きる。手にはこの病院の名前の入った薬の袋をなぜか握り締めていた。

.....

あきら：「詩音が全快した？」

和恵：「ええ、熱も下がったし、特に症状も見られないし、病院
追い出されました。」

退院したという表現より追い出されたというのが的確だろう。元氣
な詩音が暇持て余すと何するかわからない。

あきら：「さすが、番井先生だな。まさか2〜3日で治るとは。」

和恵：「それが、詩音ちゃんがいうにはこの薬を飲んだから治っ
たっていうんです。」

和恵が薬の袋をみせた。あの病院の薬の袋だ。

和恵：「これをどこに手に入れたって聞いたら、ベクトル空間
っていうんです。」

あきら：「また、行ったのか。」

和恵：「ええ。それよりもこれを見てください。」

薬の袋の中にメモ書きがあった。

「おねつやこんこんがまたでたら、このくさなぎせんせいのくすり
をひとつだけのむように。あきらばばより」

そこには俺の字で書かれたメモ書きが書いてあった。

和恵：「あきらくん、この薬はなんですか？」

あきら：「しらん。しらん。本当だ。」

和恵：「．．．とりあえず、また番井先生に相談してみましよう。」

あきら：「それと、くるみにもだ。丁度今帰国している。」

．．．

くるみ：「こんにちは。あきら君、和恵ちゃん元気？」

和恵：「こんにちは、くるみさん。くるみさんも元気そうですね。」

三条くるみ。俺達の家の隣に住んでいる。

くるみのほうが一つ年上だが、普段のどことなく抜けてるような受け答え、そして中学生のような容姿から俺達のほうが年上を感じる。そして、両親が有名なバイオリニストで日本を離れることが多い。学生時代はまだ健在だった俺の母親と一緒に面倒を見ていた。

平凡な人生を送っている俺と違い、有名な科学者である。詩音に言わせれば「アインシュタインもびっくりの理論」を打ち立てたらしい。よくわからないが。我々にわかることは、この若さでノーベル物理学賞をもらってるということくらいだ。

くるみ：「それで、詩音ちゃん、またベクトル空間にいったんですって？」

詩音：「そう、またいつてきたの、くるみちゃん。それで、お薬

もらってきたの。」

くるみ：「ふぐん。」

くるみは薬の袋をあけ、中身のメモを見た。

くるみ：「これ、あきらくんが書いたの？」

あきら：「まさか。俺が薬のことなどわかる分けない。」

くるみ：「ふぐん。じゃあ、『対世界』のあきらくんが書いたんだ」

あきら：「!」

和恵：「?」

くるみ：「この世界にはここと同じ『対世界』があるはず。ベクトル空間はその二つの世界をつなぐ通路のはず。そこに、対世界の詩音ちゃんがいて薬を持ってきたと考えるのが普通。」

あきら：「全然、普通じゃないだろ。じゃあ、なにか？ もう一つの世界の詩音も、ベクトル空間にきたって言うのか。」

くるみ：「うん。バランスを考えると来れるはず。多分対世界はほとんどこの世界と同じはず。きっと、その詩音ちゃんも同じ病気のはず。だから、向こうは薬もったの。」

あきら：「じゃあ、なんで、こっちは薬もってないんだよ」

くるみ：「それはわからない。薬のことは専門外なの。それは番井

先生の担当。」

肝心なことはわからないのか。

.....

番井：「全快してるわね。いくらなんでも早すぎ。」

和恵：「実は・・・」

和恵が今回の経緯を話した。

番井：「そのベクトル空間とか言うおとぎ話はともかく、薬には興味ありますね。ちよつと見せていただけませんか？」

和恵は薬の袋を見せた。

番井：「確かにこの病院の袋です。でも、この薬はみたことない。普通に使われている薬ではない。ん？メモもあるんですね」

番井：「くさなぎせんせい？」

和恵：「くさなぎせんせいをご存知なんですか？」

番井先生はすぐには答えなかった。すこし、悩んだ末、ゆっくり答えた。

番井：「ええ、この病院に今年の冬までいた先生です。」

和恵：「まあ。でも過去形なのは、もう別の病院にいかれたんですね。」

番井：「いや、草薙先生は今年の冬事故で亡くなりました。私の婚約者だったんです。」

和恵がハッと顔を上げる

和恵：「ご、ごめんなさい、立ち入った話しちゃいました。」

番井：「いや、気にしないでください。でも、すごい優秀な先生だったんです。人間的にも立派で。ああ、ごめんなさい。」

番井：「でも、この袋の日付は今月ですね。一体どういうことなのか？ 和恵さん、すみませんがこの薬の残った1錠いただけないでしょうか？ 分析して調べてみたい。」

和恵：「はい、お願いします。持っけていても怖くて飲ませられません。」

そういつて和恵は薬を番井先生に託した。

つづく

3・0・詩音(しおん)(後書き)

詩音：「詩音です。」

ポッチ：「ポッチです。」

詩音：「二人合わせてプリティウィザードです。」

詩音：「それにしても、19話目でやっと主人公登場ってどういうことよ？」

ポッチ：「3話目に出てる。それに主人公は舞ちゃんだと思う。」

詩音：「ええ、あんな根暗で融通のきかない真面目人間の舞ちゃん主人公だと物語が暗くて沈んじゃうよ。」

ポッチ：「でも、明るいだけが取り柄の詩音が主人公だと物語がはじけちゃって、めちゃくちゃになっちゃう。主人公になりたければ12の悪い癖直さないかね。」

詩音：「もう、和恵ママみたいなこと言わないですよ。」

ポッチ：「はいはい。さて、次回トリックエンジェル第20話は」

詩音：「運動会です。私たちが大人相手に大活躍よ。えへへ。」

ポッチ：「さっそく12の悪い癖のお披露目ね。」

3 - 1 ・運動会（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 1 ・運動会

「後悔後を絶たず」

ああ、ことわざとして間違っている。本当は「後悔先立たず」だ。でも、この次から次へと起る困った事態を迎え、何が悪かったんだろうと俺は自問自答する。

．．．くるみと会わせたいだろうか？．．．

．．．和恵がポッチを助けたせいだろうか．．．

．．．健一じいさんの血を引いているせいだろうか．．．

どれも可能性がある。でも、今更後悔してもしょうがない。いまさら詩音たちのいたずらに驚いてもしょうがない。

あれは、今年の10月の詩音の初めての運動会の話だ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ポッチ：「詩音、そのガラスのビンに入った薬見たいのなに？」

ポッチは詩音の持っている褐色の牛乳ビンくらいの大さのものを指して言った。そのビンは牛乳ビンと違い、口の部分が細くなっている。

詩音：「リキッド・スピーカー。くるみちゃんが送ってきたの。今年はずっと帰るの遅くなるから、お詫びに送ってくれた。」

くるみはアメリカの大学の教授で毎年10月になると日本に帰ってくる。今年はずっと10月になったがまだ帰ってきていない。

ポッチ：「リキッド・スピーカー？」

詩音：「うん、液体スピーカー。」

ポッチ：「どうやって使うの？」

詩音：「お洋服なんかに染み込ませると、あら不思議、お洋服がスピーカーになるの。」

ポッチ：「へへ、面白そう。」

詩音：「アメリカの研究者が試作したんだって。でも、スピーカーとして使い始めて10分しか持たないらしいの。それに染み込ませても2〜3日したら蒸発するみたい。」

ポッチ：「なんだ。使えない。10分しか音鳴らないんじゃないの？」

詩音：「うん、そうだよ。だからくるみちゃんが私たち送ってきたの。利用用途を考えてみてね。」

ポッチ：「私たちに？ それってそういうことだよ。」

詩音：「うん、くるみちゃん居ない間暇だろうから、これで遊ん

でなさいってことだと思う。」

ポッチ：「くるみさん、やっぱり面白いよね。さて、これどう使うか考えますか。」

.....

10月の日曜日、今日は楠木家も朝から忙しい。

和恵：「詩音ちゃん、準備できました？ そろそろポッチちゃんが迎えに来ますよ。」

詩音：「できたよ。」

今日は小学校の運動会だ。詩音達1年生にとって小学校で初めての運動会になる。だから、和恵も朝から気合を入れてお弁当を作っている。

あきら：「おはよう。お、もう行くのか。気合入ってるな。」

詩音：「うん、準備もあるからね。パパ達も後で来てくれるんでしょ。」

あきら：「ああ、紅白リレー応援するから頑張れよ。」

詩音は紅白リレーの1年生代表だ。優勝をかけた最後の種目の花形である。親としては無事に走ってくれればいいと思いつつも、やっぱり、他の児童をこぼす抜きしていくような活躍を期待してないといえはうそになる。

詩音　：「パパも出るんですよ。」

あきら　：「ああ、昼休みの間に先生と保護者対抗の綱引きに出るんだ。まあ、綱引きだからあんまり活躍できないのはちょっと残念だ。」

先生対父兄対抗リレーとかがないのが残念だ。

詩音　：「ママはでないの？」

和恵　：「ママは詩音ちゃんとあきら君の応援係です。お弁当も持っていくから楽しみにしてください。」

.....

お昼休みに入り、校庭でお弁当を食べる。詩音たち家族はポツチの家族つまり神崎家家族と一緒に食べる。

神崎　：「楠木さんも綱引き出られますか？」

あきら　：「ええ、できます。」

神崎　：「私も出るんです。じゃあ、頑張りましょう。日頃の先生達に対するうらみをはらさないで。」

そういつて豪快に笑う。

.....いや、日頃のうらみを晴らすのは先生達じゃないか？.....

今回の綱引きは保護者は事前に選抜されている。つまり、楠木家、神崎家も選ばれていることは何らかの作為があったに違いない。先生達の間では両家は超有名だ。「あのいたずらコンビのご両親達」というレッテルが貼られている。

児童A：「保護者・職員対抗綱引きに出られる方は東門に集まりください。」

放送がかかった。

あきら：「じゃあ、行ってくるな。」

そういつと神崎さんと一緒に東門に向かった。

詩音：「じゃあ、詩音達も係の仕事があるから行くね。」

和恵：「あれ、詩音ちゃんたちも。ちょっと寂しいです。せっかく、一緒にパパ応援しようと思ったのに。」

詩音：「うん、でも係の仕事しながら応援するよ。」

そう言っつてふたりはやはり東門のほうに向かっつていった。

.....

児童B：「先生、この綱に変な張り紙貼っつてあります。」

用具係の6年生の児童が綱引きの綱を準備しているときに言っつた。

先生A：「なになに。『怪我をしているので今日は休ませてください』に『今日は病気なので休ませてください』だと？なんじゃこりゃ。」

2本の綱を用意してあるが、両方とも変な張り紙がしてあった。

先生A：「くだらないいたずらだ。気にしないではがして使うぞ。綱が怪我したり病気になるわけない。それに2本しかないんだから休ませるわけには行かない。」

保護者職員対応綱引きの参加者が入場してきた。慌てて綱を持って準備がなされた。

先生と保護者が綱の右左に並んで準備をする。

先生A：「位置について。よーい。」

そのときだった。

「やめてー!」

大きな声が響いた。

慌ててピストルを持った先生がピストルをおろす。

「怪我してるって言うてるじゃない。引っ張ったら痛いじゃない! 止めてよ」

その声は綱引きの綱から聞こえる。

綱A : 「大人の人のなにどうして相手の気持ちかわからないの？
こんな大勢でひっぱったら痛いに決まってるじゃない。綱の代わり
に人を引っ張ればいいじゃない。そうすれば痛みがわかるわ。」

綱全体から声が聞こえる。先生達が慌ててかけよって綱を調べる、
なんの変哲もない綱だ。

保護者：「気味悪い」

保護者：「なんかののろいか？」

保護者：「これ、引っ張ったら途中で切れちゃうんじゃないか？」

がやがやと声が聞こえる。

あきら : 「(だけどこの声、どこかに聞いたことがある)」

あきらは首をひねった。神崎さんのほうを見ると心なしか顔色が悪い。
い。

先生達が協議している。

しばらくして先生から説明があった。

先生A : 「一応、念のため綱を交換します。ちょっとお待ちください。
い。」

そうして、もう一本の綱が用意される。

あらためて参加者は綱を持って準備する。そのときだった。

「触らないでー！」

また、綱から声が聞こえる

綱B : 「病気だつて言ってるでしょ。つらいんだから触らないでよ。」

皆、綱から手を離す。なにごとかと保護者の間でざわざわと声が聞こえる。先生の中には座り込んでしまった女の先生がいる。

綱B : 「あなた達だつて子供が病気るとき、大勢で押しかけて、みんなでべたべた触る？ 触らないでしょ。そんなことくらいわかるでしょ。どうして大人つて自分勝手なの。自分達の楽しみのためなら、相手がいやだつて言ってるに何やってもいいの？」

保護者達が顔を見合わせる。

先生 : 「綱がしゃべるなどありえない。さあ、続きをやりましょう。」

一人の先生が意を決してそう発言する。

保護者 : 「やりましょうつて、この状態で行ったらどんな事故がおきるかわからないじゃないか。綱が切れたり、あるいは暴れたしたらどうする。」

先生 : 「綱が暴れることはないでしょう、いくらなんでも。」

保護者 : 「綱がしゃべる事だつてありえないだろう。」

あきら：「・・・何てことだ。」

この綱の口調、この声間違いない。娘の詩音だ。そして、さっきの声はポツチだ。聞き覚えのある声のわけだ。そうあきらは気づいた。神崎さんのほうを見ると神崎さんもこっちを見ている。そうして、お互いがつくり肩を落とす。

先生達が協議する。

しばらくして

先生：「はい、やはり、安全第一で今回の競技は中止とさせていただきます。せっかくお集まりいただいたのに申し訳ございませんでした。」

結局中止となった。あきらと神崎さんはさすがに自分達の娘のいたずらですっていえなくてすこすこと帰って行った。

.....

ポツチ：「やったね」

詩音：「大成功」

昨日のうちに例のリキッド・スピーカーを綱引きの綱に染み込ませ

て、小型の無線受信機を綱の中に仕掛けておいたのだ。それで、無線機を使ってしゃべっていた。リキッド・スピーカを綱全体に染み込ませたので綱全体でしゃべってるように聞こえたのだった。

先生B：「こらー、おまえ達ここでなにやってる！」

詩音：「やつば。見つかった。」

.....

和恵：「まったく、もう、また先生に怒られたじゃない。もう、ママしらない！」

あきら：「そうだ。いくらなんでも今回は、やりすぎだぞ。」

その後、2人とその両親は職員室に呼び出された。しかし、二人とも「しらない」と白を切った。

詩音：「じゃあ、綱全体がしゃべる仕組みを先生達説明してください。そんなことできるわけないじゃないですか。」

ポツチ：「無線機を持ってきたのは謝ります。互いにどこまで届くか実験してたんです。無線機を持ってきてはいけないと校則にはつきりと書かれてなかったので問題ないと思いました。」

詩音：「もし、この無線機で綱がしゃべるといふなら、この無線機をお貸しします。どうぞ思う存分やってみてください。」

先生が実際にやってみたが綱はしゃべらなかった。10分すぎてる

からスピーカーの機能は消滅している。

ふたりでいけしゃあしゃあと弁解する。

神崎さんが、ここで割って入り「疑いだけで罰するのか？」と先生をつめより、反論できない先生たちは言葉につまり、限りなく黒に近い灰色で開放された。

詩音：「ごめんなさい。だつてくるみちゃんに頼まれたんだもん。」

帰り道、今回の仕掛けを二人に説明した。

和恵：「まったく、もう。くるみさんもくるみさんです。こんなおもちゃ、詩音に与えたら喜んでいたずらするに決まっています。」

あきら：「全くだ。帰国したらちゃんと言わないとな。」

.....

くるみ：「?????」

くるみ：「ジョークは人生における潤滑油なの。アメリカだったら笑って許される。」

あきら：「ここは日本だ。こんなことしたら詩音たちの立場がないだろう。もう、こんな道具送るの止めてくれ。」

くるみ：「わかった。詩音ちゃんたちが困るのは良くないことなの。少し考える。」

そういつてくるみは納得してくれたと思った。

しかし、彼女の対応は180度逆の対応をした。そう、詩音たちがいたずらしても立場が悪くならないような仕組みを作ったのだった。

俺の後悔は今もまだ続いている。

3 - 1 ・運動会（後書き）

詩音　：「お道具は大切にちゃんとお手入れして使いましょう。そうしないと化けて出てきますよってというお話でした。」

ポツチ　：「あれ、そういうお話だったっけ？」

詩音　　：「さて、次回トリックエンジェル第20回は」

ポツチ　：「『小春日和』です。」

詩音　　：「くるみちゃんのお話だよ。」

3・2・小春日和(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 2 ・小春日和

一階のリビングから声が聞こえる

「さあ、ご飯の用意が出来ました。下におりてきてください。」

リビングに下りてくると長いストレートの髪にカチューシャをした女性がご飯の用意をしていた。

「お熱とかこんこんとか出てませんか？ とっても心配です。」

私が首を振るとその女性は安心してにっこりと微笑み私に話し掛ける

「準備が出来ました。今日も冬子がよりに腕をかけてご飯作りしました。どうぞ召し上がれ。舞ちゃん・・・」

ガバッ

目がさめ、起き上がった。夢だった。このごろ良く見る夢だった。

詩音：「なんなのよ、この夢。かんべんして」

和恵：「詩音ちゃん、いいかげんにおきなさい。いくら土曜日でももう10時すぎてるわよ。ごはんかたづけちゃうわよ」

下のリビングから声が聞こえる

詩音：「はい。今起きた。着替えるから待ってて」

.....

午後になっていつものように隣のくるみちゃんの家遊びに行く。

くるみ：「いただきます。」

詩音：「いただきます。」

もう11月も終わろうとしている小春日和の土曜の午後の昼下がり、くるみと詩音はいつものように庭のテーブルに腰掛け、お茶にする。今日はアップルパイとロシアンティーだ。

詩音：「うん、おいしい。やっぱりくるみちゃんのお菓子は最高。」

くるみ：「どういたしまして。」

この習慣は詩音が物心ついたときには行われていた。秋から冬にかけて行事のない土曜の昼下がりにはくるみちゃんの家で過ごす。天気が悪かったり、寒かったりするときは部屋の中だが、今日のような天気のいい日は外ですごす。

庭にはサルビアやけいとうやポインセチアの花が植えられている。

詩音：「お庭、相変わらずきれいな。」

くるみ：「あきら君が、ちゃんと世話してくれてるから。」

にっこり笑って答える。ご両親は有名なバイオリニストで日本に帰ってくることはほとんどなく、くるみも年の半分はアメリカにいて日本に帰っても、研究とか講演とかで忙しい。だから、この広い家と庭の面倒が見切れない。そこで、隣の楠木家が管理人を行っている。楠木家にとって貴重な収入源である。

くるみ：「オレンジケーキはいかが？」

詩音：「わあ、オレンジケーキもあるんだ。ほしい〜」

くるみ：「はいどうぞ」

詩音：「いただきます。」

くるみは詩音が食べるのを微笑みながら見ている。

詩音：「おいしい〜」

詩音は幸せいっぱいケーキをほおぼる

・・・やっぱり、お菓子はくるみちゃんよね・・・
・・・お食事なら、やっぱり・・・
・・・冬ちゃん・・・

詩音の顔色が曇る。

くるみ：「詩音ちゃん、また、向い側の冬ちゃんのこと思っていたでしょ。」

詩音：「うん。ちょっとね」

くるみ：「和恵ちゃん悲しむと思うの」

詩音：「うん、和恵ママはとっても大好き。一番大好き。でもね
．
．
．」

くるみ：「詩音ちゃんたちの夢の記憶は『対世界』がもたらす時空を越えた記憶の混濁だと思うの。だから、現実ではないの。」

詩音：「うん。わかってる。そうだとすると向こうの舞ちゃんの記憶だよ。うらやましい。」

くるみ：「よっぽど舞ちゃんと冬ちゃんの影響が強烈なのね」

そういつてにつこり微笑む。

冬ちゃん。黒木冬子。和恵の幼馴染である。調理師学校を出たはいが、その後はこの街でぶらぶらしている。料理の腕も印象に残るようなレベルではない。詩音の見る夢に出てくる冬ちゃんは詩音が知っている冬ちゃんとは明らかに違う印象だ。

くるみ：「行ってみたい？」

詩音：「うん、行ってみたい。冬ちゃんと舞ちゃんに会ってみたい。」

くるみ：「大丈夫。そのうち会えるはず。でも、まずはベクトル空間の謎を解かないと。」

詩音：「うん。ところでそのベクトル空間の行き方、研究進ん

だ？」

くるみ：「全然だめなの。今日は詩音ちゃんも来てるし、基礎からもう一回見直しましょう。」

普通、年が離れているとはいえ、女の子の会話だ。もっと、料理の話とか占いの話とか、男の子の話とかするものだが、この二人の話はガチガチの理論物理学になる。

詩音が紙に複雑な微分と積分の混ざった15元の偏微分方程式を書く。

詩音：「とりあえず出発点はこの方程式ね。」

その方程式はニュートン力学の方程式でないことはもちろん、インシュタインの宇宙方程式とも違ったものだった。

くるみ：「詩音ちゃん、すごいの。もうさらさらと統一場の理論の方程式書けるようになったんだね。」

詩音：「えへへ。くるみちゃんの教えがうまかったから。」

統一場の理論と呼ばれるその方程式はくるみが発見した理論の方程式である。この発見でくるみはノーベル賞を受賞している。この世界は10次元できており、そのうち二次元は直交する時間軸と定義することで表される方程式だ。くるみの第一定理とも呼ばれている。

くるみ：「この直交2次元の時間軸の現実時間を限りなく0にする。」

詩音：「ベクトル空間が現われるの。」

詩音が13番目の方程式を指して言う。

くるみ：「そうなの。この世界の時間が流れない不思議な空間。しかも、その空間は光速に近い速度が必要とか、ものすごい加速度の世界、つまり高重力空間である必要がなく、普通の世界に安定して現われることがこの式からは導き出されるの。」

詩音：「だけど、このベクトル空間に行くにはものすごいエネルギーの障壁があって、簡単にはいけない。」

くるみ：「行くためには、高エネルギーの物質と反物質をシンクロトロン上で加速させて対消滅させないため。」

詩音：「今までの理論だとそんなことしたらブラックホールができることになっている。でも、実際にはできない。実際にはベクトル空間が開くはず。それはくるみちゃんの第二定理を解けばそうなることが示される。」

くるみ：「そう。では、そのときに必要なエネルギーは？」

詩音：「プロトン一つあたり240 GeV。とんでもないエネルギー。直径数十キロのシンクロトロンか、それ以上の線形加速器が必要になる。」

くるみ：「そして、そんな加速器は日本はおるか世界にもないの。」

詩音：「うん。ヨーロッパで作っているらしいけど、まだ完成し

ていない。」

くるみ：「でも、詩音ちゃんはベクトル空間に行っている。つまり、なにかこの理論は抜本的に間違っている。別の理論と方法があるはず」

詩音：「はあ、ここまででは今までのおさらいね。」

くるみ：「詩音ちゃんは何か特別なことをやっているわけでないの。重要なのは、特別な場所で発生していること。それ以外は共通点はみられないの。あと季節とか時間とかも少し関係あるかも。」

詩音：「秋から春にかけて行くことが多いからね」

くるみ：「私も、そこに何かあると思ってる。理論はわからないけど、確かに活発化してるの。」

くるみが秋から春にかけて故郷に戻ってくるのは、これが理由である。

詩音：「それで、行くと言うより、向こうから呼ばれた気がするの。」

くるみ：「だとしたら、向こうで飛ぶための高さを減らしていると思うの。そうね、何らかの理由で跳び箱の段数をそのときは減らしている。そんな感じなの。」

詩音：「なるほどね。跳び箱か。じゃあ、踏切板をこつち側につけばいいのかな？」

くるみ：「！ 詩音ちゃん、いいことに気づいたの。踏切板は水平方向のエネルギーを垂直方向に変換するの。これと同じように 軸にエネルギーを変換する仕組みが必要。」

詩音：「どうすれば変換できるんだろう。」

くるみ：「うん、それがわからないの。」

結局、この日は二人で色々話をしたが一步も進まず日が暮れてきた。

和恵：「詩音ちゃん、くるみさん。そろそろ寒くなってきたからお部屋に入りましょう。」

ポッチ：「夕飯の買い物してきたよ。詩音、おとぎ話に夢中になつてないで現実に戻ってきな。」

詩音：「あ、ママ、ポッチ、お帰りなさい。」

くるみ：「和恵ちゃん、ポッチちゃんお帰りなさい。」

和恵とポッチは夕飯の買い物に出かけていた。楠木家の土曜の夕飯はくるみと一緒にこの家で食べる。これも長年続けられている習慣の一つだ。この土曜日の食費はくるみもちなので家計には助かっている。そして、いつの間にかポッチまで加わっている。

詩音：「今日のご飯はなに？」

和恵：「カレー鍋です。この頃流行っているらしくてお友達の家でも作ってるみたいです。」

詩音：「やった。この前ひかるちゃんの家でも作ったんだって。おいしかったって。」

和恵：「そうなんですか。それじゃあ詩音ちゃんも手伝ってくださいか？　くるみさんももし良かったら手伝ってください。」

二人は「はい」と返事をして家の中に入っていく。世間一般から見たらとても普通とは思えないが、詩音にとっては極当たり前の平凡な土曜日が過ぎて行った。

つづく

3 - 2 小春日和（後書き）

ポツチ：「カレー鍋おいしかったね。やっぱり冬は鍋だね。」

詩音：「うん。おいしかった。でも、お肉食べたかった。ポツチが一人で食べた。」

ポツチ：「そうだった？ そんな細かいこと気にするなて詩音らしくないよ。」

詩音：「うう。食い物の恨みは恐ろしいんだぞ。」

ポツチ：「ゴホン。さて、次回のトリックエンジェルは」

詩音：「第22話『パリカール』です。」

ポツチ：「次回は響子先生登場です。お楽しみに。」

3 - 3 パリカール（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 3 . パリカール

12月のある日のこと。

詩音とポツチは響子先生が勤める幼稚園二人で遊びに来た。響子先生は詩音の幼稚園のときの担任で、今年の春の卒園してからもときどき遊びに来ている。目当ては「パリカール」ことロバだ。響子先生は「サクラ」と呼んでいる。

でも、詩音たちは「パリカール」って呼んでいた。パリカールの背中に乗ってあそんだり、餌を上げたりしている。

でも、パリカールを園外に出して散歩に連れていくことは許してもらえない。

詩音：「ねえ、響子先生、今度、たまにはパリカール散歩に連れてってもいいでしょう？ 私達小学生になったんだから大丈夫。」

響子：「ええ、サクラを？ だめよ。危ないわよ。うん、そうね、見つからずに連れ出すことできたら許してあげようかな。」

詩音：「ありがとう、約束だよ。」

響子はちよつと大人げなかったかなと思った。この幼稚園は警備会社の防犯システムが何重にも働いている。不審者の侵入なんて簡単に見つかることになっている。だから、見つからずにサクラを散歩に連れてくなんて不可能である。

ポツチ：「どうだった？」

詩音　：「OK」。見つからなければいいって。」

ポツチ：「じゃあ、早速下準備ね」

とりあえず、防犯システムを確認する。

ポツチ：「監視カメラがあそこあそこ」

詩音　：「あつちにも隠れてるよ」

ポツチ：「このルートなら死角になるね」

詩音　：「あ、赤外線センサー」

ポツチ：「うん、連れ出すときはこの赤外線センサーに引っかかるね。」

詩音　：「響子先生が自身満々にっていたのはこのセンサーのためか」

ポツチ：「なんとかなる？」

詩音　：「うん。赤外線があゝ。うん。光には変らないよね。」

ポツチ：「人には見えないけどね。」

詩音　：「まあ、波の一種だから何とかなるでしょう。」

ポツチ：「そうね、詩音の得意分野だからね。音波とか光とか重力波とか時間波とか得意よね。」

詩音：「重力波と時間波は、まだ理論の段階だよ。でも光とか音なら何とかなるかも。」

ポツチ：「じゃあ、早速作戦室で作戦会議」

詩音：「お〜」

詩音とポツチは響子先生にさよならの挨拶をすると早速ポツチの家に向かった。ポツチの部屋が作戦室だ。

ニヤーゴ：「ニヤー」

ふたりを見つけてニヤーゴが部屋に入ってくる。ニヤーゴはポツチが飼っている黒猫だ。

詩音：「これで赤外線センサー無効にできる。こんな感じで作ってくれない？」

ポツチ：「了解。プラスチック版とアルミ箔ね。あと、固定する木ね。何とかなるわ。」

詩音：「さつすがポツチ。工作なら天下一品ね。」

詩音はニヤーゴを膝の上に抱きながらポツチを誉める。

ポツチ：「工作だけじゃないと思うけどな〜」

たしかにポツチはオールラウンダーでなにやらせても上手だ。でも、この二人の武勇伝は詩音の科学センスとポツチの器用さで成り立つ

ている。和恵ママもポツチのお母さんも会ったびに嘆いている。「もう少し、違うところに能力を発揮してくれるとね。」と。

- - -
- - -
- - -

数日後、装置が完成する。そして、次の日曜日に決行が決まった。

日曜日

二人は荷物を持って、見つからないよう周囲に気を配って幼稚園の塀を飛び越える。そして、監視カメラや職員室の死角を通って門のところに行く。ここに赤外線センサーが取り付けられている。そして、持ってきた4枚のアルミ箔でできた鏡を取り出す。

ポツチ：「こんなんで大丈夫なの？」

詩音：「うん、赤外線だって光だもん。だから鏡で反射させられる。要はどれだけピカピカの鏡かというのと、角度がどれだけ正確かが大事」

ポツチ：「準備OK」

詩音：「じゃあ、カウント5から。5 / 4 / 3 / 2 / 1 / GO！」

二人は同時に鏡をセットする。

詩音：「作戦成功！これで迂回路ができたから、間を通ってもセンサーに引つかからないわ。」

そういつて二人はパリカールのところに行く。

詩音：「パリカール、サイレント!」

この日のために詩音はパリカールに芸を仕込んでおいた。よしとい
うまで、物音立てずに歩かせることができる。

こうやって、二人はまんまと「パリカール」ことサクラを幼稚園か
ら出すことに成功する。

その後をゆっくりと初老の男が後をつける。

.....

詩音：「GO、GO」

ポッチ：「たまには外に出してあげないとね。狭い小屋の中じゃか
わいそう。」

詩音：「だよね。私たちいいことしたよね」

この二人の倫理観はすこしずれている。

パッカポッコ。パッカポッコ。

そうやって二人はパリカールの背中に乗って花の丘公園へゆっくり
と向かう。

途中で呆然と見送る人々に手を振りながらのんびり向う。

花の丘公園に入ると、後ろに乗っていたポッチがパリカールにぶら下げられた荷物からオカリナを取り出す。そして、反対向きに座りなおし、オカリナを吹く。曲は南米のアンデス風のみんが良く知っている曲だ。その物悲しげな曲が初冬のさびしげな雰囲気と良く合う。

詩音：「ロバに乗ってその曲？ その曲に合うのはラマだと思うけど。」

ポッチが吹くのを止めて、応える。

ポッチ：「雰囲気よ。気にしないで。」

そういうと再び吹き始める。パリカールの揺れにあわせて、左右にゆっくり揺れながら公園の中を進んでいく。

詩音：「まるでブレーメンの音楽隊ね。」

ポッチのオカリナの音に惹かれて小さな子供達が集まってきた。

ポッチ：「どっちかって言うとハーメルンの笛ふきじゃない？」

二人はグリム童話を引き合いに出しながら話をする。

小さな子供達が集まってきたんで、二人はパリカールから降りて、小さな子供達をパリカールに載せて親達と一緒に公園を進んでいく。

そして、公園の中にある小川に来ると、パリカールから子供達を下ろし休憩する。パリカールが水を飲んでいる間、荷物からパリカール

ルの餌を取り出し、周りの人に配る。今度は大人たちも喜んでパリカールに餌をあげる。

そんなことをしているうちに公園の管理人が血相を変えて飛んでくる。ロバなんて公園に入れちゃだめだといっている。

でも、ポツチが反論する。公園にロバを入れてはいけなと書いていない。犬や猫は良くてロバはだめな理由が事前に告知されていない。それで、だめというのはおかしくない？ それに、すでに中に入っている。もしだめなら本来入り口で止めるべき

なのに、後からのこのこきて言うのは管理責任を上司から問われな
い？

そして、あなたの上司と管理をしている市に弁護士である父から抗議しても良いかとたたみ掛ける。

管理人は口をパクパクしながら引き下がっていった。

詩音：「別に悪い事しているわけでもないのにね。本当、大人
って融通利かないよね。」

そんなこんなで小一時間遊んだ後、そろそろ二人は帰る準備をする。

詩音：「パリカール、帰るよ。」

サクラ：「ヒヒー」

二人はパリカールの背中に毛布を乗せ、その上に二人乗って手綱代
わりのロープを引いて帰り道についた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ピーーーー、警備会社でアラームがなる。

警備員：「幼稚園にて不審者が侵入した模様。窓ガラスが割られた模様。直ちに警察に連絡するとともに幼稚園に連絡を」

そのころ幼稚園では警報が鳴り、警備会社から連絡が来る。待つてましたとばかりに響子が飛び跳ねる。絶対、今日あの二人が来ると踏んで当番を引き受け待機していた。

響子：「こらゝ、おまえたち、何してるゝ」

教室の影で何かが動いているのを見つけた。しかし、見つけたのは中肉中背の男だった。何かを物色してる。

響子：「ひゝ」

思わず、ひるむ。だが、

響子：「どろぼゝ！」

大声で叫ぶ。男は思わず窓から逃げ出した。

響子：「まてゝ、泥棒ゝ」

響子が追いかける。しかし、男のほうが足が速い。門の外にもう逃がっている。

響子も門の外まで、追いかける。

響子：「だれかゝあいつを捕まえてゝ、泥棒よゝ」

しかし、泥棒はそのまま遠ざかる。そして泥棒の先には見慣れた一頭が女の子二人を乗せて歩いている。

詩音　：「響子先生？」

響子　：「泥棒〜、まて〜」

詩音　：「OK、パリカール、GO！」

サクラ：「ヒヒ〜」

パリカールが二人を乗せたまま泥棒に向かう。

ド、ド、ド、ド、ドスン！

パリカールが泥棒に体当たりをかける。思わず泥棒は腰砕けになり尻餅を付く。

ふたりの後ろから初老の男が追い越してきて男を取り押さえる。

初老の男：「観念しろ。この連続空き巣魔め。」

初老の男は男に手錠をかける。

- - - - -

パトカーがきて空き巣を連れて行った。残ったのは響子とポッチと詩音と初老の男の4人だった。初老の男は刑事さんだった。4人はパリカールをつなぐと職員室に入った。

響子：「あんたたち、何やってるの。勝手に連れ出しちゃ危ないじゃない！」

開口一番、響子が詩音とポツチの頭をポカッ、ポカッと叩く。

ポツチ：「いたゞ。見つからなければいいって言ったじゃない。」

響子：「見つけました。」

詩音：「そんなに気が短いとお嫁さんにいけなくなるよ。」

響子：「なんですって〜！」

響子が再びげんこつを食らわせようとするやいなや、脱兎のごとく二人は職員室の扉のところに逃げる。そして、こつちを伺っている。刑事：「まあ、まあ。二人のおかげで逮捕できたんだし。ここは大目に見てあげてやってはいかがでしょうか？」

響子：「でも〜。」

詩音：「そうだよ〜。刑事さんの言うとおりだよ。」

ポツチ：「表彰物よね〜。」

響子がキツとにらむ。思わず二人は首をすくめる。

刑事：「申し送れました。私小早川巖ともうします。仲間内からは巖さんと呼ばれてます。」

詩音：「わたし、詩音。」

ポツチ：「神崎です。ポツチと呼ばれてます。」

誰も聞いてないのに自己紹介するふたり。

響子：「泉響子です。ここの幼稚園の先生をやってます。」

小早川：「しかし、この子達はすごいですな。やすやすと防犯センサーを無効化してしまうんですな。それで、泥棒が入ってきたときも最初は気が付かなかったんですな。」

響子：「ほら、あんたたちのいたずらでみんなに迷惑かけたのよ。ごめんなさいは？」

詩音：「ごめんなさい」

ポツチ：「ごめんなさい」

小早川：「いやいや、皮肉を言ったのではなくて、その知識と行動力に感嘆しました。とても小学生とは思えない。良い教え子を持ちましたね。」

響子：「はあ。」

まあ、厳密にはポツチは教え子ではないが、似たようなものか。響子はそつそぶく。

小早川：「おかげで、連続空き巣事件も解決しました。別途3人には感謝状をおくらせてください。」

詩音：「やった」

ポツチ：「おじさん、話わかる」

響子：「いえ、そんな大したことはしていないので。」

小早川：「では、そろそろ、署に戻らないといけないのでここで失礼。」

響子：「あ、あの、お茶でも飲んでいってください。すぐ用意しますので。」

詩音：「やった。お菓子もらえる。」

ポツチ：「響子先生、話わかる」

小早川：「いえいえ、お気遣い無用です。まだ、勤務中なので。では、また。」

刑事は帰っていった。

響子：「あなたたちにお茶を出すつもりはなかったんだけど。でも、捕まえたお礼だ。飲んでいくか？」

詩音：「やった」

ポツチ：「先生大好き」

響子はカステラと紅茶を二人に出した。

響子：「今回のことは先生も悪かったわ。見つからなければいいといったのは良くなかった。でも、散歩に連れてつてくれたのは助かったわ。正直この頃忙しくて連れてつてやれなかったからね。」

詩音：「でしょ、でしょ」

響子：「でも、子供たちだけじゃだめ。道路とか危ないところもいっぱいあるしね。今度散歩に連れていくときは大人と一緒に歩くこと。そして事前に連絡すること。そうしたら連れてつてもいいかな。」

詩音：「わあ、ありがとう」

ポツチ：「先生、話わかる」

響子：「よし、それじゃあ、おやつ食べたら、いたずら道具片して、気をつけて家に帰るんだぞ。わかった？」

詩音：「はい」

ポツチ：「はい」

二人は片付けた後、響子とパリカールに挨拶をして帰っていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

男：「初仕事、ご苦労様。」

小早川：「いえいえ。でも、班長、お気遣いありがとうございます。」

「
男　：「どうです、あの二人は。」

小早川：「いや、おてんばというか、頭がいいというか、とにかく予測の範囲外の行動しますね。ハラハラ、ドキドキって感じですよ。」

男　：「うん、この仕事は荷が重いですか？」

小早川：「いや、是非やらしてください。あの二人見てるだけで若返った気がします。」

男　：「そうですね。では、引き続きお願いしますね。」

男はそう笑って去っていった。

つづく

3 - 3 パリカール（後書き）

ポッチ：「カステラおいしかったね。」

詩音：「うん、おいしかった。でも、響子先生、乱暴」

ポッチ：「あれじゃ、いい人できないよね。」

詩音：「一生独身だよね。」

ポッチ：「うんうん。さて、次回のトリックエンジェル第23話は。」

詩音：「短編ウシガエルです。」

ポッチ：「また詩音のいたずらです。」

詩音：「ではでは。」

短編うしがえる(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

短編うしがえる

あれは詩音が小学1年生の7月のことだった。

詩音：「パパ、今度の土曜日蛙取りにいこう。」

あきら：「蛙取り？ また、変ったお誘いだな。女の子らしくない
というか。でも、今度の土曜日は会社だ。」

詩音：「夜も会社？」

あきら：「いや、土曜日は残業ないから夕方には帰ってくる。」

詩音：「じゃあ、大丈夫。取りに行くの夜だから付き合って」

あきら：「蛙取るんだよな。夜に蛙なんかつかまえられるのか？」

詩音：「夜じゃないと捕まえにくいの。」

あきら：「どんな蛙捕まえる気なんだ？」

詩音：「うしがえる。こんな大きいやつ。」

そうやって、まるで子供用のボールをかかえるような感じで両手で
示す。

あきら：「面白そうだな。でも、パパ捕まえ方なんて知らないぞ。」

詩音：「大丈夫、ポッチのお父さんが知ってるから。今度の土曜

日なら一緒にいけるって。」

ポッチは詩音の友達の子だ。いつも、二人で一緒にいる。

あきら：「意外だな。あのお父さん、もっとインテリっぽい感じだけどな。」

詩音：「そうかな。結構子供みたいなところあるよ。じゃあ、土曜日よろしくね。」

土曜日の夜、4人で集合する。和恵は話を聞いただけで身震いして、「ふたりで行ってきてください。」といって送り出した。

神崎：「楠木さんはうしがえる捕まえたことありますか？」

あきら：「いや、実はないんです。」

神崎：「そうですね。意外ですね。子供の頃とか捕まえませんでしたか？でも、ご安心ください。装備は一式持って来ています。」

いくらここらが田舎でも普通捕まえないだろう。あきは思った。

神崎：「昔は、こうやって夜になると大人が捕まえに来てたんですけどね。今じゃ見なくなりましたね。」

あきら：「その人たちは捕まえてどうするんですか？」

神崎：「売るんですよ。うしがえるの肉は美味ですからね。」

あきら：「え？食べられるんですか？というよりおいしいんで

すか？」

詩音：「パパしらないの？ うしがえるのことを食用がえるとも
いうでしょ。」

あきら：「そういえば聞いたことある。」

神崎：「だけど、今は法律で売買が禁止されてるし、わざわざか
えるの肉を食べる人もいなくなったんで、いっぱい繁殖して、たん
ぼを荒らすようになって困っているってわけです。」

あきら：「なるほど。でも、どうやって取るんですか？」

神崎：「いたってシンプル。この懐中電灯で田んぼとか小川の岸
を照らして見つけたらこの網で捕まえる。」

あきら：「そんな簡単につかまるんですか？ 逃げないんですか？」

神崎：「逃げますよ。でも、図体がでかいから動きも鈍い。だか
ら、昼間は隠れて動かないんです。夜になってこそ動き出す。
ということ、夜捕まえるんです。早速やりましょうか？」

そういつて、頭につける懐中電灯と網を二人分貸してくれた。

ぐも、ぐもとうしがえるの泣き声が聞こえる。

ポツチとポツチのお父さんは早速、その音のほうを見て田んぼを照
らす。

神崎：「いた、あそこだ」

二人で追っかけていく。

しかし、見失ったようだ

ポツチ：「そう簡単にはいかないようね。」

詩音：「パパ、私たちもやろう」

詩音はパパの手を取り引つ張ってく。

ぐもぐも、ぐもぐもという泣き声のほうをライトで照らす

詩音：「いた！　パパ捕まえて！」

あきら：「よっしゃ！」

そう言つて、網を差し出す。捕まえようとした瞬間、蛙は勢い良くとんで逃げた。

あきら：「くっそ、逃げられた。」

ポツチ：「お父さん、こっち！」

向こうでも声が聞こえる。

神崎：「飛ぶと予想されるほうに網を上からかぶせるんだ。」

言つのは簡単だがやるのは難しい。

はあ、はあ。息が切れる。意外と大変だ。

神崎：「いや、思ったよりとれませんか。昔はもっととったよ
うな気がしたんだが。」

あきら：「簡単に見つかるんですが、捕まえようとするといきなり
1メートルぐらい飛んだり、水中に潜ったりで大変ですね。」

ポッチ：「捕まえた！」

詩音：「すごい！」

4人が集まる

ポッチ：「水面じゃなくなつて底の泥ごとすくつたら捕まえられた。」

神崎：「なるほど、一旦底に逃げてやり過ぎす習性があるんで
すな。なら、反対に底をすくつてやれば良いんですな。」

ポッチ：「逃げられた。大人しくしていたと思つたら、急に逃げ
られた。」

神崎：「ああ、うしがえるはものすごい力がありますので、子供
では逃げられてしまつかも。大人が網からケースに入れるようにし
てください。」

詩音：「きゃ、捕まえた！」

あきら：「お、どれどれ？」

大人の手のひらくらいのうしがえるが網の中にいた。

神崎：「楠木さん、両手でしっかりと力強く握ってください。片手だと逃げられます。」

あきら：「はい」

しっかりと握ってケースに入れた。

その後、4人で一匹づつ捕まえたところでお開きになった。

あきら：「いや、なかなか面白かったです。こんなに盛り上がるとは。」

神崎：「私もこうやって娘とコミュニケーションが取れてよかったです。」

そうか、神崎さんとポッチは血が繋がってない親子だっけな。仕事も忙しいからこういうチャンスでないとなかなかできないしな。

あきら：「また、今度行きましょう。」

神崎：「是非是非」

そうやって4人は二組に分かれ家路についた。

あきら：「ところで、詩音、捕まえたこの蛙どうするんだ？」

詩音：「えへへ、秘密。」

詩音はにっこり笑ってごまかした。

次の月曜日、学校でゴンタが自慢気に詩音に話す。

ゴンタ：「詩音、みてみる、でっけえ亀だぞ。昨日捕まえたんだ。」

ゴンタがケースに入った亀を見せる。

詩音：「おお、すごい。でも、こっちも負けないわよ。おっきな蛙2匹。」

先週、先生が「身近にいるいきものを持ってきましょう。」とみんなに宿題を出した。先生としてはフナとかザリガニとかを期待していたのだろうが、いつのまにか誰が一番大きくてすごいものを持ってくるかの競争になっていた。

ゴンタ：「蛙？ そんなの小さいだろう。みせてみるよ。」

詩音：「ほら」

詩音が一匹をつかんでゴンタの鼻先に出す。

ゴンタ：「ぬお、でけ。蛙がこんなに大きいのか！」

キヤー。周りの女の子が騒ぎ出す。

ひかる：「詩音ちゃん、早くしまいなよ。周りの女の子が怖がって

るよ」

詩音：「別にこんな怖くないのに。しょうがないな」

そう言つてケースにしまおうとした。そのときだった。

ピヨーン。詩音の手から蛙が逃げ出した。女の子の悲鳴があがる。

詩音：「あ、こら」。 「

しかし、蛙はあつというのまに教室内を飛び回りどこかに隠れてしまった。

詩音：「どこいったのよ」

そんなこんなで探したがチャイムが鳴ってしまった。先生がきてしまった。

詩音：「ま、いつか。もう一匹いるし。」

先生が入ってきた。

担任：「はい、みんな静かに。今日は騒がしいわよ。はい、おしやべり止めて。授業始めるわよ。」

そう言つて先生はホームルームの後、一時間目を始めた。子供達も大分落ち着いてきた。

静かな教室に先生の声だけが聞こえる。そのときだった。

ぐもぐも

教壇の方から音がする。

担任：「牛の鳴き声？ 教壇に牛は入らないわよね。ということ
は神崎さんまた、何かいたずらしましたね。」

ポッチ：「なんで、すぐ私を疑うのよ。詩音かもしんないじゃん。」

担任：「こつこつ機械仕掛けのいたずらは神崎さんしかしません。」

そうやって、教壇の下を覗き込む。その先生の顔をめがけて何か
飛び出した。

担任：「キヤー！」

担任がその場に崩れる。その担任の顔の上に「ヌタツ」と何かが張
り付く。

そのまま担任は気を失った。

詩音：「あ、見つけた！」

蛙は教室中を飛び回り、その先々で悲鳴を撒き散らしていた。教室
は授業を続けられる状況でなくなった。

- - - - -

和恵：「はい、申し訳ございません。いつもご迷惑ばかりでなん

とお詫びしたらよいか。はい。ちゃんときつくしかっておきますので。はい。まことに申し訳ございませんでした。」

和恵が電話を切る。

和恵：「詩音ちゃん？」

和恵が両手を腰におき、怖い顔で詩音に近よる。

詩音：「詩音、悪くないもん。蛙が逃げたのしょうがないもん。」

和恵：「でも、先生やほかの子供達に迷惑かけたんでしょ。」

詩音：「でも、詩音、わるくないもん。不可抗力だもん。」

詩音が口を尖らせて抗議する。

和恵：「とりあえず、もう、うしがえる学校に持って行っちゃダメですよ。」

詩音：「はい」

和恵：「まったく、もう。」

あきら：「でも、詩音の言う通り、詩音が悪いわけじゃないだろう。」

和恵：「あきらくんまでそんなこと言ってはダメです。学校に迷惑かけて電話かかってきたんですから。これで2回目です。1学期で2回ですよ。先が思いやられます。全く誰に似たんだか」

詩音が口をとがらせたまんま、俺のほうを指差す。

あきら：「そんなことないだろう。俺よりも和恵のとうさんのほうだろ。」

あきらは健一さんのことを思い浮かべていた。あの人もいたずら好きだ。

詩音：「じつちゃんがうしがえるもつてくと先生が喜ぶつて教えてくれたの。」

あきら：「ほらみる。やっぱり健一さんだ。」

和恵：「ん、も、みんな人のせいにしてないの。でも、おとうさんがそんなこと教えたんですかですか。まったくもう。」

和恵：「後で、お父さんにも電話しておきます。詩音に変なこと教えないようにつて。それと、明日、その蛙逃がしてらっしゃい。私はそんな不気味なの飼うなんてまっぴらです。」

詩音：「え。そんな。せつかく苦労して捕まえたのにな。」

詩音が口を尖らして抗議する。

次の日の午後、詩音は蛙を逃がしてくるといつて、外に出て行った。スーパーの袋に2匹を入れて歩いていった。ただし、行き先は小川や田んぼじゃなく幼稚園だった。

詩音：「こんにちは。響子先生いる？」

先生A：「あら、詩音ちゃん、いらっしやい。ちょっと待っててね。泉先生〜。」

響子先生が出てくる。

響子：「あら、詩音ちゃんどうしたの？ 困った顔して。」

詩音：「実は困った事が起きちゃったの。先生相談に乗ってくれる？」

響子：「ええ、いいわよ。私でできることなら。」

詩音：「実は、学校の課題でペットを持ってきましょって言われて、学校にもっていったんだけど、学校じゃ飼ってくれなくて、ママも家で飼えないって言われて困ってるの。」

響子：「それで、幼稚園で飼えないかって相談なのね。物によるわね〜。うさぎとか亀とかハムスターとかなら他のと一緒に飼ってもいいわよ。」

幼稚園にはこうやって引き取り手がなく飼われているロボもいる。

詩音：「それで、これなんだけど。」

響子：「なにになに？」

そうやってスーパーの袋を覗き込む。

「又タッ」

何かが飛び出して響子の顔に張り付く。そのまま、響子は気を失う。

そして、もう一匹も逃げ出し、職員室の中に飛んでいった。

詩音：「あ、こら、だめ。」

詩音が追いかけるが後の祭りだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

和恵：「はい、申し訳ございません。響子先生や幼稚園の方々にまでご迷惑おかけしてなんとお詫びしたらよいか。はい。ちゃんときつくしかっておきますので。はい。まことに申し訳ございませんでした。」

和恵が電話を切る。

和恵：「詩音ちゃん？」

和恵ママが再び怖い顔で近づいてくる。

詩音：「詩音、悪くないもん！...！」

おしまい

短編うしがえる（後書き）

ポツチ：「ほんと詩音ってトラブルメーカーね。普通、学校にうしがえる持つてく？友達として恥ずかしいわ。」

詩音：「あら、ポツチさん、あなたそんなこと言える立場でしたっけ。次の日学校にこゝんな長いアオダイショウ持つてきたのはどなたでしたっけ？ 詩音のとき以上に教室大パニックでしたよね。」

ポツチ：「えへへ」

詩音：「笑つてごまかさないの。まったく。さて、次回のトリックエンジェル第24話は」

ポツチ：「音叉です。」

詩音：「おんさつて読むの。再びくるみちゃんとい世界の謎に挑みます。」

3・4・音叉(おんさ)(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

3・4・音叉(おんさ)

くるみ：「いただきます。」

詩音：「いただきます。」

一日中冷え込んでいる2月の土曜日の昼下がり、くるみと詩音はくるみの家の庭にあるサンルームでお茶会を開いていた。くるみがわざわざ土曜のお茶会のために増築した部屋である。ここからだ冬の寒さを感じないで、外でお茶をしている雰囲気味わえる。

今日はスポンジケーキとドーナツと紅茶だった。

詩音：「ミス・ラヴェンダーのお茶会？」

くるみ：「そうなの。詩音ちゃんさすがなの。赤毛のアンなのよ。」

赤毛のアンの第二巻「アンの青春」の中に出てくるロマンティックでちょっと変わり者のミス・ラヴェンダーがアンにお茶をすすめるシーンに出てくるお菓子である。

詩音：「くるみちゃんに借りた本の中にあつたから。やっぱり、アンシリーズは『アンの青春』が一番よね。」

とても小学1年生の感想とは思えない。

くるみ：「わたしも『アンの青春』は好き。特にミス・ラヴェンダーは好きなの。」

詩音：「うん、『アンの青春』はミス・ラヴェンダーの物語みたいなものだからね。」

くるみちゃんもミス・ラヴェンダーも変わり者同士だからねとは口には出さなかった。

くるみ：「でも、赤毛のアンならともかく、難しい『アンの青春』なんてよく読めるの。詩音ちゃんすごいかも。」

詩音：「ベクトル空間に持ち込んだ。あそこなら時間はたっぷりあるから。」

ベクトル空間では通常の時間は流れない。そのかわりベクトル空間の時間が流れる。そのため、年を取ることなく悠久の時間が流れていく空間である。

詩音：「一度あそこに呼ばれちゃうと長いときは2週間とか一ヶ月とか帰ってこれないからひま。まるでミス・ラヴェンダーがこだま荘で隠遁生活してるみたいなの。」

くるみ：「突然呼ばれて、帰る時間は不明確。とっても困るの。あそこに自由に行きたいときに行けて帰りたいときにかえることできたらどんなに便利でしょう。」

二人がここ数ヶ月悩んでいるところに結局話題は行き着いた。しかし、打開策も考えられず悶々としている。

詩音：「早く何とかしないと。」

くるみ：「草薙先生が舞ちゃんを助け、草薙先生の代わりに番井先

生が死んだことにより、対世界のバランスが崩れ始めてるのね。」

詩音は ベクトル空間にノートをおいて舞との連絡帳代わりに使っている。その結果、和恵ママと番井先生が向こうにはいないことを知り、その影響が出始めていることを気にしている。

詩音：「早く向こうに介入して、バランスを元に戻さないとベクトル空間がバランスを崩して崩壊する。」

くるみ：「うん、でも、スランプなの。」

詩音：「ごめんなさい。あせらせちゃったね。でも、それが普通よね。そんなにポンポン真理を発見したら毎年ノーベル賞もらわないと間に合わないよ。」

くるみ：「そうかも。でも、こんなときは気分転換が必要ななの。」

詩音：「気分転換？」

くるみ：「うん。詩音ちゃんにピアノ聞かせてあげるの。」

くるみはサンルームの中にある電子ピアノに向かおうとした。真っ青になる詩音。

詩音：「え？ ミス・ラヴェンダーのお茶会にはピアノは出てこないよ。『妖精の角笛』だよ。」

必死に話題をそらす詩音。お世辞にもくるみのピアノは上手とはいえない。そのくせ人に聞かせるのが好きだ。いわゆる下手の横好きである。ジャイアンのカラオケと一緒にである。

くるみ：「うちには『妖精の角笛』はないの。かわりにピアノがあるの。詩音ちゃん、ピアノ聞いて欲しいの。」

言葉は穏やかだが、有無を言わせぬ迫力でくるみが迫る。

パパとか和恵ママとか呼んで犠牲者を増やそうと考えた詩音であったが、もう間に合わない。

詩音：「そうだ、くるみちゃん、ピアノじゃなくてバイオリン弾いて。」

天は二物を与えない。くるみはピアノだけでなく楽器全体が苦手だ。だけど、しょうがない。まだ、両親の影響を受けまじなほうのバイオリンを詩音はリクエストした。

くるみ：「わかったの。今日はバイオリンにする。」

くるみがニコニコしながらバイオリンを取りに言った。ドキドキしながら待ちつづける詩音

詩音：「処刑の場にひかれていく人の気持ち、今やっとわかったわ。」

ぼそっと、独り言を言う。

くるみが戻ってくる。バイオリンケース以外に何か持ってきた。金属でできたYの字になっている棒だった。

詩音：「くるみちゃん、何もってきたの？」

くるみ：「音叉なの」

詩音：「音叉？」

くるみ：「うん、この頃バイオリン弾いてないから調律しないといけないの。長いこと弾いていないと音がずれるから、時々音あわせをするの。それがこの道具。」

くるみは音叉を叩いて鳴らしてみる。

・・・コーン

小さな音がかすかに聞こえる。

詩音：「音小さくてこれじゃ聞こえない。」

くるみが詩音の頭の上に音叉を乗せる。まるで頭の中で鳴っているように聞こえる。

くるみ：「頭の上とか口にくわえて使うの。」

詩音：「なんか不便。もっと普通にしてて音大きくなるじゃないの？」

くるみ：「??？」

くるみ：「うん。ちょっと待ってて。」

くるみは2階に行つてがさがさ何かを探している。

しばらくして木の箱みたいなものを持ってきた。

くるみ：「あつたの」

くるみは木の箱をおいて、再び音叉を鳴らす。そして木の箱の上に音叉を差し込む。今度は木の箱から大きな音が聞こえ出す。

詩音：「?!」

くるみ：「共鳴箱というの。」

詩音：「共鳴箱？」

くるみ：「うん、共鳴箱。この音叉とこの箱が共鳴して大きな音ができる。共鳴すると小さなエネルギーでも大きなエネルギーになることができるの。」

詩音：「へへ」

くるみ：「お風呂で身体を小さく前後に揺らしたりするとそのうちお風呂の水があふれたりするのと同じ。」

詩音：「ああ、知ってる。大きな橋が風に吹かれて突然壊れたりするのと一緒にでしょ。この前テレビでやってた。」

くるみ：「詩音ちゃん。すごい。頭いいの。」

詩音：「へへ」

詩音は照れくさそうに頭をかいた。

くるみ：「共鳴はその物体が持っている固有振動数が一致するとおきるの。固有振動数はその名のとおりにその物体が持っている特定の振動。」

詩音：「固有振動数？」

くるみ：「うん。式で書くところなるの。」

くるみは固有振動数の式を詩音に書いて見せた。

くるみ：「この振動数が一致すれば共鳴が起きて小さなエネルギーでも大きな力が発生するの。」

詩音はその式をじゅっと見つめていた。そして、見る見る顔色が明るくなっていった。

詩音：「『共鳴させられれば小さなエネルギーで大きな力を出せる・・・』 ああ！ わかった！」

くるみ：「????？」

詩音：「ベクトル空間への行き方！」

くるみ：「え？」

詩音：「共鳴させればいいんだ！ そうすれば240GeVものエネルギーがなくてもいい。それにこの式間違っている！ だって、軸方向の時間の記述がない！」

くるみ：「あ。」

二人で顔を見合わせる。

詩音：「この世界での時間軸で共鳴が起きるように、軸方向の時間も共鳴が起きるはず。だから、軸の固有振動数がわかれば共鳴させることができる。」

くるみ：「詩音ちゃんがベクトル空間に行けるのは、きっとベクトル空間の門の固有振動数と詩音ちゃんの固有振動数が一致して共鳴しているから。だけど、好きなようにいけないのはまだ共鳴がたらないから。」

詩音：「音叉を私の頭の上で共鳴させるのでなく、共鳴箱のようなものを使って共鳴させればもっと大きなエネルギーがだせる。」

くるみ：「そうやって、軸方向の時間で共鳴させれば、向こう側のエネルギーがどんどん溜まってとほうもないエネルギーになる。しかも、それにかかる時間は軸の時間だから、この現実世界ではほんの一瞬でしかない。だから、好きな時に自由に出入りができる。」

詩音：「ブレイクスルーした！」

くるみ：「うん、うん。」

詩音：「そうするとガウス平面状での固有振動数はこうゆうふうに表示されるから、これを軸上にフリー展開するところなる。」

詩音がフリー展開した式を見せる。それをくるみが少し手直します

る。

くるみ：「できた。これでいける」

詩音：「すごいすごい。これって『固有時間振動数』って名づけ
ない？」

くるみ：「うん、賛成なの。」

詩音：「後は、その人の固有時間振動数をフーリエ展開でスペク
トラム分析すれば誰でもいけることができる。」

くるみ：「うん。でももう一つ問題があるの。この共鳴箱と一緒に
共鳴させるに適した材質があるはず。それを使って共鳴させないと
うまくいかないはず。」

詩音：「適した材質？」

くるみ：「うん。触媒みたいなもの。多分この世にありふれている
もの。そして『なんでこれが？』って言う感じのものだと思っ。」

詩音：「つまり、触媒となる材質とその人の固有時間振動数を見
つける方法を探し出せばいいのね。」

くるみ：「簡単に言うけど大変。」

詩音：「うん、でも、今まで比べればすごい進歩した。なんかワ
クワクしてきた。」

二人はもうお茶会もバイオリン演奏もそっこのけで「くるみの第三

定理 (Shion's theory) を作り上げていった。

つづく

L・M・モンゴメリー著 掛川恭子訳の「アンの青春」(講談社)
からの引用

3・4・音叉（おんさ）（後書き）

ポツチ：「うまく、ピアノから逃げたわね。」

詩音：「ちつつち。その後、パパとママが帰ってきて、お夕飯のときに披露していただけたわ。犠牲者増えたのは良かったけどね。」

ポツチ：「あはは、結局逃げ切れなかったんだ。ご愁傷さま。さて、次回トリックエンジェル第25話は」

詩音：「『3・5・対世界』です。再び番井先生登場です。」

3・5・対世界(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 5 ・ 対世界

そろそろ寒さも緩む3月、詩音は街外れの病院を訪れた。
番井先生に会うためである。

番井：「あら、詩音ちゃん、今日は和恵ママと一緒にじゃないのね。でも一緒にいる人を見てるとすごい緊張しちゃうわね。」

番井先生らしくなく緊張した趣で話す。それもそのはず詩音は母親の和恵と同行してきたのでなく超有名人と同行してきたからだ。

詩音：「こんにちは。今日は診察じゃなくて相談にきたんです。」

番井：「やつぱり。そして、この方と一緒になら大変な話よね。」

そう言つて番井先生が女の人のほうを見る。

くるみ：「こんにちは。番井先生。」

番井：「こんにちは。三条博士。で、詩音ちゃん、相談つて、なに？ できることと出来ないことがあるわよ。」

ノーベル賞学者が治療目的以外で訪ねてくるのだからただ事でない。

詩音：「あのね、助けたいの。」

番井：「誰を？」

詩音：「向こうの女の子。」

番井：「また、その話。この前お断りしたはずよ。」

番井先生の顔が曇る。

詩音：「でも、このままじゃ助からない。」

番井：「そうね。助からないわね。治ったように見えても絶対再発するわね。予後不良よ。そして、再発したらもう助からない。」

詩音：「だから、助けて欲しい。」

番井：「うん、でも、『対世界』に干渉するのはよくないことだと思うわ。神の領域よ。」

詩音：「じゃあ、先生は毎日その『神の領域』を犯しているわ。運命を変えて神の思し召しに逆らって患者を治している。」

番井：「相変わらず、口が達者ね。」

番井先生がふつとため息をつく。

詩音：「ごめんなさい。そんなつもりで言ったんじゃないです。助けたいんです。向こうには和恵ママがいないんです。それに、こっちと違って免疫とかいうの持ってないです。」

詩音があわてて弁解する。

番井：「でも、向こうのことまで干渉するのはやっぱりよくないでしょう。それにこっちには関係ないでしょう。」

くるみ：「それが関係あるの。」

くるみが話に割り込む。

番井：「どういふことですか？」

くるみ：「対世界のバランス問題があるの。片方が死ぬと子供が出来なくなるの。そうしないとどんどんバランスが崩れるから。対世界ではバランスを保持しようとする力が働くの。」

番井：「ちょっとまって。じゃあ。」

くるみ：「うん、こっちに影響が出るの。せつかく先生がこっちではあの子を助けたのに。既に先生は神の領域に踏み込んでしまったの。」

番井：「それなら、向ここの私が何とかすればいいじゃない。それがバランスじゃない？ 何も私がどういふ言っことじゃないわ。」

詩音：「あの、言いにくいんだけど。」

くるみ：「それは、私が言っの。詩音ちゃんにはつらすぎる。大人の責任。」

番井：「？」

くるみ：「向ここの番井先生は1年前事故で死んでるの。草薙先生の代わりに。」

番井 : 「うそ . . .」

詩音 : 「事実です。」

番井 : 「じゃあ、私は子供が出来ないってこと?」

くるみ : 「はい、こちらの誰と結婚しても出来ないの。」

番井 : 「ちょ、ちょっと、そんなの信じられないわよ。」

くるみ : 「気持ちはわかるの。でも、安心して欲しいの。一つだけ方法があるの。草薙先生と結婚すること。向こうでは逆に草薙先生が生きている。そうすれば崩れたバランスが元に戻る。」

番井 : 「ええ? 春彦が生きてるの!?!」

詩音 : 「うん。だから、先生もう少し考えて欲しいんです。彼女を助けることに協力することを。」

番井 : 「少し、考えさせて。」

番井先生がつめを噛む。

詩音 : 「はい、ゆっくり考えていただければと思います。でも、先生にも十分メリットがあると思います。いい返事を期待して待っています。」

番井 : 「だけど、タイムリミットまで半年から一年半よ。多分、それくらいに再発するわ。その間に向こうの世界にいけるの?」

くるみ：「それは私達に任せて欲しいの。理論的には完成してるの。後はどうやって実践するかだけ。」

番井：「23世紀のおとぎ話がそう簡単に実現できる？」

詩音：「ヒントはつかんできます。逆に先生のほうも治療方法を確立しておいてください。もし、確立できればノーベル医学賞ものです。」

番井：「ほんと、口がうまいわね。詩音ちゃん。わかりました。考えておくわ。」

詩音：「ありがとう、先生。いい返事を期待しています。」

くるみ：「ありがとうございます。私も来月から大学に戻ってこの研究を続けます。また、秋に戻ってきますので、それまでに進展してることを期待してください。」

そう言つて、二人は帰っていった。

.....

番井：「春彦が生きている。信じられない。だけど、あの二人はそれを信じ、私にあわせてくれるという。そして、その代償は向こうの女の子の治療。」

番井：「神の領域へ侵入か。始めたら引き返せないわよ、美雪」

番井先生はそうつぶやくとともにため息をついた。

UJU<

3・5・対世界（後書き）

ポツチ：「詩音って、本当、交渉事上手よね。」

詩音：「？」

ポツチ：「押したり、引いたりしながら、相手にとっていいことを説明してその気にさせたり、権威には権威ぶつたり。」

詩音：「そう？ それって基本だよ。そうしないと陰謀なんてできないよ。」

ポツチ：「陰謀・・・ほめた私がバカでした。」

詩音：「さ、さて、次回トリックエンジェルは」

ポツチ：「『魔法使い（前篇）』です。」

詩音：「いよいよ『エンジンプロジェクト編』の核心に迫るお話です。」

3 - 6 魔法使い(前篇) (前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

3 - 6 魔法使い（前篇）

詩音 : 「ポッチ、鏡の角度OK?」

ポッチ : 「2枚とも水平角、上下角ともにOK」

詩音 : 「よし、これで明日の準備は完了ね。」

ポッチ : 「あとは明日予報どおり晴れてくれればいいわ。」

詩音とポッチはこの春2年生に進級する。明日は入学式。去年はピカピカの1年生で迎えられたが、今年からは迎えるほうになる。

- - - - -

次の日

先日までの春の嵐は去り、きれいな青空が広がった。

まだ、落ち着きのない新入生とご両親を迎え、一生に一度しかない小学校の入学式を迎える。先生たちもこの日はいくばくか緊張して参列する。在校生たちも、この日は入学式に参列してこの晴れの舞台をお祝いする。だけど、小学生。先生が普段と違うことを察知して普段より落ち着きがない。中にはちゃんと並ばない子供もいて、その子供をしっかりとつけ並ばせる。しかし、親の手前、ぶん殴るわけにも行かず、ますます子供たちがいうことをきかず、先生たちは、普段より時間をかけて並ばせる。このような状況では、細部にまで目が行き届かない。この環境では、重大な見落としがあっても、先生ばかり責めるのは酷というものである。

教頭　：「では、続きまして校長先生のあいさつ」

校長　：「こんにちは。今日は昨日までの嵐がうそのように収まり、暖かい日差しがもどりました。太陽も皆さんの入学をお祝いしているようです。」

すこし頭が薄くなり額が広がった校長先生が挨拶をする。
そのときだった。

・・・ピカー・・・

その校長先生はその額に太陽の光が照らされ、その額が明るく輝く。在校生がどつと笑う。父母の席からもクスクスと笑いがもれる。

校長先生もその異様な雰囲気をとおり、思わず話を止める。晴れの入学式が台無しだ。こないたはずするのはこの小学校のなかではたった二人しか考えられない。

ポッチ　：「やった！」

詩音　　：「(だいせいこう)」

ガッツポーズをこっそり決める二人。しかし、後が良くなかった。

先生A　：「こら、楠木、神崎、おまえらなにやった！」

先生B　：「今日という今日は許さないぞ！」

先生ふたりがポッチと詩音のところに駆け込む。そして、「ポカッ」「ポカッ」と二人でそれぞれ詩音とポッチにげんこつを加える。

詩音：「いた〜い。二回も殴ることないじゃない」

ポツチ：「そうよ〜。体罰反対！」

先生A：「なんだと〜、おまえら自分が何やったかわかってるのか！」

先生がポツチをひっぱたく。ポツチの唇が切れて、血が流れ出る。そして、詩音を方をもう一回殴ろうとした。

そのときだった。父母席から突然男が二人声を上げる。

男A：「貴様らなにやっている〜！」

男B：「おまえらこそ自分が何やったかわかってるのか！」

その声に教師二人はおもわずそっちのほうに目が行く。男二人が目散に教師二人めがけて走っていく。

教頭：「やめてください！ここは神聖な教育の場です！先生方、その保護者二人を止めてください。」

教頭の声に耳も貸さず一目散に男たちは二人の教師に向かっていく。それどころか、来賓席から男が立ち上がり、教頭のほうに向かって歩いていく。

そして男二人は、教師二人を一瞬でねじ伏せ、床に叩きつける。

男A：「傷害の現行犯で逮捕する〜！」

先生A：「ぎゃく、腕が折れる」

男B：「楠木詩音さん、大丈夫ですか？ 暴漢は取り押さえました。後は私たち警察に任せてください。」

教頭の前に初老の男が現われる。

男C：「ちよつと事情をお伺いさせていただきませんか？」

あまりの事態に呆然とする一同。教師二人と教頭はそのままパトカーに乗せられ小学校から去っていく。

校長も真つ青だ。

年配の学年主任がとっさに壇上に駆け上がった。

主任：「一旦、休憩します。30分後に再開します。」

そついうのが精一杯だった。

- - - - -

和恵：「はい、楠木です。え？詩音がまたいたずら？ 申し訳ございません。なんとお詫びしたらいいのか？ え？ 警察？ そんなことやっただんですか？ はい、急いでいきます。ええ、夫と一緒にいかせていただきます。」

ポツチと詩音の両親が学校に緊急で呼び出される。タクシーを捕ま

えて学校に向かう途中、

あきら：「さすが、わが娘。いつかはあると思ったが小学2年生で両親ともども警察沙汰で緊急呼び出し受けるとは思わなかったぜ。」
なんとなく楽しそうだ。

和恵：「あきら君、何言ってるんですか？ 詩音のいたずらで入学式がめちゃくちゃになって、警察沙汰になってるんですよ。なにをのんきに。」

ぷんぷん怒る和恵。

そう言っている間に学校に付く。さすがにあきらも気が重い。

あきら：「こうやって考えると、俺も学生のころはさんざん悪さして親不孝のことをしたよな。親の立場なんも考えなかったんだな。」

和恵：「でしょう。まったく、詩音ちゃんは。」

あきら：「とりあえず、謝り倒すしかないかな。」

まあ、親の因果が子に報いてやつかと考える。先生が二人すでに待っていた。

あきら：「うわ、いくら俺でもここまで先生怒らせたことなかったぞ。」

和恵：「詩音ちゃん、何やったのよ。」

恐る恐るタクシーを降りる。先生の前に出るなり和恵が謝る。

和恵　：「あの、このたびはうちの詩音が・・・」

しかし、その言葉をさえぎり迎えの先生たちが謝りだした。

先生　：「このたびは我々の不徳の至り本当に申し訳ございませんでした。」

あきら　：「へ？　えっと　どうしたんですか？」

先生　：「校長と市の教育委員長がお待ちです。こちらへどうぞ。」

和恵　：「あ、あの、担任の先生は？」

先生　：「先ほど辞表を出されました。」

あきら　：「ええ？　ちょっとおかしくありません？」

先生　：「楠木さんのご両親のお怒りはごもつともです。本当に申し訳ございませんでした。担任も責任を重々感じております。どうかお許しを。」

謝り倒すはずが謝り倒されている。

和恵　：「えっと、えっと担任の先生は今どちらに。」

先生　：「ご安心ください。同僚の先生がついてご自宅まで送っていています。ええ、精神的に不安定なので自殺しないよう同僚がついています。」

自殺？　なんで自殺しなければいけないんだ？

あきら：「詩音は？　今どこに？」

先生：「はい、楠木さんは神崎さんと一緒に保健室で休まれています。ご安心ください。少し、精神的にショックを受けているようですが保健の先生がついております。ご安心ください。」

詩音が精神的にショック？　あの心臓に針金生えている詩音がか？

先生：「どうか校長室までお越し願えないでしょうか？」

あきら：「は、はあ」

先生に案内されて校長室の前に来る。やっぱり何年経ってもこの雰囲気はなれない。いやなもんだ。

先生：「校長先生、楠木様をお連れしました。」

楠木様？　様付けってどういうこと？

勢いよく校長先生と見慣れない紳士が二人の前に出てくる。深々と頭を下げる。

校長：「このたびは本当に申し訳ございませんでした。」

ふたりとも、恐怖でひきつった顔でぶるぶる震えながら謝っている。

男の人：「あやまってすむ問題じゃないだろ。おまえたち自分が

やったことがわかってるのか？」

校長室の中から怒鳴り声が聞こえる。

男の人が中から出てくる。

和恵　：「神崎さん！」

ポッチのお父さんだ。確か弁護士をやっている。

神崎　：「おお、楠木さん、来られましたね。ご安心ください。楠木さんの怒りごもつともです。私もはらわた煮え繰り返る気持ちです。ここまで日本の教育現場が酷いとは思いませんでした。」

あきら　：「えっと、あの、いまいち状況が飲み込めていないのですが。」

神崎　：「ああ、到着されたばかりでしたね。大丈夫です。裁判で徹底的に追求します。こんな学校は先生総入れ替えすべきです。」

あきら　：「えっと、今回は詩音とポッチちゃんがいたずらしたんですよね。それで、げんこつ食らった。悪いのはいたずらしたほうで、いたずらの罰は受けなくては。」

神崎　：「楠木さん、楠木さんがそういうこと言ってもらっては困りますね。確かにいたずらしたのは、我々の娘です。しかし、体罰をふるうのはいかがでしょうか？ 周りの子に暴力ふるったとか、機材を壊したというのならわかります。しかし、たかが鏡で光を反射させただけで暴力をふるうのは絶対許されません。」

あきら：「まあ、確かに。でも、ここまで・・・」

神崎：「うちの娘はそれで怪我したんです。娘の身体は楠木さんもご存知でしょう。それはちゃんと学校に伝えていきます。しかし、学校側はそれを無視した。ことは重大です。」

神崎：「校長、教育委員長どちらも管理不行き届きです。お二人には即刻辞任していただかなければなりません。また、暴力をふるった教師二人には、しっかり実刑を受け反省していただかないといけませんね。」

確かにポッチには怪我をさせたのは悪い。しかも、ポッチの身体を考えればそれは重大な問題になる。しかし、いたずらしたのは子供たちふたりだぞ。それがここまでおおごとになるのか？ あきらは疑問に思った。

あきら：「まあまあ、落ち着きましょう。」

神崎：「落ち着いていられますか。体罰は法律で禁止されているんです。日本は法治国家なんです。それを、教育者自らやぶり、拳の果てに怪我をさせる。言語道断です。」

とりつくしまもない。なんとか神崎さんをなだめようとした。その時だった。よく知っている男の声が校長室から聞こえた。

男の声：「楠木、おまえ、この重要さを理解していないぞ。今回のことは神崎さんの話以上の大問題だ。学校側のとんだ大失態だ。」

校長室から良く知っている男が現われた。

あきら：「南！」

和恵：「南さん！」

なんでここに南が。南は俺の高校時代の悪友で、和恵とも友達である。

南：「神崎さん、申し訳ない。こいつ状況が飲み込めていないんです。私のほうから説明しておきますんで、許してやってください。」

神崎：「いえいえ、楠木さんに怒ってなんかいませんよ。私が怒っているのは、この無責任な二人です。まったく事態を理解していない。」

南：「楠木、行くぞ。詩音ちゃんを迎えに行つて、お前家で説明する。」

なにがなんだかさっぱりわからない。とりあえず保健室に行く。

詩音：「パパ、ママごめんなさい。なんでこんな大騒ぎになつちやたのか。私にもわかんない。」

詩音が和恵に抱きついて泣き喚く。ポッチは呆然としている。

あきら：「ポッチ、怪我は大丈夫かい。」

ぽっち：「うん、大丈夫。」

でも目はうつろな状態だ。

南　：「詩音ちゃんは引き取る。ポッチちゃんはもう少しかかりそうだ。まだお父さんの怒りは静まっていない。当然だ。先生、もう少しポッチちゃんについてあげてください。」

南は保健の先生に挨拶する。

南　：「じゃあ、行くぞ楠木。」

状況が良くわからない。なぜここまで大事になる、なぜ南がここに
いる訳がわからない。

先生　：「今、タクシーをご用意いたしますので。もちろん費用は学
校でもたさせていただきます」

南　　：「ああ、2台お願いします。」

あきら　：「おい、何言ってるんだ、自分たちで帰るよ。」

和恵　　：「そうです。タクシー代もってもらうなんておこがましい
です。しかも2台なんて。」

先生　　：「いえいえ、どうか私たちの立場を理解してください。お
願いします。」

南　　：「楠木。和恵ちゃん。相手のことも考えるよ。学校は誠
意を一生懸命みせてるんだぞ。それを断って帰ってみる。今度は県
の教育委員会が菓子折り持って、おまえの家に押しかけるぞ。事態
をこれ以上大げさにしなかつたら、先生たちの厚意に甘えるべきだ。

それが大人の対処だ」

タクシーが2台来て俺たちはまず和恵の実家に向かった。

タクシーが和恵の実家のレストランにつく。タクシー一台は帰ったが一台はそのまま待機してもらった。

南　：「和恵さん、申し訳ないが祐美子さんを呼んでくれないか？」

和恵　：「あ、はい。」

祐美子さんが怪訝そうな顔で出てくる。

南　：「祐美子さん、ご無沙汰しています。急で申し訳ないので、詩音ちゃんを少し預かっていただけませんか？それで、詩音ちゃんの側にいてほしい。大丈夫、詩音ちゃんは悪いことしていない。馬鹿な大人に巻き込まれただけだ。」

南　：「楠木と和恵ちゃんに話をしたい。このまま楠木の家に向おう。」

祐美子：「わかりました。あとでちゃんと説明してくださいね。」

待たせていたタクシーで俺達は自分の家に向った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

あきら：「さあ、説明してもらおうか。」

和恵と俺が家に着くなり説明を求める。

南：「ああ、まずは俺の立場を説明しよう。」

南は懐から手帳を出し、2人に見せる。

2人：「け、警察手帳！」

あきら：「どういうことだ。おまえ、東京で大企業に勤めていたんじゃないのか？」

南：「ああ、ひよんな事から警察と一緒に仕事をする事になって、色々あって、今は警察庁に勤めている。」

あきら：「おまえがか？ 信じられない。あの不良の南が？ 警察にお世話になることはあっても、警察に勤めるなんてありえない。」

南：「さんざんないわれようだな。」

あきら：「わかった。百歩譲って信じよう。それで、おまえは警察で何をしている？」

南：「楠木詩音護衛班の班長だ。」

あきら：「はあ~~~~~?。」

南：「本当、おまえ学校から何も聞かされていないんだな。それだけで学校側の責任は重いぞ。怠慢もはなはだしいな。」

あきら：「全然、わからない。説明を受けたつもりがますますわからないぞ。楠木詩音護衛班でなんだ？」

南が顔を横に振り、ふくとため息をつく。

南　：「おまえ、本当に詩音ちゃんのことわかっていないんだな。」

あきら：「失礼な、これでも親だぞ、一番わかってるつもりだ。」

南　：「おまえ、トーマス・エジソンって知っているか？」

こいついきなり何言ってるんだ。

あきら：「電球発明した人だ。」

南　：「ああ、そのとおりだ。それ以外にも色々発明して世界の発明王と呼ばれた人だ。そのエジソンの小学校時代の逸話を知っているか？」

あきら：「そんなの知るか！」

和恵　：「えつと、たしか、いたずらばっかりして退学させられたんでは？　その後、お母さんが憤慨して自ら教えたんじゃないかなかったです。」

南　　：「さすが和恵ちゃん良く知ってるね。楠木とはえらい違いだ。そのエジソンだが、小学校のときに1+1はなぜ2になるのかって言って散々先生を困らせたんだ。だって、水を注いであるふ

たつのコップを大きな一つのコップにいれれば1+1=1じゃないかっていったんだ。天才は発想からして常人と違う。それ以外にも実験と称して納屋に火をつけたりしている。そして学校の理解が得られず3ヶ月で問題児のレッテルを貼られて退学になったんだ。」

あきら：「それと今回の話がどう関係ある。」

南：「まあ、黙って最後まで聞け。そのエジソンだが、実は高等教育を受けることができなかったことで、発明に失敗したり、事業に失敗したりしている。つまり、理解のない学校のせいでもっと活躍できる才能を奪ったとお偉方が考えたんだ。」

和恵：「はあ」

南：「そこでエジソンプロジェクトというのが文科省の肝いりで始まった。天才は子供の頃、枠にはまらない行動を起こすことがある。しかし、それが原因で初等教育につまづき、その後の人生がうまくいかなくなるのは国家の損失と考えたんだ。そのため、この国で、これはつていう子供がピックアップされ、その子が学校生活を問題なく過ごせるように配慮されるようになったんだ。」

南：「そして、10人の子供が選ばれた。その子たちが通う学校には優秀な先生が配置され、また、補助金がついて学校設備の充実が図られるという優遇処置が取られる。その代わり、その子が多少奇行に走っても、それを是として、正しく導いてあげることが課せられる。」

あきら：「つ、つまり、詩音はその10人に選ばれたということか。」

南　：「10人に選ばれたとか言うレベルでなく、その10人の筆頭だ。筆頭には専属の護衛部隊がつく。それだけ重要人物なんだ。」

あきら：「ただのいたずら娘だろう?」

南　：「本当にわかっていないな。ただの子じゃないだろう。すでに小学校1年生のときに微分積分はおろか複素数まで理解していた。そんな小学1年生いるか?」

あきら：「確かに、めったにいないだろう」

南　：「さらにはポッチもその10人に入っている。詩音ちゃんに隠れて目立たないが、IQだけなら詩音ちゃんよりはるかに上だ。詩音ちゃんが理数系に特化しているのに対して、ポッチは不得意分野がないオールラウンダーだ。」

南　：「そのため、詩音ちゃんたちのいたずらは大目に見られている。国家公認なんだ。しかも、今回の件は神崎さんがいつていたように、誰かを怪我させたり、器物を破損させたわけでない。たわいもないいたずらだ。それを入学式の父兄の前でぶんなぐった。認められている権利を無視して、公衆の面前で法律違反を犯した。守るべき人間が攻撃する側に回ったんだ。」

あきら：「だが、いたずらには相応の罰を与えるべきだ。」

南　：「あのな。学校は補助金もらってるんだぞ。詩音ちゃんを守るべき立場なんだ。しかも、いたずらは大目に見る。そういう約束の中での暴挙だ。社会として許されないんだよ。」

南　：「それにもう一つ。おまえ親として責任放棄してないか？
詩音ちゃんを怒るのは学校の義務でなく、おまえの義務だろう。
それを先生任せにしているかい？」

反論できなかった。南の言うとおりである。たしかに俺が甘えていた。

南　：「いつとくがぶん殴れって言うてんじゃないぞ。詩音ちゃんに自分の行為がどれくらい影響を与えるかそれをこんこんと諭すんだ。そうしないとあの詩音ちゃんは納得しないぞ。逆にそうすれば詩音ちゃんもわかるだろう。」

いつのまにか南が大人になっていた。

南　：「とりあえずは今日はここまでしよう。気持ちの整理が必要だろう。それに神崎さんのあの調子じゃ、今日は何言っても収まらないだろう。一晩あけて頭を冷やそう。」

あきら：「ああ」

南　：「それと明日、俺の代わりにエジソンプロジェクトの責任者の一人が説明に来る。文科省の役人だ。楠木だったら俺ですむが神崎さんを説得するにはその人が必要だからな。」

そう話すと南はいとまを告げた。学校に再び行って少し落ち着いていたら神崎家に説明することだ。

エジソンプロジェクト。そんなプロジェクトがあるとは知らなかった。南がいうように詩音の能力をちゃんと俺は理解しているのだろうか？

そして、例えすごいとしても、周りから優遇されるようなことが正しいのだろうか。心に何か引っかかる。

後編につづく

3・7・魔法使い（後編）（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

3 - 7 ・魔法使い（後編）

次の日俺たちは家族は3人で神崎家に向かった。今日、プロジェクトの責任者の一人の文科省の官僚が来て、神崎さんと俺たち一家に説明をしてくれることになっている。

神崎家で待っていると程なくしてその文科省の官僚がやってきた。

官僚　：「やあ、楠木久しぶりだな。」

あきら　：「やっぱり、志穂先輩だったんですね。」

大橋志穂先輩は俺や和恵と同じ高校の先輩である。俺のいた天文部と和恵のいたダンス部両方掛け持ちして部長やった人で、色々世話になった人である。高校卒業後も互いに連絡を取り合っている仲である。大学卒業後文科省に勤めているのをしっていたし、南も現れたから、もしかしたらと思っていた。

志穂　：「元気そうで何よりだな。」

あきら　：「ええ、おかげさまで。それで、今日は何しにきたんですか。」

わかってはいるがあえて突っ込みたくなる。

志穂　：「何って、今回の事件の対応だ。エジソンプロジェクトの責任者の一人として当然だ。」

志穂は神崎さんと挨拶をする。神崎さんも昨日と比べればだいぶ落

ち着いている。

神崎：「昨日は年甲斐もなく取り乱した姿をお見せしてお恥ずかしい限りです。」

俺たちが神崎家に来たとき、そうおっしやっていた。

俺たち3人と神崎家の3人、それと志穂先輩で大きな神崎家の大きな応接間に入る。うちの家とはえらい違いである。

志穂：「先に親御さんと話をしたい。詩音ちゃんとポツチちゃんは2階のポツチちゃんの部屋で待っていてくれ。」

詩音：「はい。志穂さん。」

ぼっち：「わかりました。」

二人は黒猫を抱いて2階に行く。

志穂：「昨日はいろいろすまなかった。プロジェクトも反省している。先に不穩分子3人を排除しておくべきだった。」

あきら：「まだ、若干世間常識とずれてる気がしますが。」

志穂：「まあ、黙って聞け。あの3人はもともとエジソンプロジェクトが気に食わなかったんだ。そのため、ここぞとばかりに過剰反応した。」

あきら：「え？」

神崎　：「なるほど、それでああいう反応をしたのか。」

和恵もきよとんとしている。

志穂　：「彼らは、教育と言つのは万人に対して平等であるべきと考えているんだ。」

あきら　：「それは正しいと思いますが。」

志穂　：「いや、正確ではない。教育の機会は万人に対して平等であるべきであり、教育そのものを平等である必要はないと考えている。」

神崎　：「まさしく、そのとおりです。」

志穂　：「つまり、彼らの考えは『出る杭は打たれる』だ。できない子がある一定レベルに上げることが重視して、できる子をそれ以上伸ばそうとしない。それどころか伸ばす行為を邪魔する。」

あきら　：「いや、それは言いすぎかと。」

神崎　：「いやいや、世の中ってそういうものです。」

志穂　：「彼らの考えは我々エジソンプロジェクトの考え方を真っ向から否定する考えだ。」

和恵　：「でも、公立小学校だから仕方ないのではないのでしょうか？」

志穂　：「しかし、現実ここから通える私立小学校がどれだけある

？ 事実上選択肢として存在していない。しかも、私立のお金がかかる。神崎さんならできるが、こう言ってはなんだが楠木のところだと、『まあ、小学校のうちには公立でいいや』にならないか？」

あきら：「確かに、そのとおりです。」

志穂：「今、中学がそうなりつつある。優秀な子は環境の整った私立に行く。そうして、だんだん公立と私立に差が出てくる。しかし、私立は裕福な家庭の子しかいられない。つまり、金持ちじゃないと優秀な子が育たなくなっている。どんどん格差が広がっている。なにが『教育と言うのは万人に対して平等であるべき』だ。理念は結構だが、実体は逆に動いている。」

神崎：「まさに、そのとおり」

志穂：「このままだと、小学校もそうになってしまうぞ。だからこそこのエジソンプロジェクトを成功させなければならない。公立小学校で十分優秀な子供を育てられると。今、公立でも中学高校は中高一貫の学校もあり私立に対抗している。同じように小学校でも特別な仕組みを考える必要がある。その小学校はそのモデル校なんだ。」

神崎：「いや、文科省の役人なんて、事なかれ主義かと思っただけだが、しっかりと考えを持ってらっしゃる。それ以上に、その考えを自ら実行している。言うだけならだれでもできる。感服いたしました。」

まだ、しっくりこない。何か変だ。

和恵：「えっと、普通じゃダメなんでしょうか？ みんなと一緒に

でいいと思うんです。」

そうだ、和恵が代弁してくれた。

志穂：「天才は普通の環境では浮き上がってしまう。エジソンみたいな。」

和恵：「はあ。」

志穂：「このプロジェクトの発案者は誰だと思う。」

和恵：「誰でしょう？わかりません。」

あきら：「もしかして、くるみですか？」

志穂：「ああ、ノーベル賞受賞者の三条博士だ。彼女も学校時代浮いていただろう。その経験から文科省に持ちかけたんだ。」

くるみも学生時代友達もできず一人ぼっちだった。唯一の友達が隣に住んでる俺だった。今でこそ、俺達や研究所の仲間がいるが、あの当時は大変寂しい思いをしていたんだろう。

志穂：「そして、三条博士は責任者の一人でもあり、詩音ちゃんとポツチちゃんの推薦人でもある。」

あきら：「なるほど。くるみなら確かに気持ちがわかるか。そして、ちょっと性格的には難があるが、くるみが詩音に対して悪いやり方を勧めるわけがないな。」

志穂：「納得してくれたか。」

志穂がほっとした表情で話す。

あきら：「完全ではないがある程度理解できました。」

和恵：「私も、よくわかりませんがくるみさんが後ろについているのなら安心しました。」

結局、俺たちは話の内容に納得したのでなく、くるみという人物に納得したのであった。

志穂：「よかった。神崎さんも納得してもらえたか？」

神崎：「ええ、うちは最初から納得していますよ。なあ、おまえ」

神崎妻：「ええ、あなた。」

志穂：「では、子供たち二人に話そうか。」

- - - - -

ふたりは志穂先輩の説明を聞いた。

詩音：「つまり、もういたずらしちゃだめってこと？」

志穂：「いや、おまえたちの才能を人に役立つようなことに使えって言ってるんだ。そうだなあ、いたずらするにしても、何か人の役立つことにつながるようなことをしろってことだ。」

ポッチ：「なんだ、いたずら止めろって言ってるんじゃないんだ。それだったらいいよ。」

詩音：「うん。」

志穂：「校長先生のおでこに光当ててもだれの得にもならないだろ。そういうのはだめなんだ。詩音ちゃん、わかってくれたか？」

詩音：「やだ。」

和恵：「詩音ちゃん。」

詩音：「詩音、今までどおり普通でいい。ちょっと位怒られてもいい。」

志穂：「詩音ちゃん、君たちは選ばれたんだ。もっと自覚しなければいけない。」

詩音：「大人っていつもそう。詩音の意見なんか聞かないで、自分で勝手に詩音の人生決める。『君たちは選ばれたんだ』っていわれても詩音には関係ない。」

あきら：「詩音！」

志穂：「では、どうしたら協力してくれる？ 詩音ちゃん」

詩音：「だって、選ばれたって、詩音にはなにもいいことないんだもん。何かしてくれたら考える。」

志穂がやや拍子抜けした顔で話を続ける。

志穂：「はあ、悪かった。そのとおりだ。ちょっと説明が足らなかった。この話受けてくれたら、魔法を使えるようにしてやる。」

詩音：「どんな魔法？」

志穂：「召喚魔法だ。」

そう言って携帯電話を二つ取り出した。

志穂：「この携帯電話を使って、困ったときがあつたら呼び出せばいい。」

志穂は携帯電話を見せて、画面に電話帳を開いた。

志穂：「ここに書いてある人がおまえたちが召喚できる人だ。」

そこには二人の両親のほかに、南や巖さん、はたまた松井先生まで入っている。

詩音が目を輝かせている。

詩音：「この携帯くれるの？ 前から携帯欲しかったの。だって友達はみんなもってるんだもん。」

詩音、もしかして携帯電話で釣られるレベルなのか？

志穂：「ああ、二人に特別に渡そう。」

ポッチ：「この名前のところに 印がついている人は？」

志穂　：「それは究極召喚魔法を唱えないと呼び出せない人だ。その道の実力者ぞろいだ。普段は忙しいから使つてはいけませんが、本当に困つたら呼び出すがいい。」

詩音　：「他には？」

志穂　：「おいおい、まだ欲しいものがあるのか？」

詩音　：「だって、召喚魔法しか使えない魔法使いつていないよ。魔法の呪文とか教えてくれないの？」

志穂　：「そ、そうだな。ああ、いい魔法の呪文を教えよう。『プロジェクト外秘』だ。この呪文を唱えると大抵の事ができるようになる。」

詩音　：「どんなこと？」

志穂　：「そうだな、例えば、この携帯を学校に持っていったら、先生に見つかつて、『なんで持ってきたんだ？』といわれたら『プロジェクト外秘です』といえればいい。また、例えば、取り上げられても、『返してください。この携帯はプロジェクト外秘扱いです。』といえれば返してくれる。」

ポッチ：「すごい。」

志穂　：「それに本当に欲しいものがあれば、その呪文で物が買える。例えばお金を持っていなくても、会計のときに『プロジェクト外秘です』といえばサイン一つで買物ができる。もちろん、代金はプロジェクトで持つから安心しろ。」

詩音　：「すごい」

志穂　：「ただし、この街の大人に効果が限定される。他の街や子供には通じないからな。それと人のためになることに使うこと。自分や家族のためだけに使っちゃダメだ。」

ポッチ：「うん」

志保　：「それと、その携帯電話はお財布機能を持っている。プロジェクト外秘といわなくてもそれで日本全国どこでも買える。さらに言うと電車や飛行機にも乗り放題だ。ピツッとやれば何でも買える。どこにでも行ける。」

詩音とポッチが目を輝かせる。

詩音　：「わかった。プロジェクトに協力する。いたずらも人のためになることにつながらないのはやめるように努力する。」

結局、物とかお金につられるのか。

志穂　：「よし、エジソンプロジェクトの名のもとに契約しよう。ただし、以下の二つを約束してくれ。一つは人のために使うこと。二つめはこの話はみんなには内緒にしておくこと。話していいのはその召喚魔法機械のなかに名前が載っている人だけだ。」

詩音　：「どうしても話さないといけないときは？」

志穂　：「そのときはプロジェクトメンバーに入ってもらおう。その人にも契約してもらおう。」

詩音：「わかった。」

志穂：「よし、契約成立だ。」

志穂：「ところで、さっきの『プロジェクト外秘』の呪文だが、
両親にも使えるように申請しておく。」

あきら：「いいんですか？」

志穂：「ああ、ただし、家計の足しにするなよ。あくまで詩音や
ポッチちゃんの研究費用とかのためだけだ。そう、研究費と
思ってくればいい。」

あきら：「一体どれくらい使えるんですか？」

志穂：「一家族で年間これくらいだ」

志穂はそう言って指を一本立てる。

あきら：「10万円くらい？」

神崎：「いや、楠木さん、10万は安いでしょう。100万円
くらいでしょう。」

あきら：「100万円ていったら毎年軽自動車を買えますよ。そ
んなには。」

志穂：「残念だが二人とも違う。1000万円だ。」

神崎さんですら口を大きく開けて志穂先輩を見る。

志穂：「うそではない。それくらい期待されてるってことだ。」

詩音：「じゃあ、早速欲しいものあるんだけど。」

志穂：「なんだ、言ってみる。遠慮はいらないぞ」

詩音はあるものを言った

あきら：「おまえ、そんなもの使って何するんだ？ しかも、あんなでかいものうちには置けないぞ。」

詩音はみんなにその用途と置き場所を説明した。親4人はその話をきいて感心半分、あきれ半分といった感じた。

あきら：「そんなことできるのか？」

志穂：「できるかどうかを確かめる研究実験だろ。まさしく、エジソンプロジェクトにふさわしい内容だ。詩音ちゃん、早速手配しよう。」

志穂：「ほかに質問ないか？」

ポッチ：「あの、召喚魔法のリストの中に学校関係者がいないけど大丈夫？」

志穂：「さすがポッチちゃんだな。まさにそこが今我々の問題なんだ。」

その後、詩音とポッチと両親4人と志穂で校長先生と担任の先生に昨日のいたずらについて謝りに言った。

あきら：「殴った教師と教頭のところに行かなくてもいいのですか？」

志穂：「彼らは謝られるのではなく謝るほうだろう。向こうから謝罪してくるのが礼儀だ。」

神崎：「ええ、そのとおりです。大橋さんは良くわかってらっしゃる。」

すっかり、志穂先輩に心酔してしまった神崎さんだった。

校長先生は快く許してくれた。だけど、担任の先生は会ってさえくれなかった。

志穂：「担任の先生はちよつと心労が重なったようだ。校長側と教頭側の板ばさみに合っただいぶ弱っている。当分学校にもでてこないかもな。」

.....

結局、今回の件で、校長といたずらした二人の当事者はおとがめなしだった。しかし、ポッチをひっぱたいて怪我を負わせた教師は自主的に辞職、もうひとりの教師と教頭は他校へと配置換えとなった。

また、担任も一身上の都合ということで退職することとなった。

新年度そうそう学校は3人の教師と教頭がいなくなるという異常事態を迎えた。

つづく

3・7・魔法使い（後編）（後書き）

詩音：「携帯げつと〜。すごいよ〜。メールもできるし、インターネットから着メロダウンロードし放題！ 夢みたい！」

ポツチ：「……………詩音、私たちもつとてつもないもの手に入れたの気づかないの？」

詩音：「へ？」

ポツチ：「ま、いつか。さて、次回のトリックエンジェルは」

詩音：「一週間お休みして『幼保一元化』です。学校の大逆襲です。」

ポツチ：「ま、ここまで派手に好き放題やったら、学校も黙ってないわよね。」

詩音：「では、おたのしみに〜」

3・8・幼保一元化（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 8 ・ 幼保一元化

入園式も過ぎ桜が散りかけた頃のことである。

園長 : 「ちよつと泉さんよろしいでしょうか?」

響子 : 「はい」

私は園長に呼ばれて園長室に入った。

園長 : 「泉さんは今年どの学級も担任として持ってらっしゃらなかったわよね。」

響子 : 「はい、今年は少し全体を見るようにと園長先生がおっしゃられて。」

園長 : 「ええ、そうです。泉先生もこちらに来て4年目。そろそろ次のステップへ上がっていただくためにそのようにさせてもらってたんでしたね。」

響子 : 「はい。」

園長 : 「実は、事情がちよつと変わってしまったね。」

響子 : 「はい?」

園長 : 「そういえば、幼保一元化ってご存知?」

響子 : 「ええ、幼稚園と保育所をいっしょにしていこうと言っ動

きです。」

園長：「はい。少子化の世の中の流れとしてこの幼稚園でも考えていかなければなりません。」

響子：「ええ、そのとおりだと思います。」

園長：「だけど、保育園を併設するとなると設備投資しなければならぬなど経営的に大変なんです。それに、保育園を併設するととなると保育士の資格をもった先生が必要ですね。」

響子：「はい。」

嫌な予感がする。

園長：「幸いにしてこの幼稚園は幼稚園教諭免許と保育士の資格両方持った先生が多くいらっしゃいます。それで両方を兼ねることが出来るんですが。」

やっぱり。私は幼稚園教諭免許しか持っていない。リストラの話？！

園長：「確か、泉先生は保育士は持っていらっしゃるじゃないですか。たよね。」

いよいよ本題ね。私は意を決した。

響子：「園長先生、確かに私は持っていませんが、熱意なら誰でも負けません。必要なら通信教育等に取ります。ですから。」

響子：「園長先生、お願いします。辞める何ていわないでくださ

い。」

園長が手で制止する。

園長：「いえ、まだ話の途中です。」

え？ リストラの話じゃないんだ。

園長：「そして、泉さん小学校教諭の免許お持ちでしたよね。」

響子：「ええ、まあ。」

私は大学で小学校・幼稚園教諭の免許を取得した。今となっては小学校教諭の免許でなく保育士の資格をとるべきだったと後悔している。

園長：「実は市から小学校の代替教員の話が急に來てるんですけど、しかも、泉先生名指しで。」

響子：「はあ？ 私小学校の先生の経験ないんですけど。」

園長：「しかも、もし、泉先生が代替教員になられるようでしたらこの幼稚園に幼保一元化のモデル園として援助が出るそうなんです。そうすると設備投資費用の捻出もうんと楽になります。」

響子：「えつと」

園長：「もちろん、ずっと小学校教諭していただくのではなく、3年したらこの幼稚園に戻っていただくと言う期限付きです。人生の幅を広げる意味でとても有意義と思うんですけどね。」

つまり、私を小学校に送ること設備投資が可能となり、この幼稚園も安泰と言うことね。私の意思は斟酌されないの？

響子：「でも、私は園児たちとずっと一緒にいたいです。」

園長：「保育士の資格を持つてる人が優先になっちゃうわね．．．」

「ぼそつて園長が言う。」

響子：「つまり、今回小学校に行かないと、この幼稚園も先細りになり先生をリストラしないといけない。そのときは保育士の資格を持ってないと危ないってコトですね。」

園長：「そこまで、はっきりは言っていないわ。でも、幼稚園も経営が重要なのよね」

「はっきりとは言っていないが、暗に言ってるじゃないですか。」

響子：「はあ。わかりました。期限付きということでしたら、小学校に参りましょう。」

園長：「わかってくれてうれしいわ。泉先生ならきっとできると思う」

響子：「それで、いつからですか？ 来年度からですか？ それだと遅いですね。2学期からですか？」

園長：「いいえ、明後日からです。」

響子：「ええ？ そんな急なんですか。」

園長：「はい。実は2年生の担任が急に病気になるれてしまい急遽代替教員が必要になったんです。」

響子：「それはおかわいそうに。どこか身体が悪いんですか？」

園長：「それがここだけの話心の病なんです。」

響子：「え？ もしかして原因は学校関係なんですか。」

園長：「ええ、たいしたことではないのですが、クラスに少し変わった女の子が二人いて、その子たちのいたずらで心労になられてしまつて。他の先生もしり込みしているところでした。」

響子はあたまを抱えた。小学2年生でいたずら好きの女の子ふたり。

響子：「詩音とポッチですね。」

園長：「良くご存知で。」

響子：「まあ、一人は幼稚園時代の担任でしたしね。浅からぬ縁です。なるほどわかりました。私が呼ばれた理由もすぐわかりました。ええ、参ります。」

.....

響子：「と、ということ、事情により学校を離れた先生に代わり、

今日から担任になる泉響子です。皆さん、宜しくお願いします。」

ゴンタ：「なんだ、また女の先生かよ。もっと話のわかる男の先生とかじゃないのか」

ひかる：「でも、きれいで優しそうな先生。」

後ろの席で青ざめた二人が座ってる。

詩音：「優しい？ 知らないって幸せよね。」

ポッチ：「学校も本気ね。史上最凶の最終兵器投入してきたわよ。」

響子：「そのうしろ二人！ 何か言いました？」

詩音：「いえ！ 何も言っていないです。」

響子：「そう、それじゃみんなよろしくね。」

響子がつこりと笑う。

つづく

3・8・幼保一元化（後書き）

詩音　：「とうとう、学校側の反撃が始まったわよ」

ポツチ：「プロジェクトが響子先生呼んだじゃないの？」

詩音　：「南さんに聞いたんだけど、市と学校が先手を打ってプロジェクトよりも先に声かけたんだって。それで、プロジェクト側も大混乱してる」

ポツチ：「はあ、てことは学校側が声かけなくてもどのみちプロジェクトが呼んだのね。」

詩音　：「うん。私たちって不幸よね。」

ポツチ：「響子先生の方が不幸のような。」

詩音　：「さ、さて、次回のトリックエンジェルは？」

ポツチ：「『指導実績』です」

詩音　：「私たちも反撃開始します！　お楽しみに」

3 - 9 ・指導実績（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 9 ・指導実績

響子は詩音とポツチの指導実績を見て愕然とした。

．．ふたりともテストはほぼ満点。どの教科にもぶれがない．．

．．知能指数はポツチのほうが上．．

．．10年に一度出るかでないかの天才が二人同じクラス．．

．．時々辛らつないたずらを用意周到に準備をして行う。その場合、学校側の不備や担任の先生の矛盾といった痛いところをついてくる．．

．．国家の極秘プロジェクトが裏で動いている形跡あり．．

そういえば、校長が赴任してきたとき言っていた。

校長：「とにかく、平穩無事に進級させればよいです。多少のこととは大目に見てやってあげてください。エジソンの母になった感じをお願いします。」

つまり型にはめるなっこと？

他の児童はどう指導する？

校長：「あのクラスは問題児は2人だけです。それ以外の子はあの二人を押さえ込めば同調したりしないでいい子達です。でも、あの二人を押さえ込めないと一気に学級崩壊の危機に晒されます。」

なるほどね。

校長：「ただし、ポッチのお父さんはモンスターペアレント気味なので注意願います。」

職業は弁護士だったはず。いづれ家庭訪問が必要ね。

先生：「あの〜」

響子：「はい。あ、前山先生。」

前山先生は今回の欠員の中で補充された先生の一人だ。ほかにも川上先生と言う新任の先生もこられている。この3人は新しくきた先生と言うことで色々話がしやすい関係になっている。

その中でも前山先生はうちのクラスの副担任だ。初めての私に対してのサポート役に学校がつけてくれた。

前山：「実は、詩音ちゃんたちのことですが。」

響子：「何か、やったんですか？」

前山：「いえいえ、まだ何も。でも、校長からも要注意人物と言われてますが、いまいちピンとこないんです。ごく普通の活発な女の子にしか見えないんですが。」

響子：「まあね。確かに表面上は普通の女の子よね。」

前山：「確か先生は詩音ちゃん幼稚園時代の担任でしたね。幼稚園の時はどうでしたか？やっぱりいたずらばかりやってましたか？」

響子：「ぜんぜん。確かに活発でみんなを引っ張ってくタイプだったけど、いたずらはしなかったわ。ただ、ちょっと変った子だったわよ。」

前山：「ほ。どんなところが？」

響子：「晴れてるときは外で遊ぶんだけど、雨が降っていると教室の中で遊ぶじゃない。」

前山：「ええ、外では遊べませんからね。」

響子：「そうすると、他の子は教室でお絵かきとかをしてるんだけど、彼女は宿題やったの。」

前山：「宿題？」

響子：「そう、三条博士の宿題。」

前山：「三条博士って、あのノーベル賞の三条博士ですか。」

響子：「そう、そして、時々『先生わかんない』っていつて聞きの来るの。」

前山：「ほほう、それで。」

響子：「私もわかんないから、適当にごまかしてた。」

前山 : 「どんな問題でした？」

響子 : 「三角関数。」

前山 : 「はあ？」

響子 : 「しかも加法定理とか余弦定理とか使わないと解けない問題。」

前山 : 「幼稚園ですよ。」

響子 : 「そうよ。今はガウス平面とかフーリエ級数とか勉強してみるみたい。」

前山 : 「ご冗談を」

響子 : 「疑うなら確かめてみるといいわ。私だって信じたくない。」

前山 : 「・・・」

響子 : 「結局、その知識をもてあましてるのよね。だからいたずらに走る。なんかいい目的を与えてあげればいいんだけど。」

前山 : 「泉先生は彼らのいたずらの被害を受けたことはないんですね。」

響子 : 「そんなことないわよ。去年2回あったわよ。わざわざ幼稚園に来てやられた。」

前山 : 「はあ。」

響子 : 「一回目は『先生学校じゃ飼えないから幼稚園で飼って』
っていわれて、こんな大きいウシガエル持ってきた。」

そう言つて、私は両手でその大きさを示した。そして、その姿を思
い出して身震いをした。

響子 : 「そのときの担任の先生が、『身近な生き物を持ってきて
見ましよう』って、言っちゃったのよね。それで、他の子はザリガ
二とかメダカとか持ってきたんだ。あの二人はわざわざウシガエル
を取ってきて持ってきたのよ。こんなやつ」

あらためてその大きさを示す。

前山 : 「まあ、確かにウシガエルを持ってきてはいけません。と
はいつてないですからね。」

響子 : 「他にも、幼稚園で飼ってるロバを連れ出されたこともあ
るわ。」

前山 : 「はあ」

響子 : 「私が悪いんだけどね。見つからずにやれるもんならやつ
てみなさいって。防犯装置がいっぱいあったから見つからずに連れ
出すことなんて不可能だと思ったんだけど、防犯装置無効化されて
連れ出されたわ。」

前山 : 「はあ。」

響子：「とりあえず理科系は得意だから気をつけてね。それと挑発しちゃだめよ。不可能と思うこともやっちゃうから。特に光と音とかには要注意ね。波関係は猛烈に強いから。」

前山：「それで三角関数やフーリエ級数なんですね。」

響子：「まあね。でも、私がこっちに来てからぱたっていたずらがやんでるのよね。」

前山：「先生が怖いからでは？」

響子：「まさか、以前からやられてるのに、私が来たからって止める理由はないわ。あの子たちのいたずらぱったりやんでるのは絶対何か別の理由があるわ。」

前山：「理由？」

響子：「ええ、何か大掛かりないたずらを仕掛ける準備とか。まあ、本人たちに聞いても絶対口割らないだろうから、少し様子見ですね。前山先生も何か気づいたら教えてください」

前山：「わかりました。って？あれなんですか？」

前山先生が窓の外の校門の方を指差す。そこには口バに乗った2人の少女がいた。

響子：「あいつら、早速何か始めた！」

そいつって一目散に職員室を飛び出した。

- - - - -

響子 : 「あんなたち、サクラを連れて何やってるの?!」

詩音 : 「先生、きいて。パリカールかわいいそうなんだよ。」

ポツチ : 「幼稚園追い出されました。飼い主がないから。」

詩音 : 「飼いならされたロバとも言えども、こんなに大きいと後ろ足で蹴飛ばされたり危険きわまりない。特に飼い主がいらないと言うこと聞かないのがロバの習性であり、飼うのは危険だって。」

ポツチ : 「保健所から指導があつたみたい。」

詩音 : 「危なく、サクラ本当にさくら鍋になるところだったんだから。」

確かに、サクラは眼をつけられていた。最初は小さかったから良かったが大きくなるにつれ幼稚園からいい顔をされなかったのは事実だ。なんとか面倒を見ると言う条件で飼っていたのだった。

響子 : 「それで、どうして小学校につれてきたのよ?」

詩音 : 「学校で飼うに決まってるじゃない。ねえ、ポツチ。」

ポツチ : 「そうだよ。詩音」

響子 : 「そんなの無理に決まってるでしょう。」

詩音：「校長先生の許可もらってる。」

響子：「え？」

詩音：「いいよっていつてくれたもん。」

やけに手回しがいい。

響子：「校長先生が良いと言っても担任の私が許さない。」

ポツチ：「え〜。残念。じゃあ、詩音行こうか。」

詩音：「うん」

響子：「ちよっと、どこに行く気？」

詩音：「保健所。」

ポツチ：「かわいそうだけど。しょうがないよね。飼えないだもん。」

詩音：「響子先生の家でもこんな大きいの飼えないでしょう。と
いうか普通のおうちじゃ、こんな大きいロバ飼えない。近所迷惑に
もなるし。」

ぼっち：「飼えないからって、山に逃がすのもね。自分でえさ取る
こともできないからすぐ死んじやうよね。」

詩音：「大人って無責任よね。可愛いからってもらってきて、飼

えなくなるとポイントだもんね。」

響子：「ちよっと、人聞きの悪いこといわないでよ。わかりました。わかりました。許可します。でも、その前に飼育委員の先生にも聞いてみなきゃ。」

ぼっち：「すでに話は通してあります。私たち飼育係ですから。」

なんだ、この用意周到さは。サクラを小学校で飼う以外の選択肢は事前につぶされている。指導書にかかれていた「辛らつないたずらを用意周到に準備して実行する。」というのを思い出した。

響子：「あんた達、このために飼育係に立候補したの？」

詩音：「たまたまだよ。た・ま・た・ま」

とても信じられない。

響子：「あんたたちの狙いは何？サクラを小学校に持ってきても何の得にもならないでしょう。」

詩音：「ひど〜い。先生も困ってるだろうって思って、一生懸命頑張っているのに、なんで疑うかな〜」

響子：「いや、その、ごめん。」

詩音：「うん、じゃあ、パリカールを新しい小屋に連れて行くからじゃあね〜。」

響子：「新しい飼育小屋まで準備されてるのか。」

ふたりを見送りぼそっていう。

前山：「すごいですな。大人を完全に手玉に取っている。しかも、いい事をした以外には見えないし。泉先生、本当に彼女たちは純粹にサクラを助けようとしたんじゃないですか？」

響子：「うん。信じたいんですけどね。今までの行動を見るととてもとても。保健所に連絡して指導するように言ったのは彼女たちって考えるほうが素直じゃありませんか？」

前山：「まさか。でも本当ならすごい策士ですな。」

響子：「ええ、すごい策士です。当然なにか狙ってるんでしょうが、今のところしっぱすらつかめませんね。」

私と前山先生は複雑な思いで職員室に戻っていった。

つづく

3 - 9 指導実績（後書き）

ポツチ：「いよいよ逆襲開始だね」

詩音：「えへへ、細工は流々。果報は寝て待て。楽しみ楽しみ。」

ポツチ：「ほんと、詩音の悪だくみには感心しますね。」

詩音：「あら、越後屋さん、あなたの悪だくみの方が一枚上ですわよ。まさか、あんな物語にしちゃうなんて。」

ポツチ：「えへへ」

詩音：「ということで次回トリックエンジェル第30話は」

ポツチ：「『のっぽさん』です。」

詩音：「院内学級の物語の新作です。お楽しみに」

3・10のつぼさん(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3・10のつばさん

バラが咲き乱れる5月も終わりのころ、私は和恵ママと病院に行った。

私は数ヶ月に一度東京の病院に行く。別に病気とかしているわけではないけど。

でも、お母さんは心配して検査してもらいなさいという。

だけど、お母さんは忙しいから連れてってくれない。

だから、いつも和恵ママと行く。

お母さんは仕事ばかりに目が向いて私には構ってくれない。

家族が出来ても前と同じ。

病院に行くのはめんどくさいし、時々とっても痛い検査をするからいや。

でも、今日はちょっと楽しみ。だってのつばさんも来てるはずだから。

.....

のつば・・・「やあ、ポッチお久しぶり。元気してかい。」

ポッチ：「のっぽさんお久しぶり。もう、すっかり元気そうね。」

のっぽ：「ああ、今はこうして自宅療養しながら通院してるんだ。」

二人は院内学級の部屋で挨拶を交わす。誰も無い土曜の午後の院内学級。入院している子は院内学級では遊ばずにプレイルームにみんな集まっている。

だって、ここは勉強する部屋。

ポッチ：「もう、歩けるまで治ったんだね。」

のっぽさんは病気で車椅子生活だった。日本では治らないという病気だったんだけど去年の夏、番井先生の紹介でアメリカで手術を受けた。世界一の名医だそうで奇跡的に治った。

のっぽ：「ああ、今は何不自由なく生活できるようになった。」

ポッチ：「よかった。本当に良かった。」

のっぽ：「それは、物語を書く人が確保できるからかい？」

ギクツ。 それもちよつとある

ポッチ：「ううん。一緒に話して作る人がいてくれるのがうれしい。」

本当に半分はそついう気持ち。

保育園のころからのお友達で土曜の午後、月に一度、多いときに

は毎週あつて物語をふたりで作っている。

のっぽ：「相変わらず、口はうまいな。でも、まあ、いいや。新作も出来たことだし、お披露目といこうか。」

ポッチ：「題名は？」

のっぽ：「フェンリルだ。この前ポッチが持ってきたものを少し手直ししたんだ。」

- - -
- - -
フェンリル

みんな、フェンリルって知ってる？ 知るわけないよね。フェンリルは魔法の世界に住んでる大きな大きな狼なんだ。とても凶暴でどんなに縛り付けていても食いちぎって逃げ出してしまう恐ろしい狼。

でも、この物語に出てくるフェンリルはそんな怖い狼でなく、人に優しい狼なんだ。なんでって？ それはもう年老いてしまったからさ。若い頃のように暴れることもしなくなった大人しい狼なんだ。名前は「パリカール」っていうんだよ。

魔法の街の片隅にサーカス団があるのはみんな知ってるよね。そのサーカス団の入り口近くの小屋にパリカールは飼われているんだ。昔は、サーカス団の一員として、みんなに芸を見せていたんだ。大きな口から火を吐いてみんなを驚かせていたんだ。そう、サーカス団の花形でみんなの人気者だったんだ。

だけど、それは昔の話。今はそんな元気もなく、一日中小屋の中でうずくまっている。それでも、引退したての頃は、昔のパリカールを知ってる人が、小屋によって、パリカールに話し掛けてくれたんだ。でも、年をとるにつれ、そうやって訪れる人は少なくなっただけで、もう、ほとんど訪れる人もいなくなり、さびしい生活を送っていたんだ。

でも、二人の女の子はパリカールのことを忘れずに会いに来てくれんるんだ。

そう、その子たちは魔法学校の「シオン」と「リン」のふたりだ。

シオン：「パリカール、今日も元気にしてる？」

リン：「今日は特別に圧ペン麦持ってきたから食べなよ」

パリカールもふたりのことは覚えていて、喜んでもらった餌を食べるんだ。

そうやって、二人は毎日は無理だったけど、できるだけ餌を上げにきてくれてたんだ。

え？　なんで、毎日餌をあげられなかったのかだった？　それは二人は忙しかったからさ。学校に入ると忙しくなるんだ。

え？　勉強とか宿題で忙しくなるのだった？　普通はそうなんだけど、この二人は違うんだな、学校の先生へのいたずらの準備で忙しいんだ。

さて、話を戻して、パリカールのはなし。

シオン：「でもさ、毎日檻の中じゃかわいそうだよね。」

リン：「散歩連れてってあげようよ。」

ふたりはいい事を思いついたと思って、アプリコット団長のところに相談にいったんだ。アプリコット団長はサーカス団の団長でフェンリルみたいに凶暴な怖い人なんだ。

団長：「なに、散歩に連れてくなんて、ダメだダメだ。年老いたとはいえこいつはフェンリルだ。おまえらなんて、食いちぎってあつというまに逃げていくに決まっている。」

リン：「そんなことないよ。パリカールは大人しいし、私たちの言うこと良く聞くよ。」

シオン：「アプリコット団長のほうが凶暴だよ。」

団長：「だめなものはだめ。例え言うこと聞いたにせよ、フェンリルなんて街に散歩に連れて行ったら、大騒ぎになる。ただでさえ危ないから処分しろって言われてるのに。」

シオン：「でも、かわいそうだよ。一日中檻の中だよ。団長だって一日中檻の中だったらいやでしょ。」

団長：「それはそうだが、こればかりはダメだ。」

リン：「どうしても?」

団長：「うん、どうしてもだ。ん、そうだな、この嚴重な檻から

見つからずに出せたら許そう。でも、この魔法の檻から出したとしても魔法の監視がいたるところにある。このサーカス団から見つからずに連れ出すことなんて不可能だがな。ははは。」

団員：「アプリコット団長、市長が呼びです。」

団長：「わかった、今行く。おまえ達もくだらないことを考えていないでサーカスでも見ていってくれ。そのほうがよっぽどいい。」

そういつて団長は去っていった。

リン：「見つからずに連れ出しちゃえばいいのね。」

シオン：「でも、市長がアプリコット団長に何のようだろう。そっちも気になる。」

そういつて二人はアプリコット団長のうしろをこっそりついていった。

市長：「実はな、このサーカス団の場所なんだが、別の目的で急遽使わざるを得なくなったんだ。この前、川が氾濫したことがあっただろう。それで、家を流された人の仮の家をつくらないといけない。だけど、場所がなくてね。いろいろ考えたがここしかないんだ。それで、3年間だけ貸してくれないだろうか？」

団長：「ええ、それで、私たちサーカス団はどうするんですか？」

市長：「実は隣町が是非きてくれないかというんだ。そちらでサーカスをやってくれないか？」

団長：「私はこの街が大好きです。それを隣町に行けと言つのはひどいです。」

市長：「ああ、君達がこの街を好きなのは良く知っている。だけど、現に家を失い困っている人もいるんだ。それに、3年間だけだ。なんとかしてくれないだろうか。」

団長：「うん、わかりました。」

市長：「ありがとう。協力してくれてありがとう。」

市長はアプリコット団長の両手を握った。

市長：「それで、隣町からの要望なんだが、あの、フェンリルのことだが、その、言いにくいのだが、危険だということであつてこないで欲しいといわれている。つまり、処分してくれてことだ。」

団長：「ちょっと待ってください。殺すつてことですか。」

市長：「まあ、はっきりとは言わないがな」

団長：「・・・考えさせてください」

市長が帰って行った。アプリコット団長はパリカールの前に座っている。目には涙を浮かべていた。シオンとリンは物陰から隠れてそつと見ていた。

シオン：「どうしよう」

リン：「どうしよう」

シオン：「とりあえず、パリカール連れ出しちゃえ。明日、サーカス団お休みだからその隙を狙って引っ張り出しちゃえ。」

そういつて、次の日、シオンとリンはサーカス団の場所にもぐりこんだ。

アプリコット団長は少し無謀な約束をしていたのだった。まさか、この嚴重な魔法の鍵で閉められた檻を明け、魔法のカメラで見張られたこの場所から子供二人で連れ出せるとは思っても見なかったからだ。

しかし、相手が悪かった。二人はやすやすと魔法をかけて、魔法の鍵を解除して、魔法のカメラになにも写らないようにして連れ出してしまった。

シオン：「簡単よね。」

リン：「うん、私たちのことなめてるよね。」

この二人の魔法は大人顔負けだ。こんなこと朝飯前でできてしまう。

そうやって、二人はパリカールの背中に乗って街じゅうあちこちを散歩した。でも、夕方になってきてしまった。もう帰らないと。

二人と一匹はとぼとぼとサーカス団に帰ろうとしていた。そのときだった。

団長：「どろぼう。だれか、そいつを捕まえてくれ。」

アプリコット団長が大声で叫んでる。その前には、男が二人逃げている。サーカス団の大切なものを盗んでいったみたいだ。

シオン：「パリカール、ゴー」

パリカールがふたりを乗せたまま、猛ダッシュをする。そして泥棒一人を突き飛ばし、もう一人を口から出した炎に巻く。

「いてて」「あちち」

どろぼうは後から追っかけてきた団長や団員達に取り押さえられた。

団長：「ありがとう。っておまえたちか！勝手にパリカールを持ち出して！」

リン：「見つからなければ、いいっていったじゃない。」

団長：「うう。」

シオン：「ほら、パリカール役に立つでしょ。番犬代わりにもなるんだから殺さないで置いてあげなよ。それに、こんなに連れまわしても悪さしないでしょ。いい子なんだよ。」

団長：「でもな、隣町には連れて行けないんだ。それは約束なんだ。」

シオン：「大人って、ずるい！さんざん人気者のときはちやほや

して可愛がっていたのに、用がなくなるとポイって捨てちゃうなんて可哀想。しかも殺すなんてひどすぎる。」

団長：「しかたがないんだ。私だって殺したくない。でも、大人の約束で仕方がないんだ。」

リン：「アプリコット団長って最低！でも、後1日まったください。私たちがいい方法考えます。」

そういつて二人はぶんぶん怒りながら帰って行った。

次の日、二人はしょんぼりしてサーカス団に現われた。

団長：「ほう、昨日はあれだけ威勢が良かったのに今日はどうした。まあ、これでわかっただろう。パリカールは可哀想かもしれないが、山に返すわけにも行かない。普通の家で飼えるようなものでもない。処分するしかないんだ。」

そのとき二人の後ろから、頭が薄くなつた男の人が現われた。

男の人：「パリカールはうちの魔法学校で預かります。きのう、二人から話を聞きました。こんなにみんなの助けになつているのに処分するなんて教育上好ましくありません。ええ、学校で預かります。」

男の人は校長先生だった。

シオン：「へ、へ。考えれば方法なんてあるもんね。」

リン：「パリカールはもらっていきますね。」

二人は勝ち誇ったように言った。それに対して、アプリコット団長は怒るかと思っただが、目に涙を浮かべこういった。

団長：「ありがとう。ありがとう」

そうやって、パリカールは魔法学校に来ることになった。校庭の片隅の小屋に番犬代わりに余生を送っている。そして、時々、シオンとリンに連れられて散歩する。

リン：「やばい、もういたずら見つかった。追っかけてくる。」

シオン：「急いで逃げるわよ。早く乗って。パリカールGO」

そうやって、二人はパリカールの背中に乗って街じゅうを駆けずり回っている。

おしまい

.....

ポッチ：「うん、いい感じ。前作の『星の子しおん』よりも明るくなった。」

のっば：「復帰第1作としては結構出来てるだろう。」

ポッチ：「うん、とつても。ところで、これ、かのんには見せた？」
のっぽ：「いや。話を聞かせてあげようと思ってお見舞いにいった
んだけどさ、会った瞬間『出てけ』って。『また、私を笑いに来
たの？』だってさ。は、もうやんなっちゃうよ、最初に聞かせて
あげようとしたのに。」

ポッチ：「のっぽさんでもだめだったんだ。なんで、ああ、意固地
なんだろう。」

のっぽ：「そりゃ、僕が病気治ったからさ。かのんは病気かそう
でないかで人に対する態度決めるからね。『健康な人や治った人に
治らない病気の苦しみがわかるか』ってね。特に、ポッチは入院し
ていたわけでないから、なおさらつらくあたるだろう。」

ポッチ：「うん。」

のっぽ：「だったら、ほっておけばいいのに。あんな子。毎回来る
たんびに会いに来て、怒られて帰ってるんですよ。」

ポッチ：「でも、気になるのよ。のっぽさんもそうでしょう。」

のっぽ：「まあね。なんか気になるんだ。やっぱりほって置けない
んだ。」

ポッチ：「でしょ。」

のっぽ：「そういえば、かのん転院するらしい。」

ポッチ：「え？」

のっば：「このまんまこの病院にいても治らないなら、長野に新しい治療方法を試している病院があるからそっちに行ってみるって。」

ポッチ：「そう。でも、この病院よりいいところなんて無いのに。」

のっば：「しょうがないよ。この病院は大きすぎるから新しい治療法にするのはとまどうらしい。」

ポッチ：「寂しくなるね。例え邪険にされてても。」

のっば：「だね。」

のっば：「そうそう、それと話は変わるけど、もし、向こうの世界と接触する機会があっても、病気の人がこっちではどうなっているか話してはいけないってプロジェクトが決めたって。」

ポッチ：「どうして?」

のっば：「かのん見ればわかるじゃん。もし、かのんだったら、向こうのかのんが死んでいたらショックだし、健康だったらねたむだろう。だから秘密なんだって。」

ポッチ：「うん、しょうがないね。でも、なんか納得いかない」

のっば：「これから番井先生の診察受けるんだろう。そのときに聞いてみたら?」

ポッチ：「そうだね。そうする。」

- - - - -

番井 : 「他に何か気になるところはある?」

ポッチ : 「先生、かのんが転院するって本当ですか?」

番井 : 「ああ、残念だけどね。当病院では症状の悪化を抑えるのが精一杯。このままだと一生病院だからね。だから、新しい治療方法を試してみるそうよ。」

ポッチ : 「...あの、心臓移植とかだめなんですか?」

番井 : 「相変わらず、神崎さんは医療系の話にも詳しいわね。心臓移植も考えたけどなかなか日本では難しいわ。臓器移植法が改正されて15歳以下も心臓移植できるようになればいいけど。昔は海外での移植もあったけど、今は自粛や禁止の方向で世界が動いているのよね。」

ポッチ : 「そうなんですか。」

番井 : 「それにかのんは体質的に大量の免疫抑制剤を与えることが出来ないのよ。だから、もし、ひどい拒絶反応がでたら治せないわ。そのため、内科療法に頼ったほうがいい。」

ポッチ : 「やっぱり、ちゃんと考えてますよね。」

番井 : 「そりゃそうよ、医者だもん。他には?」

ポッチ : 「えっと、向こうで病気の子がこっちではどうなっている

か教えてはならないって話を聞きました。本当ですか。」

番井：「ああ、その話は三条教授とも電話で話してそう決めたわ。やっぱり、シヨックなのよね、向こうの自分が死んでいたりするからね。」

番井先生が和恵ママに目を向ける。和恵ママは顔を伏せて話を続けるのをやんわりと拒んだ。

番井：「特に子供はだめ。将来が見えてしまう。なので、鈴木隆、斉藤かのん、丸山美鈴の3人のこちらでの消息は決して言っちゃいけない。秘密にしておくのよ。」

ポツチ：「丸山美鈴もですか？」

番井：「そう。ただし、向こうが気付いてしまうのはしょうがない。こちらからは話さないようにするのよ。わかった？神崎さん。」

ポツチ：「はい。」

番井：「和恵さん、詩音ちゃんにも言っておいてください。申し訳ないけど、彼女が一番いうことときかなそう。」

和恵：「すみません、ちゃんと言い聞かせておきます。」

番井：「じゃあ、また、3カ月後に。」

そういつて、私と和恵ママが診察室をでようとした。

番井：「神崎さん。つらいとは思っけど絶対内緒よ。」

ポツチ：「はい。」

番井先生は後ろから私に再度念を押した。

診察室を出て和恵ママが私に言う。

和恵：「時期がきたらちゃんと話せると思います。それまではつらいけど頑張りましょう。」

そう言って私を抱きしめてくれた。和恵ママが本当のママだったらどんなに良かったのか。そう思いながら、和恵ママの期待を裏切るまいと私は心に誓った。

だけど、詩音はちゃんと守るだろうか。詩音はどこまで考えているか本当にわからない。このプロジェクトの決定を知らないくせに、こうなることを予想して既に対策を打っている。完全に先読みしている。

「パリカール」

やっと、詩音がロバのサクラに勝手に名前をつけた意味がわかった。

つづく

3・10のっぼさん(後書き)

詩音：「私たちがいいことしたよね。」

ポツチ：「うん、動物の命助けたし、こうやって物語にすることで院内学級の小さな子どもたちにも喜んでもらえる。」

詩音：「実話をベースにしたところがいいよね。」

ポツチ：「うん。『学校に団長みたいな悪い先生がいて、大人の事情ってやつで平気でひどいことをするんだけど、私たちがそれに立ち向かってんだよ』って小さな子どもたちに希望を与えるもんね。」

詩音：「うんうん、本当にいい話でした。さて次回の『トリックエンジェル』第31話は？」

ポツチ：「『噂話』です」

詩音：「季節外れの怪談だよ」

ポツチ：「お楽しみに」

3 - 1 1 ・ 噂話 (前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

学校で昼休みにポッチの周りに人が集まっている。ポッチが物語を読み始めようとしている。

音楽室

もう30年以上の前の話である。この学校ができる前はここは小さな山だった。そのころ日本は高度成長期といって急に人々の暮らしが豊かになっていった時代だったんだ。人々は地方から東京近郊に集まり始めて人口がどんどん増えていった。

この街もやっぱり、人が増えて行き、今まであった小学校ではかえきれず、いくつも新しい小学校を作ることになった。この小学校はそんな小学校の一つ。

学校を作るのには山を切り崩して建物が建てられるように平べったくしないとならない。そこで、大勢の作業員が集められて工事を始めるんだ。

その中にとつてもピアノ好きな若い作業員がいた。彼は音楽家を目指していたんだ。そして、オーストリアに留学することを夢見ていた。だけど、お金がなかった。今みたいに豊かな時代ではなく、みんなが貧乏していた時代だったんだ。だから、彼は作業員をしながら留学のためのお金をためていたんだ。

彼は早くお金が貯まるよう一生懸命働いた。休みの日も仕事ができるよう親方に頼み一生懸命働いた。

ある日曜日のことだったんだ。その日は朝から大雨だった。普通だったらそんな日はお休みなんだけど、学校を来年の4月から開くためにはこれ以上遅れられない状況で、工事を無理やり行つてたんだ。

多くの作業員はぶつぶつ文句をいう中、そのピアノ好きの作業員は黙々と働いた。夕方になって暗くなり始めたとき、みんなが作業を終えて飯場にもどったとき、後片付けがあるからといってその作業員は工事現場に残つてた。

その時だった。山が急に崩れてきた。大雨で土砂が緩んでたんだ。そして、その作業員はあつという間に土砂に飲み込まれてしまったんだ。

みんな大慌てで助け出そうとした。でも、大雨でなかなか助けられない。やっとのことで作業員を土砂から引つ張り出したときは次の日のことでもうそのときは息がなかった。そして、その遺体には右手のひじから先がなかった。一生懸命探しても見つからなかった。

その土砂崩れがあつたのは、丁度、この学校の音楽室のあたりなんだ。そして、雨の日の夜になると誰もいないはずの音楽室から、ピアノの音が聞こえるようになったんだ。

不思議に思つた用務員さんが誰もいない真つ暗な音楽室を開けると、血のついた右手がピアノを……

詩音：「やめて〜！」

はあはあしながら詩音が叫ぶ。机に突っ伏し両手で耳をふさいでいる。

ポッチ：「なんでも。これからがいいところなのに。」

周りのみんなが「うんうん」とうなずく。

詩音：「季節はずれもいいところじゃない。しかも、わざわざノッポさんの物語でやらなくても良いでしょ。フェンリルとかタグオブウォーとか他にも話があるじゃない。なんでわざわざ怪談なのよ。」

ポッチ：「ええ、せつかくの新作なのに。嫌がるノッポさんに無理やり書かせたんだからありがたく聞きなさいよ。『その血のついた腕は用務員を見つけると……』」

詩音：「だから止めてっていつてるでしょう!」

ポッチ：「もしかして、詩音怖いの?」

詩音：「こ、怖くなんてないもん。ただ、そんな非科学的な話をするなんておかしいって言ってるのよ」

ポッチ：「あ、そ。じゃあ、そのまま耳をふさいでいて。じゃあ、続きを」

詩音：「キヤー!」

詩音はがくがく震えている。

ひかる：「ポッチ、それくらいにしてあげなよ。詩音おびえてるよ。」

ゴンタ：「あはは、詩音に弱点があつたなんて傑作だ。今度、いちゃんからその手の本一杯借りてきて話してやるよ。」

ゴンタが鬼の首を取ったように喜ぶ。

詩音：「そんなことしてみなさい。目と鼻の区別がなくなるまでぼくばこにしてあげるわ。」

ゴンタ：「やれるものならやってみな。あはは。」

詩音：「く〜」

ひかる：「ゴンタもいかげんにしなさい。でも、そういえば、この頃噂で日曜日の夜になると音楽室でピアノの音が聞こえるって話聞いたことある。」

女子A：「わたしも聞いたことある。」

ひかる：「やっぱり、さっきの話実話なのかな？」

詩音：「ひかるちゃんまで勘弁してよ〜。」

.....

響子：「あはは。詩音にも苦手なものがあつたんだ。」

放課後、ポッチが先生に話をして腹を抱えて笑う。

詩音：「だって、怖いじゃない。誰もいない音楽室で右手が一斉

に向つて来て、助けを呼ぼうにも声が出なくなつて。ひひ」

ポツチ：「さつきよりも話が膨らんでる。」

響子：「なるほどね。自分で想像して妄想を膨らめますタイプだね。それじゃ怖いわね。大丈夫よ。そんなの噂話。本当のことじゃないから。」

詩音：「そつだよね。そつだよね。」

響子：「でも、この川上先生も言つてたわ。やっぱり、日曜の夜になると聞こえたつて。」

詩音：「きゃく。響子先生まで。勘弁してよ」

職員会議の中でその話が話題に出た。

校長：「えく。このごろ児童の間で、音楽室の怪談の話が広がっているようです。当然ですが、根も葉もない噂です。調べてみましたがもちろん、何もありませんでした。」

校長：「しかし、先生の中にもその噂を信じている人がいるようです。先生方が動揺しては児童たちがますます落ち着かなくなります。先生方も一緒になつて騒ぐのでなく、そんなことはないと言つて強く噂を否定するようお願いいたします。」

川上：「あのく。例の2年生のいたずら二人組のいたずらじゃな

いんですか？」

校長：「ですから、調べた結果何もありませんでした。川上先生、証拠も無いのになんでもあの二人のせいにするのはいかなものでしょうか？確かにあの二人の奇想天外ないたずらのせいにすれば、この世の全ての怪奇現象は片付きます。でも、それは根も葉もない噂を流すのと一緒です。」

響子：「そうです。特に楠木さんは怪談がとても苦手です。いたずらどころの騒ぎではないです。今回ばかりはあの二人は関係ないでしょう。」

校長：「はい、いいですね。調べた結果何にもなかったんです。これ以上噂に尾ひれをつけて広めないようくれぐれもお願いします。」

職員会議ではそういう話になったが、噂は陰でこそこそとささやかれ続けた。

つづく

3 - 11 噂話（後書き）

詩音：「なんなのよ今回の話、物語の進行と関係ない怪談話なんて。」

ポツチ：「たまにはいいじゃない。」

詩音：「たまでもよくない。」

ポツチ：「やっぱり気になるのね。後で続き読んであげるね。」

詩音：「ひ〜」

ポツチ：「さて、次回のトリックエンジェルは？」

詩音：「『取材』です。もう、怪談話はおしまい。」

ポツチ：「そんなことないわよ。ちゃんとひきずるわよ。」

詩音：「勘弁して〜」

3 - 1 2 ・取材（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 1 2 ・取材

ある日、私は校長室に呼ばれた。

響子　：「え？取材ですか？」

校長　：「ええ、テレビ局が取材したいと言ってきています。それで、予備取材に泉先生も出席していただけませんか？」

実はうちの学校に取材が来るのは珍しくない。ただし、そのほとんどが科学雑誌や科学系の新聞で取材対象は詩音である。

響子　：「取材対応なら私でなく前山先生が適任なんでは？」

詩音の取材に同席するのはたいがい物理の得意な副担任の前山先生だ。私では理論物理学がわからないからだ。

「稀代の天才少女」

あのいたずら娘のもう一つの側面である。科学雑誌の取材はいわゆるゴシップ的に「天才少女現る」的な内容でなく、非常にまじめに詩音に取材に来る。つまり、大人同様の扱いで専門家への取材としてきている。

ただ、その内容が難しいのと三条博士の影に隠れているため、一般には目立たないのだ。

校長　：「いや、今回はいつもの物理の取材でなく、じつはロバの「サクラ」の取材希望なんです。」

響子 : 「はい？」

校長 : 「希薄になった動物とのかかわり方がテーマのようです。昔あった飼っていた豚を卒業と同時に市場に出す話みたいな感じでしょうか。」

響子 : 「はあ。」

だけど私はサクラを本当に桜鍋にするつもりはないのだけど。

数日後、テレビ局の取材が来た。といっても今日は予備取材なので、カメラとかはない。どんな取材をしたいか説明にきてくれる日だった。

記者 : 「実は動物とのふれあいによるアニマルセラピーについてが取材テーマなんです。」

校長 : 「ふむふむ。ストレスの多い現代社会において小学生も家庭などの影響でストレスを受ける子がいますからね。」

記者 : 「ええ、それで、こちらの小学校に日本では珍しいロバがいると聞いたもので。」

確かに日本でロバを飼っていること自体がめずらしい。200頭くらいしかいないはずだ。そして、小学校で飼っているところなんてうちの小学校くらいかも知れない。

響子 : 「でも、うちの小学校でロバ飼ってるなんて良く知ってますね。」

記者：「テレビ局で詩音ちゃんに聞いたんです。『週刊こども科学』の撮影のとき話してたんです。」

一気に力が抜けた。「週刊こども科学」は子供向けの教育番組で科学の面白さをわかりやすく教えている番組だ。もともと、平日の昼間に放送されており、視聴率のほうはお世辞にも高いといえず、民間放送局だったらすぐなくなってしまう番組だ。

その番組で詩音は準レギュラーとしてひと月かふた月に一度くらい科学の解説をしている。天使のように可愛い天才少女にはうつつけだ。その、悪魔のような性格はテレビには映らない。

響子：「でも、別に教育カリキュラムとして動物のふれあいを行っているわけではないですよ。」

いつもは小屋に飼われている。ときどき先生か冬子の立会いのもと散歩に連れて行ってるが。

記者：「その自然さがいいんですよ。なんでも、そうやって事故の後遺症で困っている人のリハビリも行ってるとか。」

冬子のことか。まあ、そういう言いかたもあるかもしれない。冬子はリハビリを兼ねてこの学校にボランティアに時々来ている。

結局私たちは取材を引き受けた。別に準備とかする必要もないし、ありのままの姿をとってもらえばいい。私はそう気楽に考えていた。

しかし、次の日、職員室は大騒ぎだった。

先生A：「テレビの取材ですって？ 当日何着てくればいいのかしら」

先生B：「放送日はいつですか？ 親戚中に連絡しなきゃ。」

あ〜。子供じゃないんだからさ。もう少し落ち着こうよ。

そのとき校長がみんなに向って話し始めた。やはり、こういうときは校長だ。しっかり気を引き締めてもらわないと困るくらいのこととは言ってくれるだろう。

校長：「先生方も話を聞いているとおり、テレビ局の取材が来ます。みなさん、わが校をアピールする絶好のチャンスです。くれぐれも粗相のないように。それと、取材の前日には構内一斉大掃除を実施します。きれいな校舎でのびのびと児童が育つところを見てもらいましょう。私のほうからは県と市の教育委員会に連絡して取材当日は来賓の方を呼び一緒にご案内したいとかんがえています。」

あちゃ〜。校長が舞い上がっている。普段どおりの取材をしたいって言っているのに。

教室に行き、取材の話をする。想像はしていたが大騒ぎになった。

ゴンタ：「せんせ〜い。だれかインタビューとか受けるんですか？」

響子：「うん、一応、サクラはこのクラスで飼っていることになっているからね。だれか、クラス代表でインタビューに受けてもらうかもね。」

サツと何人かが手を上げる。そして、われ先に主張し始める。

ポッチ：「当然、飼育係の私が取材に応じます。もともと幼稚園からサクラを持って来ようとしたのは私です。」

ひかる：「いえ、ここはクラス委員の私がみんなを代表してテレビに映ります！」

詩音：「やっぱり、ここはもうひとりの飼育係でもあり、テレビ慣れしている私に対応します。」

ひかる：「詩音ちゃんはもうテレビでてるんだからいいでしょ！」

詩音：「だって、メジャーデビューしたいもん。視聴率のない昼間の教育番組でたってだれも見えてないもん。」

ポッチ：「ひかるちゃんはきつと当日カチコチになって話せません。詩音はいたずらするに決まっています。やっぱりここは人前で話すのが得意な私が適任です。」

詩音：「ポッチ、人のこと言えないでしょう！」

響子：「うるさ〜い。いいかげんにしなさい。まだ、インタビューがあるかどうかも決まっていな〜いし、インタビュー受けてもテレビに映るかどうかもわかんないの。もう少し詳しい話が決まったらまたみんなに話します。以上。はい、授業始めるわよ。」

私はその話題を早々に切り上げて授業に入った。

結局、インタビューを受けるのはクラス代表としてクラス委員のひかるちゃんにやってもらうことにした。それと、サクラの世話を

しているシーンで飼育係の詩音とポツチにやってもらうことにした。クラスの子は全員でサクラと一緒に手を振るシーンを最後に流すことで納得してもらった。

- - - - -

数日後の日曜日。私は和恵に呼ばれて楠木家で夕食をごちそうになった。本当は児童のところにお呼ばれするのはよくないが、もともと和恵とは友達でしょうちゅう呼ばれているし、校長先生の許可を和恵が取ってくれて行くことにした。

和恵：「学校の先生だからっていつも呼んでるのに呼ばないのは変です。校長先生も快くOKしていただけました。」

そう、和恵はニコニコしながら言った。

和恵：「ところで響子ちゃん、学校にテレビ局から取材が来るんですって?」

ああ、今日の目的はそれか。やっぱり和恵でも気になるのか。

響子：「別にテレビ局の取材なんてめずらしくないでしょう。和恵だってステージママとして詩音連れてってるじゃない。」

和恵：「ステージママじゃないです。詩音はどこかの芸能プロダクションに入って子役やっているわけではないです。」

響子：「そうね。そうだったわね。三条博士の弟子ってことで教育テレビにでてるんだものね。」

子役として認められているのでなく、ノーベル物理学賞受賞者と共同執筆した女の子として認められているに過ぎない。

詩音：「だから、チャンスなの今回は。これでテレビ局に人に認められたり、芸能プロダクションの目に止まったりすれば芸能界デビューなの。」

和恵：「詩音ちゃん可愛いから、すごく売れると思います。みんなの人気者になると思います。」

あきら：「でも、芸能プロダクションもいかがわしいのが中にはあるからな。パパとしては心配だな。」

詩音：「パパは私が有名人になるのは反対なの？ 有名人になればこの家だっておつも大きくなるよ。1階にリビング一間、2階に寝室と子供部屋しかないこの家、もっと大きくできるよ。パパの書斎だってできるかも知れない。」

あきら：「書斎かあ。魅力的だな。」

ああ、この一家やっぱりどこか抜けている。既にテレビに出てるんだから、もし、スター性があるのならとつくに目についている。だけど、どこからもスカウトされないということは。でも、そこは大人気ないから指摘するのは止めておこう。

そのうちポッチも現われた。両親が仕事なので夕飯を食べに来たのだ。この家ではポッチがそうやって夕飯を食べに来るのは当たり前のことだった。

ポツチ：「あ、響子先生いらっしやい。狭い家ですが遠慮なさらずどうぞ。」

詩音：「あの〜ポツチ？」

ポツチ：「いまさら、何恥ずかしがってるのよ。」

詩音：「そうじゃなくて、一応私のうちなだけど。」

あきら：「そんなこと気にするな。ポツチは家族みたいなものだ。」

和恵：「そうそう、遠慮なく言ってもらっても構わないです。」

ふたりはそう笑って答える。

本当にポツチはこの家の家族となっている。ポツチの家族は両親が不在のときが多く、そう言う意味でポツチは寂しい想いをしている。それを楠木家がカバーしている。

そうやって、私達は和恵のダンスサークルの話や、ポツチのいたずらがあまりにひどくて町外れの病院から出入り禁止を受けている話でもり上がっていった。

響子：「ポツチ、病院で何やったの？」

ポツチ：「えへへ」

詩音：「ひとつは、順番待ちの整理券30枚抜いちゃったのかね。後から来た人は、『今日は人が多いな。これだと2時間後だな』とかがいって帰っちゃうじゃない。そして、看護師さ

んが順番を呼ぶんだけど、呼んでも呼んでもその番号の人出てこないし、帰っちゃった人もいるから順番大混乱。」

響子：「……」

あきら：「それで、あの病院、整理券からカードで受付する方法に変わったんだ。」

響子：「……」

詩音：「後、張り紙もよくやったらしい。夏の暑い日に据え置き型のクーラーに『故障中』って張り紙して止めちゃったりね。みんな故障中って書かれると納得して、暑い中がまんしてた。」

響子：「……」

詩音：「後、内山さんという看護師さんの背中に『不倫中』と書いていた紙はったりね。」

響子：「内山って？　つかさ?!」

和恵：「はい、つかささん。張り紙見つけたときは本当に怒って泣いてました。」

詩音：「とどめはしまへび事件よね。」

響子：「しまへび?」

詩音：「診療室に上着と一緒にしまへび持ち込んで、着る物を置いておくかごに入れたの。上に上着かけて見えないようにしてね。」

そして、上着ごとわざと忘れて帰ったの。」

詩音：「それで、看護師さんが気づいて『忘れ物』と言って、上着を取ったら下からしまへびがにょるにょる。診察室大パニック。」

響子：「うわ〜。」

詩音：「結局、だれもしまへび捕まえないから、ポッチがまた呼び出されて、持って帰らされたの。そのときポッチはしまへびのしっぽをつかんでぶんぶん振り回しながら病院内を練り歩いたのよ。病院中大パニック。」

ポッチ：「だって、袋捨てちゃったんだもん。入れ物ないから噛まれないようにぶんぶん振り回して目を回させるしかないでしょ。」

響子：「もし、噛まれたらどうするつもりだったの!？」

ポッチ：「大丈夫。しまへびは毒ないから。それに噛まれても病院だからすぐ手当してもらえる。」

響子：「はあ、それは出入り禁止になるわよ〜。」

私は頭を抱えた。

響子：「なんで、そんなことしたの。」

ポッチ：「だって、からだどこも悪くないのに、時々検査するからって痛い注射するんだもん。だから、病院にいけなくなればいいと思った。」

響子：「あはは。なるほどね。それで解決した？」

ポツチ：「ううん、東京の別の病院で検査することになって代わらなかつた。」

響子：「あはは。残念ね。その病院ではいたずらしなの？」

ポツチ：「うん、その病院にお友達が通ってるから。そのこと会えなくなるのは嫌だからね。」

響子：「そうね。いたずらは止めておきなさいね。」

そんな話をしているとき、私の携帯がなった。校長先生からだつた。

響子：「もしもし、泉です。」

校長：「ああ、泉先生、夜で悪いんだが至急学校に来てくれ。音楽室に児童二人が忍び込んで警備員につかまった。先生のところの児童だ。」

響子：「もしかして、詩音とポツチですか？」

詩音：「私達ここにいますよ。」

詩音とポツチが私をにらむ。

響子：「ああ、ごめんなさい。つい。」

校長：「ゴンタとそのおにいちゃんだ。なんでも幽霊退治をするつもりだったらしい。」

- - - - -

響子：「全く、あんた達何やってるの？」

ゴンタ：「詩音が怖がつてかわいそうだから、お化けなんて出ないつて証明しようとしたんだ。だけど、本当にでたんだ。でも、音楽室に入ったら、電気が消えて突然ピアノ以外の音が聞こえなくなつてお兄ちゃんの声も自分の声も聞こえなくなつて、後ろの戸がしまつて、ピアノを右手のひじの先だけで弾いていて、俺達に気付くと『みたな』ていつてこつちを向くんだ。」

兄：「俺達、慌てて、戸をあけて逃げたんだ。そうしたら警備員さんに見つかつて。」

校長：「調べてみましたが、何もありませんでした。右手もお化けもいませんでした。この子達の想像の産物でしょう。」

ゴンタ：「本当なんだつて。信じてくれよ。」

響子：「はいはい。信じるから今日は帰ろうね。それと、この話は詩音たちにはしちやだめよ。怖がるからね。後は大人に任せて。ちゃんと調べておくから。」

ゴンタ：「うん、わかった。」

ゴンタのお母さんに連絡して、ひきとっていただき、その日の騒ぎ

はおしまいとなった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日

校長：「昨日ですが、児童が例の音楽室による入り込もうとして捕まえました。例の噂を信じているようです。」

校長：「しかし、何もありませんでした。困った話です。今はテレビ局の取材の準備等ではたばたしています。それにつられて児童たちも浮ついているようです。」

校長：「大事な時期ですからそんな下らない噂を広めないよう児童たちに指導願います。また、教育委員会のお偉方に話が伝わったら大変なことになってしまいます。くれぐれも宜しくお願いします。」

川上：「やつぱり、あのいたずら娘二人組みの仕業じゃないんですか？」

響子：「いいえ、違います。そのとき私は二人と一緒にいました。アリバイがあります。」

校長：「ですから、この前も言ったように証拠も無いのにあの二人のせいにはいけないでしょう。それに、何も無かつたんです。」

川上：「すいません・・・。」

校長：「それと、休日は音楽室の下の階段にロープをはり、そこから先は出入り禁止とします。児童はもちろん先生達も近づかないようお願いいたします。」

先生達：「はい。」

先生達はみな、取材のことで頭が一杯だった。音楽室のうわさ話は立ち入り禁止にしたことで自然と話がされなくなっていた。

つづく

3 - 1 2 ・取材（後書き）

詩音：「よい子のみなさん、しまへびを捕まえていたずらにつかっ
つてはいけませんよ。毒はないけど結構凶暴なんだから。」

ポツチ：「どつちかっていうとニシキヘビの方が大人しいよね。」

詩音：「ちょ、ちよつと。もしかしてニシキヘビも飼ってるの？
絞め殺されちゃうわよ。」

ポツチ：「内緒。教えない。えへへへ。」

詩音：「よい子のみなさん、ニシキヘビを買うときは県知事への
届け出が必要です。内緒で飼ったりしたらいけませんよ。」

ポツチ：「ちゃんと、届けてるわよ。人聞きの悪いこと言わないで
よ。」

詩音：「！！！」

ポツチ：「さて、次回のトリックエンジェル第3話話は？」

詩音：「『常温過冷却水』です。約束を守らない悪い大人に正義
の鉄槌を下すお話です。」

ポツチ：「まあ、そういう言い方もできるわね。」

詩音：「お楽しみに〜」

3 - 1 3 ・常温過冷却水（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

3 - 13 ・常温過冷却水

ポツチ：「詩音、この褐色の広口瓶の中身はなんなの？」

詩音：「常温過冷却水。例によってくるみちゃんを送ってきたの。」

ポツチ：「過冷却水？」

詩音：「うん、このお水、32度になると液体から固体になるの。だけど、ゆっくり冷やすと20度くらいでも液体のまま。」

そういつて、詩音はゆっくりと液体をコップに移す。

詩音：「こんな感じで、液体のままなんだけど。」

詩音がコップをマドラーでかき混ぜる。そうすると一気に液体だった水がまるで氷のように固まる。

ポツチ：「うわゝ。面白〜い」

詩音：「でしょゝ。衝撃とか大きな音を立てると一気に固まるの。溶かすには32度以上の温度が必要。たとえば、手で温めたり、息を吹きかけて溶かすの。」

ポツチ：「でもさゝ、これ、なんの役に立つの？」

詩音：「もともと、カイロに使うものなの。物質って固体化する時熱を放出するの。ほら、雪の日はあったかいけど、雪が解けると

寒く感じるのと一緒。」

ポッチ：「ということは、夏に使うカイロ？ そんなの欲しがる人なんていないじゃない。」

詩音：「そう。だから、くるみちゃんが私たちに送ってきたの。しかも、30分たつと機能しなくなつてとけちゃうといういつものパターン。」

ポッチ：「用途を考えてねつてことか。ほんとくるみさん面白いよね。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

7月に入り七夕をすぎたあたりに撮影当日がやってきた。

取材シーンはクラス全員が映る冒頭のシーン以外にクラス代表のインタビューシーンとパリカールを世話しているシーンの2つとのことだった。結局すつたもんだした拳句、インタビューのほうは、クラス代表ということでクラス委員のひかるということになった。そして、パリカールを世話するシーンは飼育委員の詩音とポッチの二人に決まった。

詩音：「インタビューが少ないのが残念。でも、これでテレビに映るから芸能事務所の人が『なんて可愛いだろっ。この娘は掘り出し物だ』つて言つてすぐスカウトに来るよね。」

ポッチ：「うん、そうなるといいね。希望をもつのは自由だよね。」

ポッチがあきれながら適当に応える。

響子：「詩音ちゃん、スカウト来るといいね。」

担任の響子もポッチに合わせて適当なことを言う。

そのうち、テレビ局のクルーが来て響子と挨拶を交わした。そして、響子を見てテレビ局のクルーが変更を申し入れた。

クルー：「担任の先生の絵が欲しいですね。先生が入るとテレビ栄えがしますね。」

クルーが鼻の下を伸ばしながらそう言う。

クルー：「ロバの持ち主でもいらっしやるので、ロバと二人で写るシーンを児童二人でなく、先生でお願いします。」

そう強引に変更してしまった。仕方無しに、それを詩音たちに説明する。

詩音：「え〜。ひど〜い。テレビに映るってパパやママに言っちやっただよ〜。それを急に変更だなんて。」

ポッチ：「私もです。ショックです。」

響子：「ごめんね〜。テレビ局の人の指示なの。ほんとにごめんね〜。」

響子は一応二人に謝る。

響子：「（でも、本当はちょっとテレビに映りたかったのよね。テレビ局の指示じゃしょうがないよね。」

だが、ふたりが響子の顔を怪しそうに見てる。

響子：「じゃあ、先生、打ち合わせがあるから。」

そう言つて響子は慌てて逃げ出した。

詩音：「ああ、詩音芸能界デビューするはずだったのに。これじゃ、何のためにパリカールを小学校につれてきたかわかんない大人つてずるい！」

ポッチ：「そうだよね。ひどいよね。」

ポッチが適当に同意する。芸能界デビューするためにここまで大掛かりな仕掛けをするなら他に方法があるだろうとあらためてポッチは思った。

詩音：「どうしよう。」

ポッチ：「どうする？」

詩音：「しょうがない、ポッチ。作戦Bいくわよ。」

ポッチ：「そうこなくっちゃ！」

ポッチが今までのやる気のない受け答えから急に元気になる。

詩音：「準備して校長室に行くわよ。」

ポツチ：「お〜！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

詩音：「響子先生、そろそろパリカールと一緒にシーン取るって、後ろが詰まってるから早めにお願ひしますだって。」

響子：「はい、じゃあ、行くわね。」

響子は小屋のほうに向おうとする。

ポツチ：「先生、スーツ姿でパリカールの世話をするシーンを取る気?! ジャージに着替えないと!」

そうだった。この格好じゃ明らかに不自然だ。今日はテレビ局が来るというので暑い中スーツで来ているのだった。響子はそれに気付いた。

あわてて職員室に戻りジャージを取り出す。ここで着替えるわけにも行かず更衣室に向う。

更衣室の前に行く

「漏水中。使用禁止」

とかいてあった。女子トイレで着替えようと思いトイレを見たら「清掃中立ち入りを遠慮ください」と書いてあった。

時間がない。響子は、水浸しになった更衣室に入った。

中に入ってみると、床一面がぬれているが、これくらいなら着替えられなくもない。

しょうがないので着替えようとしたとき、更衣室の外から声が聞こえる。

詩音：「先生、早くして〜、みんな待ってる〜。」

わかってるわよ。響子はそう思い、つい聞こえるようにと大声で応えた。

響子：「わかってるわよ。せかさないで!」

ポツチ：「だめー!」そこで大声出さないで!」

響子：「え?」

そのときだった。

ピキーン。

床やドアのところに一面にぬれていた水が凍りついた。文字通り、液体から固体化してしまった。

そして、響子の足に絡み付いてしまい動けなくなってしまった。

響子：「あんた達、何やったの!?!」

詩音：「常温過冷却水が漏れてるの。」

響子：「何よそれ！」

詩音：「ほら、カイロとかで叩くと固形化して熱を出すやつと同じ原理。急に振動とか与えると固まっちゃうの。大きな声だしたからその衝撃で固まったの。」

響子：「なんで、そんなもの置いてあるのよ！」

ポッチ：「校長先生の許可を取っています。棚の上を見てください。」

そこには「過冷却水タンク。学校長許可済み」と書いてあった。

響子：「どうでも言いから早く何とかしなさいよ。」

詩音：「ええ、使用禁止って書いてあるところに入った先生が悪いんだよ。それを私達に何とかしてって言われても。」

ポッチ：「30分たったら効力が失せます。それまで待っててください。」

響子：「それじゃ、インタビューに間に合わないじゃない。」

詩音：「しょうがないです。私達で代役やります。」

響子：「こら〜〜。」

何とか更衣室から出ようとした。しかし、足がまるでロウで固められたように凍り付いて動けない。

響子　：「あんた達。覚えておきなさい！」

そう叫んだがもう返事は無かった。

少しづつ熱で溶かし、足が動けるようになり、固まったドアを手や息であっためながら溶かして行きドアを何とか開いたときはもう30分たっていた。

慌てて、現場に向うと、すでにインタビューは済んでいた。

いたずら二人娘は満足した顔でテレビ局のスタッフと談笑していた。

響子　：「あんたたち〜」

詩音　：「ふえ？ 私達何も悪いことしてないよ。それどころか、緊急事態に見事に代役はたしたんだよ！私達いいことしたよね。」

ポッチ　：「そうそう、響子先生が警告無視したのが悪いんです。」

詩音　：「すぐ人のせいにして怒るのは先生のよくない癖です。」

プチ！　どこかで音がした。

響子　：「いいかげんにしなさい！」

その時だった。

校長　：「泉先生、一緒に校長室まで来てくれませんか？」

- - -
- - -
- - -

校長 : 「見事にやられましたね。」

響子 : 「はあ。」

校長 : 「間違いなく、あの子どもが先生にインタビューさせないためのいたずらです。」

響子 : 「ええ、絶対間違いありません。」

校長 : 「でも、証拠がない。」

響子 : 「ええ。」

校長 : 「更衣室に常温過冷却水を置いたのは文科省の要請です。良くわかりませんが、あの更衣室は重力バランスが崩れていて、その崩壊の方向を知るために常温過冷却水が必要なんだそうです。」

響子 : 「でも、それはいたずらを正当化するための方便です。」

校長 : 「私もそう思います。でも、否定できないのです。」

響子 : 「はあ。」

校長 : 「そして、あの子どもは使用禁止の張り紙をして入室を制限した。私の許可の元にね。そして、泉先生はやむにやまれず中に入った。」

響子：「そのとおりです。あの時は仕方なかったんです。」

校長：「そうやって、あの子達の術中にまんまとはまった。たまにたま偶然が重なっただけ。」

響子：「偶然じゃないです。故意です！」

校長：「そんなことわかってます。でも、証拠がありません。ここで、あの子達を責めたら、保護者と文科省が黙っています。」

響子：「くっ」

校長：「例によってよく考えられたいたずらです。ほんと参りましたね。でもこれも給料のうちと思って大人の対応をお願いしますね。怒らず、穏便にお願いします。」

響子：「く」。わかりました。」

.....

撮影の片づけをしているテレビクルーに詩音は尋ねた。

詩音：「ねえねえ、この番組の放送って総合テレビだよ。ゴールデンタイムなんですよ？」

クルー：「え？」

詩音：「あ、さすがに総合テレビのゴールデンタイムは無いよね。じゃあ、BS？」

クルー：「えつとく、聞いてないの？」

詩音：「？」

そのときだった、詩音は後ろから声をかけられた。

藤村：「詩音ちゃん」

週刊こども科学の藤村ディレクターだった。

藤村：「今日はお疲れ様。なかなかいい絵が取れたよ。」

詩音：「へ？　なんで、藤村さんここにいるの？　藤村さん週刊こども科学のディレクターでしょ？　関係ないじゃない。」

藤村：「何いつてんだよ。関係大有りだろ。」

詩音：「え？」

藤村：「だって、週刊こども科学の撮影じゃん。」

詩音：「ええ？」

藤村：「いつてなかったっけ。今度特番組むって。だから、詩音ちゃんの学校に取材にきてるんじゃない。ちゃんと校長先生には話してるよ。」

詩音：「うそ。うそでしょ。それじゃ今までと同じじゃない。誰も見ない平日の昼間の番組なんてスカウトなんか来ないじゃない！」

ポツチ：「校長先生の茶目っ気と思う。黙ってたのは。」

藤村：「じゃあ、俺たち次があるんでこれで失礼するな。また、収録の時よろしく。」

そついうと藤村はテレビクルーに指示しながら撤収していった。

詩音は、その姿を茫然と見送りながらその場へたり込んで叫んだ。

詩音：「詩音の芸能界デビュー~~~~~。」

つづく

3 - 13 ・常温過冷却水（後書き）

ポツチ：「今回はいたずら出来て面白かったね。」

詩音：「全然、面白くない。ポツチはいたずらが目的だけど、私は違うもん。」

ポツチ：「ところで、スカウト来た？」

詩音：「こないわよ。全然。ああ、こうやって、詩音芸能界デビューできずに埋もれていくんだ。こんな人生なんてやだよだ。」

ポツチ：「大丈夫、これからも、きっとチャンスあるよ。」

詩音：「そうだよね。うん。うん。」

ポツチ：「さて、次回トリックエンジェル34話は」

詩音：「第三章最終話、『音楽室』です。」

ポツチ：「あの音楽室の謎解きです。」

詩音：「お楽しみに〜」

3 - 14 ・音楽室

夏休みが始ったばかりの7月のある日曜日。

私は学校で夜遅くまで仕事をしていた。1学期の間、取材だなんだで出来ずに貯まってしまった仕事が残っている。それを新学期までに何とかしないといけない。

昼間はほかにも部活の指導とかで何人かの先生が残っていたが、今は私一人が職員室に残っている。

響子：「もう、8時半かあ。今日は帰りましょう。」

そう一人でつぶやいたとき、ピアノの音が聞こえたような気がした。

響子：「？」

私は耳を澄ました。確かに聞こえる。例の音楽室の方向だ。

響子：「新世界？」

弾かれている曲はドボルザークの新世界の第4楽章のようだ。相当に上手だ。速いテンポで滑らかに弾かれている。

響子：「例の音楽家の亡霊」

私はあの、右手のひじから先で日曜日の夜になるとピアノを弾くと言つ怪談を思い出した。

響子：「疲れてるんだわ。日曜日まで仕事するのはやっぱりよくないわね。帰ろう。」

そう想い、私は帰り支度をした。

その間も新世界は流れている。本当に上手だ。普通の新世界と何が違うんだろう。

響子：「左手のパートのアレンジがきれいなんだ。」

私は納得した。右手のメロディパートは普通だけど、左手はアレンジアレンジされている。

響子：「左手?!」

あやうく引つかかるところだった。怪談は右手だけのはず。それを両手で弾いている。これは怪談なんかじゃない。

響子：「確かめてみようじゃない。」

私は意を決して音楽室に向った。

音楽室に通じる階段の下について音楽室を見上げる。そこには口
ープが張られ

「関係者以外立ち入り禁止。学校長」

と書かれた張り紙がしてある。

響子：「そういえば、何も無かったって言っているのは校長だけ。」

他の職員が確認したって話を聞いていない。この音楽室には何かがある。それを校長は隠している。」

私は覚悟を決めて階段を上ろうとしたとき、曲が変わった。悲しげな音楽だ。

響子：「これは、ショパンの葬送行進曲。しかも、メロディ部分だけ。」

まるで、近づくようになって言っているようにも聞こえる。しかし、私はそのまま進んだ。そして、音楽室の扉を開く。

ギー。

立て付けの悪い扉が音を立てて開いていく。中は真っ暗だった。

ピアノの音は相変わらず聞こえる。

私は電気のスイッチを探して中に入る。

そのときだった。

ドン。ガチャ。

扉が閉まり、鍵が閉まる音がした。

響子：「ちょっと、誰かいるの？」

私は声を出そうとした。

しかし、自分では声を出しているつもりでも声が出ない。自分の声が聞こえなかった。

響子：「なんなのよ。いいかげんにしなさい。」

だけど、その声は私の耳には届かない。

さっきまでしていた、学校の外の騒音も聞こえない。暗闇と静寂に覆われている。

私は恐怖に包まれ始めた。

目が慣れてくると、ピアノのところにボツと光るものが見える。ひじから先の右手がピアノを弾いている。

私はそれを呆然と見つめていた。

突然、その右手がピアノを弾くのを止めてこちらを向いた。

響子：「ヒッ！」

ゆっくりとこちらに近づいてくる。

響子：「やめてー！」

しかし声にならない。

ピタ、ピタ。

頭の上から、何か冷たい液体が落ちてきた。これは。

響子：「血！」

私は頭の上を見上げた。そこには右手のひじから先の無い男の死体がぶら下がっていた。

私はそのまま気を失った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ポッチ：「逆位相装置のスイッチ切ったよ。これで声を出せる。」

冬子：「この装置すごいです。音を完全に消しちゃうんですね。」

詩音：「うん、流れている音と逆の位相を瞬時に出すことによつて、音が相殺されて聞こえなくなっちゃうの。しかも登録されているピアノの音だけだけは聞こえるの。」

ポッチ：「例によつて連続10分しかもたないのが欠点だけどね。」

これは志穂さんがくるみさんに対抗して送ってきたの。志穂さんも好きだよな。」

詩音：「まったく。ところで冬子さん、協力ありがとう。冬子さんの右手迫真の演技だったよ。」

冬子：「どういたしまして。それじゃ、冬子見つからないうちに帰ります。響子ちゃんに見つかったら殺されます。また、必要あつ

たら呼んでください。」

詩音：「いつもありがとうございます。それじゃあ、他の人にも見つからないように帰ってね。」

冬子が帰って行ったのを見送るとあらためて二人は気を失っている響子先生を見下ろす。

ポツチ：「さてと」

詩音：「関係者以外立ち入り禁止って書いてあるのに。」

ポツチ：「普段私たちにはルール守れっていうのにね。学校クビだね。」

詩音：「校長の言いつけ破ったならクビだよね。」

ポツチ：「幼稚園に戻れるかしら。」

詩音：「無理ね。3年の約束が3ヶ月じゃね。」

ポツチ：「リストラだね」

詩音：「失業だね」

ポツチ：「いい先生だったけどね。」

詩音：「いい先生だった。」

ポツチ：「ちよっと可哀想だね。」

詩音：「困ったね。」

ポツチ：「どうしよう。」

詩音：「どうしよう。」

ポツチ：「うん。」

詩音：「あきらめてもらおうよ。それも人生だよ。詩音たち悪くないもん。」

ポツチ：「うん、でもなんかいい方法ない？」

詩音：「うん」

ポツチ：「やっぱりあきらめてもらおうか。」

詩音：「そだね。」

詩音：「ん？ ちょっと待って。いい方法考えた。関係者外立ち入り禁止なんだから関係者になればいい。」

ポツチ：「おお。その手がある。」

詩音：「じゃあ、今から響子先生はプロジェクトの見習として参加してもらいましょう。新入りとしてこき使ってあげる。」

ポツチ：「うん、そうすればクビにならずに済むし、いい使い走りも出来たし、これで万事解決だね。」

詩音　：「選択の余地無しだね。」

私は目を覚ました。

そこには詩音とポッチがいた。ポッチがピアノを弾いている。これはエリーゼのためにだ。

でも、私が一番驚いたのはここに詩音とポッチがいることでもなく、ポッチがクラッシックをピアノで弾いているのでもなかった。目の前のスクリーンに映し出された光景だった。

響子　：「この光景はなんなの？」

詩音　：「おはよう。先生。でも、すごいよね。私たちがいることでもポッチがエリーゼのために弾いてる事でなく、この風景のことを聞くんだね。」

響子　：「あまりに不思議な光景じゃない。この世のものとは思えない。」

詩音　：「先生ももう、元に戻れないよね。この風景を見ちゃったからね。」

響子　：「どついう意味？」

詩音　：「この風景は　ベクトル空間の風景」

詩音の目つきが変わりまじめに答えている。こんな詩音を見たことがない。

響子：「ベクトル空間って、三条博士のあの？」

詩音：「そう、くるみちゃんの統一場の理論で実在が予言されている時の流れない空間。」

響子：「まさか。どうしてその風景がビデオで映し出されんのよ。」

詩音：「私がビデオでとってきたから。」

響子：「ちょっと待って。それって詩音ちゃん行ったことあるってことよ。そんなことあるわけじゃない。あ、また二人でいたずらしてるのね。」

私は詩音ちゃんの顔つきからしていたずらしてるとは思えなかった。でも、そう、いたずらしていると信じたかった。

詩音が首を振って話を続ける。

詩音：「ポッチ、悪いんだけど、C4を根音にしたCマイナーセブン弾いてくれない。」

ポッチ：「OK」

ポッチがエリーゼのためにの演奏をやめ、和音を弾く。

詩音　：「先生、ここに座ってくれない？」

そういつと詩音がちょっと左にずれて、自分が座っていたところを指す。

私は言われたとおりに座る。

詩音　：「先生、私の手を握ってみて」

そういつと詩音は私に手を差し伸べる。私は訝りながら手を握ってみる。そのとたん、スクリーンに映し出された風景が重なる。まるでそこにいるような3次元の映像だ。

詩音　：「先生が今見てるのが実際のベクトル空間。固有時間振動を使ってベクトル空間を開いてるの。」

私は夢を見ているようだった。目の前の光景も、それを解説する詩音ちゃんも現実世界とは思えない。

詩音　：「今、この時間だけ音楽室とベクトル空間がつながってるの。それできつちり6分24秒だけこの光景が出現するの。」

詩音ちゃんの声が遠くに聞こえるように感じる。

詩音　：「まるで、ここだけ空間が重なってるように見えるの。先生、手をつないだまま一緒にきてくれる？」

そういつと、詩音ちゃんが私の手を引いて、スクリーンの方に向かって歩く。しかも、この不思議な世界を歩いているように風景がっっていく。

詩音：「ここで回れ右してみてください」

私は反対方向を向いた。

響子：「あ。」

そこにはずらっと並んだ本があった。「量子力学解説」「一般相対論詳説」「フリー展開解説」そういった物理と数学の本が並ぶ。

詩音：「この本は私が持ち込んだの。」

なんで？ そう思った私の顔色をみて詩音ちゃんが続ける。

詩音：「ひまだから。だって、一度ここに呼ばれたら長いときは2週間から1ヶ月くらいでてこれないんだもん。」

響子：「呼ばれる？」

詩音：「そう、なぜかはまだわかんないんだけど、呼ばれちゃうの。決まって花の丘公園から。2年生になってからも何回も呼ばれてるの。」

響子：「って、詩音ちゃん皆勤じゃない？ 何ヶ月も学校休んでないじゃない。」

詩音：「うん、この世界は時間が流れないから。正確には現実世界の時間が流れないから。ベクトル空間では軸の時間が流れるの。」

響子 : 「 . . . 」

詩音 : 「それで感覚的には何週間もたってるんだけど、こっちに戻ってくるときっちり6分24秒の整数倍の時間がたつの。最大で51分12秒後に帰ってくるの。つまり6分24秒の8倍。これはブランクの仮説と同じで、飛び飛びの値をとるのは時間が波である証拠なの。くるみちゃんが時間は波であるといったことの実証になるの。」

普段から詩音の実力の程がどれくらいか知りたかった。でも、せいぜい大学生くらいかと思った。それでも、十分過ぎるくらいすごいのだが。しかし、今の話を聞くとそんなレベルでないことがわかる。

響子 : 「まるで、三条博士と話してるみたい。」

詩音 : 「うん、だって、くるみちゃんの一番弟子だもん。」

詩音が話を続ける

詩音 : 「だけどプロジェクトが興味を持つてるのは実は ベクトル空間じゃないの。その先の『対世界』なの。」

プロジェクト。詩音たちを守ってる秘密の国家機関。私は核心部分に近づいてるのがわかった。

響子 : 「『対世界』? 三条博士が『くるみエッセンシャル』で予言しているパラレルワールドのこと」

詩音 : 「さすが先生よく知ってるね。その本の右側を見て欲しい

の。」

私は物理と数学の本が並んでいる棚の右隣を見た。そこには「家庭の医学」「薬物大辞典」「紙芝居の作り方」「心の理論」といった本が絵本と一緒に並べられている。

響子：「詩音、医学にも興味あるの？」

詩音が首を振る。

詩音：「先生、その右に貼ってある絵をみてみて。」

私はその右に張ってある画用紙に書かれた絵を見てみた。お父さんとお母さんと子供の三人の似顔絵が貼ってあった。

響子：「子供は詩音ね。うん、雰囲気です。お父さんはあきらね。アホっぽいもんね。でも。」

私はお母さんの似顔絵をみて愕然とした。ストレートの長い髪にカチューシャ。私はその子を知っている。

詩音：「そう、お母さんは和恵ママでなく冬子さんなの。つまり、ここには私だけでなく、もう一人きているの。その子はきつと『対世界』の私。その子の名前は楠木舞。そして、その子のお母さんは冬子さん。」

うそだつて言って欲しかった。実はいたずらでしたって言って欲しかった。

詩音：「対世界は本当にあるの。きつと、向こうにも先生がいる

はず。ほぼ同じだけどちょっと違う世界。」

詩音：「そしてプロジェクトはその向こうの世界にどうしたらいいかを探してるの。この音楽室はそのためにも改造されてるの。」

ポッチ：「この音楽室は花の丘公園と一緒に重力のバランスがくずれたところに位置するらしいんです。この学校にはそんな場所が他にもいくつもあります。」

私は愕然とした。徹底的に隠していたのはこれだったんだ。でも、なんで私に話すの？

詩音：「先生には申し訳ないけどプロジェクトに入ってもらおうの。この秘密を知っちゃったからね。」

そして、そのプロジェクトメンバーを聞いて愕然とした。あきら、和恵だけでなく南、志穂先輩、三条博士といったメンバーが入っている。

詩音：「本当は先生には最初から打ち明けたかったんだけど、先生が学校側から招聘されたから今まで黙ってたの。もし、プロジェクトから招聘されたらもつと早かったのにね。」

そして、私はプロジェクトの内容を聞いてさらに愕然となる。

響子：「もし、断ったら？」

詩音：「学校クビになる。校長先生の言いつけ守らなかったから。」

ポッチ：「幼稚園にも戻れない。3年の約束が3ヶ月しかたつてないから。」

詩音：「警察につかまる。プロジェクトの内容知っちゃって、プロジェクトに参加しないから。南さんが喜んで迎えに来る。」

南の勝ち誇った顔は見たくない。

響子：「つまり、選択の余地無しってことね。しょうがないわ。あきらめてプロジェクトに参加するわ。」

詩音がいつもの表情に戻りうれしそうにわらう。

詩音：「ありがとう、響子先生。やっぱりわかってくれた。じゃあ、見習として私達の実験手伝ってね。」

響子：「ええ、見習はやだな。でもなんで、いつもこんな夜に実験してるの？」

詩音：「うん、毎日この時間だけベクトル空間を見ることがきるの。しかも、ゴールデンウィークから夏休みの間の季節だけ。」

ポッチ：「私たちはこの時間を『天使の帰宅時間』って呼んでるの。まるで天使が毎日この時間ここを通過して帰っていくみたいだから。」

詩音：「しかも、その時間はきっちり51分12秒。すごいよね。」

ポッチ：「そして、見るだけで行くことができない。」

響子：「それで、あんた達はピアノを弾いて何してるの？」

詩音：「固有時間振動数を探してるの。」

響子：「固有時間振動数？」

詩音：「うん、その人が持っている時間振動数。その振動数がぴたりとあうと共鳴が起きて、ベクトル空間を見ることができの。」

響子：「はあ。」

詩音：「それで12音階平均律を使って固有時間振動数を見つけるの。」

ポッチ：「固有時間振動数は人によって違うんです。」

響子：「ふ〜ん。それで、和音を弾いてるのね。でも、どうしてエリーゼのためになんて弾いてたの？　さらにはポッチはなんで弾けるの？」

詩音：「どの和音で共鳴するかわからないから、とりあえず、曲をかけるの。そのとき、空間が揺らぐときがあって、そのときのコードがどれかを探すと見つけやすくなるの。」

ポッチ：「ちなみに、私はピアノ上手に弾けません。このピアノは自動演奏機能をもった特注品。プロジェクトで買いました。さっきの新世界は自動演奏です。」

用意のよろしいことので。

詩音：「口で説明するより、実際にやってみたほうが早いわね。先生、ここに座って。ポッチ、今度は子犬のワルツをかけてみて。」

そう言っただけはさっきの場所に座らされた。子犬のワルツがかかる。しばらくしたときだった。

いきなり景色がゆれた。

響子：「あ！ 今景色がゆれた」

詩音：「うん、正確には空間がゆがんだんだけど、ゆがんだところの和音が先生の固有時間振動数の倍音のはず。こうやって和音を見つけたら根音を見つければ1個見つかる。そして、後2個見つければ安定的にみられる。」

響子：「へへ、私も見れるようになるんだ。」

詩音：「うん、普通はこんな簡単には行かないんだけど。響子先生の固有振動数はメジャーな和音で出来てるみたい。簡単に見つかるかも。」

そうやって、私は夏休みの間、彼女達の実験に参加させられた。

- - - - -

それから1週間後

ポッチ：「そろそろ天使がご帰宅する時間。」

詩音　：「じゃあ、3人の和音弾いてくれる？」

ポッチ：「OK」

ポッチは私と詩音とポッチの3人の和音を弾いた。あれから毎日夜、実験に付き合わされている。しかし、毎日続けた成果もあり、3人の固有振動数となる和音の組み合わせを見つけることが出来た。

ちなみにこの一連の話を校長に話したら、

校長　：「また、彼女達に引っかけたんですか。今回は先生が言いつけ守らないのがいけないのです。あきらめて彼女達に今年の夏は付き合っただけでください。ただし、プロジェクトの言いなりにならないように。あくまで学校の先生であることを優先してください。」

と釘をさされた。校長もプロジェクトのことは知っていた。それで、プロジェクトの要請で音楽室のことは黙っていたのだった。

結局課外活動として付き合っている羽目になる。

3人の和音が弾かれるとともに目の前にベクトル空間が現われる。実際には見えてるだけでベクトル空間に行っているわけではない。

響子　：「もう、和音が見つかったんだから花の丘公園からベクトル空間にいけないの？」

詩音　：「うん、和音が見つかるだけじゃダメなの。共鳴するには触媒が必要なの。後は共鳴の触媒となる物質がわかればベクトル

空間に自由にいけるようになる。」

響子：「へへ、そんな簡単にはいかないのね。でも、自由でないけど時々は行ってるんでしょ。」

詩音：「うん、でもそれは不定期で規則性が無いからいついけるかわかんない。ここ1ヶ月くらい行ってないかな。夏ってどういうわけだかなかなか呼ばれないの。」

響子：「そういうものなんだ。」

ポツチ：「ねえ、棚の上のもの何？　なんか増えてる。」

棚の上に何か箱のようなものが2、3個置かれている。ここ数日で数が増えている。

響子：「オルゴールの箱みたいね。何に使うのかしら。」

ポツチ：「星のマークがついている。」

詩音：「向こうの冬子さんが作って舞ちゃんが持ちこんだってことかな」

響子：「木で出来た箱っぱいわね。」

私は棚に近づいて見てみる。手で触ろうとしてみたが、無理だった。

そのとき

・・・コーン

とかすかな音が聞こえた気がした。

ポツチ：「あれ？ 音叉が鳴ってる。詩音鳴らしてる？」

詩音：「ううん。でもこきえるよね。」

響子：「どこでなってるのかしら。」

私は音楽室を探してみたけどそれらしきものは見当たらない。

詩音：「これ、まさかと思うけど、ベクトル空間で鳴ってる？」

ポツチ：「まさか、ベクトル空間を見ることは出来ても音は聞こえないよ。」

そう言っている間に音がどんどん大きくなる。

詩音：「もしかして、これって固有時間振動による共鳴！ ベクトル空間と現実空間の両方で共鳴している！」

そのときだった。部屋の隅から詩音が突然現われた。詩音は木箱を持っている。

響子：「詩音が二人！」

詩音とポツチは呆然とその姿を見ている。

響子：「詩音、とうとう分裂したのね。あなたならやりかねない

「思ったわ。」

そう冗談めかして言って私は新しく現われた詩音に向かって歩いていく。彼女の前に立ち

響子：「こんにちは。」

と挨拶する。

が無視してそのまま私のほうに向っていく。そして、何事もなかったように私をすり抜けていく。

響子：「え？」

詩音：「その子、私じゃない。」

響子：「え？」

詩音：「ベクトル空間に来た舞ちゃん。」

ポッチ：「う、うそ。本当にいたんだ。」

詩音：「頭ではわかっていたけど、実際に見ると驚きを通り越してショックだわ。私がもう一人いる。」

そっくりだった。姿かたちもしぐさも詩音そっくりの女の子。いままで、理論上のこととして想像の域を出なかった話が現実に近づいてくる。

詩音：「舞ちゃん！」

詩音が話し掛けるが、反応が無い。向こうからはこちらの声も姿も見えないようだ。

舞ちゃんはリュックから本を取り出して棚にしまい、棚から別の本を取り出しリュックの中に入れて。そして、何か気になるのかあたりを見回した後、持ってきた木箱を再びもって部屋の隅に行く。

．．．コーン

再び音叉の音が聞こえる。その音は木箱から聞こえてくる。その音はだんだん大きくなり、

そして、

ビュン。

舞ちゃんは消えていなくなった。

ポツチ：「彼女『共鳴』させて自由に出入りできてる！」

詩音：「わかったー！ー！」

詩音が金縛りから開放されたように駆け出し、突然教壇の下に隠していたPCを取り出す。そしてなにやらがちゃがちゃ操作しているうちに窓際のスクリーンが明るくなる。

女の人がパジャマ姿で現われる。

くるみ：「なによ、詩音ちゃん、こっちは朝の5時前よ。もう少し

寝かせてよね。」

三條博士だった。今は西海岸にいる。インターネットのテレビ電話で呼び出したみたいだ。

詩音：「くるみちゃん、わかったの！ 固有時間振動を起こす媒体！」

くるみ：「え？ え？ わかったの!？」

詩音：「うん、舞ちゃんが持ってた。木箱！ 木！ 木材！、やっぱりありふれた物だった！これで向こうにいける!」「」

詩音が興奮をかくさず叫んだ。

4章「かのん編」に続く

3 - 14 ・音楽室（後書き）

ポッチ：「とということでも3章『エジソンプロジェクト編』は終わりです。後は短編を一つ入れたいと思います。」

詩音：「そして、次次回からは再び舞ちゃんの世界になります。」

ポッチ：「どつぷりと舞ちゃんワールドに浸っていただければと思います。」

詩音：「とということでも、雰囲気壊さないために私たちのあとがきは当面お休み。でも、主人公は私だから忘れないでね。」

ポッチ：「そして、書ききれなかった不思議なアイテムとかの解説は活動報告に。ベクトル空間の話は別の小説で出したいと思えます。」

詩音：「それでは、しばらくの間、私たちはお休みです。またね。」

.....

ポッチ：「（で、お休みの間何してるの？）」

詩音：「（とりあえず、アメリカに行くの。そのあとは秘密。）」

短編ファンデルワールスカ(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

短編ファンデルワールス力

先生　：「美鈴ちゃんもずいぶんお姉ちゃんになったんですね。大分落ち着いてきましたね。」

響子　：「はあ？　ポツチのどこがですか？」

先生　：「いたずらしなくなってきたじゃないですか。」

どうしてそんなことがいえるの？　と私は聞きたくなった。

- - - - -

今年も運動会の日がやってきた。私にとって初めての小学校の先生としての運動会。しかし、今年の運動会は厳戒態勢がひかれている。そして、私はその対策委員長を務めている。もちろん詩音とポツチのいたずら対策だ。

ま、彼女達の考えることは大体わかっているから、先手を打てば何とかなる。すでに二つのいたずらを見つけ回避している。

一つは運動会用の行進曲のテープが入れ替わっていた。マーチのはずがアニソンになっていた。ハレルヤユカイで入場するところだった。もちろん、そんなこともあるうかと予備のテープを持っ持っている。

二つ目は放送設備に仕掛けがしてあった。スイッチを入れると地域のミニFM放送局が入るようになっていた。しかも、今日に限っ

てアニソン特集をやっていた。リクエストNO.1はハレユヤユカ
イだった。

もちろん、二人は

「しらな〜い」「証拠もないのに疑うのはよくないことです。」

と白を切る。だが、テープの入れ替えはまだしも、放送設備の設
定変更などあの二人にしかできない。正確に言くとポツチしかでき
ない。

しかも、今回は来賓として三条博士が来ている。この街の、いや、
今の日本において皇室の次くらいに丁寧に扱わないといけない人だ。
そして、文科省の官僚とその使いつぱが来ている。現在の教育現場
を知りたいといっている。さらに巖さんまでウロウロしている。孫
の運動会を見に来たといっているがもちろんうそである。

つまり、三条くるみ、大橋志穂、南、巖さんといったプロジエク
トメンバーが勢揃いして見張っている。

そして、挙句の果てに詩音たちから予告状の手紙まで出ている。

「響子先生、運動会は楽しみだね。詩音&ポツチ」

である。

いくら私がプロジェクトに参画しているといえども、学校行事の
無事遂行が最もプライオリティが高いことだ。プロジェクトの思い
のまま、二人にいたずらを完遂させてはならない。

しかし、明らかに学校側の対応が一步遅れている。

先生A：「泉先生、やっぱり、体育準備室に仕掛けがしてありました。玉入れのたまに小型無線受信機が、大玉ころがしの玉にも無線機が取り付けられてました。」

響子：「うん、玉入れの玉と大玉転がしの玉は隣の小学校から借りてきたものと取り替えて。」

先生A：「わかりました。」

そのとき突然私のTシャツがしゃべり出した。

服：「さすが響子ちゃんばんばん見抜くわね。」

服：「でも、服にリキッドスピーカー染み込ませてあったとは思わなかったでしょ。みんなの前でハレルヤユカイ歌いたかったんだけどね」

がつくり膝をつく。すでに五つ目のいたずらだった。しかも、もし、このいたずらを実行されていたら、委員長の面目丸つぶれだった。

響子：「前山先生、川上先生なにやってるの？ちゃんと見張ってる？」

私が無線機に話し掛ける。

前山：「ちゃんと見張ってます。二人は一生懸命クラスの応援してます。」

服　：「それ、本当に詩音とポツチかなあ。」

私はこのうるさいＴシャツを着替えるため更衣室に行き服を着替える。

響子　：「前山先生、どう?」

無線機に話かける。

前山　：「普通に応援してます。特に変わったところはありません。」

響子　：「引き続きそのまま見張っててくださいね。」

無線機　：「冬子、了解しました。」

突然、無線機に冬子が割り込む。再びがっくり膝をつく。冬子を仲間に引き入れている。さっきの服の声は冬子だった。

響子　：「冬子、どこにいるの?」

冬子　：「ベクトル空間です。そういって言われました。」

響子　：「周りに何が見える?」

冬子　：「海と大地の不思議な風景が広がっています。冬子、そういって言われました。」

本当に居るかもしれないところが怖い。

しかし、完全に裏をかがれている。いくら二人を見張っても意味がない。すでに作戦は冬子の手によって実行されていて、二人の手から離れている。ここで、二人を締め上げてはかせてもいいが、プロジェクトメンバーが見張っている。つまり、現行犯逮捕以外捕まえられない状況に陥っている。

響子：「昨年と同じ失敗はしないか。」

昨年は現行犯逮捕だったがそれでも、白を切られた。今年は去年以上に輪をかけてまじめに運動会に参加している。

どこで、仕掛けてくるか？ 彼女達の性格から児童の競技そのものへの妨害の可能性は低い。狙いは先生か保護者だ。

響子：「となると、お昼休みか。」

私はじっくり待つことにした。そんなとき、学区内の保育園の先生が挨拶に来た。ポツチの担任だった先生だ。

響子：「あの、今おちついてきたとおっしゃいましたよね。」

先生：「ええ、あの子は保育園時代毎日いたずらしてましたから。」

響子：「・・・」

先生：「例えば、プールの水に入浴剤入れて緑色にしたり、砂場に落とし穴作ったり、教室にある草花を造花に変えたり、飼っているアヒルを黒く塗ったり、大人しい男の子の顔に油性ペンでいたずら書きしたり、お弁当に日にやっぱり大人しい子のお弁当をすりか

えて、中身に「スカ」って書いた紙を入れたり。」

響子：「・・・」

先生：「そうそう、最高傑作は遠足の日に森林浴公園に行ったとき、『風邪でお休みします』っていつておきながら、先回りして『本日緊急工事のため臨時休園』って張り紙して、遠足が中止になりかけたり。」

響子：「保育園児ですよね。」

先生：「ええ、私ももう20年近く保育をしています、あの子見たいな子は空前絶後ですね。」

やっぱり、ポッチもエジソンプロジェクトメンバーの資格を十分もってる。

先生：「それが、小学校に入ってお友達に恵まれて、いたずらの回数がすごく減ったと聞いています。詩音ちゃんでしたっけ。彼女があの子を救ってくれたんですね。」

響子：「はあ。」

確かにお姉さんになったかもしれない。いたずらの回数も減ったかも知れない。だけど、詩音と一緒にになって、派手でたちの悪いいたずらをしてるようなきがするのは気のせいだろうか？

先生：「あの子は当時片親で、さびしかったんです。それで、かまって欲しくていたずらばかりしてたんです。」

じゃあ、今、片親じゃなくなつて、お父さんにいっぱい構つてもらつてるのになんでいたずらするのよ。

響子：「あの、今でも十分していると思つんですけど。」

先生：「そうですね。聞いています。担任の先生にバケツで水从头から掛けたり、校長先生にいたずらして入学式妨害したり。でも、保育園のときと比べると大人しいもんですよ。」

響子：「はあ」

先生：「それで、今日は楽しみに来たんです。久しぶりにあの子から手紙をもらつたんです。」

そう言つて先生が手紙を見せる。

「先生、運動会は楽しみにしててね。ポッチ&詩音」

先生：「これだけなんですけど、ワクワクしてきますよね。何を仕掛けてくるか。」

この先生達観している。私はドキドキするけどワクワクはしないわよ。

そうこうしているうちに運動会は無事午前の部が終わつた。今回は先生・保護者対抗競技は午前の部に持ってきて玉入れだった。そして、玉入れの玉を全部入れ替えていたずらを未然に防いでいる。

児童たちは親の元にお弁当を食べている。私たちも来賓の方々と一緒にお弁当を食べる。本部席には仕出し弁当が出ることになつて

いる。係の先生がお弁当を配り始める。

響子：「あ、だめ、全て回収して。こっちのお弁当を配って。」

私は準備しておいた別のお弁当を配ってもらった。

先生B：「この回収したお弁当はどうしますか？」

響子：「捨てて」

先生B：「え？もつたいないでしょ。」

響子：「味見してみてください。」

お弁当を回収した先生がお弁当を食べてみる。

先生B：「ぐは、なんだこの海老チリ。辛いを通り越して痛い。」

先生が咳き込んでいる。

響子：「6個目のいたずらね。」

私がそういうと、となりで保育園の先生がニコニコしながら言っ
た。

先生：「あら、見破られちゃったのね。」

楽しんでませんか？ こっちは必死なんですけど。

新しいお弁当を配り、無事食べ終わった。一息ついたところで、

午後の競技が始まる前に吹奏楽部の演奏が行われる。本部席の先生、来賓の方々は皆、席についてその演奏を楽しみにしていた。

放送係：「それでは、これより、吹奏楽部による演奏を行います。曲目はビゼーのカルメン、コッペリアからマズルカ、そして最後にハレルヤユカイです。」

放送を聞いて愕然とした。

響子：「しまった！。これが狙いなものね！」

私は思わず両手をテーブルについて立ち上がった。そのときだった。

キーンという甲高い音がした。

来賓A：「うわ、動けない。」

来賓B：「ちょっと、接着剤かなんかついてるの？」

来賓C：「椅子も動かないぞ」

突然来賓席が騒ぎ出した。皆椅子から立ち上がれなくなった。

響子：「やられた〜。」

そのとき、今度は私のジャージのスボンから声が聞こえた。

ズボン：「響子、積年の恨みを晴らすときが来たぞ。高校時代散々いじめてくれたな。今ここで悔い改めるがいい。」

南の声がズボンから聞こえる。

響子：「南！ あんたなにやってるのよ。」

私は来賓席にふんぞり返っている南に詰め寄る。

南：「ぼく何もやってないです。濡れ衣です。」

ズボン：「さて、言うことを聞いてもらいましょうか。今、来賓の方々が動けない状態になっているけど、このままでは一生動けなくなります。」

響子：「ここまでいって白を切るつもり？」

南：「信じてください。」

ズボン：「同級生でコントを演じているのもいいけど、そのまま動けなくなってもいいのでしょうか。」

響子：「う！」

ズボン：「それでは、僕からの要求を伝えます。吹奏楽の演奏にあわせてハレルヤユカイを踊っていただきます。踊っていただくのは前山先生、川上先生、そして泉先生です。」

響子：「南、あんた、どういっつもり？」

南：「だから、僕じゃないです。」

ズボン：「で、踊っていただけますか？」

響子：「踊るたって、踊り方知らないわよ。」

ズボン：「大丈夫です。詩音ちゃんとポツチが踊れます。彼女たちの踊りを見よう見真似で踊っていただけます。」

響子：「いやよ、そんな恥ずかしいこと絶対できない。」

ズボン：「来賓の方、お手洗いにいきたくなくてもしりませんよ。」

くるみ：「あの、お手洗いきたいんですけど。そろそろ、動けるようにしていただきたいの。」

校長：「泉先生、3人が踊れば解決する問題です。来賓の方これ以上迷惑かけないように。」

響子：「く〜。わかりました。」

私は前山先生に連絡する。前山先生が絶句する。

前山：「先ほど詩音とポツチは家族とのお弁当を終え席に戻つてます。全然、いたずらしているそぶりを見せていません。」

響子：「とりあえず、詩音とポツチと一緒に踊るように言って。それと前山先生と川上先生も付き合っつてね。」

前山：「はい、仕方ないです。」

前山先生が詩音とポツチに話をする。

詩音：「やだ。」

ポッチ：「なんで、私がそんな恥ずかしいことしないといけないんですか？　今年はまじめに運動会参加してるのに。」

前山先生と川上先生が必死に説得する。

詩音：「しょうがないなあ。じゃあ、付き合っただけ。ただし、条件があります。泉先生にはこの黄色いリボンを頭に巻いてもらいます。あとこの腕章もね。前山先生と川上先生はこのたすきをつけてもらいます。」

腕章には「団長」と、たすきには「きゅん」と「大泉」とかかかれていた。

響子：「やられた、準備万端じゃないの。」

そうして、吹奏楽部の演奏にのって5人はハレルヤユカイを踊った。私はいやだけど黄色いリボンを頭に巻き、腕章をはめた。男の先生二人もたすきをかけている。詩音は「みるく」というたすきをつけ、ポッチは「長沼」というたすきをつけていた。

二人の完璧な踊りに対して、3人の先生の見よう見真似の踊りがおかしく、児童や先生からは大爆笑となった。演奏が終わったとき割れんばかりの拍手となった。

吹奏楽部の演奏が終わると、来賓の方々を縛り付けていた力が消え去った。

ポツチ：「ああ、恥ずかしかった。」

詩音：「響子先生貸しいちだからね。」

ぬけぬけと二人が言う。

響子：「あんたたち！いいかげんにしなさい」

ポツチ：「なんか証拠あるんですか？」

詩音：「そうそう。」

そのとき意外な人物が立ち上がり、二人にこつんこつんとげんこつを加えた。

ポツチ：「キヤツ」

詩音：「くるみちゃん何するのよ。」

くるみ：「いたずらするのは構わないの。でも、最後は種明かししてごめんなさいなの。はい、ふたりとも。」

ポツチ：「ごめんなさい。」

詩音：「ごめんなさい。」

くるみ：「種明かしするの。ファンデルワールス力なの。電荷をもたない分子にはたらく距離の6乗に反比例する力。これが物理吸着力として働くの。ヤモリが壁に張り付くのと同じ力なの。」

響子：「で？」

くるみ：「このファンデルワールス力を引き出す粉をこの前うちの
大学で発明したの。それで詩音ちゃんたちに使ってもらったの。」

響子：「ふん。つまり、今回の黒幕は三條博士ってこと？」

くるみ：「ん？それは違うの。」

響子：「どうして？」

くるみ：「今回のじゃなくて今回もなの。去年のリキッドスピーカ
も私なの。すごいでしょ。」

響子：「ほほ。ところで、三條博士、何かいうことない？
子供達には言っておきなারা。」

くるみ：「??？」

くるみ：「あ」

くるみ：「ジヨークは人生の潤滑油なの。」

私はぶちきれた。

響子：「あんたね、いい年した大人がなにやってるの？ しかも、
あんたノーベル賞もらった科学者でしょ！」

くるみ：「だから、科学的ないたずらなの。」

響子：「ちがう！ 立場を考えなさいって言ってるの。しかも、小学生手下にして毎年何やってるのよ。詩音とポッチもいいかげんにしなさい。毎度毎度いたずらばかりで、まったく。」

三条博士がおびえた小動物のように私を見て、ぼそつと言う。

くるみ：「やっぱり、響子先生うわさ通り凶暴なの。」

詩音：「うんうん、お嫁に行けなくなるよね。」

私はもう何もいえなかった。

.....

運動会が終わり、ポッチの保育園の先生が帰り際に私に挨拶をした。

先生：「今日は楽しかったです。やっぱり、あの子はお姉ちゃんになったようでも、昔と変わらなかったです。少し、安心しました。きっと、そのことを伝えたくて手紙を書いたんですね。今、こんなに元気でやってるよって。いい子なんですよ。」

響子：「はあ。」

先生：「きっと、詩音ちゃんも幼稚園の先生に手紙を出してるはずです。『先生、こんなに学校楽しんでるよ』って、今日は詩音ちゃんの幼稚園の先生にお会いできませんでしたが、きっと思いは伝わってると思います。」

響子　：「そうですね。きっとそうですね。」

私はそう言ってポツチの先生と別れた。

確かに、詩音は学校を楽しんでいるのは事実だ。だけど、手紙を出した理由は明らかにポツチが先生に出した理由とは違う。だって、その幼稚園の時の先生は当事者の私なんだから。

天使のように可愛いくせに性格は悪魔。頭のよさは天下一品。

響子　：「まったくもつ。和恵、あきら、とんでもない娘よ。なんとかしなさいよ。ま、でも、楽しい一日だったけどね。」

そう毒づいて私は後片付けに向かった。

おしまい

4 - 1 淳（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

11月になり少しずつ寒くなりだした、ある水曜日のお昼。舞が元気に病院に来る。別にどこか悪いわけではない。彼女はこの病院の院内学級のボランティアである。

エレベータで6階に上がり小児病棟の方に向かう。小児病棟の入り口の下駄箱で靴をサンダルに履き替える。小児病棟には土足で入ることが出来ない。

西棟のナースセンターに立ち寄り、健康チェックをしてもらう。風邪などひいていると中に入ることが出来ない。一般小児病棟である東棟なら比較的簡単に見舞い客として入れるが、特別小児病棟である西棟には、本来、小学生が中に入ることとは出来ない。しかし、体温チェックなどで問題なければ舞は特別に中に入ることを許されている。

つかさ：「OKです。舞ちゃん。中に入ってもよろしい。」

舞　：「ありがとうございます。それと、病院食余ってる？」

つかさ：「はい。余ってはいないけど、舞ちゃんの分用意してます。」

舞　：「いつもありがとうございます。」

そう言っつて、舞は西棟のかのんの病室に向かう。途中、ガラス戸で廊下が締め切られている。ここから先は普通の人は入れないクリンエリアになる。

この病院の小児病棟は感染症防止のため5つのゾーンに分けられている。一番外はエレベータホールのあるゾーン。2番目が東棟や院内学級のあるゾーン。3番目がいま入ろうとしているクリーンエリアである。

通常はこれだけであるが、さらにその奥の病室のいくつかはクリーンルームになることが出来る。これは準無菌室になることができる部屋である。白血病などの骨髄抑制期はこの部屋の扉が閉まり、準無菌室レベルまで引き上げられる。ここまでくるといくら舞でも中に入れない。

そして、その奥に無菌室がある。しかし、その無菌室は使われているのを見たことがない。準無菌室で大概の治療が済むかららしい。クリーンエリアの入り口の病室に向かう。

舞　：「こんにちは〜」

かのん：「おそ〜い。せつかく二人分確保してあげたのに。ごはんさめちゃうぞ。」

舞　：「ごめん。帰り際に先生と話してたもんで。」

かのんは舞が入院したときに知り合ったお友達である。心臓病を患っている。心臓に負担をかけないため、歩くことも禁止されていて、車いす生活を強いられている。

かのん：「美鈴呼んで来て、一緒にご飯食べよう。」

舞　：「うん、呼んで来るね。」

舞が病室を出てさらに奥の部屋に向かう。奥から2番目の右側の部屋。ここに美鈴がいる。

舞　：「美鈴。一緒にご飯食べよう。」

美鈴　：「あ、舞ちゃん、来たんだ。こんにちは。いこいこ。」

そう言って、ベッドから降りて、今運ばれてきた昼食を持って病室を出る。美鈴は白血病。今年の正月からこの病院にいる。

3人は水曜日と土曜日の昼はこうやって一緒に昼食を食べる。場所は院内学級の部屋だ。

美鈴　：「あ、そうそう、今週からもう一人増えたんだ。」

そう言って美鈴が隣の病室に声をかける。舞が半年間入院していた部屋だ。

美鈴　：「淳くん。」

中から男の子が出てきた。少し、ぽっちゃりした男の子だ。

美鈴　：「私たちと同じ1年生。9月くらいから入院してたんだけど、ずっと部屋からでらなかったんだ。やっと今週から院内学級に行くことが許されたの。」

淳　　：「真泉　淳。よろしくです。」

小さな声で挨拶をした。

舞　：「楠木舞です。宜しく。」

そうやって、舞はかのんの部屋に寄り、かのんの車椅子を押しながら東棟の入り口にある院内学級の部屋に向う。

院内学級の部屋には誰もいなかった。もっとも、長期入院して院内学級に通っている子供は舞を除いたこの3人だから当たり前といえは当たり前である。

舞　：「いただきます。」

一同　：「いただきます。」

病院食は決しておいしいものではない。でも、みんなで食べればおいしくなる。だから、舞もあえて病院食をお願いしている。もっとも、彼女にしてみれば、病院食も給食も外食も「まずい」の一言でくくられてしまうので気にしていないのだが。

病院食といっても実は病状によって食事の内容が違う。舞と美鈴は普通食であり制限がかかっていない。かのんは水分と塩分に対して厳しい制限がかけられており、それよりの食事である。

．．．淳君のは低蛋白、減塩料理に見える。腎臓病？．．．

舞は淳の料理を見て病状の推測をつける。

淳　：「あの、楠木さんはなんの病気なんですか？」

舞　：「舞でいいよ。私も淳君って呼ぶから。」

淳　：「はい、それで舞ちゃんは何の病気？」

舞　：「私の病気はラインベルク症候群って言う難病。」

淳　：「そうなんだ。それじゃ、ここには長いの？」

舞　：「？　うん、今年の1月かな。西棟の入院したのは。」

淳　：「じゃあ、1年近くなんだね。でも、元気そうですね。」

舞　：「？　うん、元気だよ。」

淳　：「え？　元気なのに入院してるの？」

かのん：「あはは。舞は退院してるよ。半年近く前に。今はボランティアって名目で遊びにきてるだけ。」

舞　：「一応ボランティアしてるよ。」

ボランティア名目で来ているが実際は子供達と遊んでいるだけと
いってもいい。最も、病院側も、ただ遊んでるだけでも、この病院
のことをよくわかっていて、入院している子供のストレス発散にな
る舞のボランティアは大いに歓迎している。

淳　：「あゝ。本当ですか？　西棟から退院できたんですか？」

舞　：「へ？」

淳　：「だって、噂では、西棟に入院する子は不治の病だから、入ったら死ぬまで出られないって。」

舞　：「あのね。だれよそんなこといったの。現に私は退院します。」

実際、重症患者の多い西棟は天国に召される子供もいる。しかし、ちゃんと治って退院する子も多い。だけど、噂は悪いほうに広まってしまっている。

その意味もあって、舞という生きた証拠をもってその悪い噂を振り払うためにボランティアにきてもらうことは病院にとって悪いことでない。子供たちの精神安定のためだけでない。

だから、舞がこの病院の6階でただ遊んでるだけでも病院側は何も言わない。それどころか病院食ながらも食事を出してくれる。

淳　：「よかった。退院できるんだ。助かった。」

美鈴　：「それに、かのんだって先月から週末の一時外泊認められてるわ。私も年末は一時外泊許してもらえそう。」

舞　：「美鈴おめでと。淳君、こうやって少しずつだけでも治っていくんだから、退院できないんなんて思っちゃだめだよ。」

淳　：「うん」

その後、ご馳走様をして、食器を片付けてもらって4人でトランプしたり淳君を無理やりおままごとにつき合わせたりして遊んだ。その中で、みんな薬を飲んだので舞はその様子をすばやく観察した。

・・・淳君が飲んでるのは私もよく飲んだステロカイドとあれは免疫抑制剤のメリビゾン．．

．．．とうことはI g a腎症のカクテル療法ね．．．

．．．I g a腎症なら確かに重い病気だけどかのんや美鈴に比べたら格段に軽いはず．．．

そして、美鈴たちが「ちょっと疲れた」といってお開きになりみんな病室に戻ったので、舞はその隙に松井先生を捕まえた。

舞　：「松井先生、なんで淳君I g a腎症なのに大仰に西棟なの？」

ぶぐ。松井先生が飲んでいるお茶を噴出した。

松井　：「なんで、わかった。真泉くんが話したのか？」

舞　：「ううん。食べている料理とのんでる薬でわかった。」

松井　：「うわ、良くそれだけでわかるな。」

そこに草薙先生が現われる。

草薙　：「お、勉強してるな。貸した本役立ってるようだな。」

舞　：「えへへ。」

草薙　：「淳君が西棟にいるのは免疫抑制剤飲んでるからだよ。病状の重い軽いよりも、感染症からの隔離が目的で西棟に入院してるらつてる。舞ちゃんの時と同じだ。」

舞　：「なるほどね。」

松井　：「ところで舞ちゃんに何を貸したんですか？」

草薙　：「薬の本だ。後、小児科の本。」

松井　：「小学1年生に理解できるんですか？」

草薙　：「わからないところは、私も教えてあげてるんだ。他にはわかったかい？」

舞　　：「かのが拡張性心筋症、美鈴が急性骨髄性白血病。」

草薙　：「ぐは。聞いていてよかった。そんなことまでわかつちやうのか。」

舞　　：「うん、いけなかった？」

松井　：「先生、まずいでしょう。本を取り上げましょう。」

草薙　：「いや、知識を得ることはまずくない。問題はそれをちやんと使えるかだ。舞ちゃん、約束してくれないか？」

舞　　：「？」

草薙　：「もし、相手の病気がわかってても絶対に相手やその家族には言わないこと。言いたくなったら私や松井先生にこっそり言うこと。」

舞　：「わかつたけど、なんで？」

草薙　：「診断と治療は先生しか出来ないんだ。そう、法律で決められている。それに本当の病氣の名を教えないときがある。ガンとかな。」

舞　：「そうなんだ、じゃあ、しょうがないね。うん、約束する。」

ちよつと残念そうな顔をしながらも舞は再び院内学級のほうに戻っていった。小さな子どもたちを集めている。どうやら物語でも読むのであろう。

松井　：「しかし、とんでもない子ですな。」

松井先生は半分感心、半分呆れながら言う。

草薙　：「一種の天才児というか天性のものを持っている。知識をすごい勢いで吸収しているんだ。でも素直でいい子だ。このまま行けば大人になつたら名医になるな。」

松井　：「ええ、うまく育ってくれるといいですね。」

草薙　：「それを指導して行くのが我々の医者役目の一つだろう。」

そう言つて二人は院内学級で小さな子供達を集めて物語を読んでいる女の子を温かい目で見守つた。

つづく

4・2・沙耶(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 2 ・沙耶

11月の終わりごろ。例によって舞が西棟に遊びに来る。

淳　：「あ、舞ちゃん、こんにちは。」

舞　：「淳君、こんにちは。どう？調子は。」

淳　：「まあまあです。入院したばかりのときと比べればすこいよくなってる。」

舞　：「それは、良かった。今日は夕飯も病院で食べるからじっくり遊べるわよ。」

淳　：「ありがとう。ところで、どうして、舞ちゃんは水曜日だけは遅くまでいるんですか？」

美鈴　：「選択食狙いよね。」

舞　　：「美鈴。」

淳　　：「選択食？」

美鈴　：「そ。病院食の普通食なんだけど普段は選べないんだけど水曜日だけちょっとご馳走になって、しかも自分でどちらか選べるの。だから、夕食まで付き合っただよ。」

舞　　：「美鈴。誤解を招く表現よしてよ。遅くいるのは夜でないと楽しめない遊びがあつてそれを楽しむためだよ。」

淳　：「え？　なんなの？　夜でないと楽しめない遊びって。」

淳は興味津々に聞く。退屈な病院ではその手の話は貴重である。

舞　：「天体観測。星を見るの。」

淳　：「へへ。舞ちゃん、星に詳しいんだ。」

舞　：「ううん。詳しいのはかのん。」

淳　：「ええへ、意外！」

かのん：「なによ、私が詳しくちやおかしいの？」

淳　　：「え？　だって、勉強とかできなさそうじゃん。」

かのん：「なんですって？　じゃあ、もう淳君には星のこと教えな
いから。女の子だけで楽しむからいいわよ。」

かのんが目を吊り上げて怒る。

淳　　：「ごめんなさい。許してください。かのんさんは勉強がで
きて、星に詳しくてもちっとも不思議じゃないです。」

かのん：「わかればよろしい。」

かのんが両手を腰に当てえらそうに言う。そんなかのんをスルーし
て美鈴が話す。

美鈴　：「ところでさ、天体観測って水曜日じゃなきゃいけない理由ってないよね。ね、舞。」

舞　　：「美鈴も細かいところこだわるわね。水曜日が一番って学校で習ったの。」

舞がしどろもどろしながら答える。

美鈴　：「ふ〜ん。ほんとかな〜。」

舞　　：「さ、夜まで何して遊ぼうか。そうだUNOやらない？学校の友達の神崎さんから教わったんだ。」

.....

夕食を食べ終わって4人がロビーの窓に集まる。

かのん：「でもね、秋の南の空ってあんまり明るい星がないんだ。ただ一つだけ、まっすぐ前に低くみなみのうお座のフォーマルハウトがあるだけ。あの白い星がそう。」

他の3人が窓の外を見る。確かにポツンと白い星が見える。

かのん：「フォーマルハウトっていうのは魚の口って意味なの。みなみのうお座はクジラみたいな魚が水をのみこむように書かれてることが多いんだ。水がめ座から落ちる水がちょうどその口に当たるところがフォーマルハウトなの。」

淳　　：「かのんちゃん、よく知ってるね。」

かのん：「毎日のように星を見てるからね。この窓から。だから、ここから見える星しかよく知らない。」

淳　：「ふん。なるほどね。」

かのんはつい最近まで病院の外に出たことがなかった。小さいころからこの病院に入院していたためだ。

舞　：「でも、前から不思議に思ってたんだけど、一人で勉強したんじゃないよね。誰かに教わらないと星の区別なんてつかないよ。」

かのん：「えへへ、内緒。」

かのんが笑ってごまかす。

そんな話をしながらそろそろ病室にもどる時間がやってきた。舞にも冬子が迎えに来ていた。4人が「おやすみ」と言って別れたあと、舞はかのんの車いすを病室まで押して行った。

かのん：「舞、今週の土曜日の夕方ひま？」

舞　：「うん、ここに来たあとは暇だけど。」

かのん：「じゃあ、街外れの天文台まで行こうよ。そうしたら、誰が教えてくれたか話してあげる。」

舞　：「うん。面白そう。でも、かのん大丈夫なの？」

かのん：「うん。週末の一時帰宅の時天文台に行っていていいかって秋本先生に聞いたら、『あつたかくして少しだけだったらOK』って許可貰ったんだ。」

舞：「じゃあ、一緒に行こう。楽しみ〜」

- - -
- - -
- - -

土曜日の夕方、舞の家にかのんとお母さんが車で迎えに来た。

冬子：「舞ちゃんをよろしくお願いします。」

冬子に見送られ、3人は街外れの天文台に向かった。

舞：「こんな近くに天文台があるなんて知らなかった。」

母親：「普通は山の中にあるものなのにね。こんな住宅街のはずれにあるなんて不思議ですよね。」

舞：「かのん、天文台にはよく行ってるの?」

かのん：「あのさ、私、冬ちゃんたちの結婚式の時初めて病院の外に出たんだよ。ひと月ちょっと前。行ってるわけないじゃない。」

舞：「そうだよな。でも、どうしてここに天文台があるなんて知ってるの?」

母親：「沙耶さんが教えてくれたんだよな。」

舞　：「沙耶さん？」

かのん：「私に星を教えてくれた人。高校生のお姉さんでこの天文台でアルバイトしてたんだ。」

母親　：「舞ちゃんは沙耶さんを知らないんですって？」

舞　　：「うん。知らない。」

かのん：「沙耶さんは舞や美鈴と入れ違い。西棟に入院していて私やたかしにいちゃんに星を教えてくれたんだ。たかしにいちゃんは全然興味なかったみたいだけどね。」

舞　　：「もしかして、『星の子しおん』のお姉さんって。」

かのん：「そう、沙耶さんがモデルなんだ。」

舞　　：「知らなかった。」

車が天文台につく。

母親　：「さあ、つきました。」

3人は駐車場から天文台に向かっていく。かのんの車いすは私が押していく。

天文台につくと、中から大学生くらいの若い男の子がでてきた。

男の子：「お電話いただいた、斉藤さんですね。私はここでアルバイトをしている案内役の山本です。どうぞこちらに。」

母親：「今日はよろしくお願いいたします。」

靴を脱いで、スリッパに履き替える。

山本：「今日はお客さんが斉藤さんたちだけのようです。ですので貸切なので何か希望があれば言ってください。いろいろお見せできますよ。」

母親：「といつてもねえ。私星わからないから。かのは何見たいの。」

かのか：「口径15cmの望遠鏡があるはず。それ使って天頂と北天の星が見たい。」

山本：「え？ せっかくだからこっちの40cmの反射望遠鏡のほうがいいんじゃない？ よく見えるよ。」

かのか：「でも、15cmのほうは車いすで観れるでしょ。それに、今日はどちらかというと星座を見たいから。」

山本：「ごめんなさい。うつかりしていました。じゃあ、さっそく秋の星座の素晴らしい眺めをお見せしましょう。」

そういつて、山本さんと3人は天文台の中庭にでる。

かのかは周りと星空ををきよるきよる見比べる。

舞：「かのか、秋の星座が素晴らしいって言うけど、フォーマールハウトだっけ？ それ以外大して星や星座なかったんじゃないか？」

たつて？」

かのん：「それは南の空に限ったこと。天頂と北天には素晴らしい星があるわ。」

山本：「かのんちゃんだっけ、よく知ってるね。」

かのん：「えへへ」

山本：「何か見たい星あるかい？」

かのん：「じゃあ、天頂の渦巻き。」

山本：「はい、わかりました。お安いご用で。」

山本はそう言つてセッティングを始める。

舞：「渦巻き？ なに？」

かのん：「えへへ、見てのお楽しみ」

山本：「はい、準備できました。中をのぞいてごらん。」

かのんが最初にのぞく。

かのん：「うわゝ、本当に渦巻いてるんだ。ぼんやりとだけど見える。舞ちゃん見てみな」

そう言つて私に望遠鏡の場所を明け渡す。のぞいてみると楕円形の星が見える。でも、渦を巻いているのはよくわからなかった。

舞　：「なに、この星？　こんな星みたことない」

かのん：「アンドロメダ大星雲！　お隣の銀河だよ。銀河は星がいっぱいいっぱい集まってできた星の固まり」

舞　：「へ〜。じゃあ、この地球もどこかの銀河にいるの？」

かのん：「もちろん。私たちは天の川銀河にいるんだよ。」

舞　：「天の川？　あの織姫と彦星の天の川？」

かのん：「うん。あの天の川も星がいっぱい集まってできてるんだ。銀河の中から見てるから川みたいに見えるんだって。」

舞　：「へ〜。本当にかのんってよく知ってるね。」

山本　：「僕も驚いた。よく知ってるね。どうやって勉強したんだい？」

かのん：「えへへ、実は沙耶さんって人に教わったの。」

沙耶という名前を聞いたその瞬間、山本は凍りついた。

山本　：「そっか。沙耶に教わったのか。そういえば、病院で小さな女の子に星を教えるって手紙をもらったこともあったな。君がその女の子か。」

かのん：「うん、いっぱい教えてもらった。」

山本　：「どつりで詳しいわけだ。」

山本は星空を見上げた。

舞　　：「そういえば、沙耶さんってここでアルバイトしてたんだよね。退院してからはもうアルバイトはしてないの？　そのお姉さんに会ってみたいな。」

かのか　：「かのかのお母さんが顔を見合わせる。」

かのか　：「舞、ごめん。ちゃんと行ってなかったね。」

山本　　：「沙耶は去年の12月に天国に旅立って行ったんだ。」

舞ははつとして山本を見る。

舞　　　：「え……。ごめんなさい。変なこと聞いちゃった。」

そういつと舞は俯いた。

山本　　：「いや。乗り越えなければいけない事実だ。そうだ、せつかくだからアンドロメダ姫の神話の話をしてあげるよ。」

そう言つて山本は話を始める。

山本　　：「昔、アンドロメダ姫というそれはきれいなお姫様さまがいたんだ。だけど、それを母親のカシオペアが自慢して海の女神に『うちの娘はあなたより美しい』って言ってしまつた。それを妬んだ海の女神は海の神様のネプチューンに言いつけるのさ。怒つた神様は化け物クジラを人間界によこして大暴れさせるのさ。そして、

そのクジラを鎮める方法はただ一つ。アンドロメダ姫をいけにえにささげることだったんだ。」

舞　：「ええ！」

山本　：「そして、アンドロメダ姫は鎖で海岸の岩につながれ、クジラに食べられる運命を待っていたんだ。その姿がアンドロメダ座として夜空に描かれているのさ。」

舞　：「自分の娘をいけにえにささげるなんてひどい。」

かのん：「それでどうなったの？」

山本　：「クジラが現れてあわや飲み込まれるって時に、勇者ペルセウスが来て、化け物クジラを退治するんだ。そして、アンドロメダ姫の鎖を解き放ち、ペガサスに乗ってペルセウスの故郷に帰って結婚するんだ。めでたしめでたし。」

舞　：「よかった。ハッピーエンドなんだ。」

山本　：「そうだよ。夜空を見てごらん。アンドロメダの隣にペルセウス座があつて、逆の方向にペガサス座がある。アンドロメダ姫の頭とペガサスの羽とお尻をつなぐと有名なペガサスの大正方形になるんだ。」

かのん：「ああ、あれね。見つけた。」

舞　：「どれどれ。あ、あれかな。」

二人は夜空をきゅきゅ言いながら指さす。そんな夢中になってい

る子供たちの姿を見ながら、山本がつぶやいた。

山本：「だけど、私はペルセウスになれなかった。沙耶を助け出すことはできなかった。」

その姿を見てかのんのお母さんはなくさめる。

母親：「仕方なかったんです。誰かが悪いわけではないです。神様がくれた病気なのですから。」

山本：「すみません。お見せぐるしいところを見せてしまいましたね。」

山本は子供たち二人に向き直る。

山本：「じゃあ、今度はカシオペアだ。見つけられるかな？」

舞：「簡単だよ。あのWの形をした星座。」

かのん：「え、どれどれ？ うわ〜大きい！ 本で見たのと全然大きさが違う。すごい。」

3人は夢中になって星空探検を続けていた。

- - - - -

帰り道、3人は天文台から街に戻っていく。

かのん：「沙耶さんは美鈴と同じ病気だったんだ。だから、この話

は病院では言えなかった。」

舞　：「そうだったんだ。」

かのん：「沙耶さんは西棟の一番奥の部屋で最期は治療していたんだ。今はだれも使っていない部屋だけどね。だけど出てこれなかった。」

舞　：「そっか。」

かのん：「舞だけなんだ。」

舞　：「え？」

かのん：「舞だけが退院できたんだ。西棟から。沙耶さんもたかし兄ちゃんもダメだった。」

かのんがうつむいて話す。

舞　：「じゃあ、私が最初でたかし兄ちゃんを最後にすればいいんだ。」

かのん：「え？」

舞　：「これからはみんな退院できる。たまたま続いただけ。だって、みんな良くなってきてるじゃない。」

かのん：「そうだよ。みんな良くなってきてる。いつか、美鈴や淳君もつれてここに来れるよね。」

舞　：「うん。4人でまた星を見よう。」

車がいつの間にか舞の家の前に着いた。

舞　：「じゃあ、また月曜日病院で。今日はありがとう。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

月曜日。舞が草薙先生をつかまえる。

舞　：「沙耶さんって知ってますか？」

草薙　：「だれから聞いたんだ？」

舞　：「天文台の山本さんとかのんから。」

草薙　：「そっか。」

舞　：「骨髄移植したけど、うまくいかなかったって。」

草薙　：「そんなことまで話したのか？」

舞　：「ううん。でも、お話を聞いていたらそれしか考えられなかったから。」

舞は聞いた話から骨髄移植に結びついた経緯を草薙に話した。そして骨髄移植の成功率もどこで調べたのかわからないが草薙に告げた。

草薙　：「相変わらずだな。舞ちゃんは。」

舞　　：「美鈴もそうなるの？　同じ病気だよね。」

草薙　：「それが心配だったんだな。大丈夫。美鈴ちゃんは骨髄移植はしない。沙耶さんの主治医は私でなく3月までいた山田先生だったから詳しくはわからないが、美鈴ちゃんと沙耶さんは別の病気だ。沙耶さんは悪性リンパ種だった。治療法が似ていただけだ。」

舞　　：「よかった。美鈴も骨髄移植するのかと思った。成功率低いから心配しちゃった。」

草薙　：「美鈴ちゃんは、すでに寛解している。そして強化治療に入っている。5回のうち4回終わりあと一回だ。そうすれば退院できる。骨髄移植をする必要はない。心配することはない。」

舞　　：「ありがとう。安心した。」

そういつて、院内学級の部屋に舞は向かっていった。

その姿を見送りながら草薙はつぶやいた。

草薙　：「成功率30%以下。まったくどこからこんな数字引つ張り出すのか。ちゃんとした数字なんて出てないのに。でも、当たらずしも遠からずか。なるべくなら西棟の一番奥の無菌室はもう使いたくないものだな。」

つづく

注意書き

この物語では舞ちゃんの世界は2003年くらいの時代設定です。そのため、骨髄移植の成功率がまだ低かったころのお話です。現在（2010年）では、医学の進歩が急速に進み、成功率も格段と上がっています。ですので成功率30%も昔の話、移植を行った無菌室から出てこれないのも今ではほとんどない昔の話です。

4 - 3 院内感染（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 3 ・院内感染

12月に入りイチヨウの木も大分色づいてきたある日のことだった。舞は院内学級ではなく、東棟の大部屋で物語を読んでいた。

つかさ：「舞ちゃん、珍しいですね。東棟で物語読むなんて。いつもは院内学級の部屋が多いのに。」

舞：「うん、たまにはね。それに今日は冬ちゃん料理学校で来ないからね。」

いつもは冬子が東棟の子供達、特に就学前の子供達を相手に遊んでいる。

東棟の子達は短期入院が多いので、院内学級に転籍することはない。それで、冬子がボランティアでちょっとした勉強を教えたり、小さな子供達の相手をしている。

つかさ：「響子お姉ちゃんと一緒に料理学校なんですよ。冬ちゃん。」

舞：「そうなんです。ある意味怖いですよね。」

つかさ：「先生大丈夫か心配ですよね。」

あの二人が料理学校に通う意味が良くわからない。単に親友二人が共通の趣味で親睦を深めようというのだろうか、他の受講生に迷惑じゃないだろうか？ というか、先生も迷惑してないだろうか。そう、舞は思った。

舞　：「二人で、先生いじめてないか心配です。『冬子この材料ならもつとおいしく作れます』とか『ふくん。この程度で先生できるんだ』とか言いそうで怖いです。」

つかさのいとこである響子の料理は飛びぬけている。特に中華料理は絶品である。一方、舞の母である冬ちゃんこと冬子は調理師学校出身の元プロで一度食べた料理の味をそのまま再現できる能力を持っている。下手なレストランよりもおいしい料理ができる。特に洋食系はめちゃくちゃ得意である。

後ろから松井先生がひょっこり現われる。

松井　：「料理学校に行ったほうがいいのは、いとこのほうだよな。」

顔を真っ赤にしてつかさが怒る

つかさ：「松井先生、ちょっとひどくないですか。確かに私は自信がないですけど」

舞　：「そうだよ、先生それセクハラだよ。」

松井　：「悪い悪い。でも、つかささんの魅力は料理ではないからな。そんなの気にならないよ。」

つかさ：「いまさら、フォローしても遅いです。」

松井先生とつかさんが話している間、舞は一人の女の子のしぐさが気になっていた。昨日、入院してきた女の子だった。ちょっと、熱っぽい雰囲気で背中を掻いている。その捲り上げられた背中を見

て舞の顔が引きつる。

舞　：「松井先生、ちょっと。」

松井　：「どうした。舞ちゃん。」

舞は松井先生に耳打ちした。

舞　：「（あの、今日入院した女の子だけど水疱瘡じゃない？）」

松井　：「え！」

水疱瘡は非常に感染力の強い病気だ。でも、子供がかかる分には症状は重症化せずに一週間もすれば治る。しかし、それは健康なときにかかる分にはだ。病院の中で感染するとそうは行かなくなる。

松井　：「つかささん、あの子を連れて診察室に。それと、舞ちゃん、草薙先生に話して。あ、そして、舞ちゃん、絶対に西棟に入ったり、西棟に入院している子に会うな。」

舞　：「わかってる。そんなこわいことしない。」

舞はそう言つて西棟のナースセンターに駆け込む。

舞　：「草薙先生を至急呼んで。それと、クリーンフロアの緊急封鎖を」

看護師：「どうしたの？　急に」

舞　：「東棟で水疱瘡の疑いのある子が見つかりました。」

看護師の顔が引きつる。

看護師：「わかったわ。すぐ手配する。」

幸い、院内学級に3人はいなかった。それぞれ病室のようだ。

騒ぎに気づいて、美鈴が病室から出てくる。

舞：「だめ〜。外に出ちゃだめ。私も濃厚接触者だから、会っちゃだめ！」

看護師が慌てて、クリーンフロアに入り、美鈴を奥に連れて行く。

舞：「ふう。」

舞がため息をついていると草薙先生が現われた。

草薙：「ちゃんと診断した結果、水疱瘡なのか？」

舞：「いいえ、表情と背中 of 発疹を見て私が松井先生に言いました。」

草薙先生の顔が引きつる。

草薙：「舞ちゃんがそう判断したのなら確度高いな。ところで、舞ちゃん、水疱瘡の予防接種を受けてる？」

舞：「ええ、受けてます。ボランティア始める前に祐美子さんに確認しました。」

草薙　：「ふう、ひとまず安心だ。濃厚接触者が抗体を持ってくれれば助かる。よし、とりあえずこのフロアの医師、看護師、ボランティア含めて抗体チェックを行う。」

看護師　：「そんな大騒ぎしないで松井先生の診断結果でてからでも遅くありません？」

草薙　：「ばかやろ、この病棟における水疱瘡の院内感染は致命傷なんだよ。免疫抑制している西棟の患者に移ったら重症化、下手すれば死ぬぞ。」

診断結果が出た。やはり、水疱瘡の疑いが濃厚だった。

松井　：「さすが、舞ちゃんだよ。良くぞ見抜いてくれたって感じだ。」

舞　　：「でも、発疹があるようじゃもう周りに感染してるかも。」

草薙　：「大丈夫だ。あと、二日以内に抗体陰性の子供や先生達にワクチンを打てば発病しない。だから、抗体検査を急いでるんだ。問題はワクチンを打てない、美鈴ちゃんと淳君だ。」

舞　　：「かのんは？」

松井　：「かのんちゃんは大丈夫。もちろん移るといけないけど、免疫抑制していない。免疫抑制していなければワクチンは打てる。」

ある意味、かのが必要以上に西棟にいるのが幸いしている。けど、後の二人が問題か。

草薙　：「とり会えず、抗体の確認を急いでやろう。応援の先生も募る。」

舞　　：「ごめんなさい、私何も出来ない。」

草薙　：「気にするな。でも、早く医療免許とって俺達を楽にしてくれ。」

舞　　：「うん。」

何十年後になるかわからないがその日を期待してくれるのが舞はうれしかった。

- - - - -

抗体検査の結果が出た。舞や草薙先生、松井先生、つかさんは陽性だった。つまり、水疱瘡には移らない。だけど、美鈴と淳君とかのんは陰性だった。つまり、移る可能性があるということだ。

松井　：「淳君と美鈴ちゃんが陰性なのはつらいですね。」

草薙　：「しかし、その二人に接触している人たちが陽性なのは不幸中の幸いだ。特に舞ちゃんの陽性にはホッとしたよ。」

舞　　：「万が一陰性だったら？」

草薙　：「下手すると、小学生卒業までボランティア禁止。」

舞　　：「!」

草薙　：「まあ、そうならないように舞ちゃんには各種予防接種を受けてもらうとか、学校で風邪が流行ったらボランティア自粛してもらうとかしてるから大丈夫だけだな。」

舞がホツとする。

草薙　：「とりあえず、東棟の陰性の子供達はワクチンを打とう。かのんちゃんもだ。それと、西棟担当の看護師で陰性の人はワクチン接種後、一週間の出勤停止。それで様子見だな。」

舞　　：「美鈴と淳君は?」

松井先生と草薙先生が顔をしかめる。

松井　：「淳君にはプログリンを投与する。ワクチンを打てないからな。美鈴ちゃんは・・・」

草薙　：「どうする。」

松井　：「ワクチンをもってぬほか。やはり高力価プログリンの投与すね。クロアシビルでウイルスの増殖を抑える手がありますが、回復期にありますので免疫そのものを活性化するほうがいいです。」

草薙　：「うん、ただし、美鈴ちゃんは骨髓抑制期同様、部屋のドアを閉めて面会謝絶状態まで持っていこう。可哀想だが、準無菌室レベルまであげて万全をきそう。」

- - - - -

次の日から戦いが始つた。とりあえず、ワクチンの接種から始つた。他の部局の応援ももらい、対応している。

舞　：「水疱瘡にかかつた女の子は？」

松井　：「感染病棟の個室に移してる。病状そのものは特に普通で問題ない。」

舞　　：「それはよかつた。美鈴たちは？」

つかさ：「美鈴ちゃんと淳君は事情を理解して大人しくしています。特に美鈴ちゃんには部屋からも出れないのに『慣れてるわ』って大人しくしてます。ただ・・・」

舞　　：「ただ？」

つかさ：「かのんちゃんは怒ってます。ものすごく不機嫌です。」

舞　　：「やつぱり・・・」

つかさ：「別に水疱瘡移つたって私は大丈夫。そもそもなんで、わたしがクリーンフロアなのよ』って怒ってます。」

舞　　：「あちゃ〜。しょうがないなあ。」

草薙　：「心臓に負担かけるってわかつてないな。わがまま言つと

「一時外泊取り消しって伝えてくれ。」

つかさ：「はい。でも、みんな舞ちゃんに会えないのを寂しがります。」

舞：「・・・」

草薙：「ドア越しで会ってあげてくれないか。少しは気が休まるだろう。」

舞：「うん」

かのんと淳君がクリーンフロアの入り口まで来た。かのんが何か言っている。「舞もラインベルク症候群再発してこっちに来なさい。」って言ってるみたいだ。

舞：「無茶言わないでよ」。再発しても、キロニーネ一錠渡されるだけで入院しないし、入院しても西棟には入れないよ。」

かのんが怒ってる。気持ちの問題だとか、友達がいないとか言ってるようだ。

だけど、こればかりはどうしようもない。ドア越しに紙芝居をしたが、全然面白くなかったようで、かのんなんか途中から横向いていた。

感染発覚二日目はそのように過ぎて行った。でも、本当の危機は次の日からだった。

3日目の朝、舞は家を早く出て学校に行く途中、病院に寄った。

松井：「ええ？ 子供がインフルエンザにかかって今日は来れない？ 2人目だよ。この緊急事態に子供が風邪ひいたからって休む看護師ってなんだよ。」

舞：「まあ、まあ。松井先生。」

草薙：「いや、賢明な判断だ。万が一、看護師が感染して、院内に持ち込んだら大変だ。この状況だからこそ正しい判断だ。」

松井：「確かにそうですが。舞ちゃん、学校でインフルエンザ流行ってる？」

舞：「ううん。でも、幼稚園や保育園は流行ってるみたい。」

つかさ：「そういえばいとこの響子お姉ちゃん言っていました。クラス閉鎖だって。」

松井：「かゝ。そういえば休んでる二人は子供が保育園だったな。」

草薙：「東棟の面会制限を加えないとな。ご家族には申し訳ないが、東棟も就学前の子供の面会を制限してくれ。」

西棟はもともと未就学児の面会は許されていない。

草薙：「舞ちゃん、学校のほうでインフルエンザが流行りだしたら教えてくれ。その場合は12歳未満の面会制限まで加える。」

舞　：「わかりました。」

そういつて、舞は学校に向かった。

学校が終わり、舞は病院による。そこは、疲労困憊の松井先生とつかささんたち看護師の方々がいた。

舞　：「どうしたんですか？」

松井　：「水疱瘡の感染者が出た。」

舞　：「ええ？　だってワクチン打ったじゃないですか。」

草薙　：「それが、全員ではないんだよ。あくまで患者は任意での接種なんだ。それで、ワクチン接種を拒否された患者が2名いる。」

つかさ：「別に、水疱瘡なんて昔から子供のかかる病気なんだから、ワクチンなど打たないでかかったほうがいいって。」

舞　　：「水疱瘡のワクチンなんて安全じゃないですか。なんで、打たないんですか。」

草薙　：「万が一を考えてだ。ワクチン打つよりも水疱瘡で死ぬ確率のほうが高いのだが理解してもらえなかった。」

松井　：「まったく、自分勝手すぎる。ワクチンを打つのは自分のためだけでなく、他人に感染しないようにするためなのに。」

草薙　：「しかたがない。まあ、その二人は申し訳ないが感染病棟に隔離させてもらった。これで、ワクチンを打っていないのは美鈴ちゃんと淳君だけだ。」

舞　　：「ふたりは大丈夫？」

松井　：「ああ、感染していない。不自由な環境でも我慢強く、文句いわないで耐えている。」

舞　　：「二人ともすごいよね。プログリンの筋肉注射だってすごい痛かったはずなのに。」

松井　：「美鈴ちゃんは『マルクに比べれば痛くも何ともない』って我慢してました。」

舞は美鈴のことを思うといたたまれなくなった。

舞　　：「で、もう一人のわがまま娘は？」

つかさ：「昨日より大人しいけど、不機嫌です。」

舞　　：「やっぱり・・・。」

帰り際、昨日と同じようにドア越しで話したがやっぱり不機嫌だった。

.....

感染発覚後から4日目。舞は午後から病院に行った。

昨日までの雰囲気とちがい、なにか混乱しているような気がした。

松井　：「人が足りないんだ。看護師が休んでいて、看護業務が行き渡らない。だけでも、他の部局も忙しくてこれ以上人がだせないんだ。」

つかさ　：「だんだん、東棟の入院患者さんもいらいらして来てます。」

舞　　：「私、手伝うよ。何か出来る仕事ない？」

松井　：「ありがとう。でも、今足りないのは体力がいる仕事なんだ。舞ちゃんには厳しい。」

つかさ　：「今、足りないのはベットメイキング、部屋の掃除、食事の配膳、下膳、車椅子やストレッチャーの移動、患者さんの入浴補助、カルテや検査物を運ぶ人なんだ。いわゆる看護助手の人だ。」

松井　：「尚且つ、この病院とこの小児病棟を熟知している人だ。」

つかさ　：「そんな人、いるわけないでしょ。」

舞　　：「・・・」

舞は一人の女性を思い浮かべた。

舞　　：「一人いる。多分二人分くらいの仕事をする。」

つかさ　：「だれ？」

舞　：「冬ちゃん。」

松井　：「そ、そうか、その手があるじゃないか。彼女ならこの病院のこと熟知している。」

つかさ：「でも、忙しいでしょ。」

舞　：「昨日まではごたごたしてた。でも今日からは暇なはず。ちよつと電話かけてみるね。」

少したつてから冬子が現われた。

冬子　：「おうおうおう、お天道様はだませても、このお星様吹雪はだませませんぜ。水疱瘡のウイルスども年貢の納め時だぜ。ど〜ん。」

自分で効果音をいれて登場する。

冬子　：「私が来たからには皆さん安心です。後は任せておいてください。」

あっけにとられる一同だった。

が、早速、看護助手の制服に着替えてあつという間に東棟に行き仕事を始める。誰から指示を受けるわけでもなく、自ら判断して進めていく。

冬子　：「あ、着替え手伝いますね。はいよしよし。」

冬子：「診察の間にベッドきれいにしておきますね。」

冬子：「舞ちゃん、ここ掃除しておいてください。」

冬子：「このカルテはレントゲン室に持っていけばいいですね。」

冬子：「大丈夫。痛くないです。冬子が抱っこしてて上げます。」

あつという間に的確に効率よく仕事が進んでいく。一気に今まで滞っていた作業が片付き始める。

松井：「しんじらんね。舞ちゃんのママすごいぞ。」

舞も自分自身信じられなかった。

- - - - -

次の日、冬子は朝から病院に来て、仕事をする。昨日と比べて、今日は同僚の看護助手の人たちに指示をしている。

看護助手の人たちもその自ら率先して働く姿と的確な指示を見て文句をいわない。

そのちよこまか病棟内を動く姿は病棟の名物となった。

そして、看護助手だけでなく、看護師やはたまた先生まで冬子の指図に従い始めた。

冬子：「松井先生、奥から3番目の子をちよつと見てあげてくだ

さい。」

冬子：「つかさちゃん、入り口の子、点滴外れかけて痛そうです。見てあげてください。」

でも、だれもそのことに文句を言わない。

冬子：「もう少ししたら、潜伏期間がすぎます。そうしたら、元に戻ります。頑張りましょう。お守りにこの冬子お手製のお星様のストラップあげます。元気出しましょう。」

冬子はフェルトでできたお星さまストラップを渡す。昨日家で作ってきたものだった。

冬子：「先生に看護師のみなさん、騒ぎが収まったら健一さんのレストランで打ち上げやりましょう。冬子がよりに腕をかけて料理作ります。この前、料理学校で覚えたメニューだします。さあ、がんばりましょう！」

いつの間にかみんなを元気づけ仕切りだす。冬子パワーは衰えをしらなかった。

舞：「パパが言った。何か一つに夢中になった冬ちゃんのパワーは信じられないって。不可能も可能にするって。」

つかさ：「そういえば、響子おねえちゃんが言ってたけど、高校の学園祭の時、一人でお星様ぬいぐるみを200個作って売りさばいたとか。」

草薙：「ああやって、みんなに元気を配っているのか。元気の源

って感じだな。」

みんなが感心してうなずく。

次の日、さらに看護師や看護助手で休む人が増えた。未就学児の間でインフルエンザと水疱瘡が猛威をふるっている。

どんどん仕事が増えていく。一人ひとりにかかる負担が増えていく。だけど、ギリギリのところまで踏ん張っている。なぜなら、冬子が嬉々として、さらにパワーアップして、驚くべき効率で片っぱしから対処していくからだった。

松井：「まるで『せんたくかあちゃん』見てるみてえ。」

舞：「せんたくかあちゃん？」

松井：「有名な絵本だ。せんたくが大好きなたくましくて『みんなかかってこい』見たいなお母さんがたまった洗濯物を片っ端から洗濯していく絵本さ。どんどんどんどん洗濯物の依頼が増えていくんだけど、いやな顔一つ見せず、『まかせなさい』っていつて洗濯していくんだ。すげえ〜かつこいいんだ。」

松井先生が目を真っ赤にして話をする。

「今、小児病棟に『冬のかあちゃん』が現れている。『冬のかあちゃん』が危機を救ってる。」

この病院では人気病棟の看護師達には称号をつけて呼ぶ習慣がある。小児病棟は「マザー」だ。そして、冬子はいつのまにか「ウインターマザー」「冬のかあちゃん」と呼ばれ、病院中の噂になっていた。

.....

感染発覚1週間後。ようやく水疱瘡の騒ぎもおさまった。

冬子：「冬子、こんなにもらっても良いんですか？」

冬子はこの一週間働いた分の給料を見てびっくりした。

松井：「ええ、これでも少ないくらいです。何せ、この小児病棟の危機を救ったんですからね。院長からの金一封も入ってます。」

草薙：「おかげさまで、水疱瘡の感染も広まらず、インフルエンザで休んでいた看護師も戻ってきました。ありがとございました。」

冬子：「いえいえ、冬子お役に立ててうれしいです。」

緊急閉鎖されていたクリーンフロアも開放され、かのんたちも出てきている。舞と久しぶりに院内学級で遊んでいる。

つかさ：「冬子さんパワー、本当にすごかったです。」

冬子：「そんなに褒められると、冬子照れてしまいます。そうそう、これみんな食べてください。今、紅茶入れますね。」

冬子は焼いてきたクッキーをみんなの前に差し出して、紅茶の用意をする。

みなんでおいしい手作りクッキーを感心しながら食べた後、松井先生が冬子に提案する。

松井：「どうです。冬子さん、准看護婦目指しませんか？　ここで働きながら夜学に通うことも出来ます。昼間の看護学校でも、授業は午前中だけです。主婦業と両立できると思います。このままボランティアだけというのはあまりにもったいないです。」

冬子：「ありがとうございます。冬子にはとても魅力的に感じます。でも……」

松井：「でも？」

舞：「ママには夢があるんだよね。」

クッキー目当てにいつの間にか舞が院内学級の部屋からきて話に割り込んだ。

松井：「夢？」

冬子：「冬子、将来の夢があります。ある資格を取りたいです。そのためには大学を卒業しなければなりません。今、通信制の大学に通っています。なので看護学校は難しいです。」

松井：「そうですか。ちょっと残念です。冬子さんならいい看護婦になれると思うのですが、やりたいことがおありなら致し方ない

ですね。まあ、大学卒業後もう一回考えられるのもいいでしょうし、でも、大学頑張ってください。」

松井先生は未練たっぷりに話す。

草薙：「大学でないと取れない資格を取って、どんなことやりたいのですか？ ヒントだけでも。やっぱり料理関係ですか？」

冬子：「料理関係でなく、医療関係です。えっと笑わないで聞いてくれますか？」

そう言つて、冬子は自分のやりたいことを少し話した。みんな笑わなかった。

草薙：「すごい。もし本当になったら、看護師になるよりも助かる。」

松井：「でも、それを実現するには確かに大変だ。普通は無理だ。」

つかさ：「でも、冬子さんならできてしまいそう。すごく楽しみです。」

舞：「うん、ママなら絶対なれると思う。この1週間みてあげたためてそう思った。」

一同うなづく。

冬子：「みなさん、ありがとうございます。さ、そろそろ、遅くならないうちにお暇しましょう。舞ちゃん一緒に帰りましょう。あ

きらさんが一週間ほったらかしで寂しってます。」

舞　：「うん、この1週間、パパちょっとかわいそうだったからね。」

そう言って、「冬の母ちゃん」は帰っていった。後にさわやかな余韻を残して。

つづく

4 - 4 ・クリスマス（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 4 ・クリスマス

舞　：「美鈴、入ってもいい？」

美鈴　：「うん、どうぞ」

12月25日のクリスマスの日、舞は美鈴の病室を訪れた。

美鈴　：「かのんや淳ちゃんも呼ぶ？」

舞　：「ううん、今日は呼ばないで欲しい。美鈴と二人で楽しみたいから。」

美鈴　：「？　どうしたの？」

舞　：「これ、もってきたん。」

舞はケーキとポテチを差し出す。

美鈴　：「わく、おいしそう。だったらやっぱり二人を呼ぼうよ。」

舞　：「だめなの。食事制限があるから。このケーキはバターケーキだから美鈴は大丈夫。」

美鈴　：「あ」

舞　：「二人に塩分はダメ。淳ちゃんはさらにたんぱく質はだめ。かのんはケーキ大丈夫と思うんだけど、お菓子は病院が出すお菓子しかダメでしょ。だから、二人でこっそり。」

美鈴　：「でも、二人に悪いよ。」

舞　　：「美鈴だって食べられる時期と食べられない時期があるよね。だから、食べられる時期はしっかり食べないとね。」

美鈴　：「うん……。」

舞　　：「年が明けて少ししたら、最後の治療に入るじゃない。そうなるよ。また、あえなくなるでしょ。だから、二人でクリスマスのお祝いしよう。」

美鈴　：「うん、ありがとう。」

ケーキを食べながら二人はたわいもない話をする

美鈴　：「この前、ひかるちゃん来たよ。」

舞　　：「うん、見たいだね。どうだった？」

美鈴　：「目、そらしながら、『美鈴ちゃんファイトです』って言うてくれた。」

舞が頭を抱える。

舞　　：「ひかるもしょうがないなあ。すぐ見抜かれるってわかんないからね。」

美鈴　：「でも、お見舞いに来てくれるのはうれしい。」

舞　：「そのへんは難しいよね。普通の子なら、そう言って二度と来ないけど、ひかるはお見舞い続けるからね。」

美鈴　：「うん、そういう意味で安心してお話できる。裏表ない子だよ。」

舞　：「そう。とってもまじめだからね。少し融通利かないところもあるけど。」

美鈴　：「舞ちゃんに融通利かなくて言われるのって相当だよ。」

舞　：「おや、おなかいっぱいですか、美鈴さん。じゃあ、ケーキは片付けましょうか？」

美鈴　：「舞ちゃん、意地悪。」

二人は笑いあった。

美鈴　：「ところで、不思議な風景の世界のほうはどう？」

舞　：「美鈴だけだよ。あの世界信じてくれるの。かのんとか淳ちゃんとか、空想物語だと思ってるしね。」

不思議な風景の世界とは公園の端から舞が時々呼ばれる世界である。多分夢でも見ているのだろうとみんな信じていない。舞自身も夢でないとは断言できない世界である。

美鈴　：「だって、本当にあつたら面白いじゃない。詩音ちゃんだっけ？　舞ちゃんと同じ子がもう一人いるんなんで。すごい素敵。」

そして、その不思議な世界はパラレルワールドにつながっていて、舞と同じ子がやっぱり不思議な光景の世界に呼ばれているらしい。この世界とほとんど同じ世界が別の場所にあるらしい。

舞　：「美鈴も半分信じてないでしょ。」

美鈴　：「そ、そんなことないよ。」

舞　：「どうだか。でも、少しづつわかってきたよ。同じところと違うところがあるみたい。」

美鈴　：「どんなところが違うの?」

舞　：「うん、例えばね。向こうには草薙先生がいないの。」

美鈴　：「え?」

舞　：「死んじやってるの。」

美鈴　：「ええ〜。あんな良い先生いないんじゃ、向こうは治る病気も治らないじゃない。」

舞　：「その代わりに、番井先生がいる。こっちの世界では死んでるんだ。」

美鈴　：「不思議。」

舞　：「うん、向こうの私もわけわからないって言うてる。」

美鈴　：「へへ、そうなんだ。不思議だね。他には？」

舞が言いよどむ。

舞　　：「向こうでは、冬ちゃんがママじゃないんだ。」

美鈴　：「え？」

舞　　：「向こうでは私を生んだ和恵ママが生きてるんだ。」

美鈴　：「ご、ごめんなさい。つい調子に乗って聞いちゃった。」

舞　　：「ううん、構わない。去年までだったら、すごいショックできっと泣いてたと思うんだけど、それ知っても、『ふん』って感じだった。」

美鈴　：「舞ちゃんのうそつき」

舞　　：「え？ うん、ちょっとだけやきもち焼いた。でも、ちょっとだけだった。だって、冬ちゃんがママじゃないんだよ。私はそれはやっぱり嫌。」

美鈴　：「『桜祭り』だよね。」

舞　　：「うん。でも、不思議だったのはそのことノートに書いたら、『冬ちゃんがママなんてうらやましい』って返事が書いてあったの。本当のママがいるのにな。」

美鈴　：「あはは。でも、じゃあ、向こうにも冬ちゃんがいて、その子は冬ちゃんを知ってるってことだよな。」

舞　：「うん、そういごと。」

美鈴　：「じゃ、私もいるんだよね。」

舞　　：「え？」

美鈴　：「だって、舞ちゃんにも冬ちゃんにも向こうに同じ人がいるんだよね。私にいてもおかしくないよね。」

舞　　：「あ、考えたことなかった。でも、そうだよ。いるはず。そうだよ。私なんで気づかなかったんだろう。」

美鈴　：「向こうの私も同じ病気かな。」

舞　　：「あ、私も向こうの私も同じ病気だから、可能性あるよね。」

美鈴　：「じゃあ、きつと、頑張ってるんだろうな。今ごろ、こうやって向こうの舞ちゃんと一緒にケーキ食べてるのかな。治療頑張ってるのかな。」

舞　　：「きつとそうだよ。今度聞いてみるね。うん、ちょっと面白そう。もしかしたら特效薬かなんかで治ってるかも知れないよ。」

舞は自分のキロニーネの経験を当てはめてみた。

美鈴　：「ええ、そうしたらそのお薬もらってきてね。」

舞　　：「うん、わかった。」

舞はそう言つて不思議な風景の世界に想いをはせた。

- - - - -

午後からは舞は院内学級でクリスマスの飾りつけを手伝った。

院内学級の正式なクリスマス会は先週終わっている。本当のクリスマスのは看護師やボランティアの方が忙しい。だから、その前に行うのが通例だ。そのときには木ノ内先生や松井さんたちお医者さんとか看護師さんとかがいっぱいいいた。

でも、このクリスマスにも入院している子供たちはいっぱいいる。だから、今日はつかさんと冬ちゃんと舞が中心になって、ささやかなクリスマス会を開こうとしている。

冬子：「特別に病院からお菓子をもらってきました。」

厳しい食事制限のあるかのんと淳君でも食べられるように冬子が病院からもらってきた。

冬子：「病気が治れば冬子がおいしいご飯やお菓子を作ってます。それまではがまんです。」

みんな、おとなしくうなづく。ただどのんはぼそつと言つ。

かのん：「いいなあ、舞は。毎日、おいしい冬ちゃんのご飯食べられて。」

舞 …「うん。」

舞は悪びれず素直に返事する。

かのん：「やだやだ。少しは『そうでもないよ』とか遠慮すべきよ。」

舞 …「じゃあ、『そんなことないよ』」

かのん：「今更遅いつて。」

淳 …「あはは、相変わらずだよな。二人は。」

かのん：「なによ、淳。淳のくせに生意気よ。」

美鈴 …「まあ、まあ。」

つかさ：「そういえば、今日はとっておきの出し物があるとか。」

冬子 …「はい。隣の三条さんがお見舞いに来てくれます。」

つかさ：「三条さんって、あの有名なバイオリニストの三条夫妻？」

冬子 …「そうです。演奏してくれるそうです。」

つかさ：「なんで、冬子さん、黙ってたんですか！ みんな呼んでこないよ。」

冬子 …「だめです。お忍びです。クリスマス休暇で帰ってきてる

ので、たまたま来てもらっただけです。」

つかさ：「そんな、もったいなさすぎます。」

冬子は首を振る。

冬子：「草薙先生と松井先生くらいにしましょう。それと木ノ内先生も響子先生も来ます。」

少しして木ノ内先生と響子先生がくる。そして、三條夫妻が来る。草薙先生と松井先生も来る。

三條夫妻がみんなに挨拶をする。だけど、院内学校の子供たちは、三條夫妻のすごさを理解していないからだのおじさんおばさんが来たとは思っていない。大人たちのほうが緊張している。三條夫妻にはくるみという一人娘がいる。優秀な科学者でヨーロッパに行っている。天才演奏家と天才科学者。一家そろっての天才である。

2曲演奏したのち、3曲目は響子先生が院内学級のエレクトーンと夫妻のバイオリンと協奏する。簡単な曲で夫妻のほうが合わせてくれた。

夫妻は、騒ぎが大きくなる前に退出した。

美鈴：「向こうの私もこうやってバイオリンとエレクトーン聞いているのかな。」

舞：「うん、きっとそうだよ。おんなじ世界なんだから。向こうの私もきくと聞いていると思う。」

美鈴　：「会つてみたいな。」

舞　　：「うん。元気になったら会いに行けるよ。」

三条夫妻の余韻余韻の残る院内学級の部屋で響子先生が提案した。

響子　：「せっかくだから、このエレクトーンで「きよしこのよる」弾くからみんなで歌いましょう。」

みんなできよしこのよるを歌う。病気が治る願いを込めて。

.....

詩音　：「くしゅん。」

ポツチ：「どうしたの？　風邪？」

詩音　：「ううん。ちょっと寒気がしただけ。」

詩音とポツチが隣の三条家のサンルームでお茶をしている。今日は手作りケーキと手作りポテトチップに紅茶である。

ポツチ：「そうだよね。これからのことと思うと体震えるよね。」

詩音　：「本当。お菓子作りは最高に上手なのに。」

ポツチ：「天は二物を与えずよね。」

くるみが楽譜を持って部屋に入ってくる。

くるみ：「クリスマスのためにピアノ練習したの。5曲も練習したの。一生懸命したの。ふたりとも聞いてくれるよね。」

青ざめる二人。いくら練習したってくるみのピアノがまともに聞けるわけではない。

ポッチ：「（じ、5曲も?!）」

詩音：「（に、逃げるわよ）」

ポッチ：「くるみさん！そこにつちのこいるー！」

くるみ：「え？どこ?」

(おいおいおい)

二匹のはぐれメタルはその場から逃げだした。

じじく

4 - 4 ・クリスマス（後書き）

今年はこの話でおしまいです。

4章の続きは年が明けたら再開します。そして、季節感を合わせるため当面の間2〜3週間に一回の投稿ペースになります。ごめんなさい。

4・5・アーキテクト（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 5 . アーキテクト

年が明け1月になった。

私は医療の勉強が面白くてしょうがなかった。

病気にも色々種類があり、それぞれに治療方法と薬がある。まるでパズルゲームのような面白さがあった。そして、現実に私の周りにはいろいろな病気の子がいて、どうしたら治るかがわかる醍醐味があった。

私は、草薙先生から本の借り夢中になって読んだ。医学の本、薬の本。難しいけどとても面白かった。

草薙 : 「舞ちゃん、楽しそうだね。」

舞 : 「うん、すごく面白い。勉強ってこんなに楽しいとは思わなかった。」

草薙先生はにっこり笑ってくれた。良くやってるって言うてくれるようにうれしかった。

私はあることに気づいた。不思議な風景の世界ではこちらの時間が流れないことだ。

不思議な風景の世界に行って、何週間もたっているにもかかわらず、戻ってくると1時間もたっていない。だったら、本を持ち込んで、どうしようもないくらい暇な不思議な風景の世界の生活を有意義に過ごすそうと思った。

だけど、不思議な風景の世界に持ち込めるのはなぜか本1、2冊だけだった。

前にリュックにいっぱい詰め込んだけど、持ち込めたのは1冊で、後は不思議な風景の世界の入り口にバラバラと置き去りにされていた。

1冊しか持ち込めなかったけど十分だった。難しい内容も何度も度も読み返して少しずつ理解できるようになっていった。それも、私にとって面白いことだった。

ふと、壁を見ると本棚があり20冊くらいの本がおいてあった。

舞　：「これって、詩音ちゃんが持ってきたんだよね。一体何回こっちに來てるんだか。」

私はあらためて本棚を見て感心した。

私は、ノートを置いてもう一人ここに来る私と同じ苗字の子と連絡をとりあうようになっていた。相手の名前は楠木詩音というらしい。対世界の自分だっていつてるけど、対世界がなにかもわからないし、自分と同じならなぜ名前が違うのかもさっぱりわからない。

やがて、時間が経過して自分の世界にもどる。

そうするとわからないところを草薙先生に質問する。暇なときは付き合ってくれるが、忙しいと「ぐぐぐ」といわれてしまう。

最初は何言っているかわからなかったけど、つかさんに聞いたらインターネットで調べることだということ、院内学級にあるPC

の使い方をつかささんに教わって調べ物をした。

そんなある日、インターネットで私は本にかかれていないことを発見した。

それはかのんの病気を治す最新療法だった。

舞　：「ねえ、松井先生、草薙先生、かのんの病気のことなんだけど。」

松井　：「どうした。なんか気になることがあるか。」

舞　：「アビニシオ阻害薬とか　遮断薬使えば治るんじゃない？」

松井　：「は？」

草薙　：「とうとう、先生の治療方針にまで口出しし始めたぜ、こいつ。」

口調とは裏腹に草薙先生はうれしそうだ。

かのんの心臓の主治医である秋本先生が呼ばれた。

秋本　：「舞ちゃん、その二つの薬は心臓に負担を掛ける薬なんだ。いかに心臓に負担をかけないかを考えるかのんちゃんの治療と真逆なんだよ。」

舞　：「でも、ここにコロンビアの先生がこの二つの薬を使って治したって書いてあるよ。なんでも、この薬は心臓の動きをゆっくりにすることで疲労を減らすんだって。」

そう言つて私は印刷した紙を渡した。

秋本　：「え？」

秋本先生はまじめに読み出した。

舞　　：「ほら、こつちには日本で行つた例もある。」

秋本先生の顔から笑顔が消えた。

秋本　：「ちよつと、調べてみよう。興味がある。」

そう言つて歸つていった。

松井　：「本当に治療方法調べたんだ。まだ、小学1年生だぞ。」

草薙　：「きたぞ」。舞ちゃんの時代が。」

草薙先生に誉めてもらいうれしかった。

数日後、秋本先生が小児病棟に来た。

秋本　：「舞ちゃん、あれから調べたんだが、アメリカで新薬が承認されたみたいなんだ。アーキテクトという薬なんだ。これがアビニシオ阻害薬と 遮断薬を混ぜたものなんだ。」

舞　　：「ええ！ 薬があるの？」

秋本　：「ああ、これが子供の拡張性心筋症に効くことがわかったんだ。それで、新薬として取り寄せて治験という形でかのんちゃん

に処方したいと考えている」

舞　：「じゃあ、治るの？」

秋本　：「それはなんともいえない。でも可能性がある。」

一週間後、取り寄せていたアーキテクトが届いた。

秋本　：「この薬は、副作用として動悸、めまい、心不全の可能性がある。だから、安静にすることが求められるんだ。だから、舞ちゃん、あんまり、かのんちゃんに体動かすようなことさせちゃだめだよ。」

秋本先生は私にそう注意をした。

そうして治療が始った。この薬、他にも飲むと気分が悪くなるなど副作用があったが一進一退だったかのんの病状は少しずつながらもよくなっていった。治療を始めてから2週間くらいたって検査が行われた。

秋本　：「心臓の大きさも54%と小さくなっています。それにBNPの値も40くらいです。まだまだ正常値とは言えないけど、急速に改善されています。」

秋本先生が、私たちに教えてくれた。

松井　：「そろそろ、一時退院かな。」

秋本　：「アーキテクトの処方に注意してくれば、一時退院も夢でないですね。まあ、舞ちゃんがそばに付いているから、いろいろ

サポートしてもらえば大丈夫かな。」

舞　：「すごい。かのん退院できるんだ。かのん喜ぶぞ。私もかのん助けるから、退院させてあげてください。」

その話をしてからすぐに、かのんが舞のところにくる。

かのん：「舞、ありがとう。舞のおかげで一時退院できるかも知れない。」

かのんがうれしそうに言う。

舞　：「よかったね。本当によかった。このまんま病気治るといいね。」

- - - - -

かのんが一時退院することになり、かのんの周りがあわただしくも楽しげになっていた。周りの入院患者の心情も考えて、なるべく抑えようとするが、自然に漏れてしまう。

最後の治療を終えて順調にいけばもうすぐ退院できる美鈴も、自分のそう遠くない未来とあてはめながら祝福する。院内学級の担任である木ノ内先生も声をかける。

木ノ内：「かのんちゃん、もうすぐね。それで、自宅療養中なんだけど、毎週、外来に検診に来るでよ。その時、院内学級に顔を出さない？　もしよかったら、元気な日で、都合がよければ、それ以外の日も院内学級に通級しない？　そして、落ち着いて、ゴールデ

ンウィーク明けぐらいに、普通学級にもどったらどうでしょう？」

草薙　：「それがいい、ゆっくりと治すのが一番だ。」

かのん　：「いや！　すぐに学校に行きたい。学校行くの夢なの。」

秋本　　：「でも、無理は禁物だよ。」

かのん　：「いきたい！　いきたい！　いきたい！」

先生たちがため息をつく。

舞　　　：「ねえねえ、　2月からでなく、3月から学校に行くのはどう？　給食も終わって、午前授業だけの時から参加するの。そうすれば、すぐに春休みだから、疲れなくても大丈夫。5月からだとなれるのが大変かも。」

木ノ内　：「うん、そうね。たしかにそうね。」

舞　　　：「それに、私と一緒にクラスなら私が付いてるから大丈夫。無理させないわ」

秋本　　：「よし、それなら、やってみるか。ただし、絶対に心臓に負担をかける運動はしないように。立って歩くのは厳禁だ。それと、舞ちゃん、アーキテクトの副作用は知ってるな。」

舞　　　：「うん、動悸、息切れ、心不全」

秋本　　：「その傾向が出たら、直ちに病院に連絡。舞ちゃんの学校まで駆けつける。」

こうやって、かのんの小学校行きが決まった。

- - - - -

かのんは緊張しながら初めての学校に登校する。

かのん：「すごいときどき。」

最初は木ノ内先生と一緒に保健室で待つ。その後、担任の先生が迎えに来て、木ノ内先生と一緒に教室に向かう。

担任：「大丈夫ですよ。みんないい子です。かのんちゃんのこと大歓迎してくれます。それに、楠木さんも同じクラスですから心配いりません。」

教室に入る。みんな、一斉に拍手をして向かい入れる。

かのん：「斎藤かのんです。みんな、よろしく願いいたします。」

車いすで教室に入ったかのんをみんな快く迎え入れる。車いすというわかりやすい姿であるため、病気であることが一目でわかり、温かい雰囲気にも包まれる。

担任：「みなさん、斎藤さんをよろしくお願いしますね。そうそう、斎藤さんは楠木さんの隣の席に座ってください。」

担任の先生の特別の計らいだった。

休み時間になり、子供たちはみんなかのんの周りに集まってくる。いろいろ質面攻めにあうけど、持ち前の明るさで答えていく。病気の子ということでもっと暗いイメージの子と思っただいたみんなは、明るい天衣無縫なかのんをみて、びっくりするとともにみんな好きになっていった。

特に、すぐに仲が良くなったのは神崎さんだった。

神崎　：「へ〜。かのんちゃんも星が好きなんだ。」

かのん　：「うん、大好き。今度、舞と一緒に天文台に行かない？」

神崎　：「うん、いくいく〜。」

そうやって二人は意気投合していく。

こうやって回復して学校生活に溶け込んでいくかのんを見て、舞は得意の絶頂だった。この世で治せない病気など存在しない。そう、舞は思い込んでいた。

つづく

4・6・タロットカード(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 6 ・タロットカード

淳　：「ねえ、舞ちゃん。僕はいつ頃退院できるんだろう。」

淳は院内病院にボランティアに来ていた舞に尋ねた。1月ももうすぐ終わり、2月に入る頃のことだった。

淳は腎臓病をわずらっている。

…5月くらい…

…でも、お医者さんじゃないから言えない…

舞　：「うーん、私お医者さんじゃないからね。わかんない。」

淳　：「でも、松井先生も舞ちゃんから診断のアドバイスもらってるじゃない。わかんないわけじゃないよね。」

小学生にアドバイスをもらう松井先生もどうだが、確かに舞ちゃんの見立ては外さない。

舞　：「でも、私、小学1年生だよ。そんなの無理だよ。」

淳　：「そっか。」

明らかにがっかりする表情を見せる淳。

淳　：「このまま、一生病院かな。」

舞　：「あり得ないわよ。第一かのんだって退院してるんだから、淳君も治るよ。」

淳　：「だから、いつ退院できるんだろ。」

堂々巡りだった。でも、草薙先生から、診断結果を患者や家族に言うのは禁止されている。いうわけにはいかない。

…こんなだったら、医療のことわかんないほうが楽。下手に知ってるから苦勞する…

そう思う舞だった。淳君の病気はI g a腎炎だから、食事制限を守らないとか変なことしない限りはそのうち退院できる。バラが咲き誇るくらいの時期の可能性が一番高い。

舞はそんな悩みを抱えながら例によって不思議な風景の世界に呼ばれていった。

しおんの部屋の中の机の上で変なものを見つけた。トランプみたいなカードだけど絵柄が違った。きれいな絵柄だった。そのカードに興味をもった舞は連絡帳にこう書いた。

舞　：「ちょっとかりるね。」

そうやって、借りてきたカードを冬ちゃんに見せる。

冬子　：「これはタロットカードというものです。占いに使います。冬子、タロットには詳しくないんですが一枚引いて出たカードで占うんです。」

舞　：「へ〜」

冬子：「舞ちゃん、興味ありますか？ 冬子、舞ちゃんのために1セット買ってあげましょう。」

舞：「え？ いいの？ ありがとう。」

冬子：「いいえ、礼には及びません。院内学級で使えば、きっとみんなも喜ぶでしょう。」

冬子は舞のために1セット買ってきた。

舞はさつそく院内学級にもっていき、見よう見まねで占いを始める。一枚引いて占うのだった。

淳：「舞ちゃん、僕がいつ退院できるか占ってくれる？」

舞：「うん、いいよ、でも、占いだから本気で信じちゃだめだよ。」

淳：「うん、わかってるよ。」

舞：「淳君は、えっと」

舞はカードを一枚引いてあたかも考えているふりをする。

舞：「5月か6月には退院できるでしょう。」

淳：「本当？！ 退院できるんだ。でも5月はちょっと先だなあ。あと3カ月か。」

でも、淳は納得して帰っていく。

今度は夢ちゃんがやってきた。夢ちゃんは今年に入って西棟に入院してきた中学生のお姉さんだった。

：夢ちゃんは美鈴と同じ白血病。でも、美鈴とは違って急性リンパ性白血病。だから、美鈴よりも治りやすく時期もはっきりしている…

舞が一枚引く。吊られた男の逆位置だった。

舞　：「うん。夢ねえちゃんは、えくと、ちよつと長いかな。

11月位と出ています。」

夢　：「え?! そうなんだ。でも、お医者さんと言ってることが一緒。舞ちゃんすごいかも。」

こうやって西棟の子を占っていたら、東棟の子供とお母さんがやってきた。この頃は、東棟の子もよくやってくる。去年と違い、舞やかのかんが退院したことにより、西棟は不治の病の子が入院するところというイメージが薄れ、それにより、院内学級にも東棟の子がよく来るようになった。

舞　：「えつと、2週間すれば退院できると出ています。」

舞　：「うん。1ヶ月くらいかかるかもしれませんが。先生は2週間と言ってますが、今の薬が合わなくて別の薬に変えて、ちよつと長くなるって出ています。」

そうやって、舞はカード占いのふりをしてどんどん診察していく。そして、実際、先生の見立てと一緒にだったり、その通りになるのだ

から評判が上がっていく。

しかし、とうとう、草薙先生の耳に入ってしまった。舞は草薙先生に呼ばれた。

草薙：「舞ちゃん！ やりすぎです！ 舞ちゃんのは占いではなく、診断です。」

舞：「ごめんなさい。」

松井：「舞ちゃん、勘弁してくれよ。薬が合わないとわかったなら、そつと、先に俺に言うのが約束だろう。」

草薙：「診断は医師しかできない。舞ちゃんのやっていることはいけないことだ。」

舞：「……」

つかさ：「まあまあ。そんなに舞ちゃんを責めなくても。舞ちゃんはみんなを喜ばせただけだったんだから。そうそう、舞ちゃん、何もちゃんと診断しなくても、タロットカードで占ってあげればみんな喜びますよ。西棟に入院している舞ちゃんがタロットの占い方知ってるみたいです。今度教えてもらったらいいです。」

舞：「本当？ 聞いてみる。」

舞は夢ちゃんに今回の話を正直に話した。

夢：「舞ちゃん、すごいよ。小学一年なのに診断できちゃうん

だ。それはすごいことだよ。でも、やっぱり、先生たちの言うとお
りだね。うん、私がちゃんとタロット教えてあげる。この前、占っ
てもらった時カードと占いの内容が違ったんでびっくりしちゃった。
ちゃんと占えるようになれば面白いよ。」

そうやって、夢ちゃんはカードを舞から借りてやり方を教える。

夢　：「タロットには東洋式と西洋式があるんだ。占いのやり方
が簡単な東洋式を教えるね。まず、カードを切ったら8枚のカード
を表から順にこんな感じで並べていくの。この形は世界樹っていう
んだ。そして、9枚目を引いたら表にするの。これが占いででてく
るカード。」

夢　：「このカードにそれぞれ意味があつて、そして、向きも重
要なの。ちゃんとカードが見えるのが正位置。反対に見えちゃうの
が逆位置。逆位置に出るとカードの意味と反対になるんだ。そして
22枚のカードの意味は。。。」

夢は舞にタロットのカードの意味を教え、カードでの占い方を教え
てあげた。舞は夢中になって覚えた。

そして、院内学級でも披露し始めた。

淳　：「舞ちゃん、僕、将来サッカーのJリーグの選手になりた
いと思っただけど、この病気でもなれるかな。」

舞　：「うん、ちょっと待ってね。あ、来年なれるって出てるよ。
よかったね。」

淳　：「舞ちゃん。それはちょっと。」

舞の占いは一時期の神がかりのようなところはなくなったが、それなりに楽しめ、院内学級でも人気の出し物となり、今でも入院した人はからなずやってもらう名物になっている。

つづく。

4・6・タロットカード（後書き）

詩音：「舞ちゃん、そろそろタロット返して。」

詩音は連絡帳にそう書いた。

詩音：「まったくもう。なんでも持ってっちゃうんだから。くるみエッセンシャルももっていったままだし。せっかく楽しみにしてたのにな。」

詩音は一人でぶつくさ言いながら、量子力学の本を仕方なしに読み始めた。

4・7・急性リンパ性白血病（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4・7・急性リンパ性白血病

冬の土曜日のことだった。

舞は朝から院内学級に向かった。ただ、院内学級に行く前に外来の待合室をわざわざ通って行くのがこの頃の習慣だった。

舞　：「見落としそうな子ないかしら。」

舞は、ある女の子に目が行った。中学生くらいの女の子だった。母親と一緒に待合室で待っている。

舞はその子の表情が気になった。熱がありそうだけど、高熱ではないみたいだ。別に咳とかくしゃみやみとかしてるわけではない。でも、けだるそうに母親に寄り添っている。

舞は気になってその女の子に声をかけた。

舞　：「お姉ちゃん、大丈夫？」

女の子と母親はびっくりした表情で舞を見た。

舞　：「私、楠木舞。おねえちゃんのお名前聞いてもいい？」

女の子：「赤井夢だけど。」

舞　：「そう、いいお名前ですね。そう、ちょっと手のひらを見せていただけますか？」

女の子は怪訝な顔をして手のひらを見せる。

舞　：「ありがとうございます。あのく、さしでがましいですけど、診察室に入ったら先生に『舞が気にしていた。』と言ってください。」

そついうと舞はそそくさとエレベーターのほうに歩いていった。

.....

外来医師：「うん。疲れから来る風邪のようですね。インフルエンザではないようです。お薬だしておきますから、ゆっくり養生してください。」

母親　：「あの、もう1週間も続いているんですけど、風邪ってそんなに長引くんでしょうか？」

外来医師：「その間、学校は？」

母親　：「部活は休んでますが、授業には普通に出ています。」

外来医師：「それは、いけませんね。ゆっくり養生しないと帰って悪化しますよ。少し、学校を休んで安静にしてください。」

母親　：「はあ。」

外来医師：「他に気になるところがありますか？」

医師は言葉とは裏腹にもう話は終わったとばかりにカルテに書きだした。

夢　　：「すみません、ひとつだけ。待合室で小さな女の子が来て、『舞が気にしていた』って言われたんですけど。」

もう診察が終わったとばかりにカルテに書きこんだ医師がびっくりして夢の顔を見る。医師だけでなく、看護師たちも一斉に夢のほうに振り替える。

医師は、落ち着きを取り戻し、ゆっくり言った。

外来医師：「少し、待合室でお待ちいただけますか？」

- - - - -

その後、あわただしく検査を行い、夢は即入院となった。検査結果に関しては父親も同席の上話をしたいと言われ、父親が急遽会社から呼び出された。両親同席の上、松井先生が説明をする。

松井　：「夢さんの血液を調べました。白血球がかなりの数あります。急性白血病の可能性が濃厚です。」

夢は先生が何言ってるのかすぐには理解できなかった。

母親　：「ちゃんと、検査してください！先週までこんなに元気だったのに白血病なんてありえないです！」

松井　：「お母さん、落ち着いてください。たしかにちゃんと検査

しましよう。まだ、疑いだけです。しかし、もし本当だったらちやんと治療しないといけません。大丈夫、今は白血病は治る病気です。」

そうして、即検査入院となった。夢は6階の西棟の個室に入院した。

- - - - -
- - - - -
2、3日後検査の結果が出た。

松井：「急性リンパ性白血病です。」

夢は何を言われたのかよくわからなかった。でも、自分が死ぬんだということは何となく理解した。両親も茫然としている。

松井：「幸いにして、発見が早かったです。普通はもっと悪くなつてから来られる方が多いです。」

母親：「あの・・・。」

松井：「ああ、この前も言いましたが、昔と違って白血病は治ります。治療率は9割あります。しかも、夢さんの白血病は比較的軽いほうです。ですから、あわてず、しっかり治していきましょう。」

夢と両親は少しほっとした。

松井：「ただ、治療には入院とそれなりに辛いものになります。我々医師や看護師もしっかりサポートしていきますので、一緒に頑張らしましょう。」

母親：「どれくらい入院する必要があるんでしょうか？ 一か月くらいでしょうか？」

松井先生が顔しかめて言いにくそうに言う。

松井：「半年から一年くらいでしょうか。もしかするとそれ以上です。」

母親：「そ、そんなにですか？ この子来年受験です。そんなに学校を休めません！」

松井：「お気持ちはわかりますが。今は治すことに専念しましょう。それに、入院の間、ずっとベットの寝ていなければ

いけないわけではないです。それに、勉強に関しては院内学級もありますのでそちらでフォローしていきましょう。」

父親：「本当に治るんでしょうか？」

松井：「治ります。夢さんには幸運の女神がついてるようです。たまたま土曜日にこの病院に来た。そこにたまたま舞ちゃんが通りがかった。そして、舞ちゃんが夢さんの病気に気づいた。これは奇跡です。」

母親：「まさか、彼女が病気を見抜いたんですか？」

松井：「はい。外来の先生が見抜けなかったことも見抜いちゃたんです。まあ、よくこの初期段階で見抜きました。」

母親：「信じられない。あの、ちゃんとお礼したいんですが。お

家はどちらなんですか？」

松井：「ああ、舞ちゃんなら毎日のようにこのフロアをウロウロしてますよ。なので、いつでも会えるので会ったときにでもお礼言えば大丈夫ですよ。」

- - - - -

治療が始まった。

松井：「今までは、はつきりと病名が分からなかったので、とりあえずステロカイドで様子を見ていました。これからは、この3つの薬を飲みます。これを4週間続けます。4週間後に再検査してみてください。」

そうやって治療が始まった。治療が始まって数日たつと、私は今までのけだるさが無くなった。

夢：「先生、大分楽になったんですけど。もう治ったんじゃないんですか？」

松井：「はは。よかったよかった。副作用もなく順調だね。でも、治ったわけじゃないんだ。入院した時は、悪い白血球がいっぱいだったんだけど、今は薬でその悪い白血球を退治したんだ。だけど、全部やつけたわけではない。ほっとくとすぐに悪い白血球が増えるんだ。だから、その悪い白血球を徹底的にやつつけないと治つたと言えないんだ。」

夢：「そうなんですか。」

松井　：「でも、調子よさそうだね。フロア内なら少し出歩いてもいいよ、部屋で寝てるばかりじゃ退屈だろう。ロビーと院内学級の部屋への出入りは許可しよう。」

夢　　：「院内学級？」

松井　：「ああ、この病院にある学校さ。入院している子供達用の学校だ。木ノ内先生が担任だ。後で話をしておこう。」

夢　　：「はい。」

松井　：「それと、その部屋にはぬしがいる。その女の子といる話とかするのも気が晴れていいだろう。」

夢　　：「主がいるんですか。」

松井　：「ああ、ボランティアで来ている女の子だ。」

夢　　：「もしかして、楠木さんですか。」

松井　：「ああ、そうだ。夢さんが待合室であつた女の子だ。」

その女の子は毎日、午後になると病院に現れた。そして、院内学級の部屋とこの西棟に出入りしている。そして、この西棟に入院している男の子とよく遊んでいる。

しかも、その子は水曜日になるとお昼ご飯と夕御飯を病院で食べている。

私は、その子たちと一緒にご飯を食べるようになった。

夢　：「舞ちゃん、どうして私が白血病だとわかったの？」

舞　：「えっと、白血病だとわかったわけじゃないの。ただ、顔が真っ白だったのと、手のひらが真っ白だったんで、ただの風邪じゃないなって思って、もしかして、血の病気、白血病とか悪性貧血とかと思って言っただけ。」

すごいと思った。

夢　：「舞ちゃん、何年生？」

もしかして、小さく見えても、実は小学校高学年、あるいは私と同じ中学生ではないかと思った。

舞　：「小学1年生だよ。」

夢　：「ええ？」

私は耳を疑った。

夢　：「うそでしょ。なんで、そんなに詳しいの？」

舞　：「え？　だって、もう1年以上この病院にいるもん。それは詳しくなるよ。」

そう言つて、舞ちゃんは彼女のこの一年の話をした。私はわかったようなわからないような感じだった。

夢　：「そういえば、もう一人女の子いるよね。確か私と同じ白血病のはず。その子はどうしてるの?」

舞　：「美鈴ね。今は骨髄抑制中だから、出てこれないの。でも、最後の治療だからそれが終われば退院するはず。」

夢　：「ふ〜ん。その子はどれくらい入院してるの?」

舞　：「もう、一年以上かな。」

夢　：「そうなんだ〜。私もそうなるのかな?」

舞　：「え? 病気は人それぞれだから。夢ねえちゃんはこの後、どっという治療するって言ってた?」

夢　：「4週間くらい薬のんで様子見るって。」

舞　：「ふ〜ん。カテーテルつけてないから点滴でなくて、飲み薬だよな。」

夢　：「うん、そう。」

舞　：「それで、1週間もしないうちに院内学級出てこれるってことはALLだね。」

夢　：「ALL?」

舞　：「うん、急性リンパ性白血病。子供の白血病で多い病気。」

私は松井先生からその病名を聞いたこと思い出した。

舞　：「夢ねえちゃん、薬は何飲んでるの？」

私は薬を見せてあげた。

舞　：「ああ、この3種類か。」

夢　：「舞ちゃんわかるの？」

舞　：「うん、ALLで最初に飲む薬。普通は4種類なんだけど、3種類つてことは軽いつてこと。」

私は驚いた。薬見ただけでどれくらいの症状かわかるんだ。

舞　：「美鈴はAML、急性骨髄性白血病だから、夢姉ちゃんとは違う病気だと思ったほうがいい。だから、美鈴と比べてもしょうがないよ。」

夢　：「ALLとAMLは違うの？」

舞　：「うん、薬の効き方が違う。ALLのほうはよく効くの。」

夢　：「舞ちゃん、すごいね。まるでお医者さんみたい。」

舞　：「えへへ。」

舞ちゃんが得意そうな顔をする。「

夢　：「じゃあ、舞ちゃん、質問、私いつくらいに退院できるか

な。」

その質問をすると舞ちゃんは急に顔を曇らせた。

舞　：「ごめんなさい、それは診断になっちゃうの。診断できるのはお医者さんだけ。私は言うてはいけないの。」

舞ちゃんは申し訳なさそうにそういった。

数日後、舞ちゃんが私のところに来る。

舞　：「ねえ、夢ねえちゃん、タロットカードって知ってる？」

夢　：「ええ、知ってるわよ。」

舞　：「じゃあ、これ使って占ってあげる。いつ退院できるか。」

夢　：「え？」

舞　：「だって、この前、私に質問したじゃない。」

そうだった。確かに質問した。でも、占い？　まあ、いいか。退屈しのぎになるし。

夢　：「じゃあ、お願いしようかな」

舞ちゃんはカードを一枚引いた。そして、その絵を見て考え込む。吊られた男の逆位置だった。舞ちゃんはそのカードをくるっと一回転させて、私に話した。

舞　：「11月くらいに退院できると出ています。」

夢　：「え？　どうしてわかるの？」

私は耳を疑った。占いはむちゃくちゃ。吊られた男の逆位置だからもつと別の意味だし、しかも、一枚めくっただけ。それに上下が重要なタロットをひっくり返してる。だけど、言っていることは先生と一緒に。すごい偶然だ。

舞　：「えへへ。何となく。」

後から聞いたけど、いろんな人に退院時期を占ってるらしく、それが、先生が言ったことと一緒になので評判らしい。でも、あの、むちゃくちゃな占いは気になった。

- - - - -

私は毎日をのんびり過ごしていた。薬の副作用もあまりなく、辛い治療と先生がおっしゃった割には楽に過ごせていた。

松井　：「順調ですね。このままいけば一時退院できます。」

私はほっとした。

松井　：「検査をしてみなければわかりませんが、このまま順調に進めば、ひと月くらい後から、強化治療に入ります。」

夢　：「強化治療？」

松井：「ええ、再発を防止するため、悪い血液を徹底的に叩いていきます。治ったように見えても、ほんの少し、悪い血液が残ってますからね。この強化治療を4回やると退院できます。そのあと、維持療法といって通院しながら2年くらい治療を続けます。」

夢：「はあ」

思ったよりも大変だ。気の遠くなるような話にはうんざりした。その表情を見たのか看護婦さんが私に言った。

つかさ：「あの、夢さん、お願いがあるのですが？」

夢：「なんでしょう。」

つかさ：「舞ちゃんの占いしってます？」

夢：「ええ、退院時期を占うやつですよね。結構当たるって評判の。でも、むちゃくちゃな占い方だけ。」

つかさ：「ええ、それで確か夢さんタロット占いのやり方知ってますよね。」

夢：「はい」

つかさ：「教えてあげて欲しいんです。ちゃんとカードの意味とか正位置と逆位置の違いとか。」

夢：「いいですけど。何ですか？ 舞ちゃん占い方はめちゃくちゃだけど、当たってますよ？」

松井　：「あれは、占いじゃない」

松井先生は不機嫌そうに言った。私は、まあいいやと思ってその話を承諾した。

舞　　：「あのく、夢ちゃん、つかさんから聞いたんだけど。」

舞ちゃんが言いにくそうに私のところに来た。

夢　　：「タロットの話ね。いいわよ教えてあげる。」

舞　　：「ありがとう。」

舞ちゃんは顔をパツと明るくしてそういった。

夢　　：「でも、教えてくれない？　なんで、退院時期を正しく占えたの？」

舞　　：「ごめんなさい、夢ちゃんにはちゃんと話すね。つかさんにも言われたし。あれは占いじゃないの。」

夢　　：「占いじゃない？」

そういえば、松井先生もそんなことを言っていた。

舞　　：「実は、診断してたの」

夢　　：「うそ！　みんなを片っぱしから？」

舞　：「うん。でも、先生に診断してはいけないと言われたから、占いをするふりをしてたの。」

夢　：「はあ」

占いで片っぱしから当てる方がまだ信じられる話だった。

舞　：「だって、みんな退院する時期聞いてくるし、それを教えてあげられないのがつらかったし。いいアイデアだと思ったんだけど。だけど、先生にはれて怒られた。」

夢　：「なるほどね」。確かに先生の言ってることは正しいわね。だから、あんな占いでもピタツと当てられたのね。」

舞　：「うん」

舞ちゃんがもじもじしながら答える

夢　：「じゃあ、私が正しい占い方教えてあげる。入院している人は不安でいっぱいなの。だから、何かにすがりたくなる。だから、占ってもらうのよ。でも、大事なのは、退院時期を教えることではなく、不安と取り除くこと。希望を持ってもらうこと。だから、正しくカードの意味を教えて、みんなに希望をもってもらうほうがたまる。」

舞　：「うん、そうだよね」

そうやって、私は舞ちゃんにタロットを教えていった。少しずつ少しずつ。幸いにして時間だけはいっぱいあった。

そんなある日、舞ちゃんがお礼にと自分で書いた絵を持ってきてくれた。怖い怪人の絵だった。

舞　：「タロット教えてくれたお礼」

夢　：「ありがとう。ところで、この怪人はなんていうの？　フランケンシュタイン？」

舞　：「え？　えっと」

夢　：「ん？」

舞　：「．．．．．夢ちゃん」

がつくりきた。構図とかめちゃくちゃだ。こうやって見ると舞ちゃんも小学一年生らしく見える。

夢　：「舞ちゃんは絵が好き？」

舞　：「うん、入院してた時、暇だったから毎日書いていた。」

夢　：「その時、絵似顔絵の書き方とか誰かに教えてもらった？」

舞ちゃん首を振った。

舞　：「パパも冬ちゃんも絵は苦手だっていつて。だから、自分で書いた。」

夢　：「そう、じゃあ、絵も私が教えてあげる。これでも、学校じゃ美術部だから。」

舞　：「え、本当？　教えてくれるの？」

舞ちゃんの顔がパツと明るくなる。

夢　：「ええ、似顔絵の書き方教えてあげる。私得意だから。」

舞　：「やった〜！」

舞ちゃんは喜んで私に抱きついた。その時、ふと私は疑問に思った。

夢　：「そういえば、舞ちゃんはボランティアとしてここの病院に来てるんだよね。」

舞　：「そうだけど。どうして？」

夢　：「ううん。なんでもない。ちょっとおもしろいと思っただけ。」

舞　：「？」

ボランティアに来てる子にボランティアで教えてあげる。まるでさかさま。これじゃどっちがボランティアかわからない。そう思うとおかしかった。でも、それもありがた。そういう風に私は思った。

続く

4 - 8 ・強化治療（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 8 ・強化治療

松井　：「さあ、夢ちゃん、今日から強化治療です。がんばりましよう。」

夢　　：「はい」

一時退院から帰ってきて再び強化治療のため入院となった。

母親　：「あの、早期発見でしたし、本人も元気に見えます。治療は軽くならないんですか？」

松井　：「うーん、残念ですがミドルリスクですね。骨髄移植までには必要ないですが、決してローリスクではないです。現時点では再発の可能性があります。まだ、親指の先くらい悪い白血球が残っているはずですよ。これを徹底的にたたかないとだめですよ。」

母親　：「はあ」

寛解つまりほとんど治った後の治療なので、そんなにくるしい治療ではないと思っただけど甘かった。

実際は過酷を極める治療となった。

青い毒々しい液体が点滴を通して私の体の中に入っていく。この青い液体が私を苦しめる。抜け毛、吐き気、腹痛、40近い高熱。毎日のように苦しめられる。だけど、まだ、このときは何とか出歩くことができる。無理やり、院内学級に行ったり、舞ちゃんや冬子さんに来てもらったりして、色々お話しして気を紛らわした。

舞　：「メロの投入が始まったんだね。美鈴もその薬を点滴してた。気持ち悪かったり、おなかが痛かったりしたら遠慮なくいってね。背中さすってあげるから。そうすれば少し楽になる。美鈴もよくそうやってあげた。」

冬子　：「そうです。冬子もお手伝いします。なんでしたら夜お泊りして看病します。」

舞　　：「冬ちゃんには夜の付き添い無理だよ。だって、一度寝たら朝まで梃子でも起きないじゃない。」

そんな二人の軽妙なやり取りを聞いてほほえましく思うとともに、私はこの二人の心遣いに感謝した。

しかし、苦しい治療はさらに続いた。メロの投入が終わると、病室の扉が閉まり、面会謝絶状態になる。私はこの病室から一歩も出られなくなる。「骨髄抑制期」に入り、免疫力が極端に落ちている。だから、準無菌室状態にするため、扉は閉まり、空気洗浄機の音が激しくなる。他の病院なら無菌室に入るところを、精神的な圧迫感から解放するため、この病院では準無菌室ですましている。もともと、クリーンフロアで無菌レベルを一段上げているため可能らしい。

この骨髄抑制期には今度は口内炎に悩まさせることになる。口の中に潜んでいた菌が私を攻撃する。普段は特に悪さをしない菌なんだけど、日和見な菌で弱った体に反応して私を攻撃する。

夢　　：「お母さん、口の中気持ち悪い。四つ星のサイダー買って。四つ星のサイダーが欲しい。」

「ただ、お母さんがなかなか帰ってこない。一時間くらいたってやつと帰ってきた。」

母親：「ごめんね。四つ星のサイダーなかなか無くって。」

夢：「別に四つ星のサイダーなかったら別の出もよかったのに、もう。早く欲しかったのに。」

私は不満のはけ口をお母さんに向け困らせていた。でも、そうでもしないとやってられなかった。なんで私だけこんなに苦しめられなきゃいけないの？ 私は治るの？ 治っても学校の授業に追いつけるの？ 同級生は受験生になったというのに自分だけ取り残されている。

夢：「やだ、やだ」

そんな気持ちで押しつぶされそうだった。

そうやって骨髄抑制期も終わりに近づくと

松井：「よし、まだ、回復しきっていないけど、部屋から出て院内学級に行ってもよろしい。」

と、先生から許可が出た。私は一目散に院内学級に向かう。ここが自分が病人じゃないと唯一思える場所だから。院内学級は私以外に淳君という男の子がいた。最初は二人で授業を受けていたが、やがて淳君は退院することになる。その後は新しい子が入ってくるまで当分私一人が生徒だった。だから、木ノ内先生の個人レッスン状態だった。それはそれで自分のペースで勉強できたからよかった。だけど、他の同級生と比べたら明らかに遅れている。

治療がひと段落すると一時退院まで治療も小休止となる。そうすると今度は暇という敵が現れた。特に院内学級も舞ちゃんや冬子さんもいない日曜日は暇だった。そうすると、今度は自問自答し始める。私は何になりたいのか？ それ以上になんのために生まれてきたのか？ お母さんやお父さんに迷惑ばかりかけてる。いったい私はなんなのか。このまま一生迷惑かけ続けるのだろうか？ そう思うにさいなまされる。

つかさ：「不安な気持ちはわかります。でも、病気の時は後ろ向きに考えがちです。絶対治りますから、今は治療に専念しましょう。」

草薙：「治療に関しては、俺たちに任せておけばいい。夢ちゃんは治った後、どう楽しむかを考えてればいいんだ。って、このセリフは俺の元婚約者の口癖だった言葉だけだな。」

そうやって、私を励ましてくれる。

一方、舞ちゃんは、色々遊んでくれるけど、ちょっと違った。

舞：「ねえ、ねえ、このカードの意味って何？ いつ治るんですかって占ったんだけど戦車の逆位置が出ちゃったの。これって難しいよね。」

夢：「それは、停滞を現すの。だから、今は闇の中だけど、少ししたら状況が変わるって解釈すればいいよ。確かに難しいよね。いろんな人占って経験積むといいよ。」

舞：「淳君の似顔絵描いたんだけど、全然似てないってみんな

いうの。淳君も不機嫌になっちゃった。何がおかしいんだろう。」

夢　：「うん。デッサンがやっぱりうまくできてないの。でも、まだ、小学2年生になったばかりでしょ。できなくて当たり前、いっぱいいっぱい絵を描いて練習すればうまくなるよ。」

そうやって、私は舞ちゃんを励ました。この状況はでも、あべこべ。本当は私が舞ちゃんに励まされるべきだけだね。ところが、舞ちゃんにタロットや絵を教えていたら、今度は話を聞いた東棟の子供たちが私の周りにやってきた。

女の子：「夢ねえちゃん、私の似顔絵描いて！」

男子高校生：「夢ちゃん、俺の絵も見てくれないか？　将来漫画家になるうとしてるんだけどどうか？　ちゃんと書けてるかな？　何か気付いたことを遠慮なく言って欲しい。」

看護師：「ねえ、ゆめちゃん、私の恋、成就するか占って欲しい。みんなに内緒でお願い。」

とうとう看護師のお姉さんの恋の相談にまで占うことになってしまった。なんだか、急に忙しくなった。そして、一時退院、みんなさびしそうに私を見送る。

舞　：「早く帰ってきてね。」

夢　：「あゝ。本当はもう二度と来たくないんだけど。」

舞　：「そうだね。でも、夢ちゃんがないとこの病院、すくなくさみしい。」

女の子：「病気が治らないように祈ってます。治っちゃうと来なくなっちゃうから。」

私にとっては複雑な心境だった。一刻も早く治して受験体制に入りたいのに。そう、高校に入って、短大に入って・・・

あれ？ そのあと私何したいんだろう。そういえばよく考えていなかった。

一時退院が終わると再び強化治療に入った。また、あの毒々しいメロを点滴して、高熱と吐き気と腹痛に悩まされる。それが終わると口内炎との戦い。前回と同じだけど、今回は慣れもあって少し違った。熱にうなされながらも私は考えていた。

夢　：「私は将来何になりたいの？」

そうやって、2回目の骨髄抑制期が終わり、再び院内学級に出てる。

いつものようにそこには舞ちゃんがいた。この子はなんでここにいるんだろう。その疑問がふつふつとわいてきた。他に遊びたいことだって一杯あるだろうに。ここが楽しいのだろうか？ それとも優等生を振るまいたく、ボランティア活動してるのだろうか？

ある日、私は舞ちゃんに聞いてみた。半分、この優等生への当てつけだったかもしれない。

夢　：「舞ちゃんは、なんで病院にボランティアに来てるの？」

舞　：「え？」

夢　：「だって、ほかにももつと遊ぶことあるでしょ。舞ちゃんの友達はみんな退院したじゃない。それに、小学生に内申書とかないでしょ。ボランティアしたってぜんぜん得じゃない。」

私は、舞ちゃんが病院にいるのは何か得になることがあるから、あるいは偽善だと思った。

舞　：「ほんとよね。かのんも美鈴も退院しているんだから、病院に来る必要ないんだけどね。でも、」

夢　：「でも？」

舞　：「ある人と約束したから。その人の約束を守るのが楽しいからかな。」

夢　：「ある人との約束？」

舞　：「うん。」

夢　：「どんな約束なの？ 私にも教えて。」

舞　：「えへへ、今は教えられない。でも、夢ねえちゃんが退院した時、教えてあげる。その時まで期待しててまってね。」

舞ちゃんはそう言ってはぐらかした。

でも、楽しいからここにいる。それだけは理解できた。

私は次にもう一人、不思議な人に同じような質問した。

夢　：「冬子さんはなんでここでボランティアをしてるんですか？」

冬子　：「夢ちゃん、それはグットクエスチョンです。簡単です。楽しいからです。」

夢　：「でも、冬子さんは調理師学校でて、東京の有名なホテルで修行して、将来はホテルのコック長になることだって夢じゃなかったって聞いています。今でも、レストラン開けばあつというまに有名店になる実力持ってますよね。」

冬子　：「でも、楽しくなかったです。ホテルに来るお客さんはみんな偉そうな人で、そのホテルの名前で満足して、味なんてどうでもよかった人ばかりです。そして、コックの人たちは腕前を競うのでなく、いかにコック長に気に入られるかに力を注いでいました。派閥ができて、その派閥の戦いをやってました。そんな世界に冬子疲れてしまいました。」

夢　：「え？　そんなことがあつたんですか？」

冬子　：「だけど、去年、舞ちゃんの看病をしながら、私は頭を後ろから殴られるくらいのシヨックを受けました。ここでは、懸命に生きるために純粹に純粹に頑張ってる子ばかりです。名誉とかお金とか出世とか派閥とか関係ないピュアな世界です。そんな子どなたのために何かお手伝いしたいと思いはじめました。」

夢　：「すごい、やっぱり冬子さん大人。」

冬子　：「ありがとうございます。でも、ただのボランティアだけ

どはいけないと思ってます。やっぱり、しっかりした職業なり、技術を身につけないといけないと思ってます。だから、今、通信制の大学に入って勉強をしています。どうしてもある仕事に就きたいんです。そのための資格を得るには大学を卒業しないといけません。だから、今、頑張っています。」

そうやって冬子さんは自分の夢を語り出した。その夢は私にとってあまりに遠い困難な夢に思えた。でも、この人ならできるんじゃないかとも思った。

夢　：「やっぱり、冬子さん大人です。夢に向かってしっかり走ってます。」

冬子　：「夢に向かうのに大人も子供も関係ないと思います。ところで、夢ちゃんは将来何になりたいんですか？」

夢　：「うーん、やっぱり絵を描くのが好きだからイラストレーターとかそっち関係の仕事をしたいと思ってんですが、まだ、漠然としてて。」

冬子　：「すばらしい夢です。冬子、今年一番の感動しました。夢ちゃんかっこいいです。でも、冬子と同じ間違い起こしそうです。」

夢　：「え？」

冬子　：「絵を描くことが好きですか？　それとも、その絵を見せて、周りの人を感動させることが好きですか？　『ありがとう』って言ってもらえることが好きですか？」

夢　：「あ」

冬子：「余計なことかもしれませんが、冬子は料理を極めることが好きだと思ってました。でも、本当はそうじゃなくて、料理を通して、「ありがとう。とってもおいしかったよ。」って目をきらきらさせて言ってくれるのが好きだったんです。」

冬子：「料理は手段であり目的ではなかったんです。」

夢：「私もそう。私は絵が好きなんじゃなくて、絵を通して『ありがとう』って言ってもらえるのが好きなんだ。」

冬子：「多分そうだと思います。舞ちゃんに、似顔絵やタロットを教えていたときは生き生きと目を輝かせていました。他の子供たちに似顔絵を描くのせがまれても、絵の批評をするよう求められなくても、いやな顔一つせず付き合ってます。」

私は目からうるこが落ちた気分だった。そう、私のやりたいことは似顔絵を描くことでも、タロット占いをすることでもないんだ。受験勉強で他の同級生と比べて遅れていることを気にしていた自分が馬鹿らしく思えてきた。

夢：「冬子さん、ありがとう。やっぱり冬子さんは『冬のかあちゃん』だよ。」

冬子さんはにっこり笑った。

でも、私は誰にありがとうと言ってもらいたいんだろう？

.....

その後、私は懸命に辛い治療を続けた。ずっと、舞ちゃんと一緒だった。調子のいい日は舞ちゃんが一緒に遊んでくれたり、あるいは舞ちゃんにタロットや絵を教えたりしながら過ごした。その間、いっぱい、話をした。好きなこと。学校のこと。将来のことなどまるで同級生のように話した。ううん。同級生以上に見栄とか張らずに済んだ分、素直に話せた。

そして、冬子さんには一杯相談に乗ってもらった。将来のこと、家族のこと、恋愛のこと。そして、冬さんはじっくり聞いてくれたあと、色々助言をしてくれた。その話は冬子さんの経験をもとにしたためになる話ばかりだった。

それらは、つらい、治療の中での一服の清涼剤みたいな時だった。

- - - - -

半年以上たって、私はやっと退院する日を迎えた。辛い治療にも耐え、骨髄抑制時の感染もなかった。その日もやっぱり、舞ちゃんと冬子さんは、院内病院に来ていた。

冬子：「夢ちゃん、退院おめでとうございます。」

舞：「おめでとう、夢ねえちゃん。でも、これから、さびしくなっちゃう。もうちょっと入院しない？」

夢：「こらこら、退院する人を引きとめてどうするの。しかも、舞ちゃん、健康見じゃない。入院患者ならともかく。外で、いつでも会えるわ。」

舞　：「そうなんだけどね。」

夢　：「そういえば、約束覚えてる？　退院した時、なぜ、ボランティアしてるか教えてくれるって。」

舞　：「うん、覚えているよ。だって、退院した時じゃないと話せないんだもん。」

そういつて、舞ちゃんは私に話し始めた。

舞　：「たかしにいちゃんとの約束なんだ。院内学級に伝わる物語ってたかしにいちゃんが作ったんだ。だけど、作っただけでは、みんなに伝わらない。読んであげて初めて伝わるもの。」

夢　：「うん。」

舞　：「私は、辛くても頑張っている院内学級の人たちや入院している子供たちに少しでも励ましや慰めになるようにご本を読んでいるの。それで、最後にみんなが笑って退院していくのが楽しみなんだ。その時、心の中でたかしにいちゃんと『よかったね』って話すんだ。」

夢　：「そうだったんだ。たかしさんは舞ちゃんにその本を託したってことは遠くに住んでる子なんだね。」

舞　：「うん。とても、遠いところに住んでる。遠すぎて会えないところ。たかしにいちゃんはこの西棟から出られなかったんだ。」

夢　：「え?!」

舞　：「西棟はそういうところ。みんながみんな治るわけじゃない。たかしにいちちゃんだって自分で自分の物語を話したかったはず。」

夢　：「・・・」

舞　：「たかしにいちちゃんの夢は『大人になること』。きっとそうだった。だけど、そんな誰でもかなえられるこの簡単なことができなかつた。」

夢　：「・・・」

舞　：「たかしにいちちゃんが自分の病気が治らないと気付いた時、この物語を語り継ぐことを私に託したの。だから、私が代わりにやってるの。」

夢　：「そうだったんだ。」

私は恥ずかしく思った。辛いのは私だけではなかつたんだ。死にそうな思いをしたけど、死んだわけじゃない。西棟から出られる私はラッキーなんだ。私は思わず涙ぐんだ。

夢　：「舞ちゃん、冬子さん、ありがとう。私、将来のことという悩んでたけど、今、はっきりやりたいこと決まった。」

.....

私は退院してからすぐに受験勉強に取り掛かった。決して頭はよ

くないけど、目標に向かって頑張った。病気のこともあるので無理は出来なかったけどできる範囲で頑張った。そして、春、私は定時制高校に入学した。学校の先生は全日制でも十分いける学力なものもつたいないと言ってくれたが、私はある目的のためと体を治すために定時制に入学した。

そして、一年間療養したのち看護学校に入学した。午前中は看護学校、夜は定時制の高校という生活だ。私にとってやりたいことは冬子さんや舞ちゃんと同じように、病気の子供たちを勇気づけてあげること。それが私にとって楽しいことだから。

そして、2年間頑張って、准看護師になってこの病院に戻ってきた。もしかしたら、もういないかと思ったけど、やっぱり女の子がそこにいた。少し大きくなった舞ちゃんだった。それに冬子さんもいる。

舞　：「おかえりなさい、夢姉ちゃん。」

冬子　：「おかえりなさいです。夢ちゃん。」

夢　　：「ただいま。舞ちゃん、冬子さん。」

おしまい

夢ちゃんの物語はこれで終わりですがトリックエンジェルはまだまだ続きます。

4 - 8 ・強化治療（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 4章の中でも結構お気に入りの作品です。思春期にだれでも悩む将来のこと。それは闘病中の人だって同じ。今、まさにこの瞬間、病気と闘い将来のことを悩んでいる中学生にエールを送ります。がんばれ。そして、やりたいものを目指しなさいと。

4・9・コナの踊り(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 9 ・ コナの踊り

暦の上では春なのにまだまだ寒い3月のことだった。

通信制大学に通っている冬子がスクーリングに行くということであれを空ける事になった。俺としてはもちろん喜んで送り出したい。ただ、たった一つだけ問題があった。そう、食事の問題だ。俺一人なら問題ない。何でも食べられる。しかし、娘の舞と一緒にとなるとは行かない。はっきり言って、食事制限のある病人のほうがまだ気楽だ。娘の舞は冬子以外の料理は全て「まずい」でかたづけしてしまう。特に外食には敏感だ。

舞　：「これで、お金取るのってどうかと思う。」

と、どんなおいしいと評判の店もけちよんけちよんにけなししてしまふ。

しょうがない、俺の料理で我慢させるかと思った。俺の料理だと文句もいわずに食う。

舞　：「病院食よりおいしい。」

本人は誉めてるつもりなのだが、あまりうれしくない。

そこで、祐美子さんの家で冬子がスクーリングに行っている間は食べさせてもらうことにした。一応レストランであり、身内でもあり、あからさまに「まずい」とは言わないだろう。

祐美子さんのレストランは病院に近いこともあって、昼間はにぎ

わう。だけど夜は意外と人が少ない。そのため、8時にはラストオーダーとなってしまう。

この日もそろそろラストオーダーの時間で、俺と舞しか客がいな
い状況だった。

俺達の食事もそろそろ終わりで、健一さんがデザートサービス
ということで俺にはコーヒーを舞にはアイスクリームを持ってきた
ときだった。

いきなり舞がレストランを見回したと思ったら、とんでもないこ
とを聞き出した。

舞　：「ねえ、パパってママとどうやって知り合ったの？」

俺はびっくりして答える。

あきら：「前にも行ったと思うけど俺と冬子は高校の部活の先輩後
輩だ。俺が2年のときに『お星様の形が好き』という理由で天文部
に入ってきたんだ。」

健一さんが面白そうな顔をして舞の隣の席に座り話に参加する。

健一　：「冬ちゃんが高校入学してすぐにこの店でアルバイトし始
めたんだ。本当はウエイトレスとして雇ったんだが、『冬子、料理
するほうがいいです』っていつて厨房に乗り込んできた。それで、
あつというまに俺の味を覚えて俺と一緒に料理を作ってたんだ。」

あきら：「だけど、すぐ、お客と喧嘩するんだ。カレーにソース掛
けようとするお客様見つけると『その食べ方は変です。冬子許せま

せん。』だからな。」

健一：「あのころは大変だったよ。でも、面白かったな。今ではいい思い出だよ。」

俺が健一さんと話していると舞が何か話したそうは顔をしているのに気付いた。

あきら：「ん？ 舞、面白くないか？」

舞：「うん、あのね、あのね、知りたいのは冬ちゃんとの出会いじゃなくて和恵ママとの出会い。」

あきら：「え．．．」

俺と健一さんは言葉を亡くす。そして、健一さんは気を使ったのか、そつと席を立つ。

あきら：「健一さん、気を使わなくていいですよ。たまにはその話もしましょう。祐美子さんもいかがですか 一緒に。」

健一：「そうさな。今日は客もないし店早仕舞いするか。」

そつ言つて、入り口の札を準備中にし、ブラインドを下ろして店じまいをする。祐美子さんがビールを持って俺達の席につく。

健一さんと祐美子さんのグラスにビールを注ぎながら俺は話し始めた。

あきら：「そうだな。俺が和恵とはじめてであったのは1年の春休みだった。その時、天文部は俺と南と志穂先輩の3人しかいなかった。

た。そして、志穂先輩が言い出したんだ。『合宿をやるう』ってね。それで、俺が突っ込んだんだ。『3人で合宿って寂しくないですか？』ってね。そうしたら、志穂先輩が言ったんだ。『ダンス部と合同でやるう』って。」

健一さんがグイとグラスを空ける。俺はビールをグラスに継ぎ足し、再び話始める。

あきら：「実は志穂先輩はダンス部と掛け持ちしてたんだ。しかも向こうでも部長をやってたんだ。それで、めんどくさいから合同合宿を提案したんだ。実は、ダンス部は女子ばかりだから、力仕事が苦手で、俺と南は体のいい荷物もちとして参加させられたんだ。」

舞が真剣に聞いている。

あきら：「その合宿で俺達は知り合ったんだ。天文部なんて昼間何もすることが無かったから、ダンス部の練習見てたり、買出しに行ったりしてたんだ。夜になると俺達がみんなの前で星の説明をする。その時何人かの女子と一緒にいたんだけどその中の一人が和恵だった。」

あきら：「そうやって、新学期になると冬子が入ってくる。そうすると部活が終わるとこの店にたむろして、わいわいがやがややってたんだ。」

祐美子：「懐かしいですね。あのころは本当にぎやかでした。」

祐美子さんが遠い目をしながら話す。

あきら：「そうやって夏休みもすぎ、学園祭の季節がやってきた。」

ダンス部も出しものを披露するのだが、その年はフラダンスだったんだ。」

舞　：「フラダンス？　あのハワイのゆっくりした踊り？」

あきら：「そう。南太平洋の踊りだ。だけど、あの年はハワイでなくタヒチとかもつと南の国の踊りだった。」

舞　：「何が違うの？」

あきら：「非常に動きが激しく情熱的な踊りなんだ。そして、その中でも最も情熱的で動きが激しいソロパートがあった。それが『コナの踊り』だ。そして、そのソロパートには和恵が選ばれた。」

あきら：「だけど、コナの踊りは難しく、しかも体力と集中力が必要だった。そして、引退したはずの志穂先輩が気になったのか和恵に対して厳しく指導した。『そんな踊りをお前は人前に見せるのか？　止めてしまえ』ってね。」

舞　：「うわ。志穂さんらしい。」

あきら：「うん。だけど和恵は負けなかった。人一倍負けず嫌いの和恵は部活が終わっても毎日家で練習した。このレストランでだ。」

舞　：「え？　ここ？　でも踊る場所なんて無いよ。」

祐美子：「キッチン側のテーブルを片付けると踊るスペースが出来ます。もともとこのレストランは踊りを披露することもできるように設計されてるんです。ダンスサークルのパーティに使えるように。」

「

舞　：「へ〜」

あきら：「和恵は毎日泣きながら練習していた。それを俺が毎日応援していた。そして、学園祭を迎え、見事、和恵は演じきった。その練習に付き合ったことがきっかけで俺と和恵は付き合いだしたんだ。」

舞　：「すごい。ねえ、ねえ。そのママの踊りのビデオ無いの？見てみたい。」

健一　：「それが、残念がないんだ。」

祐美子：「おじいさんに取ってもらおうとしたんですが、そのときビデオが壊れてたんです。」

舞　　：「え〜。そうなんだ。残念」

あきら：「俺もそのときは気にしなかった。いつでも見れると思ってたからな。だけど、次の年は引退で披露しなかったし、短大でもダンスサークルに入ったんだがコナの踊りをやらなかったから見ることは出来なかった。そして、俺達は結婚して、妊娠して、舞を生んで。そして、和恵は星になってしまった。」

祐美子さんが涙ぐむ。

舞　　：「見たかった。」

健一　：「ああ、最高傑作だった。和恵を育てて本当によかったと思っただ。」

あきら：「ああ、俺にとっても最高の思い出のひとつさ。」

しみりとした雰囲気が漂う。健一さんが、俺のコップにビールを注ぐ。

あきら：「だめだだめだ、こんなしみりしちや。もっと明るい話をしよう。そうだ、和恵と俺が学園祭の練習に熱中していたとき、冬子は何やっていたと思う？ あいつ、天文部の学園祭を盛り上げるんだっていつて、星の形のぬいぐるみ大量に作ったんだ。その数200個。それで、バザーを行うんだけど、そんな数売れるわけ無い。それで、売れ残りの処分に困ってさ……。」

俺は努めて明るく振舞った。やっと、和恵の思い出話もこうやって話せるようになった。だけど、やはり後悔している。あの踊りのビデオがちゃんと取れていねばと。もう一度、和恵のコナの踊りを見てみたい。

つづく

4・10・かのんの星物語（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 10 ・かのんの星物語

春休みに入った3月の終わりのある日の夕暮れ時。

小さな軽自動車町はずれの丘を登っていく。

軽自動車には、大人の女ひとり、女の子3人が乗っていた。

神崎 : 「うわ、本当に天文台がこの町にあるんだ。すごい。知らなかった」

一人の女の子が目を輝かせて丘の上の丸いドームを見あげた。

- - - - -

話の発端は、学校での休み時間の会話だった。

かのんと神崎さんと私の3人で星の話になった。

神崎 : 「へ、かのんちゃんもお星様好きなんだ」

かのん : 「うん、大好き。入院中も舞によく星の話付き合わせたんだ」

神崎 : 「いいなあ」

かのん : 「？もしかして、神崎さんも星の話好きなの？」

神崎：「うん。大好きなんだ。大人になったらロケット作るのが夢なんだ。遠い星の世界に行ってきた、そして、何年もたってから『ただいま』って帰ってくるロケットなんだ」

舞：「すごい」

私は、そうやって目をキラキラ輝かせて夢を話す神崎さんをすごいと思った。

舞：「神崎さんはね、自分でロケット作ってるんだよ」

かのん：「え？ 本当？」

神崎：「ペットボトルで作ったロケットだけどね」

神崎さんがてれながら話す。

かのん：「なんだあ。ペットボトルロケットがあ」

神崎：「でも、すごいんだよ。二段式なの。100mくらい飛ぶんだよ。おとうさんと一緒に作ったんだ」

かのん：「100m？ それってどれくらい？」

神崎：「ここから校庭の端っこくらい。」

かのん：「うそ、そんなに飛ぶの？ 見てみたい！」

かのんもだんだん興奮してくる。

舞　：「だめだめ。もつとあつたかくなつてから。水遊びができるような時期じゃないとね」

かのん：「ちえ〜」

かのんがぷいと膨れる。

舞　：「その代わりに、3人で春休みになったら町はずれの天文台
いかない？　大きな望遠鏡があるところ」

神崎　：「え？　街に天文台があるの？」

かのん：「うん、あるんだよ。舞と時々行ってるんだ」

神崎　：「え〜、いつてみた〜い。私もつれてって！」

かのん：「OK〜。春休みになったら3人で行こう。お母さんに頼
んでみるね」

そうやって、春休みの企画「天文台ツアー」が決まった。

- - - - -

山本　：「いらっしやい、かのんちゃん、舞ちゃん、お母さん。あ
れ？　今日はもう一人いるね。お友達？」

私たちはスリッパに履き替え、受付をしてみるとさっそく山本さんが
声をかけてきた。山本さんは天文台でアルバイトをしている大学生
のお兄さんだ。

かのん：「うん、神崎さん。神崎さんも星が好きなんだよ」

山本：「そうか。では、改めまして。ようこそおいで頂きました。私は当天文台の案内係をしています、山本です。今日は月のない夜で星空がきれいです。ゆっくりと楽しんでいってください。」

そういつて、私たち4人は奥の中庭へと向かっていった。

そらには冬の星座たちが光っていた。オリオン座、おおいぬ座、こいぬ座。冬の大三角形が南西の方角に輝いている。

かのん：「オリオンは狩りの名手なんだ。二匹の犬を連れて狩りに出かけてるんだ。それで、狙っているのはオリオンの足元にいるウサギなんだ。」

山本：「そうだね。オリオンの足元にうさぎ座があるんだ。ちょんちょんと耳の部分に二つ星があるんだけど。ちよつと、暗い星だから見えにくいかな。」

私と神崎さんは一生懸命探したけど、よく見えなかった。そんなことお構いなしにかのんが話を続ける。

かのん：「オリオンは、うぬぼれてたの。自分の狩りの腕を周りに吹聴して自慢ばかりしていたの。それで女神ジュノーの怒りにふれて、さそりにさされて死んじゃうの。だから、さそり座はオリオンの目につかないように同じ季節には夜空に現れないの」

神崎：「へへ。かのんちゃん、本当によく知ってるね。」

かのん：「えへへ」

私はかのんの話を聞きながら、星空を見ていた。ふと、南の空にひとときわ明るい星を見つけた。

舞：「あの、明るい星は何？ あんなところに一等星なんてあったっけ？」

神崎：「あれは木星だよ」

舞：「木星？」

神崎：「うん、地球と同じ太陽系を回っている星。他の夜空の星とは違って太陽の光を受けて輝いている星」

山本：「しかし、惑星をピタって言い当てるのはすごいな。よほど毎日星を見てないとわからないよ。星座と違って、季節と時間で場所が決まってるわけじゃないからね。」

舞：「神崎さん、すごい。」

私は素直に感心した。かのんと同じくらいの星おたくなんだ。

神崎：「私ね、大きくなったら、あの木星に行つて帰ってくるロケットを作りたいんだ。木星の月に着陸して、その星の氷を持って帰ってくるロケット」

山本：「木星にかい？ そりゃ無理だ。行くだけならできるけど帰ってくるのはものすごく大変だ。それこそ、燃料をいっぱい積んだ何十トンもある探査機を打ち上げないといけない。今の科学力じ

や無理だ。」

神崎：「大丈夫。探査機のエンジンはイオンエンジン使うから。そうすれば電気で動くロケットだから、電気は太陽電池でためるのだから小さくて済む」

山本：「あはは、イオンエンジンなんてSFの世界さ。昔から言われてるけど、何百時間も動かせるエンジンなんか作れないよ。」

神崎：「そんなことないよ。この前、小惑星探査機『おおたか』が小惑星に向かって打ち上げられたわ。『おおたか』のエンジンはイオンエンジン」

山本：「ああ、あの無謀な計画か。いっぱい実験器具詰め込んで飛ばした探査機。小惑星に行つて帰つてくるどころか、すぐに通信不能になるって、みんな呆れて言ってるよ。積んでいるのは『はかない夢』だけさ」

神崎：「ううん。『おおたか』は絶対帰ってくる。どんなに傷ついても帰ってくる。そして帰ってきたら、『おかえり』っていうんだもん」

かのか：「そうだよ。帰ってくるよ。山本さん、そんなこというのはひどいよ」

山本：「そうだな。悪かった。神崎さんの夢を壊しちゃいけないな。ところで舞ちゃんも将来の夢って何か持ってるの？」

舞：「夢？」

急に振られたちよつとびつくりした。

舞　：「お医者さんになることかな。特に難病で苦しんでいる人を助けるお医者さん。私も原因不明の病気だったから、みんなを助けてあげたい。」

山本　：「うん、舞ちゃんならなれるぞ。そうしたら、もし、病気になったら舞ちゃんに見てもらおうようにしよう。長生きできそうだ」

山本さんは半分冗談めいて話をする。

山本　：「かのんちゃんは？」

かのん：「うん。」

かのんは少し考えてからこう言った。

かのん：「大人になること」

神崎　：「え？　大人になってから何になるかって話だよ？」

かのん：「大人になればなんでもできる。だけど、私の病気はまだ治っていない。今はちよつと落ち着いているだけ。だから、病気が治って大人になるまで生きられることが私にとっての夢なんだ。」

神崎　：「. . .」

神崎　：「ごめん。大人になることは当たりのことだと思ってた」

かのん：「ううん、気にしないで。この病気ばかりはしょうがない

こと
「

かのんが両手を広げておどけて見せた。

山本　：「ねえ、みんな。せっかくだから大望遠鏡で木星見てみな
いか？　赤い大斑点も見られるかもしれない。」

かのん　：「うん」

神崎　　：「うん」

そういつてみんなは反射望遠鏡のところに行って飽きるまで木星を
眺めた。

つづく

4 - 1 1 ・退院（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 11 ・ 退院

春休みに入り、私はこっそり美鈴の病室にケーキを持ち込んだ。冬ちゃんの手作りケーキだ。

舞　：「美鈴、もうすぐ退院だね。おめでとう。」

美鈴　：「うん。やっと。最初は半年くらいって言っていたのに、一年以上かかった。」

ほっとした表情で美鈴が言う。

本当なら半年で済むはずだった治療だけど、薬がなかなか美鈴に合わなかったのと、治療の合間の体の回復が遅れていたのが時間がかかった原因だった。

舞　：「元気になったんだからいいじゃない。」

美鈴　：「でも、辛かった。それに寂しかった。途中で舞ちゃんもかのんちゃんも退院しちゃうし。」

舞　：「毎日のように私は来てたよ。」

美鈴　：「でも、日曜日はボランティア禁止でしょ。日曜日がとっても暇だった。」

舞のボランティアは日曜日はしてはいけない約束になっている。少しは外で遊んで体を鍛えないといけないと草薙先生に言われているからだ。

舞　：「じゃあ、これからは日曜日も遊べるね。」

美鈴　：「でも、あんまり無理できないから。」

舞　　：「そうだね。」

かのんと違って美鈴は慎重である。退院したらすぐ学校行こうなんて無謀なことは言わない。

舞　　：「退院したら何したい？」

美鈴　：「色々、いっぱい。舞ちゃんやかのかんちゃんたちと公園に遊びに行きたい。お母さんとマーメイドパークに行つて人魚に会いたい。」

マーメイドパークはたかし兄ちゃんの物語「人魚水族館」のモデルになった遊園地のこと。

美鈴　：「たかし兄ちゃんのお墓まいりもしなきゃ。」

舞　　：「うんうん」

舞はうなづく。舞にとつてたかし兄ちゃんがあこがれの人だったように、美鈴もたかし兄ちゃんに特別な思いがある。

美鈴　：「あと、響子先生の幼稚園に行つてロバの「サクラ」にも会いたい。私、ロバつて見たことないの。それとかのんがはまつてる街外れの天文台にも行きたい。」

美鈴は一足先に退院して楽しんでいるかのんのことを羨ましく思っている。

美鈴：「それとおいしいもの一杯食べたい。お寿司、お刺身、ラーメン、カレーライスに冬子さんのお星様ハンバーグ。」

舞：「冬ちゃんのハンバーグは絶品だよ。」

二人でよだれをたらしかける。

美鈴：「そして、学校に行きたい。舞ちゃんやかのかのんちゃん、ひかるさんや神崎さんと一緒に毎日遊ぶの。」

舞：「学校は遊ぶんじゃなくて勉強するところだよ。」

美鈴：「いいの。勉強はちょっとだけ。」

舞：「あはは。それで、学校はいつから通うの?」

美鈴：「5月のゴールデンウィーク明けからかな。4月の間はおうちでゆっくりしてる。病院から家に変わるだけだけどね。」

それでも、病院より家のほうが落ち着く。

舞：「じゃあ、夕飯はうちで食べてきなよ。美鈴のお母さんも忙しくなるって言ってたし。」

美鈴：「え? そんなの悪いよ。」

舞：「大丈夫だよ。冬ちゃんは『も〜まんたいです』って即答

するだろうし、パパも家族が増えたって喜ぶ。」

美鈴：「冬子さんのご飯か。すごく魅力的。お言葉に甘えちゃおうかな。」

美鈴にはお父さんがいない。別にお父さんが死んでしまったわけではないのだけど。家庭の事情って言うた。今までは入院していたこともあり、あまり、仕事ができなかった。だから、美鈴が元氣になったら一杯仕事をしないといけない。だからきつと、美鈴が一人になっちゃうからその時はうちに来ればいいと冬ちゃんが言うた。美鈴のアパートもうちからすぐ近くだ。

舞はそう思いを巡らしていた。

美鈴：「そういえば、向こうの世界の私も向こうの舞ちゃんと一緒にご飯食べてるのかな？」

美鈴が突然話題を変える。

舞：「うん、どうやら、やっぱり向こうの私もいつも一緒にご飯を食べてる子がいるみたいなんだ」

美鈴：「やっぱり！ 向こうの私ね！」

美鈴が目輝かせる。

舞：「うん。それがね、美鈴は美鈴でも神崎さんなんだ。向こうでは神崎さんと詩音ちゃんがいつも一緒にいたい。ポツチってあだ名で呼ばれてるみたい。」

詩音は向こうの私にあたる子の名前である。

美鈴　：「ええ〜。そうなんだ〜。がっかり。向こうの私はどうな
んだって？」

舞　　：「それが変なことに『しらない』っていうの。『丸山美鈴
って子は周りにはいない』って。美鈴だけではなくてかのんもたか
し兄ちゃんも知らないって」

美鈴　：「え？　なんで？」

舞　　：「向こうでも、この病院があるんだけど、西棟がないらし
いの。だから、西棟にいる人はほとんど知らないみたい。松井先生
とつかささんはいるみたいなんだけどね」

美鈴　：「うわ〜、なんでも同じな世界じゃないんだ。」

舞　　：「うん。なんか少しずつ違うみたい。」

美鈴　：「面白い。そういえば神崎さんはこっちではポツチって
呼ばれてないもんね。でも、ポツチってどこかで聞いたことあるん
だけど。」

舞　　：「うん、私もどこかで聞いたことがある。でも、学校にも
病院にもそんな変わったあだ名の子いない。」

美鈴　：「どうしてポツチっていうのかしら。」

舞　　：「うん、私も不思議に思って聞いてみたら、『初めて会っ
たときにポツチって自己紹介されたから』って書いてあった。」

美鈴　：「詩音ちゃんもわかってないのね。不思議な子。でも、やっぱり、ペットボトルロケット抱えて走り回ってて、星が大好きなんでしょう？」

舞　　：「それが、違うの。いたずらと生き物が大好きな女の子。しかも生き物もへビとかカエルが好きらしい。」

美鈴　：「いたずら好きでへビやカエルが好きな女の子？」

舞　　：「うん、それで、向こうの花の丘病院に本物のへビを持ってきていたずらしたから、つかささんがカンカンに怒って、ポッチはその病院に二度と入ってはいけない『出入り禁止』ってことになったみたい。」

美鈴　：「え、あの優しいつかささんを怒らすなんて、とんでもない子。でも向こうの神崎さんでよかった。もし、ポッチが向こうの私だったら、恥ずかしくて生きてけない。」

舞　　：「まあ、ちょっとそれはポッチがかわいそうかも。」

そういつつも、舞は苦笑していた。

そんな話をしていたら、病室にこっちのつかささんが入ってきた。

つかさ：「あ、あなたたち何食べてるの。」

美鈴　：「きゃ。みつかつちやた」

舞　　：「ごめんなさい。退院祝いしてたんです。」

つかさ：「かくれて食べるのはいけません。でも、今日は特別に許します。美鈴ちゃんのリトリートですからね。実は私も持ってきたんです。紅茶とカステラ。一緒に食べましょう。」

美鈴：「なんだ、つかささんもおんなじじゃない。」

舞：「さあ、たべよ。たべよ。」

外はまだ寒い3月。桜も咲きそうだが咲かない季節に3人は早めのリトリートを行った。

つづく

4 - 1 2 ・新学 期 (前 書 き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 1 2 ・新学期

4月になり入学式も終わり新学期が始まった。

舞　：「入学式ってあんなだったんだね。すごいっばい入学生も在校生もいるのにびっくり。」

かのん：「うん、私、幼稚園も行ってないから初めて入学式って見た。すごいおどろいた。」

ひかる：「かのんはともかく舞まで入学式に驚くのは意外よね。」

舞　：「だって、私も去年の一学期は入院してたんだよ。」

ひかる：「とても、そうは思えないほど今は元気だよね。それに、勉強だってあつという間に追いついて優等生だし。」

かのん：「かのんもそうなるかな？」

ひかる：「きつと大丈夫だよ。まずは学校に慣れて健康になること。勉強はそれからでも十分だって木ノ内先生も言ってた。」

木ノ内先生は加配の先生として空いている時間かのんを見てくれることになった。そして、支援員として副担任の前山先生がかのんのお手伝いに入ってくれた。支援学級のないこの学校では普通学級での支援が基本となる。

そして、2年生になったら2階になるはずだった教室も使われなくなつた視聴覚教室を潰して、1階に教室として作られた。かのん

が階段で苦勞しないようにとの配慮だった。

私は、ひかるの発言にちょっと複雑な心境だった。

舞　：「かのんは治ったわけでない。一時退院にすぎない。また、病院に入院しなければいけない時期が来る。」

かのんは心臓が悪い。この病気は一進一退をくり返す。少し良くなっても体が大きくなることよって心臓に負担が来る。永遠に小学2年生ならいいけど、少しずつ大きくなって、治ったはずの心臓病は負担が大きくなることによりぶり返す。それだったら、病院に入院し続けたいかもしれないが、できるだけ、みんなと同じ生活をした。そういうかのんの願いを聞き入れて主治医の秋本先生が許可した。

秋本　：「できるだけみんなと同じ生活をさせてあげたい。調子が悪ければ戻ってくればいい。学校も病院の近くだ。何かあったら私が駆けつける。」

そういつて先生はかのんを送り出した。

かのん：「入学式の校長先生の話、とっても素晴らしかった。やっぱり一番偉い先生だね。」

私はくすつと笑った。

舞　：「その校長先生のおでこに光を当てて喜んだ子もいたっけ。」

詩音が自慢げに書いた不思議な世界のノートを思い出した。

舞　：「（怒られてげんこつもらってた。馬鹿だよね）」

かのん：「何よ、舞。何かおかしいこと言った？」

舞　：「ううん、ちょっと不思議な世界のことを思い出しただけ。」

ひかる：「不思議な世界？」

かのん：「気にしなくていいわ。舞は時々想像の世界にいつっちゃうの。ロバンチストだっけ？」

ひかる：「それをいうならロマンチスト。確かに舞ってそういうところあるわよね。物語好きだもんね。」

私は時々学校でも院内学級の物語をみんなに読んでいます。でも病院ほどは受けない。ひかるくらいだ。ちゃんと聞いてくれるのは。

ひかる：「まるで赤毛のアンだよ。」

舞　：「赤毛のアン？」

ひかる：「読んだことない？　面白いよ。主人公がすごくロマンチストなの。だけど孤児なのよ。それで子供のころ友達がいないくってガラスに映る自分を見て、友達にしてたんだ。」

舞　：「なんかそれショック。まるで私にお友達いないみたい。」

ひかる：「そう言ったんじゃないよ。単純に自分と同じ子が友達な

んで赤毛のアンみたいだつて思っただけ。」

かのん：「きつと、その子、右利きだよ。舞ちゃん左利きだから、ガラスに写る友達なら反対の右利き。」

結局二人は不思議な世界の話を信じてはいなかった。

舞：「（信じてくれるのは美鈴だけか。しょうがないけどね。）」

神崎：「そうそう、また、今度天文台行かない？ 少しあったかくなってきたし。」

かのん：「うん、行こう！ 今度は北の空見たい！」

星好きのかのんが即座に返事をする。

神崎：「ひかるちゃんも楠木さんも来るよね。」

舞：「もちろん」

ひかる：「私もいいわよ」

舞：「ねえ、もう一人連れてきていい？」

神崎：「いいけど。誰？」

舞：「美鈴。」

神崎：「え？ 私？」

舞　：「ううん、丸山美鈴って子。」

ひかる：「ああ、美鈴ちゃんね。もう退院したんだもんね。」

神崎　：「丸山さんね。いいわよ。賑やかの方が楽しいわ。じゃあ、
今度の土曜日の夜ね。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

土曜日の夜、かのんのママと神崎さんのパパに連れられて街外れの
天文台にやってきた。

山本　：「またちびちゃんたち増殖したな。こんどは、いち、にい、
さん、5人か。しかも女の子ばかり。」

かのん：「女の子の方がうれしいですよ。」

山本　：「もう少し、大きい女の人の方がいいかなあ。」

かのん：「いったなあ。」

案内人の山本さんとかのんがじゃれあってる。すっかり、おなじみ
さんになっている。

神崎さんはもう先に一人で、観測所に向かっている。手には星座早
見盤を持って空と比べている。

神崎　：「北斗七星見つけた!」

神崎さんがうれしそうに言う。

そんな神崎さんを見ながら私たちはゆっくり後を追いかける。

神崎パパ：「星の見え方は意外と普通なんですね。天文台というからもつと星が見えるかと思ってました。」

山本：「ええ、街外れとはいえ、市街地ですからね。結構光が多くて、肉眼では3等星までしか見えません。山の中の天文台のようにはいきませんね。」

神崎パパ：「でも、なんでこんなところに天文台を建てたんですか？」

山本：「教育の一環ですよ。星に親んでもらうために。ここならではの楽しみ方があるんです。」

そういうと山本は神崎さんのお父さんに双眼鏡を渡した。

神崎パパ：「双眼鏡？ 望遠鏡でなくてですか？」

山本：「はい。低倍率の双眼鏡の方が楽しめることもあるんですよ。例えば、南にふたご座としし座の間にぼっかり穴が開いたように黒くなつてるところがあるでしょう。そこをのぞいてみてください。ポルックスとレグルスの間くらいです。ちょうど、あの三本杉の真ん中の木の上あたりです」

神崎パパ：「どれどれ」

そうやってそのあたりを双眼鏡でのぞいてみる。

神崎パパ：「え？　なんだこれ！　宝石箱がある！」

かのん：「かのんにも見せて。」

そう言って、かのんが双眼鏡を取り上げる。

かのん：「あ！　かに座のプレセペ星団！　きれい！」

私たちも交代で見せてもらった。箱の四隅に星があり、その中に宝石のように一杯星がちりばめられていた。

美鈴：「きれい。」

ひかる：「でも、双眼鏡使わないと見えない。」

山本：「はい、肉眼では5等星くらいなのでここでは見えませんが、望遠鏡だと逆に大きくなりすぎてよく見えないんです。双眼鏡がちよつどいい感じですよ。」

神崎パパ：「なるほど、これだと何となく星座がわかるんですね。」

山本：「はい。例えばこれで北極星の周りを見てください。」

かのん：「あ、北斗七星みたいに柄杓が見える。」

山本：「ええ、普段は暗くて見えないのですが、双眼鏡ならばちりです。」

みんなで交代で双眼鏡で星を見る。

神崎：「そういえば、なんで、北斗七星のおおぐま座も北極星のあるこぐま座も熊のくせに尻尾が長いの？」

山本：「え？ えっと、それはね。うん、はい、かのんちゃんよろしく。」

かのん：「山本さんわかんないんでしょう。」

山本：「そんなことないぞ」

かのん：「ほんとな。でも説明するね。あれは親子の熊なんだけど、もとは人間の母と子だったの。だけど、ゼウスの妻のヘラの怒りにふれて熊の姿にさせられちゃったのよ。それで、ゼウスがかわいそうに思って、夜空に放り投げたの。」

舞：「でも、それだとしっぽが長くなる理由になってないよ。」

かのん：「しっぽをつかんで思いっきりの力で投げたのよ。だから、しっぽが長くなっちゃったの。」

ひかる：「へ。かのん、よく知ってるわね。ちよつと意外。」

かのん：「なんか、前にも誰かに言われた気がする。」

美鈴：「あはは。それ淳君だよ。勉強できなさそうに見える割には知ってる』って」

ひかる：「別に深い意味はないわ。本当に感心してるのよ。」

かのんがふくれっ面をする。

そんなかのんをほっておいて神崎さんが山本さんに提案する。

神崎：「ねえ、星座早見盤のここところに渦巻きがあるんだけど、これ見たい。」

山本：「これは銀河だね。望遠鏡じゃないと見えないよ。じゃあ、この天文台で一番大きな40cmの望遠鏡で見てみよう。」

かのん：「やった。」

ふくれっ面をしていたかのんが機嫌を直して山本さんと神崎さんについていく。

舞：「かのん、車いす！」

かのん：「大丈夫。これくらいなら平気。」

舞：「もう。」

私は口では文句を言ったけど、こっぴどやっつて、みんな治つて、一緒に遊びに行ける日が来たんだと思うとすぐくうれしかった。

この日の思い出は私と美鈴にとって一生忘れられない思い出となった。

つづく

4 - 1 3 パーベキュー（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 13 ・ パーベキュー

5月に入り、美鈴が学校にやってきた。

舞　　：「美鈴。すごい。本当に一緒に学校通える。うれしい。」

かのん：「おっそい。待ちくたびれたぞ。」

ひかる：「美鈴ちゃん、よかったですね。私もうれしいです。」

そうやって、美鈴が合流した。

かのん：「美鈴、わかんないことがあったら、なんでも私に聞きな。初めての学校で慣れないことも多く不安だろうけど、教えてあげるから、安心して。」

ひかる：「あらあら先輩風吹かして。」

かのん：「えへへ」

かのんの明るい性格で病気の子供に好印象を持っていたクラスの子はすぐに美鈴を受け入れた。美鈴のあっけらかんとした性格も助けになった。とくに、ひかると神崎さんはかのんと美鈴と仲良くしてくれた。

まずは、美鈴は1時間授業だった。学校に来るのに慣れること。それが大事だった。一時間目が終わると帰って行く。迎えに来るのは冬ちゃんだった。お母さんが仕事で忙しいからだ。

かのん：「早く、美鈴も給食食べるくらい元気になりなよ。」

美鈴：「かのんちゃん、もう給食食べるまで元気になったの？」

かのん：「まっさか〜」

かのんはぺろつと舌をだした

ひかる：「かのんは食事制限があるから給食は食べられない。それに無理しないようにって授業は午前中だけ。」

ひかるは私の代わりに説明してくれた。かのんは完全に治ったわけではない。なるべく他の子供と一緒にいられるようにと配慮して学校に通っているが無理はできない。特に食事制限のあるかのんの食事はお母さんが作ってくれるから、家に帰って食事をする。

舞：「ほ〜んとかのんはうらやましいわよね。給食食べないで済むんだから。」

ひかる：「舞ちゃんの給食嫌いも困ったものよ。」

かのんと美鈴が笑う。

舞：「先生に『私も自宅でご飯食べます』って言ったんだけど怒られた。」

ひかる：「あたりまえでしょう」

かのんと美鈴がおなかを抱えて笑う。

でも、こんな楽しい学校になるなんて。私は幸せでいっぱいだった。

- - - - -

5月も半ばを過ぎ、私とかのんと美鈴とひかるちゃんと神崎さんの仲よし5人で市の施設にバーベキューに行った。ここは、普通の人だとなかなか知らないところである。ただっぴろい広場にポツンとバーベキューの施設がある。

冬子：「こんな近くにこんなバーベキューできるところあるなんて、冬子知りませんでした。」

あきら：「ああ、場所も街外れだしね。しかも、周りは木々で囲まれているから見えにくい。オオタカがいるから開発に制限がかかっている。そして、完全予約制で入口に案内すらない。ロコミ以外では知られようがない場所さ。」

かのんのお母さんが見つけてきてくれた場所だ。

冬子：「でも、広場以外に何にもないです。」

あきら：「ああ、だから、ここらへんの人は普通の人は花の丘公園の施設でバーベキューするだろ。あそこなら、遊具もあるし、子供たちが遊べる水場もある。動物園や植物園もある。」

斎藤：「だけど、人がいっぱいなので、かのんたちにはちょっと。」

かのんのお母さんがそう言った。そう、かのんや美鈴にとって人が

いっぱいいる場所はちよつと避けた方がいい。

あきら：「感染症が怖いからな。屋外だからそんなに気にすることはないのだろうけど、やっぱり念には念を入れた方がいい。」

でも、私たちにはこの広場で十分だった。走り回った後、よつばのクローバー探したり、クローバーの花で花冠を作って遊んだ。

舞：「彼女たちなら、蛇とかかえる捕まえるんだろうな。」

美鈴：「ああ、詩音ちゃんたちね。まるで男の子よね。」

ひかる：「詩音ちゃん？」

かのん：「気にしないで。舞もいい子なんだけど、ただ一つ欠点があつて、想像の世界の友達がいるの。その子の名前が詩音ちゃん。」

ひかる：「例の赤毛のアンのようなお話ね。でも、そういうのって私も好き。」

別世界の話を信じてくれるのは美鈴だけだからしょうがない。

あきら：「おーい、お肉焼けたぞ〜」

パパがみんなを呼んだ。

斎藤：「かのんのはこのお肉ね。それと、ご飯食べたら、少し木陰で休むこと。」

かのんは塩分制限と水分制限がある。塩分制限は何とか我慢できる

けど、水分制限はつらい。水を飲めば、心臓に負担がかかる。水を飲まなければ熱中症にかかる。だから、厳しい運動制限がかけられる。かのんが歩けないのは、汗をかいたりして心臓に負担をかけないようにすることである。だから、ほかの4人が広場を走り回っても、かのんは一緒に遊ぶことはできない。

冬子：「美鈴ちゃんは、生焼けはだめです。ちゃんと焼いて食べないといけません。生ものは厳禁です。」

あきら：「大変だな。肉なんて、すこし、生焼けの方がおいしいのに。」

パパは肉を焼きながらそう言った。冬ちゃんがそれを聞いて、首をかしげた後、こういった。

冬子：「わかりました。あきらさん交代です。冬子が作りましょう。」

そう言って、鉄板の上で焼き始めた。そして最後にレモンを絞る。

冬子：「これなら、塩分使っていないし、ちゃんと焼けてます。みんな食べてください。」

あきら：「でも、塩胡椒なしの焼きすぎだろう。どうして美味しくなるんだ。」

冬子：「あきらさん、とっても失礼です。文句は食べてから聞きましょう。」

パパと私は冬ちゃんの焼いた肉を食べた。

舞　：「結構、おいしい！」

あきら：「うそだろ。」

冬子　：「特別なレモンなんです。知り合いの家で作ってるレモンです。海外から輸入したレモンと違って、黄色くなってるからとったレモンですから味が違うんです。塩分、油がないですから健康にもいいんです。」

かのんや美鈴やひかるも食べる。かのんのお母さんもだ。かのんのお母さんは食べると同時にはしを落とした。

斎藤　：「これ、豚肉ですよね。」

冬子　：「はい。」

斎藤　：「こんなおいしい肉食べたことない。牛肉よりもおいしい。」

冬子　：「はい。普通は牛肉の方が美味しいのですが、こんがり焼いたり、お鍋にしたりして手間暇かけると豚肉の方がおいしいんです。しかも、お値段も安いのでとってもお得です。」

みんな冬ちゃんの料理に感動した。

ひかる：「舞ちゃん、もしかして、毎日、こんな料理食べてるの？」

舞　　：「え？　違うよ。普段はもっとおいしいよ。」

ひかる：「ごめん、やっとわかった。舞ちゃんの給食嫌い。これよりもおいしいの毎日食べてればね。美鈴が毎日、舞ちゃん家に夕食食べに行くのもわかるわ。」

そのあと、冬ちゃんが余ったお肉や野菜を鍋にしてくれた。バーベキューで鍋って変だけど、冬ちゃんが料理するからとんでもなくおいしくなる。

冬子：「塩胡椒使っていないからとてもヘルシーです。ポン酢で食べるとおいしいですが、そのままでも、野菜のうまみが出ています。味噌も使っていないし、醤油もあまり使っていないのでかんのちゃんでも大丈夫だし、温野菜だから、美鈴ちゃんも大丈夫です。」

斎藤：「楠木さん、教えてください。かのに食べさせてあげたいです。」

そう言っつて、冬ちゃんとかのんのお母さんの料理教室が始まってしまった。

神崎：「じゃあ、私たちは広場で遊びましょ。いいもの持ってきたんだ。」

舞：「いいもの？」

神崎：「うん、パパ持ってきて〜」

神崎さんのお父さんが大きな荷物を抱えて持ってくる。

ひかる：「これって、この前話してたもの？」

神崎：「うん、ペットボトルロケット。」

美鈴：「ペットボトルロケット？」

神崎：「この中に水入れて飛ばすんだよ。」

美鈴：「あはは、楽しそう。ぽんって言って風船飛ばすみたいに飛ばすんでしょ。」

神崎：「ちよつと違うかな。まあ、みててね」

神崎さんはお父さんと一緒に準備を始める。お父さんが自転車の空気入れでロケットに空気を送り込む。

神崎パパ：「準備完了。」

神崎：「じゃあ、行くね。3、2、1 リフトオフ!!」

神崎さんが手に持っていたボタンを押す。その瞬間、ロケットは消えていた。

ひかる：「あそこ!」

ロケットは広場の空高く舞い上がっていた。まるでひばりのようだった。

舞：「うそでしょう! あんなに飛ぶの!？」

美鈴：「あはは。」

ロケットは落下傘を開いてゆっくりと落ちてくる。5月の太陽の光を反射させながら。

かのん：「ごめん、私、馬鹿にしてたかも。こんなにすごいんだ。」

神崎さんは両手を腰に当てて「エッヘン」とふんぞり返る。

あきら：「うお〜、すげ〜」

あきらパパが子供みたいに叫びながらやってくる。

あきら：「見損ねた。もう一回できませんか？」

神崎パパ：「ええ、できますよ。今度は二段式でやりましょう。」

今度はパパまで子供に交じって準備を始める。

二回目はさつきよりも高く、遠く飛んで行った。私はひかると神崎さんの3人でロケットを拾いに行く。

舞：「神崎さん、すごい！そして、楽しい休日ありがとう。」

神崎さんは指を2本出してVの字にして笑った。

満開の花ミズキの下で私達は、今まで体験したことのない最初で最後の楽しい一日を満喫した。

つづく

4 - 1 4 ・遠足（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 14 ・遠足

6月に入った。もうすぐ梅雨に入る気分が滅入る時期だけど、ちょっと楽しみがある。梅雨にはいるほんのひと時の間にこの学校では遠足がある。2年生は森林浴公園だ。

ゴンタ：「森林浴公園なんかいつも行ってつままないぜ。もっと面白いところがいいのによ。」

男の子たちがやっぱり詰まんそうにゴンタに同調する。

ひかる：「じゃあ、あんたたち留守番してなさいよ。」

ゴンタ：「うるせーんだよ。女のくせに「ごちゃごちゃ言っんじゃねーよ」

ひかるの周りに女の子が集まる。

担任：「はいはい。静かにしなさい。喧嘩するなら連れて行かないわよ。」

なんだかんだ行っても遠足を楽しみにしている子供たちはそれ以上騒がなかった。

ひかる：「でも、確かに森林浴公園はつままないわよね。武蔵野公園とかのほう遊ぶもの一杯あって面白いのにな」

ひかるが私にぼそつと言う。

舞　：「そうだよね」

私はにつこり笑ってうなづく。でも、本当は嬉しくてたまらない。だって、小学校に入って初めての春の遠足だから。去年は入院していていけなかった。遠足が行けるくらい元気になるということがどんなに素晴らしいことか。入院したことのない子に言ってもわかってもらえないだろう。

遠足が楽しみなのは私だけではなかった。美鈴は先生やお母さんの反対を押し切って参加しようとしている。

美鈴　：「私も行きたい。もう、普通に学校通えるんだからいいでしょ。もちろん風邪とかひいたら行かないけど。１年間でまんしたんだからちよつとくらいいいじゃない。」

めったに自己主張しない美鈴の熱意に押されて渋々ながら松井先生とお母さんは了承した。

松井　：「舞ちゃん、無理させないようによろしく頼むね。」

美鈴は私が面倒をみることで遠足に行くこととなった。私はもちろん二つ返事で了承した。

かのんのほうは言わずもなだった。

かのん：「いきたい！いきたい！いきたい！いきたい！」

秋本先生も

秋本　：「まあ、舞ちゃんが付いてるならいいだろう。だけど、調

子が悪くなったらすぐ連絡するように。その日は病院で待機してよ
う。」

そう言っただけで認めてくれた。

けれども、意外な人から反対があった。

草薙：「松井先生も、秋本先生も大きな見落としがあります。二
人とも遠足にはいけません。」

かのん：「なんでよ!」

美鈴：「どうしてですか?」

草薙：「舞ちゃんの遠足をまだ許可してないからだ。今の話は舞
ちゃんがないと成立しない。」

舞：「どうして、私だめなんですか? もう普通に生活してま
すよ!」

私のラインベルク症候群は確かに根治していない。でも、生活に制
限がかかるようなことはないはず。

草薙：「いや、話の流れで。二人とも主治医に許可求めているのに
私には聞かないなんてさみしいじゃないか。」

舞：「はいはい。先生、私遠足に行ってもいいですか?」

草薙：「うん、どうしようかな」

つかさ：「せんせい? しつこいと嫌われますよ?」

草薙　：「おお、それは困るな。うん、許可しよう。特別だよ。」

そういつて3人の遠足の許可がでた。もっとも、私は許可出なくても行くつもりだったけど。

草薙　：「だけど、舞ちゃんがいないといけないというのはリスクがある。万が一風邪で舞ちゃんが休んだら3人ともいけなくなる。やはり医師を連れていくべきだな。よし、私が同行しよう。」

松井　：「それは無理があります。草薙先生がいないと緊急手術ができなくなります。」

草薙　：「その通りだ。では、松井先生行ってくれたまえ。」

松井　：「え？」

草薙　：「別に緊急手術はないだろう。患者さんたちは俺たちが診てやるから任せただぞ。」

松井　：「ああ、最初からそのつもりでしたね。」

そうやって、松井先生と一緒にいてきてくれることとなった。

ひかる　：「みんなで遠足のおやつ買いに行かない？」

ひかるはそう3人を誘ってくれた。

美鈴　：「おやつ？　買っていいの？」

ひかる　：「うん、ひとり300円までなら。自由に選ぶの」

美鈴　：「いく〜」

かのん　：「いいな〜。私もおやつ食べたい。」

ひかる　：「え？」

かのん　：「おやつ食べられないの。」

舞　　：「そっか。食事制限があったっけね。じゃあ、食べられるの買いに行こうよ。バナナとか果物とか食べられるもの買いに行こうよ。」

そうやって冬ちゃんと子供たち4人でおやつを買いに行った。

美鈴　　：「バナナはおやつに入るの？」

ひかる　：「(入らないと思うけど。でも、かのんちゃんにとってはおやつだからいいんじゃない?)」

冬ちゃんが秋本先生に教わった注意事項に沿ってかのんのおやつを選んでいる。かのんは楽しそうだった。

舞　　：「かのん、楽しそうね。」

私が少しからかうと

かのん：「そういう舞もさっきから真剣におやつとにらめっこしてるじゃない。」

と、言い返された。なんだかんだ言っても私も楽しかった。

楽しみにしていた遠足だけど、遠足の二日前に残念なことが起きてしまった。美鈴が少し風邪っぽくなってしまった。別に熱とか出るわけでないけど、美鈴にとっては大きな問題だった。バイ菌をやつつける白血球がちゃんとまだ回復してないため免疫とかいろいろ弱まっており、ちょっとした風邪でも命取りになることがあるからだ。

美鈴：「遠足、駄目だつて。がっかり。」

美鈴は、私たちの家に夕飯を食べに来た時、しょんぼりとそう言った。

美鈴：「風邪でも行くつて言ったら、お母さんにも松井先生にも怒られた。『まだ、血の病気が治ったわけじゃないんだから』って。」

そう、美鈴もかのんも退院してるけど治ったわけでない。かのんは薬で症状を抑えているだけ。

美鈴は完全に治ったのではなく、寛解といって、病気のもとはまだ少し残っているけど、症状に出なくなっているだけである。でも、それは私のラインベルク症候群も同じ。完全に治ったわけではない。だから美鈴も私も再発の可能性がある。

ただし、決定的に違うのは、私は再発したら、「あゝ、また出たね」。はい、「お薬」と言われておしまい。特效薬のキロニーネがあるからだ。だけど、特效薬のない美鈴の病気は再発したら、もう、お薬で治すことはできないといわれている。だから、先生もお母さんも慎重にならざるを得ない。

舞　：「元気だしなよ。遠足は来年もあるし。森林浴公園なら近いからこんど冬ちゃんと一緒に行こうよ」

美鈴　：「みんなと行きたかった。」

舞　：「そうそう、向こうの世界では先週遠足だったんだって。それで、詩音とポッチがまた、いたずらしたんだって。なんでも、運転手さんの地図をそつとすり替えて、駐車場の場所違ふところに誘導しちゃったんだって。それがばれて、二人は森林浴公園に着いてもバスの中にお残りだったんだって。バカだよね。」

美鈴　：「そう。」

私は一生懸命慰めたつもりだったが、美鈴の気分は晴れなかった。

冬子　：「美鈴ちゃん、遠足は来年もあります。森林浴公園なら私たちと一緒にいけます。だけど、美鈴ちゃんの病気は再発したら、遠足も森林浴公園も二度といけなくなってしまう。今日は冬子の料理で我慢してください。」

美鈴　：「うん」

舞　：「今日は何？」

冬子：「半月うどんです。」

舞：「ええ、うどん… がつかり」

冬子：「美鈴ちゃんの体を考えて消化のいいものにしました。それに文句は食べて聞きましょう。」

ほどなくして夕飯になる

あきら：「うほ、半月うどんか」

舞：「え？ 有名なの？」

あきら：「食ってみる」

極太の麺に醤油出汁、どろどろの半熟卵を混ぜて食べる。

美鈴：「！」

舞：「うそ！」

美鈴：「うどんって、病院でもよく出だし、あんまり好きじゃないけど、このうどん全然違う」

舞：「麺も腰があるし、それにこの醤油だしって。」

冬子：「はい、たまり醤油のだしです。半月うどんの地元から送ってもらいました。」

あきら：「冬子の会心の料理の一つだ。この上となるとお星様カレ

「半月うどんとかあまりふぐのトマトリゾットとか王様でも食べられない料理ようなとんでもないのしかないくらいの絶品だ。」

美鈴：「すごい。やっぱり、冬子さん最高」

冬子がつこりと笑う。

舞：「（美鈴も少し元気出たかな）」

舞は心の中でつぶやいた。

遠足の前日、私はかのんの家で遠足の準備をしていた。

かのん：「これでOK。ちゃんとしおりも入れたし、おやつも入れたし準備万端。」

舞：「明日楽しみだね。美鈴にはちょっと悪いけど。」

かのん：「うん、でも、楽しみ。」

私たちは美鈴のことを気にかけていても、やっぱり初めての遠足の魅力には勝てなかった。

斎藤：「舞ちゃん、かのん、おやつにケーキ焼いたけど食べていけない？」

かのん：「ケーキ?! 食べる。」

舞　：「私も食べたいです。」

かのんのお母さんは冬ちゃんから塩分のないケーキの作り方を教わった。バターとか塩分があるものを使わないけど、味はケーキそのもの。だから、ケーキを食べられなかったかのんにとってお母さんの作るケーキは天国のお菓子だった。

かのん：「おいしい〜」

舞　：「うん、おいしい」

斎藤　：「舞ちゃんのママから教わったんです。ほんとに舞ちゃんのママは料理上手ですよね。」

舞　：「ああ見えても、東京のホテルで修行してたんで。」

私はちょっと自慢げに話した。

そのあと、少し遊んで、明日の荷物の確認をして、私は帰る準備をした。

舞　：「じゃあね。かのん。明日ちゃんと起きてね。」

その時だった。かのんが苦しそうな顔をした。

舞　：「かのん？」

そして、かのんはそのままつづくまる。

舞　：「かのん!」

かのんのお母さんはいまちよつと出かけている。かのんの顔が青くなる。

舞　：「かのん、しつかりして！　今、お薬持ってくる。」

私は、かのんがいつも持っているポシエットから薬を出す。そして、その薬を飲ます。

かのん：「舞、ありがとう。大丈夫。」

舞　：「大丈夫じゃないよ。すぐ病院行くよ。」

私は病院に電話をかけた。すぐに秋本先生が飛んできた。

秋本　：「大丈夫だ。軽い発作だ。舞ちゃんが薬を上げたから事なきを得た。でも、一応病院に連れて行こう。」

秋本先生は病院に電話をかけて救急車を手配した。その救急車の音でかのんのお母さんが真っ青な顔をして帰ってくる。

秋本　：「斎藤さん、もう大丈夫です。念のために病院に行きましよう。でも、舞ちゃんがいてよかったです。舞ちゃんがあわてずお薬を飲ませたから助かりました。」

かのんのお母さんは私の手を握り何度もありがとうと言ってくれた。病院について西棟にかのんは運び込まれる。かのんの病室はまだ空いていて、再び運び込まれる。

舞　：「かのん、しつかりするのよ。」

かのん：「大丈夫だって。もう平気。」

舞　：「平気じゃないよ。心配だよ。」

その夜、私は心配で夜通しかのんのそばに言い張った。

母親　：「舞ちゃん、今日は帰りましょう。明日、遠足でしょう？」

舞　　：「こんな状態で私遠足に行っても全然楽しくない。今日はかのんのそばにいる。」

かのんのお母さんは困り果て冬ちゃんを呼んだ。私は冬ちゃんに一生懸命話した。

冬子　：「わかりました。遠足は来年もありますが、かのんちゃん
は一人しかいません。舞ちゃんの気の済むようにしてOKです。」

母親　：「楠木さん！」

冬子　：「ご迷惑とは思いますが、ちゃんと落ちつくまで舞ちゃん
にいさせてあげてください。舞ちゃんが危なかった時、かのんちゃん
は隣にいてくれました。恩返しではないですが、よろしくお願い
いたします。」

冬ちゃんがそう話すとかのんのお母さんもあきらめて了承してもら
った。

私は一晩かのんの病室で付き添った。遠足も楽しみだったけど、私

にとって遠足よりもかのんの方が大事。

次の日から、検査が始まった。もう、すぐに命に別条はないということでは帰された。

検査の結果、やはり、心臓が大きくなって悪化していることがわかった。

秋本：「すぐに入院が必要とまでは言いませんが、あまりよくないですね。学校に行くのは控えた方がいいかもしれません。」

しかし、かのんは強硬に反対した。それで、週2日だけ学校に行くことを認めてもらった、それ以外の日は自宅療養となった。

かのんの病気は一進一退を繰り返す。わかっているけど、このまま悪くなる一方なんじゃないかと私は不安でいっぱいだった。

つづく

4 - 1 5 ・ 七 夕 (前 書 き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

7月に入りプール開きになった。私は小学校で初めてのプールだった。楽しみで楽しみでしようがなかったけど、決して表情にはださなかった。だって、かのんと美鈴は見学だ。

美鈴　：「私たちにきにしないで楽しんできなよ。」

美鈴は屈託のない笑顔でそう送り出してくれた。そして、かのんはかのん：「舞、いいなあ。プールいいなあ。そうだ、舞もそろそろ再発しない？　そうすれば一緒に見学できる。」

そう、素直に羨ましがった。二人の心遣いが何となくわかり、今度は遠足に行かなかったときと同じように「一緒に見学する」とは言わなかった。

舞　　：「じゃあ、今度の七夕3人で集まってお祝いしよう！」

かのん：「七夕？」

美鈴　：「おだんご、おだんご」

かのん：「それはお月見。」

美鈴　：「あ、そっか。」

かのん：「七夕は笹の葉にお星様とか願い事を書いた短冊をつけて飾るほっだよ。」

そうやって、七夕の日に3人が祐美子さんのレストランに集まった。3人以外に、冬ちゃん、つかささん、響子先生、そして退院した淳君も来てくれた。外はあいにくの雨だった。

かのん：「淳、呼んでやったの感謝しろよ。」

淳：「別にかのんちゃんに呼ばれたんじゃないよ。」

かのん：「え？ よく聞こえなかった。もう一度言ってくらん？」

淳：「はい、かのんちゃんに呼ばれてうれしいです。」

かのんはうんうんとうなずく

美鈴：「かのんちゃん・・・。」

かのんは美鈴のたしなめにも意を介せず話を続ける。

かのん：「今年も雨だね。乙姫様と彦星会えないね。」

3人とつかささんが外の空を見上げる。

舞：「あれから一年たったんだ。」

つかさ：「そうね。」

かのんと美鈴も静かになる。

淳：「去年何かあったの？」

かのん：「淳、ほんと雰囲気ぶち壊し。空気読みなよ。」

舞：「淳君、『院内学級の物語』知ってる？」

淳：「もちろん、舞ちゃんがよく読んでくれた。」

舞：「あれ、子供が作ったの知ってる？」

淳：「え？ 大人の童話作家じゃないの？」

舞：「うん、私たちより一つ上のお兄ちゃん。私たちと同じくらいのときに作ったの。」

淳：「うわー、すごい天才。その人今何やってるの？」

美鈴：「・・・」

舞：「・・・」

かのん：「天国で神様や天使と一緒に笑ってる。」

淳：「え？」

舞：「去年の今日、天国に昇ったの。」

淳：「ごめんなさい。僕、いけないこときいちゃった。」

つかさ：「気にしなくていいのよ。知らなかったことですから。」

でも私たち3人はたかし兄ちゃんのことを思い出し言葉にならなかった。

響子　：「さあ、みんな、そんな暗くならないで、楽しみましょう。そうだ、短冊に願いごと書きましょう。みんな何をお願いするかな。」

冬子　：「そうです。今日は織姫様と彦星のお星様祭りです。賑やかにしましょう。それにしんみりしているとたかしちゃんも悲しみません。」

そうだ。本当にそう思う。よく考えたら、あの時一緒に入院していた3人はかのんが一時退院ながらみんな退院している。後から来た淳君もだ。みんなここに集まっている。西棟に入院したら助からないうという噂だったけど、あの後、ちゃんと4人も退院している。たかしにいちちゃんには悪いけど、天国に召されるのはたかし兄ちゃんが最後であってほしい。

響子　：「みんな、何かいたかな？」

美鈴　：「病気が再発しませんように」

かのん　：「このまま退院できますように」

美鈴　：「淳君は？」

淳　　：「かのんちゃんのために願いことかいた。」

かのん　：「淳のくせにいいところあるわね。なんて書いたの？」

淳　：「かのんちゃんの意地悪な性格が治りますように」

かのん：「なんですって」

つかさ：「まあまあ」

美鈴　：「舞ちゃんはなんて書いたの？」

舞　　：「みんな一緒に大人になれますようにって。」

淳　　：「え？　そんなの当たり前じゃん。」

かのん：「ほんと、淳って馬鹿。たかし兄ちゃんはなれなかったんだよ。」

淳　　：「あ」

そう、私たちは再発の可能性のある病気。決して治ったわけではない。健康な人たちだったらわからないこと。そして、淳の病気も決して軽くはないけど、急に死ぬような病気ではない。大人になれることをうたがっていない。

だけど私たちは。とくにかのんと美鈴は。

私たち三人は笹の葉に願いを込めて一生懸命お祈りした。

舞　　：「（たかし兄ちゃん、私たちを守って。）」

みんなも一生懸命お祈りした。

UJU<

4・16・上川こども病院（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 16 ・ 上川こども病院

1学期が終わり楽しみにしていた夏休みがやってきた。

だけど、すぐに楽しくないことが二つ起きた。

一つは神崎さんがお父さんの仕事の都合で転校してしまった。せっかく仲良くなれたのに。でもお仕事の都合じゃしょうがない。

もう一つはかのんがまたかるい発作を起こし再び入院することになった。

幸い、すぐに発作はおさまり大事には至らなかったが、やはり負担をかけていることと、検査した結果、また、心臓が大きくなっていくこともあり、入院した方がよいということとなった。

かのん：「わかってたことだけだね。やっぱり入院はやだ。」

院内学級の教室でかのんは舞に話す。

舞：「この、病気は一進一退を繰り返すからね。また、すぐに元気になって退院できるよ。」

舞が慰める。

かのん：「でも、学校楽しかった。前は知らなかったから憧れてただけだけど、今は知っちゃったから、なおさら行きたくなくなる。」

舞：「うん、学校いいよね。あれで、給食さえなければ最高のよね。」

かのん：「舞も相変わらずね。」

かのんが両手を広げ呆れたしぐさを示す。

かのん：「いつぱい友達で気なものにな。あえなくなっちゃった。」

舞：「みんなお見舞いに来るって。別に、面会できないわけじゃないからいつでも会えるよ。」

かのん：「でも、みんなと遊んだりするわけじゃないから。ちょっと違う。」

舞：「それも、調子よくなれば大丈夫だよ。それまでは私で我慢して。」

かのん：「うん。でも、変だよ。学校に行ってる時よりも舞と話す時間が長くなった。」

舞は院内学級のボランティアに毎日のように来ている。だから、入院している方が会って話す時間が長い。

舞：「西棟は、今、夢ねえちゃんだけだからね。人がいないことはいいことなんだけどさみしいよね。」

かのん：「舞も入院しなよ。そこから学校に通えばいい。そうすればさみしくない。」

舞：「無理言わないでよ。どんな病気で入院するのよ。」

かのん：「ボランティア症候群。病院にボランティアに来たくて来たくたしょうがなくなる病気。いいでしょ。」

舞：「うん。でも、それ入院の必要ない。それでころか入院したらますます悪くなる病気じゃない？」

そんな感じでしたわいもない会話でかのんは気を紛らわしていた。

.....

草薙：「正直、かのんちゃんの治療は手詰まり感がある。」

舞：「治らないってこと？ アーキテクトが利かないの？」

草薙：「抜本的な治療方法がないってことさ。一進一退を繰り返す。成長期だから体が大きくなる。その分心臓に負担がかかる。だから、アーキテクトが抑えても悪化したように見える。」

舞：「そうなんだ。もう一回調べてみる。」

草薙：「舞ちゃん、ありがとう。でも、治療に関しては先生達に任せておいた方がいい。どっちかというのと舞ちゃんにはかのんちゃんを元気づけたり、お話し相手になって支えてくれる方がうれしい。」

舞：「う、うん」

舞は何となく不服そうだ。

松井：「さすが、番井先生の生まれ変わり。治療方法に興味が行

つてしまつか。」

舞　：「え？　生まれ変わり？」

草薙先生が苦い顔をする。

草薙　：「ただの噂話さ。そんなのありえない。美雪が死んだのは去年だ。すでに舞ちゃんが生まれている。」

つかさ：「だけど、番井先生が生きてらっしゃっていて、事情により人前に顔を出せない。それで、舞ちゃんが伝言役として、連絡係になっているって噂があります。」

草薙　：「それも、違う。美雪は死んだんだ。葬式にもでた。骨も拾った。伝言役なんてなりえない。舞ちゃんの小学生離れた言動に理由をつけるための勝手なうわさに過ぎない。」

草薙先生は話を断ち切った。番井先生は優秀な女医さんで草薙先生の婚約者だった。去年、事故で亡くなっている。

わたしは、この話を不思議な風景の世界の連絡帳に書いた。そうしたら、次に行った時、手紙が置いてあった。草薙先生あての番井先生からの手紙だった。もうひとりの私が気を利かせてくれた。

だけど、

草薙　：「舞ちゃん、大人をからかうものじゃない。だれが書いたんだか知らないが美雪は死んだんだ。舞ちゃんが気を使ってくれるのはありがたい。良かれと思ってやったことはわかっている。でも、それは人を傷つけることにもなるんだ。」

そういつて、先生は私の話を信じてくれず、ぽんと手紙を読まずに机の上に投げた。もうこの話はおしまいって感じだった。

しかし、この手紙の話が、小児病棟に広まり、私が番井先生の使いだつて噂に信ぴょう性が増してしまつていた。

- - - - -

そんなある日かのんのお母さんが舞と草薙先生に相談があると思つてきた。

母親：「番井先生に見ていただくわけには行かないのでしょうか？ なんでも、舞ちゃんは番井先生の使いとか。ご事情があつて人前に出れないのはわかつております。もちろん、絶対に秘密にしますので。」

草薙：「お母さん、お気持ちはわかりますが、舞ちゃんが番井先生の使いというのは根も葉もないうわさです。それに、もし、生きていたとしても、番井は免疫学の専門家でした。ですので、心臓病は門外なんです。」

母親：「わかります。先生のお口からは『はい、生きてます。わかりましたから手続きします。』なんて言えるわけですね。でも、ここで、お返事ただかなくても、先生なら何とかしてくれると思います。どうかよろしく願ひします。」

草薙：「斎藤さん・・・。」

母親：「舞ちゃん、かのんをどうかよろしく願ひします。」

そういつとかのんのお母さんは部屋を出て行った。

舞　　：「あの、草薙先生、お手紙、書．．．」

舞の発言を遮り草薙先生が言った。

草薙　：「だめだ。非現実的な話に希望を持たせてはいけない。本当に舞ちゃんの話が正しいとしてもだめだ。もっと、現実的に治す方法を考えよう。」

数日後、かのんのお母さんは秋本先生と草薙先生に呼ばれた。

母親　：「番井先生と連絡が取れたんですね。」

草薙　：「いや、番井先生と連絡は取れてません。しかし、提案があります。」

母親　：「はい？」

秋本　：「幹細胞治療による再生療法という新しい治療方法が試されている病院があります。」

母親　：「治るんですか？」

秋本　：「まだ、実験段階で確実に治るとは言えません。特に15歳以下では治験例が少なくなんとも言えません。ただ、このまま内科療法だけに頼るだけではないと思います。」

草薙　：「問題はその病院の場所なんですが．．．北海道にある。」

上川こども病院』というところなんです。」

母親：「調べたことあります。こどもの心臓病治療実績では日本で一番とか。」

秋本：「ええ、我々としては悔しいのですが、残念ながら、上川こども病院の実績にはこの病院は及びません。場所的な問題はありませんが、色々お考えいただければと思います。もちろん、我々は見放したわけではありません。この病院のままというのも一つの選択肢です。その場合、今まで通り全力を持って治療させていただきま

す。」
母親：「わかりました。少し主人とも相談させてください。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

かのん：「舞ちゃん、実はかのん今度北海道に行くことになったんだ。」

かのんが悲しそうな顔をして言う。

舞：「え？ 旅行？ 大丈夫なの？」

かのん：「ううん、病院変わるんだ。」

舞：「かのん、そういう冗談よくないよ。本気にしちゃうじやない。」

かのん：「ごめん、ほんとなんだ。新しい治療をするんだ。」

舞：「ちょ、ちょっと。私やだ。北海道つて北の国でしょ。毎日いけないじゃない。そんなのやだ。」

かのん：「ごめんね。でも、私治したいんだ。舞ちゃんと離れ離れになるのはいやだけど。このまま悪くなるより、ちゃんと治療を受けたい。」

舞：「やだよ。神崎さんが転校したばかりなのになんでかのんまで遠くに行くのよ。この病院もすごくいい病院だよ。私、草薙先生と話してくる。」

そう言つて私は草薙先生のところに行った。

舞：「先生、何とか止めてよ。この病院の方が絶対いいよ！」

草薙：「確かにこの病院は優れた設備と優れた医者がいる。だから、遠くからわざわざ来てくれる患者さんもいる。だけど、小児科に関しては各県にあることも病院のほうが専門だ。特に北海道の上川こども病院は日本一と言われている。」

舞：「でも、ここから遠い。そうだ！ 東京の本院を薦めたら？ 淳典堂病院だっけ。あそこならここからも通える。」

草薙：「ああ、私たちはご両親に淳典堂病院も薦めた。しかし、美雪が死んだあと、美雪と一緒に仕事をすることを目的としていたお医者さんがみんな他の病院に行ってしまった。そのため、少し力が落ちている。秋本先生もそうやってこっちに移ってきた先生だ。」

舞　：「でも」

草薙　：「それに1%でも助かる可能性が高いならそちらに行くのは親御さんとして当たり前だ。また、少しよくなったらこっちに戻ってくるから、それまでは一緒に頑張ろう。」

舞　：「・・・うん」

私は説得するつもりが説得されて帰ってきてしまった。

舞　：「（かのんのことを考えたらそれが一番だよな。）」

私は私を無理やり納得させた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

8月に入り、いよいよかのんの転院も近くなり、私たちはキッチン花の丘でお食事を開くこととなった。かのんもその時は外泊を認められた。今回は、料理は冬ちゃんが作ることになったので、みんな楽しみにしている。

美鈴　：「無理やり、冬子さんに作らせたんですよ。おじいさん泣いてるよ。」

舞　：「いいのよ。やっぱり料理はおいしくなきゃ。」

健一おじいさんの料理もまあまあだけど、やっぱり冬ちゃんにはかなわない。舞はそう思った。

美鈴　：「かのんちゃん、ひさしぶり〜。終業式以来だね。」

美鈴が明るく話しかける。

かのん　：「うん、久しぶり。美鈴もあんまり変わってないね。」

美鈴　：「うん、10日くらいじゃ変わらないよ」

舞　　：「美鈴も病院に見舞いに来ればいいのに。」

美鈴　：「えへへ」

美鈴にとって病院は嫌な思い出がいっぱいあったところ。だから、維持療法の通院の時以外、絶対に近づかない。だから、かのんのお見舞いに行かないのだった。私のように入院中毎日退屈と戦っていただけで、あんまり嫌な思い出がないのとは違う。

淳　　：「北海道いいなあ。涼しいだろうな」

舞　　：「うん、特にかのんみたいに水分制限のある子にはいいところだよ。汗かかないから。」

健一　：「北海道といえばメロンだ。メロンはうめーぞ。特に夕張メロンはな。水分制限のあるかのんちゃんだっけと大丈夫だ。」

冬子　：「ち、ち、ち。夕張メロンは有名ですが、他のブランドでも安くておいしいメロンがあります。毎日メロン食べられます。そんなところにいけるなんてかのんちゃん羨ましいです。」

かのんが果たして水分の多いメロンを毎日食べられるか疑問だけど、

そんなことは言わないのがお約束。今日は悲しい話はしないって冬ちゃんとお約束したから。

冬ちゃんの料理を堪能した後、冬ちゃんから、子供たちに特別プレゼントが渡された。かのんだけでなく、子供たちや大人の分まで用意してあった。

小さな木の箱で、周りに一杯お星様が張られていた。

かのん：「なに？ これ。」

冬子：「冬子特製の宝石箱です。小物入れやオルゴールに改造することも出来ます。冬子こつこつと作りだめしてました。みんな受け取ってください。まだまだ一杯あります。」

舞：「い、いくつ作ったの？ 冬ちゃん。」

冬子：「30個くらいです。」

舞：「……そんなに配る人いないよね。」

冬子：「ひとり3つまでOKです。」

舞：「それでも、余るよね。」

冬子：「そうとも言います。」

健一：「冬子、悪いんだけど、余ったら持って帰ってくれないかな。ここにきては作ってるから、もう、置き場所に困ってるんだ。」

冬子：「健一さんにはこの木箱の魅力がわからないんですか？
お星様一杯でとてもかわいいです。冬子幸せです。それを邪険にするなんて健一さん変な人です。」

健一：「いや、そうじゃなくてだな。」

冬子：「わかりました。いいです。家に持って帰ります。舞ちゃん、半分持ってくださいね。」

舞：「う、うん。」

舞はいつぱい余っている木箱をみてうんざりした。

淳：「ところで、いつ出発するの？」

かのん：「あさって。10時くらい。」

美鈴：「あさってかあ。私、その日は病院の日。お見送りいけない。」

かのん：「うん、しょうがないよ。美鈴はちゃんと自分の病気治さないかね。舞はその日は？」

舞：「うん、駅まで見送りに行くよ。」

私はさみしく笑った。この前の神崎さんの時は神崎さんの家の前で出発する神崎さんの車を見送った。

冬子：「舞ちゃん、だめです。もっと元気出して笑って、笑って。」

「

一人冬ちゃんのはしゃぐけど、やっぱり元気が出なかった。

お料理はとてもおいしかったけど、みんな黙りがちで食べた。

そして、時間が来た。

ひかる：「それじゃ、頑張つてね。かのん」

舞　：「ちゃんと元気になって、早く戻ってきてよ。」

かのん：「うん」

美鈴はもう泣いてしまっている。

かのん：「そうだ、せっかくもらった木箱だけど取り換えっこしよう。みんながいつも応援してくれると思えるから。」

ひかる：「それは、いい考えね。その方が思い出に残る。」

そう言つて、かのんは冬ちゃんから一杯木箱をもらつて、みんなの分と取り換えた。みんな、木箱の裏に自分の名前をマジックで書いて渡した。

かのん：「これで、向こうに行つても元気が出るわ。」

かのんは明るく笑つた。その笑顔は一生忘れられない笑顔だった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

舞　：「冬ちゃん、重いよう。」

冬子　：「人生とはそんなものです。冬子、この年になってわかりました。」

舞　：「違うと思う。重いのは人生じゃなくて、このリュック。」

そう、帰り道、一杯木箱を持って帰るはめになった。一人3つもないといって言われた。あたり前だけど。私はかのんからもらった木箱を手に、残りをリュックに入れて歩いている。

冬子　：「じゃあ、近道して帰りましょう。花の丘公園の中を通って行きましょう。」

そういうと、ずんずん、公園の中に行ってしまう。

舞　：「ちょっと、まってよ。もう。」

そういつて、私は冬ちゃんの後を追いかける。その時、ふと、公園の片隅の方が気になって立ち止った。何か呼ばれてるような気がした。

冬子　：「舞ちゃん、どうしました？」

舞　：「呼ばれてる」

私は、一二歩、呼ばれてる方にちかづいた。

その時だった。

「コーン」「コーン」「コーン」

一斉に手の中の木箱とリュックの中の木箱が鳴りだす。そして、急に景色が揺れ、「しおんの部屋」が目の前に現れる。

舞　：「あれ？　もう、不思議な世界。今日は疲れたからあんまり来たくなかったんだけど。しょうがないか。また、二週間くらいここかあ。」

そう言つて、私は、リュックを下して、手に木箱を持ったまま、部屋を確認する。何か詩音ちゃんがメッセージを残していないか確認したかったからだ。特に何もメッセージは残ってないようだった。そして、部屋の隅に行くと突然、また「コーン」となり出す。再び景色が揺れる。

目の前に冬ちゃんがいた。

冬子　：「舞ちゃん、びっくりしました。一瞬、見失ってしまいました。」

私は茫然とその場にたたずんだ。

舞　：「うそでしょ。戻ってきてる。」

冬子　：「舞ちゃん、リュックどうしましたか？」

舞　：「え？」

背中にしよっていたリュックがない。

舞　：「あ、不思議な世界においてきた。」

冬子　：「？」

舞　：「冬ちゃん、ごめんなさい。リュック当分取りに行けない。不思議な世界においてきちちゃった。」

冬子　：「じゃあ、舞ちゃんお久しぶりです。向こうにはどれくらいいたのですか？　また2週間ですか？」

舞　：「ううん。一瞬。すぐに戻ってきた。今までこんなことなかった。でも、さっき、こうやって木箱を持って歩いていたらいきなり向こうに飛ばされたの。」

そう言って、私は再現して見せた。その時、

「コーン」

という音とともにまた、不思議な世界に飛ばされた。

舞　：「うそ！」

今度はリュックをしょって、再び部屋の片隅に戻る。再び、木箱が鳴りだした。そして冬ちゃんの目の前に戻った。

舞　：「冬ちゃん！　この木箱もつてると向こうにいける！」

冬子　：「舞ちゃん、すごいです。とうとう超能力に目覚めましたね。冬子も鼻高々です。」

冬子：「冬子も向こうに行ってみたいです。こうやって、木箱を持って歩けばいいんですね。」

そうやって冬ちゃんが歩き出す。そうするとやはり木箱が鳴りだした。

舞：「冬ちゃん、気をつけて！」

冬ちゃんがその場で動きを止める。そして、あたりを見回す。

私は、向こうに飛ばないように木箱を置いて冬ちゃんを引き戻すために手を握る。

舞：「え？」

目の前に花の丘公園と不思議な世界の両方が見える。

冬子：「これが不思議の世界……」

舞：「冬ちゃんにも見えるの？」

冬ちゃんがうなずく。私は冬ちゃんをあわててひっぱり遠ざける。木箱が鳴りやむ。

舞：「超能力に目覚めたんじゃないくて、この木箱のせい。私は自由に入入りできるし、冬ちゃんも見えるようになった。」

私と冬ちゃんは二人して茫然とその場に座り込んでしまった。

U
U
U
U

4・17・夏の終わり（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 17 ・夏の終わり

8月に入りお盆も近くなったところ、私はいつものように院内学級にボランティアに来ていた。

でも、かのんも北海道に転院して、夢姉ちゃんも骨髄抑制期で部屋から出てこない。

だから、今、西棟から院内学級に来る子はおらず東棟の短期入院患者しかない。

舞　　：「ひま〜」

つかさ：「そうですね。今は東棟の子も夏休みを利用したおっきい子が多いですから、あんまり、舞ちゃんのご本とか似顔絵とかを喜ぶ子は少ないですね」

舞　　：「うん。本当は暇なのはいいことなんだけどね〜。どっかで重症患者いないかな〜。探してこようかしら」

松井　：「こらこら。何言ってるんだか」

舞　　：「えへへ」

つかさ：「こんな時は家族やお友達とプールとか行くといいですよ」

舞　　：「でも、冬ちゃんも東棟でボランティアしてるし、パパも仕事で忙しいしね。そして、美鈴は今年はプールだめだって」

松井　：「ああ、感染症が怖いからな。半年はプールとかはだめだ」

つかさ：「他のお友達誘ったらどう？」

舞　　：「あとは、ひかるかあ。でも、ひかるまじめだからなあ。

『準備体操しっかりして、そのあとひたすら泳ぐの練習しましょう』
とか言いそう。それじゃ、つまんない」

松井先生とつかさが苦笑する。

舞　　：「それに、かのんが調子悪いのにあんまりあんまり遊ぶの
気が引けるし」

つかさ：「心配なんだよね。かのんちゃんのこと。でも、大丈夫新
しい治療がうまくいきます」

舞　　：「そうだよな。そうそう、ひかるといえば、来週、札幌の
親戚のうちに行くんだって。それで、かのんの入院している上川こ
ども病院にお見舞いに行くっていった」

松井　：「ほ。いいな。北海道か。今頃涼しくていいだろうな」

つかさ：「食べ物もきつとおいしいです。トウモロコシとかジンギ
スカンとかスープカレーとか」

松井　：「いや、夏にスープカレーを食べるのはどうかな」

つかさ：「大丈夫です。冷房でキンキンに冷えたお店で食べるのが
いいんです」

松井　：「つかささん、勘違いしてる。北海道にクーラーのあるお店は少ない」

つかさ：「ええー！　じゃあ」

松井　：「ああ、スープカレーなんか食べたら汗だくだ」

つかさ：「ええ、ショック。スープカレー食べたかったです」

舞　　：「あゝ。行くのはひかるなんだけど」

松井　：「そうだったな。俺たちが食べたいもの話をしてもしようがないな」

そんな話をしてるうちに、東棟の女の子がやってきた。カードゲームと一緒にやろうと誘っている。

舞　　：「じゃあ、私、この子と遊んでるね」

松井　：「ああ」

つかさ：「よろしくね」

そうやって二人はナースセンターに戻ってきた。

そこには浮かない顔をした草薙先生が待っていた。

草薙　：「どうもかのんちゃんの容体がよくないらしい」

つかさ：「え？」

草薙　：「秋本先生が向こうの病院の先生と話をしたらしい。不整脈があるそうだ。このまま悪化するならペースメーカーを入れる手術が必要とか言っていた」

松井　：「そんなに悪いんですか」

草薙　：「ああ、秋本先生が言うにはアーキテクトの投与を向こうでは行っていないらしい。新しい治療法を進めるうえでの障害になるとかならないとか」

松井　：「なら、いったん戻しましょう。こちらの病院に。それでアーキテクトを投与しましょう」

草薙　：「秋本先生もそれをやんわりと提案したらしいんだ。だけど、向こうの先生もご両親も今の治療法を続けたいということだ」

松井　：「なんてことだ」

草薙　：「それに、向こうは心臓移植も視野に入れてるらしい。ドナーが現れればすぐに実施する考えだ」

つかさ：「そんな。そこまで」

昨年施行された改正臓器移植法で、15歳以下も日本で心臓移植が可能になった。そして、上川こども病院は心臓移植の施設が整い医師もそろっている。この病院ではそこまでの施設は整っていないし、当然、経験のある医師もいない。

松井　：「その話は舞ちゃんに？」

草薙　：「まだだ。私が後で舞ちゃんと冬子さんに話をしておこう」

- - - - -

冬子と舞がカンファレンスルームに呼ばれる。草薙先生がそこで待っていた。

草薙　：「今日はちよつと重要な話があるんで来てもらった」

舞　　：「どうしたの？　あらたまつて」

草薙　：「実はかのんちゃんのことなんだが。もしかしたら、心臓移植の手術をするかもしれなんだ」

冬子　：「ええ！　そんなに悪いんですか？」

草薙　：「ああ、軽い心不全を起こしたらしい。今は落ち着いてい
るらしいが」

そんな話を聞いて舞もびっくりするかと思っていたが、比較的落ち
着いて聞いている。

草薙　：「舞ちゃんは驚かないのか？」

舞は首を振った。

舞　　：「驚いた。でも、半分覚悟してた」

草薙　：「そうか」

舞　　：「かのんの病気はとても重い病気。色々調べてみたけど、調べれば調べるほど難しいのがわかった。よくなったように見えてもまた悪くなる。特に体が大きくなると耐えられなくなる。だから、心臓移植しかないことわかった。でも、心臓移植すれば元気になるんだよね？」

草薙　：「ああ、成功すれば退院して歩けるようになる。そうすればこの街にも戻ってこれる」

草薙はにっこり笑った。

舞　　：「そうしたら、一緒にプールとか天文台とか行けるんだよね」

草薙　：「プールはすぐには難しいかもしれないが、天文台は行けるようになるよ」

舞　　：「じゃあ、私応援する。それと、もっと、もっと勉強する。『しおんの部屋』で勉強する。私馬鹿だった。アーキテクト見つけた時、私、どんな病気も治せるって思ってた。だけど、本当は何もできない。私、くやしい」

冬子　：「舞ちゃん…」

冬子は半分涙目の舞を抱きしめる。

舞　　：「そうだ。ひかるが北海道に行ってお見舞いする時、手紙持って行ってもらおう。タロット占いの本も持ってってもらおう。か

のんにあげるんだ。きつと喜んでくれる」

草薙　：「そうだな。それがいい」

舞　　：「あと、他にもお土産何がいいかな？　ちよつと院内学級の本見て調べてくる。」

そう言つてカンファレンスルームを舞は飛び出していった。

冬子　：「成功の見込みはどれくらいなんですか？　冬子とても心配です」

草薙　：「手術そのものが成功する可能性は高い。問題はその後だ。拒絶反応との戦いになる。それによる副作用というか合併症が怖い。下手をすると拒絶反応でだめかもしれない」

冬子　：「日本で実施例がないんですよね。こどもの心臓移植。それも心配です」

草薙　：「ああ、でも、優秀な先生がついている。大丈夫だ」

冬子　：「優秀な外科医だったら草薙先生がいます。草薙先生以上の腕を持つて人はいません。冬子知っています。草薙先生が執刀すべきです」

草薙　：「私は脳外科医だよ。心臓移植などしたことない」

冬子　：「でも、こどもの心臓移植したことないのはみんな一緒にす」

草薙：「まあな。だけど、さつき言ったように手術そのもののリスクよりも後の方が問題だ。それに、今更北海道の病院に口は出せない」

冬子：「そうでした。冬子言いすぎました。ごめんなさい」

草薙：「いや、謝らなくても。でも、いちばんいいのは手術しないで治ることだな」

冬子：「はい、祈っています」

草薙：「どうでしょう？ もう夕方ですし、舞ちゃんと一緒に祐美子さんのレストランで夕飯にでも行きませんか？」

その夜、あきらが遅くなるというので、祐美子さんのレストランで松井先生や草薙先生と一緒に舞と冬子は食事をとった。そして、どうやってかのんを元気づけるか話し合った。

そろそろ帰るといふ時

舞：「あ、『しおんのへや』の本棚からタロットの本とってこないと。忘れてた」

そう言って、舞は木箱を持って、不思議な部屋の風景の世界に行った。そして、本棚から本を取り出す。

「舞ちゃん」

だれかに呼ばれたような気がした。それに誰かに見られてる気がする。

舞　　：「気のせいか」

舞はあたりを見回して何もなかったことを確認して「しおんの部屋」から公園に戻って行った。そして冬子と一緒に家路についた。

つづく

4 - 1 8 学会（前編）（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

4 - 18 ・学会（前編）

夏休みも終わり2学期が始まった。

かのが北海道の病院で入院しているので美鈴と一緒に学校に通う。学校が終わると美鈴と一緒に家に帰る。美鈴の母親が仕事に行っているため、帰ってくるまでは舞の家と一緒にいる。

そのため、病院のボランティアの回数が少し減ってきている。

それでも週2〜3日は通っている。

そんななか、冬子と舞が二人とも草薙先生に呼ばれる。

舞　：「私だけじゃなくて冬ちゃんにも用事なの？　今度は『はしか』でもはやり出したの？」

去年の水疱瘡騒動を思い出し舞が話をする。

草薙　：「いやいや、二人に会わせたい人がいるんだ。キャサリン！」

奥から背の高い女性が出てきた。

舞　　：「キャサリンさんだ！」

冬子　：「え？　キャサリンさん？　もしかして、この人が草薙先生の彼女ですか。」

草薙　：「だから、それは違うつて。前にも言ったじゃないですか。」

草薙先生があきれて話す。

草薙　：「で、二人に用事があるのはキャサリンの方なんだ。」

キャサリン：「イエース」

べらべらべら〜と英語で何か話している

冬子　：「冬子、英語わかりません。」

草薙　：「まあ、簡単に言つと来月学会で発表があるから一緒に出席してほしいってことだ。ラインベルク症候群の症例でキロニーネで治った女の子を学会や関係者に紹介したいらしい。」

冬子　：「そんなのでしたらお安い御用です。冬子、一生懸命頑張ります。」

舞　　：「冬ちゃん、頑張るのは私の方なんだけど。でも、いいですよ、私でよければ。場所はこの街つてことはないから東京？」

草薙　：「いや。ちょっと遠い。だから冬子さんに付き添ってもらおうと思つて二人を呼んだんだ。」

冬子　：「大阪ですか？　冬子一度大阪に行つてみたいと思つてました。冬子大阪でくだおねます。」

舞　　：「大阪の食べ物つておいしいの？　いつてみた〜い」

二人で勝手に盛り上がる。

草薙　：「いや、その、もうちょっと遠いんだ。」

冬子　：「九州の博多ですね。天神とか中洲とか。あそこもおいしいです」

舞　　：「違うよ、北海道だよ。札幌。」

冬子　：「北海道もいいです。すすきのあたりでバターラーメンです。」

草薙　：「いや、外国なんだ。」

舞　　：「外国？」

草薙　：「サンフランシスコなんだ。」

舞　　：「サンフランシスコ？」

冬子　：「ああ、びっくりしました。外国って言うからアメリカみたいな遠いところを想像しました。なんだ、サンフランシスコですか。中国ですね。冬子安心しました。」

草薙　：「いや、だから、サンフランシスコはアメリカだよ。」

冬子　：「は？」

舞　　：「へ？」

- - - - -

ということ、10月に1週間学校休んで舞は冬子と一緒にサンフランシスコに行くこととなった。

学校を休むことになるから、先生は怒るだろうと舞は思っていたが、草薙先生が校長先生に話をしてくれ、担任の先生もいい機会だからっていつてOKをもらった。

響子：「秋のサンフランシスコなんていいわね。」

響子が冬子の夕食を食べにきている。

あきら：「何がいいんだか具体的に言ってみる。」

響子：「あきらも細かいところ突っ込むわね。雰囲気です。よ。」

舞：「ねえ、パパ、サンフランシスコって仕事で行ったことあるって言ってたよね。何かあるの?」

あきら：「なにもない。あえて言うなら坂かな。坂はいっぱいある。街はきれいだけだな。」

響子：「ケーブルカーにゴールデンゲートブリッジ。確かにそれくらいしか聞かないわね。」

冬子：「でも、ガイドブック見ると面白そうなのが一杯あります。歩いて回れる見たいです。早く行きたいです。」

あきら：「冬子、お前が主役じゃないんだ。あくまで舞なんだからな。そこんとこ理解しとけよ。」

響子：「でも、確かに冬子が付添っていつものもちよつと不安ね。」

あきら：「じゃあ、響子付き添ってくれるか？」

響子：「無理よ。幼稚園があるもん。それだったら、あきらが行けばいいじゃない。父親なんだし。」

あきら：「おれだって仕事だ。休みなんかとれるか。」

舞：「でも、パパ、今年夏休みとつてないよね。」

あきら：「ああ、忙しくてな。来月には暇になるけどな。って、そうか、社長に聞いてみるか」

舞：「やった。パパも一緒に行こう。」

数日後

あきら：「社長が休みをくれた。『娘の病気でアメリカの先生に診てもらおう』と話したら即答でOKしてもらった。」

冬子：「あきらさん、嘘はいけません。」

舞：「そうだよ。パパ悪い人。」

あきら：「嘘は言っていない。実際に舞は向ここの専門医と会って

話をするんだろう。細かく検査してもらわなければならないけど、診断してもらおうようなもんだ。」

舞　：「まあ、そうだけどね。」

そうやって、あわただしく準備を行った。航空機代とホテル代は招待ということでキャサリンたちの方で持ってくれる。しかし、鞆とか言った旅行用品の準備や舞のパスポートをとったりといったこまごまとした準備で大忙しだった。

美鈴　：「いいなあ、サンフランシスコ。」

舞　：「ごめんね」。美鈴も一緒について思ったんだけど美鈴のお母さんや松井先生に目を吊り上げて反対されちゃったからね。」

美鈴　：「うん、しょうがないよ。まだ、病気治ったわけではないからね。」

美鈴は退院しているけど治ったわけではない。維持療法といって再発防止のためメロとかお薬をのんでいる。そのため、風邪にかかったり、疲れたりするのは厳禁だ。飛行機に乗って長時間移動することなんか許されない。

冬子　：「美鈴ちゃんにはおみやげ買ってきます。アメリカの国旗の模様のついた洋服とかお人形さん買ってきます。」

美鈴　：「ありがとう。でも、なんでアメリカの国旗なの？」

あきら　：「アメリカの国旗には星が50個も付いてるからだ。」

美鈴　：「あ。そだね。」

お星様大好きな冬ちゃんらしかった。

舞　　：「美鈴、期待させてごめんね。でも、ちゃんといいもの買ってくるね。」

そうこうしているうちに出発の日となった。

響子先生や美鈴と美鈴のお母さん、祐美子さんと健一さんに見送られながら駅を出発した。隣町の大きな駅でバスに乗り換えてそこから成田空港に向かう。

あきら：「冬子、なんだ、その大きな荷物は？」

冬子　：「お弁当です。冬子がよりに腕をかけて作りました。」

あきら：「ピクニックに行くのと違うのはわかってるよな。」

冬子　：「あきらさん、失礼です。これは機内食の代わりです。舞ちゃんを飢え死にさせるわけにはいきません。」

あきら：「あ、忘れてた。」

舞を旅行に連れて行くのはある意味大変だ。食事があわないからだ。どんなにおいしい店に連れて行っても「まずい」「がまんして食べなさい」の応酬となる。そして、最大のネックは機内での食事だ。レストランですらぶつぶつ文句を言うのに機内食なんて出したら…

冬子　：「冬子、あきらさんがこの調子だと、これからの旅とって

も心配です。でも、安心です。冬子がこんなこともあるつかと荷物の中に一杯食材と調味料持ってきましたから。」

得意げに話す冬子。だけど、この食材、機内持ち込み制限とアメリカでの検疫に引つ掛かり、大半を没収されてしまう。

冬子：「空港の人アメリカ人もとてもせっかちでくいしん坊です。冬子が料理してあげるって言ったのに、おなかがすいて待ち切れなかったのか材料のまんま持って行ってしまいました。あのまんまじゃ不味いと思います。」

舞：「そうだね。今度はちゃんと料理してから持ち込もうね。」

舞が余計なことを言う。その結果、帰りは、ホテルで無理やり調理して持ち込むはめになった。

.....

サンフランシスコ国際空港に着くと、あきはレンタカーを借りた。

舞：「電車じゃないの？」

あきは：「ああ。アメリカでは電車は使わない。基本車での移動だ。」

舞：「でも、パパ運転できるの？」

あきは：「バカにするな。会社じゃ車を使つての移動が基本だ。それに出張に来た時もレンタカーを借りている。」

舞　：「すごい」

舞が妙な所に感心する。

冬子　：「冬子、おなががすきました。さっそく行きましょう。」

待ちきれない冬子がさっさと車に乗り込もうとする。冬子が左のドアを開けて中に入ろうとした時、冬子が固まった。

冬子　：「あきらさん、この車、欠陥車です。すぐ代えてもらいましょう。きつと冬子たちが旅慣れてないからって馬鹿にされてんです。」

舞　　：「どうしたの？」

冬子　：「助手席にハンドルが付いています。だけど、運転席にはハンドルが付いていません。これでは、運転手さんが運転できません。」

あきら　：「あのなあ。アメリカでは左が運転席。右側が助手席なんだ。」

あきらが馬鹿にしたようにいう。

冬子　：「あきらさん、馬鹿にしましたね。ちよつとした冗談です。冬子知ってます。」

冬子がプイと膨れる。

舞　：「（本当に知ってたのだろうか？）」

舞はあきらと顔を見合わせる。

車で20分くらいでサンフランシスコの市街地のユニオンスクエアのホテルに着く。キャサリンさんが用意してくれたホテルだ。ホテルに車を止めて、さっそく食事に出かける。

冬子　：「冬子いいお店を見つけました。あそこに行きましょう。お寿司にかつ丼、ラーメンがあります。」

舞　　：「すごい！　冬ちゃん、英語読めるんだ！」

冬子　：「当然です！　これでも中学高校6年間英語習いました。」

あきら　：「おい、冬子。その看板見て言ったんだろ。」

看板には日本語で「寿司、かつ丼、ラーメン」と書いてあった。サンフランシスコでは日本人観光客目当てに日本語の看板がところどころにある。

冬子　：「あきらさん、最悪です。アメリカに来てまで細かいこと気にしてはいけません。まったく困ったものです。さあ行きましょう。」

冬子がずんずんとお店に向かっていく。

あきら　：「冬子待て！　何もアメリカに来てまで日本食はないだろう。他行こつぜー！」

冬子：「あきらさんにしてはナイスアイデアです。確かにアメリカで日本食はどうかと思います。」

あきら：「いい場所知ってる。ついてきな。」

あきらはずんずん坂を降りていく。

舞：「パパ、どこ行くの?」

あきら：「ケーブルカー乗り場だ。この坂の下にある。」

坂の下に着くと人だかりができていた。ケーブルカーの始発駅があった。

あきら：「ここから乗るぞ。」

間もなくケーブルカーが到着する。そして、満員だった車内から一杯人が降りる。

冬子：「舞ちゃん、さあ、乗りましょう。あきらさん、3人分のお金よろしくです。」

冬子が舞の手を握りずんずん進む。

あきら：「まで、まだ早い。」

人が降りると駅員がケーブルカーの周りにとりつく。そして、ケーブルカーを回し始める。

あきら：「方向転換が必要なんだ。」

舞　：「おもしろい。人で押しながら回すんだ！」

冬子　：「アメリカとても遅れてます。いまどき電車を回すなんて「てつぱく」で見かけないです。しかも人で回すなんて変です。」

あきら　：「観光地なんだよ。風情があっていいじゃないか。」

3人はケーブルカーに乗る。そして、ケーブルカーは再び坂を登り始める。途中で泊っているホテルを左手に進みながら坂を登っていく。鈴なりになった人に乗せケーブルカーは坂を登る。坂を登りきったところでケーブルカーは止まり、車掌が通る声で言う。

車掌　：「チャイナタウン！」

あきら　：「さあ、おりるぞ！」

あきは二人に声をかける。3人は人をかき分け何とか降りる。

冬子　：「ふう、疲れました。日本の満員電車よりも混んでました。女性専用車を作るべきです。」

あきら　：「一両しかないのにどうやってつくるんだ。」

あきらがつっこむ。

舞　：「でも、なんでここで降りたの？」

あきら　：「ここで食事をするからだ。」

そう言ってあきははずんと歩いていく。

あきら：「ここだ。」

3人の目の前には焼肉屋があった。

冬子：「あきらさん、変です。さっき、わざわざアメリカにきて日本食屋さんに行くのは変だと言っておきながら、中華街なんて日本でも食べられます。」

舞：「しかも、韓国料理の焼肉屋さんなんてさらに変！」

あきら：「文句は食べてから聞こうか。」

そういつとあきは2人を連れて店に入る。

あきら：「スリーパーソン。」

あきは指を3本立てて店員に声をかける。店員はにこりともせず3人を席に連れていく。

冬子：「この店、店員の教育できてないです。『いらっしやませ』ひとつ言えません。」

あきら：「それは日本の文化だ。海外に来てまで期待するな。」

冬子：「でも、これでは、味など全く期待できません。」

舞：「私もそう思う。」

あきらはにっこり笑って、注文する。

あきら：「オーダー、プリーズ。カルビにロースにハラミにタンね。あとライスが3つにビアを2つ。」

あきは日本語でメニューを指しながら指で数を示して注文する。店員はメモをとり、去って行った。

舞：「日本語で大丈夫なの？」

あきら：「別にメニューを示して、数を指で出したから通じるよ。アメリカに来たから無理やり英語で話そうとするから通じないんだ。ボディランゲージ交えて話せばたいがい通じる。こういうのはパターンがあつて、パターンさえ合つてれば言語は関係ないんだ。」

舞：「パパ、すごい」

舞が感心する。

冬子：「でも、ちょっと足りなくありませんか？ それに野菜もないです。」

そう言っているうちに、山もりのお肉が来た。

あきら：「一人前の量が違うんだ。そして、サラダはバイキング形式で食べ放題。まあ、食ってみる」

そうして3人は肉を焼き始める。たれをつけて食べると舞がびっくりした声を上げる。

舞　：「おいしい！　冬ちゃんの料理には勝てないけど、すごいおいしい。」

冬子　：「おいしいです。なんでこんなにおいしいんですか？　日本でこんなおいしい焼肉屋さん知らないです。」

あきら　：「そりゃそうだろ。韓国で本当にいい腕を持った料理人は日本には来ないさ。アメリカで一肌上げようとするから、うまい店が多いのさ。これを日本で食べるとしたら板橋あたりの隠れた名店に行かないと無理だな。」

あきらは自慢する。

そんな自慢話を冬子と舞は半分聞きながら夢中で食べる。

冬子　：「もう、冬子おなかいっぱいです。これ以上食べられません。」

舞　：「私もおなかいっぱい。もうむり。後はパパ食べて。もったいない。」

あきら　：「おれも、おなかいっぱいだ。」

冬子　：「でも、もったいないです。」

あきら　：「大丈夫だ。ドギーバック、プリーズ」

あきらは店員に声をかける。

舞　：「ドギーバツク？」

あきら：「ああ、自宅の犬に残りを食べさせるからもち帰り用の袋をくれって意味だ。」

冬子　：「うち犬かってないです。」

舞　　：「それにかつてたとしても、日本に持ち帰れないよ。」

あきら：「ちがうちがう。犬のためって言うのは名目で人間が食べるんだよ。でも、ちよつと恥ずかしいから犬用っていうんだ。」

冬子　：「冬子感心しました。ちゃんと残さず食べれます。」

あきら：「ああ、システムとしてしつかりしている。ホテルに持ち帰って食べよう。調理器具を借りられなかったらキャサリンさんに言っただけでもらおう。」

結局、ホテルには調理器具を借りられなかったのでキャサリンさんに言っただけでキャサリンさんの家で冬子が料理することになった。もちろん、キャサリンさんはフォークとナイフを落として「アンビリーバボー！」を連呼したが。

つづく

4 - 19 学会（後編）（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則は
フィクションです。

サンフランシスコに到着した次の日からコンベンションセンターで学会が始まる。

学会そのものは意味もわからず退屈なものだった。キャサリンさんの発表の最後に舞が紹介される。会場中から拍手が起こる。

その後、キャサリンさんの知り合いのお医者さんに診てもらったこととなった。

医者　：「イツツア、ティピカル、ラインベルグシンドローム」

ラインベルグ症候群の太鼓判をおされた。そしてキロニーネを渡される。最初からわかっていただけ。

舞　　：「意味ない。お医者さんの自己満足。」

あきら　：「そう言っな。医療の発展のためにはこういつのも必要だ。」

こうして、学会も終わり、イベントは一通り終了した。後は帰るだけだ。

.....

舞　　：「ねえ、ねずみらんどは行かないの？　せつかくアメリカに来たんだからどこか行こうよ。」

あきら：「あれはロスアンゼルスだ。650Km離れてる。」

舞：「え、残念。」

冬子：「帰りに寄りましょう。」

あきら：「おまえ、距離感覚ないな。」

冬子：「新幹線なら3時間くらいです。」

あきら：「アメリカに新幹線はない。」

冬子：「リニアですか？」

あきら：「リニアもない。」

冬子：「アメリカのくせに遅れてます。じゃあ、車ですね。フリーウェイで一直線です」

あきら：「確かに車での旅は魅力的だな。途中、スタインベックゆかりの地モントレイを立ち寄って風光明媚な景色を見るのもいいだろう。だが、1日では無理だな。二日かかる。行くとしたら飛行機だな。まあ、ロス経由で帰ってもいいな。」

旅の最後はロスアンジェルズだった。

飛行機から降りて再びレンタカーを借りる。とたんに渋滞に捕まる。

あきら：「ロス名物の渋滞だ。東京の首都高はロスを参考にして作

「だったらいいのだけど、その結果、渋滞まで参考になってしまったらしい。」

舞　：「そんなもの、真似しないでよかったのにね。」

あきら：「まっただ。」

しばらくフリーウェイを進むとインターチェンジで別のフリーウェイに入る。

冬子　：「あきらさん、道違います。ダウンタウンはまっすぐです。冬子、ダウンタウンの文字は読めるようになりました。」

冬子がどや顔で指摘する。

あきら：「いや、あつてる。ダウンタウンには行かない。行くのはねずみらんどのあるオレンジカントリー郡アナハイムだ。」

冬子　：「冬子ショックです。冬子、ロスのダウンタウンで食べ歩きたかったです。」

あきら：「サンフランシスコと一緒に感覚だとだめだ。広さが違う。そして、それ以上に、危険度が違う。ロスのダウンタウンは怖くて歩けない。冬子みたいなのは一瞬で、ビル間に連れ込まれ、『ワールドアップ』だ。だから、安全な郊外に宿をとった。」

冬子　：「冬子、そんなドジじゃありません。どちらかというと冷静沈着な奥さんだと近所でも評判です。」

冬子が口答えするが、ダウンタウン行きはあきらめたようだ。

次の日、朝からねずみらんどだった。

舞　：「日本のねずみらんどによく似てる。」

あきら：「確かにアトラクションが同じのが多いからな。カリブの海賊、スペースマウンテン、ホーンテッド・マンシヨンとか同じだしな。それに配置も似ている。」

冬子　：「冬子がつかりです。まさか、アメリカが日本のねずみらんど真似するとは思いませんでした。」

あきら：「いや、こっちが本家。日本がこっちを参考に作ったんだ。」

冬子　：「そうともいいいます。あきらさん、細かいところこだわりすぎです。同じことには変わりありません。」

相変わらずの負け惜しみをいう冬子だった。

あきら：「まあ、確かによく似てるよな。でも、日本にないものも一杯あるんだぜ。」

舞　　：「うん、色々見てみたい。」

3人は広い園内を見て回る。「この景色は日本のと同じです」「このダンス日本で見ました」冬子はブツブツ言っているが、それとは裏腹に舞以上に楽しんでいる。

ねずみらんどで楽しんだ次の日は最終日だった。最後に、もうひと

つ遊園地に行きことになった。

あきら：「ナッツベリーファームいくぞ。」

舞：「ナッツベリーファーム？」

あきら：「ああ、イチゴジャムのおいしいところだ。」

冬子：「冬子、ナッツベリーっていうイチゴ聞いたことありません。ブルーベリーとかラズベリーとかは知ってますが。どんなイチゴが興味津々です。」

あきら：「いや、期待させて悪かった。ナッツさん一家のイチゴ畑って意味なんだ。ナッツ・ベリーファームだ。」

冬子：「もちろん、冬子知ってました。今は舞ちゃんに説明するためのちよっとしたボケです。本気にするとはあきらさんもまだまだです。」

舞：「そうだね。冬ちゃん、私勉強になった。」

舞が適当に流す。

ナッツベリーファームはロスアンゼルス郊外のアナハイムにある子供向けの遊園地だ。ねずみらんどに対抗して犬のヌヌピーがキャラクターとして園内をウロウロしている。本物のSLや駅馬車もある。

秋だというのに気温も高く、さわやかな感じだ。舞と冬子はそこで夢中になって遊んだ。

冬子：「ねずみらんどは日本でもあります。やっぱり、アメリカならではのこつちの方がよいです。」

あきら：「いや、お前の場合、ねずみらんどだとレベルが高すぎるんだろ。こつちのほつがレベルあつてるだろ。」

冬子：「あきらさん、失礼です。冬子大人です。子供扱いしないでください。」

冬子がふうとふくれる。だが、言つてることとやつてるとは違つ。ウォーターライダーに乗つて水をかぶり、舞と二人でキヤーキヤー騒いでいる

帰り際、お土産を買うこととなつた。

あきら：「このヌヌピーのぬいぐるみなんてどうだ？」

あきらが舞に勧める。でも、じつと、一つのぬいぐるみを見つめて
いる。

舞：「これ、欲しい。」

舞が見ていたのはうさぎのぬいぐるみだつた。

それを見て、あきらと冬子はお互いを見る。

あきら：「血は争えないか。」

冬子：「冬子もびっくりです。和恵さんもうさぎが大好きでした。」

「
あきら：「わかった。そのうさぎのぬいぐるみにしよう。」

ナッツベリーファームでうさぎのぬいぐるみを買って旅のお土産と
した。

こうして、あわただしいアメリカ旅行が終わった。

- - - - -

帰国してすぐに舞は病院に向かった。

舞：「ただいま。これおみやげ」

西棟のナースステーションに入るなり、そう言った。

草薙：「おお、おかえり。いつ帰ってきたんだ？」

舞：「さつき。家に着いてすぐきたんだ。冬ちゃんはグロッキー
で大の字で寝てる。」

草薙ははしやぎすぎて電池が切れてしまった子供のように寝ている
冬子の姿を想像して苦笑した。

草薙：「舞ちゃんもゆつくり休めばいいのに。」

舞：「だって、1週間近く病院あけたんだもん。心配で。松井
先生がまた、治療法で悩んだりしてないかと思って。」

松井　：「そんなことはありません。大丈夫です。」

松井先生は舞のお土産を開けながら反論する。

つかさ：「あら？　『舞ちゃんはいつ帰ってくるんだ。相談したいこといっぱいあるのに。』っておっしゃっていませんでしたっけ？」

松井　：「忘れた。」

みんなで笑う。

草薙　：「アメリカはどうだった？　英語は少しは話せたか？」

舞　　：「全然。ハローくらいかな。お父さんが大体話してた。でも、少し、アルファベット読めるようになったよ。エスエフって書いてあるとサンフランシスコでエルエーって書いてあるとロスアンジェルスなんだよ」

つかさ：「すごい。舞ちゃん、かつこいい〜。」

舞　　：「えへへ」

舞は得意そうに鼻をこする。

草薙　：「じゃあ、これは読めるか？」

草薙先生がメモにかいて渡す。

舞　　：「なになに？　シーオーエスエー　たす？　アイエスアイ

エ又エー」

草薙先生がなぜかほっとした顔をする。

草薙：「すごいじゃん舞ちゃん。アルファベット読めるようになったじゃん。」

舞がにっこり笑う。

草薙：「じゃあ、ご褒美にいいこと教えてあげよう。」

舞：「なに?」

草薙：「びつくりするぞ。なんと、かのんちゃんが検査のため一時的に帰ってきている。」

舞：「本当?!」

草薙：「ああ、西棟にいるから会ってあげなさい。」

舞：「うん!」

舞はすぐにナースステーションを飛び出した。

松井：「なんで彼女に三角関数なんか読ませたんですか?」

草薙：「ただの三角関数ではない。ガウス平面の公式だ。ちゃんと答えられるか確認してみた。」

松井：「そんなもん小学生に答えられるわけないじゃないですか。」

「
草薙　：「ああ、普通は答えられないよな。よかった本物の舞ちゃんだ。」

草薙はふくとため息をつく。

舞はクリーンフロアの中に入り、入り口に一番近い部屋に入る。そう、そこはかのんがいつも入院していた部屋。

舞　：「かのん!」

中に入るとかのんがベットを半分起こして星の本を読んでいた。昔と同じ。

かのん：「?」

かのんが首をかしげる。

かのん：「えっと、し、舞ちゃん?」

舞　：「そうだよ、3か月会わなかったから忘れたの?」

かのん：「う、ううん。大丈夫。お久しぶり。」

かのんはそういうとにっこり笑った。

舞　：「いつ、こっちに来たの?」

かのん：「1週間前。検査なんだ。」

舞：「検査？」

かのん：「うん。実はもしかしてだけど、心臓移植の手術を受けることになるんだ。それで、色々と精密検査。上川こども病院の先生と秋本先生と淳典堂病院の偉い先生も来ている。」

舞：「そっか。」

心臓移植という重い言葉に舞はうつむく。失敗すれば死を意味する。

かのん：「そんな、暗い顔をしないで。私は未来に向かっていきたいの。」

舞：「うん。そうだよ。せっかく帰ってきたんだから。じゃあ、美鈴とかひかる呼んで学校の話とか思い出話しようよ。」

かのんが首を振る。

かのん：「みんなには内緒にしておいて。あんまり騒がれたくないそれに、思い出話じゃなくて、今のこととか、これからのこととか、お話したい。そうそう、アメリカどうだった？」

舞は冬子との珍道中になったアメリカの話をした。かのんはおなかを抱えて笑った。

かのん：「冬子さんって、おもしろい人ね。それに、まるで本当の親子みたいに仲いいんだね。」

舞は少し間をあけてかのんに言った。

舞　：「本当の親子だよ。」

かのん：「ねえ、ロビーに行かない？　星を見たいんだ。」

かのんが舞の返事に答えず、提案する。

かのんはゆっくりと起き上がり、車いすに乗る。舞が車いすを押してロビーへと向かう。秋の夕方、いつの間にか、外は暗くなっていた。

かのん：「やっぱり、秋の空はさみしいわね。ぼつんと南にフォーマルハウトがあるだけ。これが冬になったらすごくきれいなのに。冬のダイヤモンドって見たことある？」

舞は首を振る。

かのん：「オリオン座、おうし座、ぎょしゃ座、ふたご座、こいぬ座、おおいぬ座。この6つの星座の1等星を結んでできるダイヤモンド型の形。実は私もちゃん見たことないんだ。向こうで友達に教わったんだ。」

舞　：「へへ。向こうの病院にも星が好きな女の子が入院してるんだ。」

かのん：「うん、まあね。そんなところ。その子は別に入院しているわけじゃないけど。その子は時々お母さんと一緒に病院にやってくるんだ。それで、教わったの。星座には全然詳しくないんだけど、星の名前とかすごい詳しいんだ。『あの星はデネブ。銀河の灯台。』

地球から見える21個の一等星全部あわせたよりも明るい星』なんて感じなの」

舞　：「ちょっと、変わった子だね。」

かのん：「まあね。ちょっとといつかかなり変わった子だけだね。」

かのんが苦笑する。そして歌を歌い出す。

かのん：「あかじめだまのさそり。ひろげた鷲のつばさ。あおいめだまの小さいぬ。ひかりのへびのとぐろ。オリオンは高くうたひ。つゆとしもとをおとす。」

舞　：「星座の歌！」

かのん：「うん『星めぐりの詩』っていうんだ。宮沢賢治って人が作ったんだって。その子に教えてもらったんだ。」

舞　：「なんか、その子幸せそう。」

かのん：「その子、お母さんと仲がいいんだ。血のつながった親子。生まれたときから一緒だった親子。ねえ、舞、産んでくれたお母さんに会ってみたいと思わない？」

舞　：「ちょっと。なんでさっきからその話なの？ わたしのママは冬ちゃんだよ。」

かのん：「うん。わかってる。だけど、冬子さんがママになる前は生んでくれたお母さんがママだったんでしょ。会いたいと思わない？」

舞　：「そりゃ〜。会ってみたいわ。正直いうとね。」

かのん：「じゃあ、天使にお願いしてみる。私にできることってそれくらいだから。」

舞　：「ありがとう。でも、今日のかのんちょっと変だよ」

なんかかのんの話に脈絡がない。舞はそう思った。

かのん：「ごめんね。本当のことというと怖いんだ。心臓移植。」

舞がはつと顔を上げる。

かのん：「だから、舞に色々聞いてほしかったんだ。私の思い。それにお話してないと不安でたまらないんだ。手術に失敗することとか。だから、成功した後のこと考えるようにしたんだ。そして、舞に話をしようって考えてた。治ったら一緒に星を見に行こうとか。」

舞　：「うん、それがいい。治ったら一緒に天文台行こう。」

かのん：「私ね向こうで友達ってそのちょっと変わった子しかできなかったんだ。私って人が嫌がるような質問でもずけずけ言うこんな性格だからね。」

舞　：「そうだったんだ。でもそれもかのんだよ」

確かにかのんはストレートな物言いだからね。でも、それがかのんのいいところでもある。

かのんは自分の不安を舞にぶちまけた。舞はそれを黙って聞いていた。

かのん：「今日は舞とお話して楽しかった。それで私からお願いがあるんだけど。」

舞：「なにに？」

かのん：「一生のお友達でいてほしいの。たとえ手術が成功した時に昔の記憶がなくなっても。」

舞：「何言ってるのよ。心臓の手術でしょ。脳の手術じゃないんだから、記憶なんて無くななんないわよ。」

かのん：「おねがい」

舞：「よくわかんないけど、もちろんその約束する。一生の友達だから。そうだ、いいものあげる。」

そういつと舞は紙袋からうさぎのぬいぐるみを取り出した。

舞：「アメリカのお土産。かのんに特別に。」

かのん：「いいの？」

舞：「みんなには内緒だよ。」

かのん：「うん。ありがとう。そうだ、お礼に一つだけ大切なこと教えておくね。私から聞いたことは内緒にしておいてくれる？」

舞　：「うん、わかった。約束する。」

かのん：「『トリックエンジェル』のいたずらには気をつけて。」

舞　：「は？　なんでいきなり『トリックエンジェル』？」

相変わらず脈絡がない。不安を打ち消すためなんだろうけど。舞はそう思った。

かのん：「『トリックエンジェル』はいつか舞の前に現れるわ。彼女たちのいたずらで舞が泣かないか心配なの。」

舞　：「ちょっと、それは物語の話。そんなの現実には起きないよ。」

かのん：「やっぱり信じてないのね。でも、きっと、本当に起きる。『トリックエンジェル』自身はかわいくていい子。だけど、『トリックエンジェル』のするいたずらは半端じゃないの。その時泣かないようにね。」

舞　：「う、うん。でも、理由を教えて。」

かのん：「ごめん、今はそれを教えられない。たかしさんと約束したから。」

たかしさんとの約束？　たかし兄ちゃんは1年以上前に天国に行った。だから、もっと前の秘密の約束？　そんな前の約束がなんでいまさら？　舞はいぶかしんだ。

舞　：「そう。わかった。でも、いつか教えてね。」

かのん：「ええ、その時がきたら。」

舞　：「うん」

かのんが話たくないのなら今話さなくていい。かのんならきつと必ず話してくれるから。舞はかのんを信じた。

かのん：「あ、そろそろ病室の戻らないと。明日のために体休めないとね。」

そう言っただかのんは病室に戻って行った。

次の日、かのんは舞に見送られ再び北海道へと帰って行った。

つづく

4 - 20 ・心臓移植（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 20 ・ 心臓移植

舞が西棟に來ると秋本先生が暗い顔してナース室を出て行った。松井先生と何か話をしていただろうだ。

舞　　：「秋本先生、こんにちは」

秋本　：「ああ、舞ちゃんか。こんにちは。」

そついうとそそくさと秋本先生は出て行った。

．．．どうしちゃったのかしら．．．

舞はそう思つて、松井先生に聞いてみた。

舞　　：「どうしちゃったの？秋本先生。暗い顔して出て行ったけど。」

松井　：「ああ、舞ちゃんか。なんでもない。いや、舞ちゃんには話をした方がいいな。こっちに来てくれないか？」

そつ言つて、松井は舞をカンファレンスルームに誘つた。

舞　　：「松井先生までどうしたの？」

椅子に座るなり、舞は尋ねた。

松井　：「いや、かのんちゃんのことなんだ。」

舞　：「え？　もしかして容体がよくないの？」

松井　：「ああ。この前発作を起こした。」

舞　　：「うそ。それで？」

松井　：「うん、すぐに対処して問題はなかったんだけど、不整脈があつたのでペースメーカーを入れる手術をしたそうだ。」

舞　　：「そうなんだ。」

松井　：「でも、大丈夫だ。ペースメーカーを付けたことによる生活への悪影響はほとんどない。治れば普通に生活できる。」

舞　　：「でも、一生ペースメーカーのお世話にならないといけないでしょ。」

松井　：「まあ、多分な。私は専門医でないから何とも言えないけどな。」

かのんはこの前から急速に病状が悪化し始めている。一度、こっちに来てからだ。

舞　　：「やつぱり、この前、無理にこっちに来てもらったからじゃない？」

松井　：「いや、それは関係ない。むしろ逆だな。悪くなって動けなくなる前に精密検査したというのが正解だろう。」

舞　　：「やつぱり、このままだと。」

松井　：「ああ、心臓移植が避けられないそうだ。」

心臓移植。リスクの大きな一種の賭けになるかもしれない。舞はそう思った。

舞　　：「大丈夫。かのんなら大丈夫だよ。」

松井　：「そうだね。きつと、そうだよ。」

松井は自分自身を納得させるようにうなずいた。

舞　　：「もし、心臓移植するとなったらいつなの？」

松井　：「こればかりはわからない。臓器提供者がいつ現れるかわからない。血液型など適合性があつて、かのんちゃんの病状とかを考えて行われるだろう。明日かもしれないし3年後かもしれない。」

舞　　：「そうだよね。臓器提供者がいるってことだもんね。」

つまり、だれかの命と引き換えに命をもらうことになる。そう考えると、複雑な気持ちになる。でも、かのんをそれでも助けたい。舞はそう思った。

舞　　：「私って、わがまま」

松井　：「え？　舞ちゃんがわがままとは思えないよ。」

舞　　：「ううん、わがまま。だって、早く提供者が現れて、かのんを助けたいって思ってる。」

松井　：「そうか。でも、舞ちゃん、わがままじゃないよ。」

- - - - -

秋本　：「再生治療でなく心臓移植が治療方針の中心になったらいいです。」

草薙　：「そうか。」

秋本　：「舞ちゃんにはペースメーカーを埋める手術といいましたが、本当は補助人工心臓装置です。」

補助人工心臓はその名の通り心臓の働きを助けるために体の外につけた人工ポンプである。

草薙　：「心臓移植までのつなぎか。」

秋本　：「はい、早急な移植が必要でしょう。相当、悪化していますね。心臓移植をしない限り、歩けるようにもなれず、一生ベッドの上。命の危険まであります。」

草薙　：「うん。」

秋本　：「前回、こちらに来てもらったときに心臓移植の登録も行いました。ドナーさえ現ればいつ行われてもおかしくない状況です。」

草薙　：「やはり、例の国家機関の助言を受けるべきだったか。」

秋本　：「かも、しれません。しかし、我々は親御さん含め関係者と徹底的に議論・検証した結果、引き続き上川こども病院で治療を続けると決めたんです。ここは任せるしかないかと。」

草薙　：「そうだな。」

10月のある日、草薙はある機関からかのんちゃんの心臓移植の危険性を指摘され、新しい治療法について提案を受けた。大量の免疫抑制剤の使用によるアレルギー反応の危険を指摘されたのと、今までの治療方法に変わる斬新的な治療法の提案だった。

そこで、急遽、かのんを呼び、本院の淳典堂病院で精密検査を行い、上川こども病院の主治医、淳典堂病院の血液科の医師、そして花の丘病院の秋本先生と草薙で検討が始まった。しかし、検討の結果、アレルギー反応が起きる可能性が0ではないが低いこと。そして、あまりに突飛な治療法について、関係者は難色をしめした。

秋本　：「確かに、アレルギー反応の危険性があります。でも、その可能性は5%未満。これで、のこり95%の可能性を否定するのは消極的すぎます。」

草薙　：「うん」

秋本　：「しかも、提案された治療方法は体中の血液の全取り換えさすがに乱暴です。エビデンスもないですしね。ここでも、本院でも、多分、日本中どこ探しても難しいのではないのでしょうか。」

草薙　：「しかし、心臓移植は。」

12月も半ばになり、少しずつ雪が積もり始めた北海道。東京ではまだ銀杏が黄色く色づき、大阪はまだ秋の名残のあるような季節。

そんなある日のことだった。

かのんの母親のもとに主治医が緊張した顔で現れた。

医者：「斎藤さん、ドナーが現れました。すぐにオペの準備に入ります。」

母親：「え？ ちょっと待ってください。少し相談させてください。」

医者：「待つてあげたいのは山々ですが、ここからは時間との勝負になります。事前に説明した通り、オペに入ります。」

あわただしく準備に入る。

主治医が今度はかのんに説明する。

かのん：「やだ。こわい。」

医者：「大丈夫だ。俺たちに任せろ。」

そう言っつて、決められた手順ののっとりどんと進行していく。

へりの音が聞こえてくる。ドクターへリが着陸する。

医者：「ドナーの心臓が届きました。」

四角い箱が運ばれてくる。そして、その箱の上には折り鶴と手紙が。

「頑張ってください。成功を祈っています」

手紙にはそう書かれていた。ドナーのご遺族の方からの手紙だった。

手紙を見たかのんの母親と医師たちは思わず目頭を押さえた。

主治医：「よし、オペ開始だ。かならず成功させる。」

こうして日本初の子供の心臓移植が始まった。

- - - - -

長い時間、母親は待たされた。よくドラマとかでは手術室の前の長いすで待つシーンが出てくるが、ここでは、ナースセンターの前のロビーの椅子で待たされた。ロビーにはテレビが映しだされているが、母親の目には入っていない。一心不乱に祈るだけだった。

時折、ナースセンターから看護師がやってきて現在の状況を説明する。中から先生の一人が定期的に電話で報告をする。思ったよりも時間がかかっているとのことだった。長期戦を覚悟していた母親もすでに手術室に入って8時間たっていることにいら立ちを見せる。

母親：「あの、まだなんでしょうか？何か問題が発生しているのでしょうか？無事終わるのでしょうか」

母親は10分ごとに看護師に聞く。そのたびに看護師は手術室に

電話を入れる。

看護師：「時間はかかっていますが、順調です。安心してお待ちくださいとのことです。」

そういわれても、安心できない。また、10分後、母親は看護師に聞く。

母親：「あの、まだなんでしょうか？ うまく行きますよね」

母親に何度も言われながらも看護師は嫌な顔一つ見せず、手術室に電話する。そして、母親に伝える。

看護師：「時間はかかっていますが、順調です。もう少しお待ちくださいとのことです。」

でも、母親は安心できない。何回目かの質問した時だった。

看護師：「大丈夫です。予定よりかかりましたが、今、胸の縫合手術をしています。あと小一時間で終わります。」

母親がその場に崩れる。

母親：「ありがとうございます。ありがとうございます」

その姿を見て緊張しっぱなしだった看護師もふくと息を抜く。

しばらくして主治医が現れる。左手にビニールに入った赤いものを持ってきている。表情は何かやり遂げたといった顔をしている。

母親はロビーの他の人の視線を気にせず駆け寄る。

母親：「あの、手術は?!」

主治医：「安心してください。手術は成功です。心臓もちゃんと動いています。まだ、拒絶反応とか、腎臓機能の低下とか予断を許さないですが、手術は大成功です。」

母親は人目を気にせず、先生の手を握り何度も何度もお礼を言う。

主治医：「とりあえず、ここではなんですので、カンファレンスルームで説明しましょう。」

そう言つて、カンファレンスルームに母親を連れていく。

主治医：「かのんちゃんの心臓ですが、やはり、普通の子供に比べてかなり大きくなっていました。もうちょっと遅れると危なかつたです。」

主治医はビニール袋を見せながら、まるで鼠をとつた猫が飼い主に見せるように得意げに説明する。

主治医：「これからは拒絶反応との戦いになります。まずは24時間後、そして1週間後、次は3ヶ月後。ここを乗り切れば5年生存率はぐっと上がります。その後のことはその時考えましょう。我々も全力を尽くしますので一緒に頑張りましょう。」

主治医が一生懸命説明するが、母親はもうぜんぜん聞いていなかった。手術が成功した喜びでいっぱいだった。

.....

夕方、楠木家に電話が鳴る

冬子：「はい、冬子です。あ、いつもお世話になります。」

あきら：「『楠木です』って言ってほしいんだが。いきなり『冬子です』はないだろう。」

冬子：「え？ 本当ですか？ 冬子びっくりです。すぐに舞ちゃんと変わります。」

そついうと冬子は舞に電話を差し出す。

舞：「誰？」

冬子：「草薙先生です。」

舞はなんだろうと首をかしげながら電話に出る。

舞：「もしもし。代わりました舞です。」

うしろで冬ちゃんが「あきらさんは細かいことにごだわりすぎです。将来きつと髪の毛で苦労することになります。」とぶんぶんしている。

草薙：「いいか、落ちついてきけ。」

舞：「うん」

草薙　：「今日、かのんちゃんの心臓移植手術が行われた。」

舞　　：「うそ！　そんな話全然聞いていない！」

草薙　：「こればかりはドナーが現れたらすぐに行わないといけない。だから、事前連絡がなかった。」

舞　　：「それで、それで？　うまくいったの？」

舞がもどかしげに聞く。

草薙　：「ああ、手術は成功だ。」

舞　　：「やった〜！」

草薙　：「順調に心臓も動いている。目も覚ましたらいいのだが、もぞもぞと暴れるので眠る薬を入れたらしい。明後日にはもう、話ができるだろうとのことだ。」

舞　　：「ばんざ〜い。ばんざ〜い。す〜い。信じられない。かのん、よかったね。」

舞が泣くむ。

草薙　：「でも、安心するのはまだ早い。これから拒絶反応との戦いになる。まだ予断は許さない。でも、山を越したのは事実だ」

舞　　：「うん。かのんなら大丈夫。きっと頑張るよ。ほんと先生教えてくれてありがとう。」

舞は涙ながらに電話の先にお礼を言う。

舞　：「かのん、大丈夫かな」

舞は夕食の時も上の空でかのんの心配をしていた。

あきら：「大丈夫だ。かのんちゃんとお医者さんを信じろ。」

舞　：「だけど心配。今すぐにも北海道に飛んでいきたい。」

あきら：「無理だ。北海道は遠すぎる。」

舞　：「だよ。日帰りで帰ってくるわけにもいかないし。あのあ。ひかるみたいに北海道に親戚いないかな。パパも和恵ママも一人っ子だからね。」

あきらと冬子が顔を見合わせる。

冬子　：「舞ちゃんに親戚がいます。しかも北海道に。」

舞　　：「え？」

冬子　：「私の兄がいます。一度舞ちゃん連れて来いとつるさいです。ちよつどいいです。明後日いきましよう。」

舞　　：「へ？」

例によって突然北海道行きが決まった。

UNU

4 - 2 1 ・ 聖夜 (前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

4 - 2 1 ・ 聖夜

斎藤　：「順調にいけば来週退院とのことです。」

舞　　：「はい？」

舞は拍子抜けした顔でかのんの母親の顔を見た。

北海道の親戚の家に来た次の日、かのんの病院にお見舞いに来た。かのんは少し前まで起きていたが再び寝ているとこのことで、ベッドの横で寝ているかのんの顔をみながら、かのんのお母さんと話をした。

冬子　：「まだ、手術して5日目じゃないですか。それなのにもう退院の話なんですか？」

斎藤　：「ええ。私も信じられないんです。もう、起きてしゃべられるくらいに回復したんです。それに、明日からリハビリで歩く練習をすることになっています。」

舞　　：「はあ」

舞はかのんの急速な回復に驚いた。なんか拍子抜けだった。8時間の大手術だったからもっと治るのは遅いと思っていたけど。

斎藤　：「でも、まだ安心しちゃいけないって。こんなにお薬もらってるの」

舞はその薬を見た。舞が上げたうさぎのぬいぐるみの横に薬はあっ

た。

舞　：「（うわ、免疫抑制剤。いろんな種類の。そうよね。）」

斎藤　：「それで、退院したら1ヶ月くらいしたら花の丘に帰る予定です。」

舞　　：「え〜。楽しみ。美鈴やひかるにも伝えないと」

舞はうれしそうに話す。だけとおかあさんはあまり楽しそうにみえない。

斎藤　：「そうですね。でも、こればかりはちゃんと様子を見ないといいません。まだ、予断を許さない状況ですので。」

冬子　：「そうです。あせらず、ゆっくり回復を待ちましょう。楽しみは取っておいた方がもっと楽しくなります。」

そのあと、かのんのお母さんと舞と冬子で院内のレストランに行つて手術の時の話をして、その日のお見舞いはおしまいにした。

舞　　：「また、明後日に来ます。その時はかのんとお話ができればと思つてます。」

そう言つて二人は親戚の家に帰つて行つた。

舞　　：「明後日楽しみ〜」

冬子　：「はい。明後日はかのんちゃんとお話できると思います。そして、明日はクリスマススイブ。思いつきり楽しみましょう。」

雪がしんしんと降るその日の夜、かのんが苦しみ出す。あわてて医師たちが診察をする。

医師：「拒絶反応が出ていますね。」

母親：「そんな…」

医師：「いえ、これは移植手術を行ったのですから出て当たり前です。想定内です。免疫抑制剤を投与すれば大丈夫です。少し量は多めにしますが、ですので、いったんICUに戻しましょう。その間少し、かのんちゃんには寝てもらいましょう。」

母親：「はい」

母親の顔が真っ青になる。

母親：「免疫抑制剤を大量に入れて大丈夫なんでしょうか？」

医師：「免疫力が落ちますので感染症に気をつけなければなりません。また、腎機能障害などの一時的な後遺症が出る可能性があります。しかし、それらに対してもちゃんと対処できるよう準備しています。想定内です。」

母親：「はあ」

次の日。この日はクリスマスイブであり、世の中は年末に向かい浮かれている時であった。

しかし、かのんの容体はさらに悪化していた。今は薬で眠っている。

医師：「うむ。急性拒絶反応ですね。」

医師が落ち着いて話をする。

母親：「あの、かのは。かのは。」

医師：「落ち着いてください。急性拒絶反応は免疫抑制剤で抑えられます。術後7日前後で出てくる可能性が高く、今回のもそれに該当します。大丈夫です。」

そういつて、医師は看護師に指示を出して点滴の準備をする。母親ははらはらしながら見つめる。

点滴に入れられた免疫抑制剤がかのんの体の中に入っていく。

看護師が管を操作して流れる量を調節する。

母親：「かのんちゃん、頑張つて。神様お願い。この子を助けて。」

夜になり、完全看護のICUでは付き添いができず、母親が帰っていく。

主治医：「今夜乗り切れば、落ち着くでしょう。」

主治医はそう言った。

主治医：「私が今日は夜通し付いていますから。お母さんは今日はお帰りください。何かあったらすぐに連絡します。」

母親が帰って行った。

主治医：「免疫抑制剤をもう少し投与するか。もうちょっとだか
んちゃん。」

免疫抑制剤の大量投与の効果が出たのか、容体が安定してきた。

主治医：「ふう。これで一安心だ。朝になれば落ち着くだろう。」

主治医は控室に戻っていく。窓の外は雪。

主治医：「よいホワイトクリスマスを迎えられそうだな。」

- - - - -

夜半過ぎ、主治医は看護師の緊急連絡を受ける。

看護婦：「ICUの女の子のバイタルが急に下がっています。血圧、
脈拍ともに急低下。ショック症状です。」

主治医：「そんなバカな。急いで強心剤を投与。EDの準備を。」

ICUに主治医が駆けつける。

- - - - -

北海道の親戚の家に泊まっていた12月25日のクリスマスの日の朝早くのことだった。その日も朝から雪だった。

一面の白い世界。そんな中で一日は始まった。

冬子と舞は親戚の家でクリスマスを迎えることとなった。冬子の兄は初めて来た姪っ子を盛大に向かい入れ、クリスマスパーティーを開いてくれた。

次の日の朝、ぐっすり眠ってしまい、少しお寝坊してしまった。

冬子：「舞ちゃん、舞ちゃん起きてください。」

舞：「ん〜。冬ちゃん、おはよう。」

寝ぼけまなこで目をこする。冬ちゃんは少し驚いたようなあせったような顔をしている。顔色も悪い。

舞：「顔色へんだよ？ 風邪引いたんじゃない？」

冬子：「舞ちゃん、急いでお出かけしましょう。」

舞：「え？ どうしたの急に？」

冬子：「かのんちゃんに会いに行きましょう。」

舞：「あ、目を覚ましたんだね。行こう行こう。」

冬子は目を落とす。そして、ちいさな声で呟いた。

冬子：「かのんちゃんが、かのんちゃんが。」

舞：「かのんがどうしたの?」

冬子：「け、今朝、天国に行ったそうです。」

冬子がふるえながら声を吐きだす。

舞：「え?」

冬子：「舞ちゃん。」

冬子は舞を抱きしめた。

.....

舞と冬子は急いで病院に向かった。あいにくの大雪で電車も遅れている中で、なんとか病院に着く。

受付で話をすると、かのんのお父さんが憔悴しきった顔で迎えに来た。

父親：「寒い中、ありがとうございます。」

冬子　：「あの、なんて言っていいか…」

舞　　：「うそだもん。信じないもん。」

父親　：「舞ちゃん…」

冬子と舞は病院の奥に案内される。その奥の薄暗い部屋でかのんは寝ていた。隣にお母さんが茫然と座っている。

父親　：「かのんに会ってあげてください。」

二人はベットの横に案内される。そこにはかのんがまるでやすやす寝てるように横たわっていた。

舞　　：「かのん、冗談はよくないよ。さ、起きよう。ほら。」

舞はかのんの手を握り話しかけた。その手は冷たかった。

舞　　：「ふたりで学校行くなって約束したじゃない。大人になるって約束したじゃない。ほら、元気出して。」

舞はかのんの手を強く握った。でも、その手は握り返されることはなかった。

冬子　：「舞ちゃん…」

冬子が舞の肩を抱く。冬子は震えているようだった。

舞　　：「うそだよ。うそだよ。これは人形で本物のかのんは、

そこに隠れてるんでしょ。今だったら許してあげるから早く出てきなさい。」

冬子がぐずぐずと泣き出す。

舞　：「そうだ。トリックエンジェルも出てきてよ。やっと、かのんが言ってたことわかった。これが『トリックエンジェルのいたずらに気をつける』の意味でしょ。はい、もうわかったから、ほんものかのんを出してちょうだい。」

冬子　：「舞ちゃん……」

舞　：「あ、ここで、お母さんと科学者とお医者さんを召喚するんでしょ。それで不治の病を治すのよね。さあ、召喚してよ。召喚しなさいよ。今ここで召喚しなければいつ召喚するのよ。」

舞　：「かのん、かのん。かのんもほらちゃんと神様に頼みなさいよ。」

しかし、かのんは寝たままだった。今にも目を覚ましそうな表情で。

父親　：「ありがとう。でも、本当なんだ。」

舞　：「うそよ！　信じない。」

父親　：「……」

舞　：「今日はクリスマスでしょ。神様のお誕生日をみんなで祝う日じゃない。なのになんで神様はかのんを連れってっちゃうのよ。」

「

舞　：「どうして。どうして。なんで神様はこんな冷たい仕打ちをするの。去年はたかしにいちゃん。今年はかのん。学校のみなはみんな健康に過ごしてるのに。なんで、なんで、私たちだけにこんなに冷たい仕打ちするの？ 私たちなんか悪いことした？」

冬子　：「舞・・・」

舞は泣きたかった。でも、舞は泣けなかった。本当に悲しいときは泣けないんだ。舞はそう思った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日、美鈴がお母さんの妙子さんに連れられてやってきた。舞はだまった美鈴を見た。美鈴も舞を見ただけじゃべらなかつた。

冬子　：「急性拒絶反応による心不全だったそうです。もう、どうしようもなかつたらしいです。」

冬子が妙子に向かって話をする。

妙子　：「そうですね。残念です。『残念です』って言葉がこの場にそぐわないのはわかっていますけど。」

冬子　：「かのんちゃん、かのんちゃん、かわいそうです。一生懸命頑張ったのに。」

妙子　：「まったくです。神様も残酷なことをします。あんないい子だったのに。舞ちゃんも美鈴もあんなにかのんちゃんと仲が良か

ったのに。」

冬子：「美鈴ちゃんも舞ちゃんもかわいそうです。仲のいい友達でした。」

美鈴はすすり泣きをしている。舞はじつとこぶしを握りしめている。

妙子：「せつかく心臓移植手術をしたのにこんな結末なんてあんまりです。」

冬子：「……」

妙子：「こつちで通夜なんですね。」

冬子：「ええ、ご都合で地元に戻るのではなく、こちらで行うことになったようです。」

妙子：「でも、そうするとちょっと困ったことになりそうですね。」

冬子：「何かあったんですか？」

妙子：「ええ、この大雪で飛行機が飛ばなくなつたみたいなんです。私たちが乗ったのが最後の便になつたみたいです。」

冬子：「それじゃあ。」

妙子：「ええ、草薙先生たちも来る予定だったんですが、駄目なようです。」

冬子　：「そうですね。」

結局、通夜もお葬式も草薙先生や学校の先生たちは来れなかった。出席したのは上川こども病院の先生と看護婦、そして、私たちだけだった。

舞は夜遅くまでろうそくの火にてらされているかのんをじっと見ていた。

美鈴　：「たかしにいちゃんもかのんも神様のところに行っちゃった。とうとう、私たち二人きりになっちゃったね。」

美鈴が舞になきながらしがみつく。舞は黙って美鈴を抱きしめ返した。

お葬式ではかのんが好きだった星の歌がかかっていた。宮沢賢治の「星めぐりの歌」だった。

十字架の飾られた祭壇の前でかのんの小さな棺は置かれていた。

みんな泣いていた。美鈴も泣いていた。冬子も妙子も泣いていた。でも、舞は泣けなかった。

舞は十字架を見ながら小さくつぶやいた。

舞　：「うそよ、一緒に大人になるって約束したじゃない。」

美鈴　：「……………」

舞　：「天文台と一緒に行って約束したじゃない。冬のダイヤモンド見に行くって約束したじゃない。」

美鈴　：「……」

舞　：「うそつき。うそつき。うそつき。うそつき。大うそつき！」

冬子　：「舞ちゃん……」

舞　：「神様なんか大つきらい！」

舞は大声を出した。一斉にみんなが振り返る。

冬子　：「舞ちゃん……」

冬子は舞を抱きかかえる。

悲しみに包まれ、式はおごそかに進んでいく。

神父　：「では、最後のお別れです。みなさん、花を故人に添えてあげてください。」

冬子　：「さ、舞ちゃん、かのんちゃんに心配かけないよう、笑って天国に送りましょう。」

舞は係員から花をもらい、かのんの小さな小さなお棺の中に添えた。みんなも泣きながら、菊の花や蘭の花をお棺の中に添えた。別れを惜しみ何回も何回も。舞はかのんが大事にしていたうさぎのぬいぐる

るみを胸においた。そして

舞　：「そのうさぎ、天国でも仲良くしてあげてね。そして、天国のたかしにいちちゃんによろしく」

そうつぶやいた。

係員　：「では、出棺のご準備を」

そう言つて、かのんの小さな棺は車に乗せられて、みんなに見守られ大きなクラクションとともに天国へと旅立つていった。

その日を境に舞が笑うことはなくなった。

- - - - -

数日後、草薙先生のところには女の子が現れる。一見、舞とそっくりな顔立ち。そして姿形。でも、どこか雰囲気が違う。いつものオーバールでなくワンピースを着ているせいかもしれない。

草薙先生は女の子をカンファレンスルームに招き、二人きりで話す。

女の子は椅子に座り、足をぶらぶらさせて草薙先生と向き合う。

草薙　：「向こうはどうだった？」

女の子：「大丈夫だった。かのんちゃんが亡くなったのを聞いて、

「こつちにも影響でないかあわてて戻ったんだけど、何ともなかった。」

草薙：「そうか。よかった。それで、かのんちゃんのこと向こうの子には話はしたのか？」

女の子：「ううん。時期を見て話すかもしれないけど。今は話さない。」

草薙：「それがいい。」

草薙：「しかし、今回は失敗だった。大失敗だ。せつかくの君たちの提案も無駄になってしまった。ちゃんと受け入れていればこんなことにならなかつたかも知れない。」

女の子：「でも、今回のことはご両親も本人も納得の上での話です。失敗したのは結果論です。」

草薙：「だが、しかし。今回、かのんちゃんの手術には失敗した。それは厳然たる事実だ。」

女の子：「だから、それは、幾つかあった選択肢の一つとして選んだ結果です。ご両親は嘆いてますが、先生たちの責任にはしていないでしょう。」

草薙：「でも、ちゃんと提案を受け入れていれbaumくいったかもしれない。」

女の子：「それは違います。心臓移植はあの時もそして今も最善の選択だったと聞いています。確かに、私たちはその危険性を説明し、

対案を出しました。でも、その話に耳を傾けるかどうかは、きつい言い方かもしれないけどご両親の判断です。ご両親はあの時最善の選択をしたんです。結果は伴わなかったけど。」

草薙　：「だけど、舞ちゃんはショックで心の病になりかけている。舞ちゃんがああなるのは想定外だ。」

女の子　：「え？　想定外だったんですか？　まったくもう。これだから大人って。でも、私たちは想定範囲内です。わかりました。舞ちゃんの件はプロジェクトが責任をもって対処します。だから、先生はこれ以上、悔やまないでください。嘆かないでください。」

草薙　：「すまない。舞ちゃんをよろしく頼む。」

椅子からポンととび下りて、女の子は出て行った。

女の子　：「まったくもう。大人ってこれだからやんなっちゃう。嘆きたいのはこっちよ。でも、過去を悔やんでも生き返らないわよ。未来に向かわなきゃ意味ないのに。『死者に心を奪われ生者に気づかない。』まったくもう。」

そう独り言を言って女の子は病院から出て行った。

4章　かのん編完

5章　桜祭り編に続く。

5・1・エルベの風(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5 - 1 ・エルへの風

年が明け、3学期が始まった。

あの日以来、舞は元気がない。学校には行っているが、やはりボーっとしていることが多いらしい。給食も大分残しているようだ。担任の先生も心配している。学校も休ませようかと考えたが、草薙先生と電話で相談して学校は行かせたほうが良いとおっしゃっており、そのまま行かせている。

家でも、ボーっとしていることが多く、何か誘っても乗り気ではない。

舞：「ひとりにさせて」

そういつて、家でボーっとしている。冬子がべったりくっついて慰めているが、前のように自分から抱っこしてもらおうようなこともなく冬子が抱きつくのをなすがままにしている。

冬子が腕によりをかけて料理を作るが、食欲がないといって、残すことが多い。今まででは考えられないことだ。

そんな中、俺と冬子は久しぶりに草薙先生に呼ばれた。舞は祐美子さんに見てもらっている。

俺達だけで呼ばれるのは一年半ぶりじゃないだろうか。あの時とは病気が違うのは俺達は良くわかつている。だけど、気が重いことには変わらない。

草薙　：「舞ちゃんは軽い鬱ですね。」

あきら　：「やっぱりそうですか。」

草薙　：「ええ、かのんちゃんの死が相当こたえています。2年つづけてですからね。仲の良かった友達が天国行くのは。2年生にシヨックを受けるなって言うほうが無理があります。」

舞はかのんちゃんが亡くなってからすっかり元気をなくし、ふさぎこんでいる。なんとか元気づけようと冬子と二人で頑張ったが、駄目だった。

冬子　：「あの、美鈴ちゃんは？」

草薙　：「美鈴ちゃんは思ったほどひどくはないです。もっとも、見かけだけかもしれないが」

冬子　：「仲良し3人組でした。」

草薙　：「はい。」

冬子　：「どうしたらいいのでしょうか？」

草薙　：「難しいです。時間をかけるしかないですね。とりあえず、我慢しろとか頑張れとか忘れるとか無理強いするのはダメですね。今までと違う別の楽しみとか新しいお友達にぐいぐい引っ張ってつもらうのがいいです。」

あきら　：「あいつの楽しみといたらこの病院だからな」

草薙　：「でも、この病院から少し離れたほうがいいです。ここは思い出がいっぱいあり、死が日常茶飯事の世界です。舞ちゃんはここに居る限り、思い出しシヨックを受けつづけます。」

冬子　：「それは院内学級のボランティアを止めるということですか。」

草薙　：「当分はボランティアをするより治療に専念すべきです。2年生らしく、外で遊んだり、おままごと遊びしたりするのがいいでしょう。」

あきら　：「じゃあ、どこか気晴らしにでも旅行に連れて行きますよ。」

草薙　：「それもいいですが、無理強いには逆効果です。ゆっくり休息するのが一番です。この2年舞ちゃんは忙しすぎました。たまには休息するのも必要です。」

確かに、2年半前に病気になり一昨年の正月からこの病院で治るのを目指して頑張っていた。そして退院してからもずっとこの病院でボランティアをしている。舞にとって、小学校とこの病院こそが世界だった。でも、病気でもないのに病院に入り浸るのは確かに変だ。こんなときくらい病院から離れるべきだ。でも、舞は納得するだろうか。

.....

舞　　：「やだ。病院行く。」

舞はすぐにそう言った。

あきら：「舞、何もず〜っといくなって言ってるんじゃない。少し休もうと喋ってるんだ。」

冬子：「舞ちゃんは今、風邪を引いてるんです。心の風邪です。だから家で大人しくしてましょ。」

舞：「病気なんだつたらなおさら病院行かなきゃ。病気だから病院に行っちゃいけないっておかしい。」

あきら：「でも、草薙先生が来てはダメだって言うんだ。草薙先生の言うことは聞かなきゃだめだろう？ 一昨年、聞かないで大変な思いしたの覚えてるだろう。」

舞：「覚えてる。」

一昨年、薬を飲まないで、病気が一気に悪くなったことを舞は思い出した。

舞：「でも・・・。」

あきらと冬子が真剣な顔で舞を見る。

舞：「わかった。パパ、ママ。」

舞はそういつしかなかった。

あきら：「うん。」

冬子：「少しの辛抱です。」

二人がにっこり微笑む。

.....

草薙：「だめだ。帰りなさい。」

つかさ：「舞ちゃん、いうこと聞きましょう。」

舞はパパや冬ちゃんに分かったといっておきながら結局、病院に押しかけた。でも、6階西棟入り口で草薙先生とつかささんに見つかってしまった。

舞：「なんで？ 西棟にかのんが待ってるよ。一緒にお話ししてあげないと。物語読んで、タロット占いやって。そうだ、夜になったら一緒に星を見ないと。」

草薙：「ふう。」

つかさ：「舞ちゃん、かのんちゃんは死んだんです。ここにはいません。」

舞：「そんなことないよ。かのんはまだここにいる。ちゃんと戻ってきている。」

つかさ：「舞ちゃん！」

つかさが舞の両腕をつかみ、「しっかりと」と言わんばかりに腕をゆるるうとするのを草薙が止める。

草薙：「（今の舞ちゃんのはかのんちゃんの死を受け入れていない）」

そう舞に聞こえないようにつぶやき、首を振る。

つかさ：「今の舞ちゃんには休息が必要です。ゆっくり休んでください。たまには思いっきりパパや冬ちゃんに甘えてください。」

草薙：「少し休んで元気になればまたくれば良い。そのためにも今は休め。」

ふたりともあきらや冬子と同じことを言った。

結局、入れてもらえないので舞はしょうがないけど帰ることにした。

- - - - -

私は病院にも行けず、でも家においても気分が晴れなかった。それで、仕方なしに、不思議な風景の世界に入り浸っていた。「しおんの部屋」を抜け出し、丘の上で、ぼーと海を見て過ごしていた。

ただひたすら、波が浜辺に打ち寄せては返す。そんなことの繰り返しを見ていた。

この世界には私しかない。鳥も虫もない世界。ただ静かに時間が流れる。ゆっくりと時間だけが過ぎていく。だんだんと日が暮

れていきあたりが暗くなっていく。でも、私はその場に座り込んで膝を抱えて海を見ていた。

どれくらい時間が立った時だろうか。遠くから人が来る足音が聞こえる。足音はゆっくりと近づいてくる。この世界には人間はだれもない。だから、近づいてくるのは、きつと、かのんだ。神様が私の願いにこたえてくれたんだ。

舞　：「ほら、かのん、一緒に見ようって言った『冬のダイヤモンド』が登ってきたよ。すごいきれい。かのんにも見えるよね。」
私は空を見ながらつぶやいた。足音は私の横でとまった。

女の子：「本当きれいなね。でも、いくらベクトル空間だからといつても、このままいると風邪をひいちゃうよ。」

声をかけられた。

女の子：「でも、いつもここは春だよ。冬になっても寒くない。いつまでもいたい気がする。」

本当はその子がかのんじゃないことを知っている。心の底でその子が来るのを待っていたかもしれない。そして私は、ゆっくりと振り返る。

その女の子はよく知っている姿をしていた。そう、鏡で見た私と同じ姿。

舞　：「詩音」

詩音はにっこりほほ笑んだ。

舞　　：「ほつといてよ。一人でいたいのに。」

詩音は黙って私の隣に座った。そして、何かしゃべるわけでもなく一緒に座っていた。そのうち、日が沈み、星が出始めた。

詩音が星を見て話し始めた。

詩音　：「この時期だと夕方にはもうオリオン座が登ってるのよね。左上の赤い星がベテルギウス。地球から500光年離れた星。もう超新星爆発を起こしてるかもしれない赤色超巨星。」

詩音　：「隣がおおいぬ座のシリウス。全天で一番明るい星。地球から8・6光年しか離れていない星。ここから肉眼で見える星で一番地球に近い星。」

私は詩音の話を聞きながら入院していた時のことを思い出していた。あのころはかのもと病院の窓からこうやってオリオン座や冬の大三角形を見ていた。

詩音が歌い出す。

詩音　：「アンドロメダのくもは。さかなのくちのかたち。大ぐまのあしをきたに。五つのばしたところ。小熊のひたいのうへは。そらのめぐりのめあて。」

それは、かのがよく歌っていた星めぐりの歌だった。

舞　　：「かのかのん。」

思わず口に出てしまった。そうしたら、もう涙が止まらなかった。そして、感情がほとばしってきた。

舞　：「かのんがその歌歌ってくれた。かのんは私に星を教えてくださいました。かのんは入院した時周りの人がじろじろ見る中で明るくなるまで、私に勇気を与えてくれた。かのんは私たちを引っ張ってってくれるお姉さんみたいな人だった。かのんは……」

舞　：「かのん、かのん、なんで死んだのよー！。もつと、もつとお話したかったのにー！。」

私は詩音ちゃんに抱きついて泣いた。詩音ちゃんは私をそのまま抱きしめ続けてくれた。そして一言いった。

詩音　：「ごめんね。かのんちゃん助けられなかった。」

私は大声ではばかりことなく泣き続けた。お葬式でも泣けなかったのに。

詩音　：「あらためまして。楠木詩音です。対世界の舞ちゃんになります。お見知りおきを。」

どれくらい時間がたったろうか。詩音が部屋に戻ろうと行って連れてきてくれた。私はもう、落ち着いていた。

舞　：「楠木舞。えつと。」

詩音：「とりあえず、聞きたいことが一杯ある顔してる。時間はたっぷりあるわ。なんでも質問して。」

舞：「どうして、私が二人いるの？」

詩音：「この世界は並行宇宙と言われていて似たような世界が無
限にあるの。だから、自分と同じ人も何人もいるわ。」

舞：「並行宇宙？」

詩音：「うん、同じような世界。その中でも対になる世界があるの。無限にある世界の中で比較的近いところにある世界。それが『対世界』。つまり、私が住んでいる世界と舞ちゃんが住んでいる世界。この二つは距離的にすごく近いのよ。」

舞：「どれくらい？」

詩音：「一番近いところで7m68cm。そして一番近いところはこの部屋にある。この部屋には二つの世界の出入り口があるの。この距離はくるみちゃんの統一場の方程式の第15偏微分方程式を解けば、簡単に出てくるわ。」

舞：「統一場の方程式？ 第15偏微分方程式？」

詩音：「うん、アインシュタイン方程式は知っているでしょ。あれはテンソルが4つなのよ。だから、10個の偏微分方程式に分かれるけど、くるみちゃんの統一場の理論はテンソルが5つなの。時間が2軸あるからね。だから15個の偏微分方程式に分解できるの。そして、その15番目が対世界を表す式。」

舞　　：「ぜんぜんわかんない。」

詩音　：「え？ えつとアインシュタイン方程式はわかるよね。」

私は首を振る。

詩音　：「フリーエ展開は？」

私は首を振る。

詩音　：「まさか、三角関数はわかるよね。」

私は首を振る。

詩音　：「えつと、ニュートン力学はわかるよね。運動量保存の法則とか。」

私は首を振る。

詩音　：「くるみちゃんに習わなかった？」

私は首を振る。

詩音　：「学校でならわなかった？ て、習うわけないか。うーん、ま、いつか。とりあえず、二つの世界があるって思っていればいいわ。他に質問は？」

舞　　：「対世界の私って言うけど、遺伝子的には同じなの？ 塩基配列とか一緒？ 詩音は染色体異常とかそういうのなの？ それ

ともやっぱり脳下垂体の異常が見られるの？　そのため、免疫抑制してラインベルグ症候群を抑えてるの？」

詩音　：「へ？　遺伝子はわかるけどその後の質問がわからない。」

舞　　：「免疫過剰ってわかる？」

詩音は首を振る。

舞　　：「高力価プロゲリンは？」

詩音は首を振る。

舞　　：「まさかステロカイドは？」

詩音は首を振る。

舞　　：「ラインベルグ症候群は？　自分の病気だよ。」

詩音　：「そういう名前だったんだ。」

舞　　：「……………」

短い沈黙の後、私はおかしくて笑い出してしまった。

舞　　：「おんなじ。」

詩音　：「おんなじ。でも、ちょっと違う。得意分野が違うんだね。舞ちゃんが医学、私が物理学。」

そう言つて二人で笑いあつた。おんなじなようであつたと違つ。まるで双子の姉妹。一人っ子の私に双子の姉妹ができたみたいだ。

舞　：「じゃあ、質問の続き。今度は簡単に説明して。この世界に詩音はどつちやつてきたの？」

詩音　：「『12音階の平均律による時間の調和理論』を使つてきたの。この定理はくるみちゃん第三定理とか、Shion's Theoryつまり詩音の定理とか呼ばれてる理論。私の名前がついてるんだよ。かつこいいでしょ。」

舞　　：「もう、もつとわかりやすく説明してよ。」

詩音　：「あ、ごめんごめん。そうね。じゃあ、木箱を使つてここに来たの。」

舞　　：「木箱つて、この冬ちゃんの木箱？　あ、冬ちゃんって私のお母さんのこと。」

詩音　：「うん、舞ちゃんが木箱でこの部屋に来るの見たの。それで気付いたの。」

舞　　：「この部屋つて、やっぱり向こうから見えるよね。冬ちゃんも木箱使つて見えるつて。」

詩音　：「冬子さんも見ることが出来るんだ。新発見。多分、舞ちゃんや私と同じ固有時間振動数を持つてるんだろつね。」

舞　　：「また、難しい言葉使つた。」

詩音：「ごめん。でも、共鳴はこの世界の基本だから覚えておいてほしいの。ギターとかバイオリンってどうして弾いただけで大きい音が出るかわかる？」

舞：「えっと、大きな木でできた箱があって、その中が空洞になって音を大きくしてるから。あ、そっか！ 木箱も木でできて中が空洞！ それに『コーン』って音が鳴る！」

詩音：「そうなの。それが共鳴。この木箱が実は跳び箱の踏切坂の役目をしていて、こつちの世界にいけるようになってるの。」

舞：「へ〜」

詩音：「だけどね。ただの木じゃダメなのよ。それで結構苦労したんだ〜。」

ふたりで一杯話した。今までの生活、ここまで来た方法。詩音は私たちの闘病生活に涙ぐみ、私は詩音のいたずら話におなかを抱えて笑った。

ここはベクトル空間。決して時間の流れないところ。いくら話しても時間がたつことはない。話しているうちに私たち二人はすっかり打ち解けて、生まれたときからのお友達のようになっていた。

詩音：「ふ〜。話疲れた。ちょっとしゃべりすぎたかな。」

舞：「ほんと、詩音っておしゃべり、でも私も結構しゃべったかも。なんだかのどか乾いた感じ。」

詩音：「私も〜。」

ベクトル空間では飢えや乾きは感じられない。そもそも時間が流れないのだから。だから、のどが渴いたと思っっているのは精神的な感覚で肉体が欲しているわけではない。

舞　：「なんか飲み物ないかな？」

詩音　：「ほんと。あ、いい方法考えた。舞ちゃん、その場に立って私の手を握って。」

舞　　：「？」

舞は言われたとおりに立って詩音の手を握った。

詩音もたって右手に木箱を持った。そして、その右手を突き出しことう言った。

詩音　：「エルベ！」

その途端、周囲は一瞬柔らかな白い光に包まれ、ゆっくりと晴れて行った。

そこは花の丘公園だった。

舞　　：「あ、ここは花の丘公園。戻ってきたんだ。」

詩音　：「うん。でも、花の丘公園はあってるけど、ここは舞ちゃんの世界じゃない。」

舞　　：「え?!」

詩音：「ここは私たちの世界。さあ、飲み物飲みに行こう。お話の続きはそれから。」

詩音は舞の手を握りずんずん進んでいった。

つづく

5・2・喫茶ファンダルシア(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5 - 2 ・喫茶ファンダルシア

詩音が「エルベ」と唱えて現れた世界は詩音の世界だった。

詩音：「世界が二つあると紛らわしいでしょ。だからこつちの世界を『エルベ』ってよんでるの。」

舞：「これが、詩音の世界。ほんとにあるんだ。」

舞は周りをきよるきよる見ながら詩音に手を引かれて歩いている。

舞：「おんなじ世界。公園も家も道路も木もみんな同じ。実は本当は私たちの世界なんじゃないの。」

詩音：「あはは、本当そっくりだね。でも、少しずつ違うの。例えば、そうね。信号機。」

舞：「え？ ちゃんと赤青黄色だよ。」

詩音：「うん、そうだけど、信号機のところよく見てみて。」

舞：「あれ？ 小さなぼつぼつがいっぱいある?!」

詩音：「そう、こつちの世界では信号機は電球じゃなくて発光ダイオードなの。青色発光ダイオードが実用化されてみんなこれに置き換わってる。」

舞：「ほんとだ。でも、言われないと気付かない。」

詩音：「うん。本当に細かいところでないと思うがいからね。さ、行きましよう。」

舞：「いくつて、どこに向かっているの？」

詩音：「秘密基地。あるいは秘密の隠れ家。」

舞：「秘密基地？」

詩音：「喫茶店よ」

舞：「喫茶店？ 子供が入っちゃいけないんだよ。それにお金持っていない。」

詩音：「大丈夫。お店の人はママの知り合い。だから特別にお許してもらってるの。」

途中、舞は知ってる人に出会った。近所のおばさんだ。でも、詩音には挨拶するけど、舞には「お友達？」と聞く。詩音は「いとこ」と答えるとおばさんはわかったような顔でまた歩いていく。

同じ街なのに誰も私を知らない世界。少し怖くて少し面白い。だって私だけが知ってる別世界。怖いのはしっかり詩音が手をつないでくれるから安心。舞はそう思った。

駅の方に5分くらい歩いたところにある喫茶店の前で二人は止まった。

詩音：「じい」

舞　　：「ふぁんだるしあ？」

詩音　：「うん、お店の名前」

入口には「本日パーティのため貸し切り」と書いてあった。

詩音　：「さあ、はいろう」

舞　　：「でも、貸切って書いてある。」

詩音　：「あ、それ、気にしないで大丈夫。しょっちゅうパーティやってないのに午後は貸し切りになってるから。理由は中に入って話すわ。」

そついうと詩音は喫茶店の扉を開けた

詩音　：「こんにちは〜」

店長　：「いらっしやいませ〜」

奥から女の人の声が聞こえる。中をのぞいてみると小さな喫茶店で4人がけのテーブルが二つと奥にカウンターがあるだけだ。

カウンターの奥に店員らしき女の人がいる。そして、カウンターの席に大人の女の人と詩音くらいの女の子が椅子に座っている。

女性　：「詩音ちゃん、今日は遅かったの。」

女の子：「そうだよ、詩音、待ちくたびれた。」

詩音：「ごめんごめん。今日はお友達を連れてきたんだ。それで遅くなったんだ。」

女の子：「だれだれ？ ひかる？」

詩音：「寒いから中にどうぞ」

そう言つて舞を中に引き入れる。舞を見た二人がびっくりする。

女性：「舞ちゃん！」

女の子：「舞ちゃん！」

同時に声を上げる。

舞：「私のことわかるの？」

女の子：「そりゃあ、わかるよ。詩音そっくりだし、オーバーオールきてるしどこから見ても舞ちゃん。」

女性：「対世界からようこそなの。」

舞：「対世界からきたことも知ってるの？」

詩音：「そりゃまあね。紹介するね。くるみちゃん」

くるみ：「三条くるみです。呼ぶ時はくるみちゃん。よろしくなの」

舞：「くるみさんって、あの本を書いたくるみさん？」

詩音：「そうだよ。ああ、やっぱり舞ちゃんがあの本持ってた

んでしょ。だめだよ。後で返してね。」

舞　：「う、うん。」

詩音　：「そして、隣の女の子はポッチ。神崎美鈴さん。」

ポッチ：「よろしく」

舞　　：「え？　神崎さん？」

確かに神崎さんだ。髪の毛が長くて眼鏡をかけててイメージが違っけど声がそっくり。

ポッチ：「そだよ。でも、呼ぶ時はポッチだよ。」

詩音　：「そして、カウンターの中にいるのはこの店のマスター

桜井流美さん。くるみちゃんの中学の同級生で、親友。」

桜井　：「桜井流美です。呼ぶ時はマスターかな。今日はよくぞいらっしやいました。」

舞　　：「こちらこそよろしくお願いします。ところで、今日はなんのパーティーなんですか？」

桜井　：「ああ、パーティーなんかじゃないのよ。くるみが来てるから貸し切りなの。」

舞　　：「？」

詩音　：「くるみちゃんはこの街じゃ超有名人。だから、普通のお

店に行くとき握手とかサインとか求められちゃうから、気疲れしちゃうんだ。だから、このお店でのんびりする時は貸し切りにしちゃうの。」

くるみ：「それと、気兼ねなく対世界の話やプロジェクトの話ができるようにするためなの。でも、このお店すごく雰囲気いいでしょ。」

舞はアットホームな飾り付けの店を見てうなずいた。

舞：「とてもあったかくていい感じ。」

くるみ：「なのなの。」

くるみはとろんとした顔でにつこりほほ笑んだ。

舞：「くるみさんって、もっと怖いイメージがあった。ノーベル科学者なんだもん。でも、すごく優しくそうな感じ。」

詩音：「ボケてるって正直に言っていていいよ。」

くるみ：「詩音ちゃんひどいの。」

ポッチ：「くるみさんも詩音にかかっちゃ威厳も何にもないわね。」

舞はすっかりこの店の雰囲気が入ったしまった。

舞：「秘密の隠れ家かあ、いいなあ。」

詩音：「舞ちゃんも今日から秘密の隠れ家の家族だよ。」

舞　　：「え？」

詩音　：「いつでもおいで。大歓迎だよ。」

舞　　：「ありがとう。」

舞がにつこりほほ笑んだ。

桜井　：「さあ、寒かったです。暖かい飲み物だしますね。」

舞　　：「あの、あの、実は今お財布持ってない。」

詩音　：「大丈夫。このお店はプロジェクトが援助してるから私達はお金いらないの。」

舞　　：「プロジェクト？」

詩音　：「あ、それはあとで教えてあげる。」

ポッチ：「ホットココアがいい。上にクリームのつけて。」

詩音　：「私も。舞ちゃんにも同じの。」

くるみ：「まってなの。今日は生クリームのホールケーキ持ってきたの。ココアより紅茶の方があうの。」

詩音　：「うわ。くるみちゃんのケーキ！　ラッキー」

ポッチ：「じゃあ、紅茶で。詩音も舞ちゃんも同じ紅茶で。」

ポツチが勝手に仕切り始める。

桜井：「じゃあ、そのテーブルで待ってて。ケーキを切って紅茶を入れるね。」

しばらくして、紅茶とケーキが出てきた。

舞が一口食べる。

舞：「！」

詩音とポツチがにやにやする。

舞：「何このケーキ！　すごいおいしい。」

詩音：「だって、くるみちゃんケーキだよ。おいしいに決まってるじゃない」

桜井：「ほんと、くるみってのほほんとしてて何にもできないくせにお菓子作りだけはうまいのよね。」

くるみ：「なんにもできなくないもん！　これでも大学教授だもん。」

くるみが抗議する。はたから見ると世間知らずで世の中生きていけるか心配になる何のとりえもない女の人に見える。だけど、頭脳は世界一、あるいは史上No.1の物理学者である。

詩音：「くるみちゃんのお菓子は絶品よね」。アップルパイとか

もおいしいし。」

舞　：「初めて。冬ちゃんよりもおいしいお菓子に出会えるなんて。」

くるみ：「ありがとう。舞ちゃんやさしいの。」

舞　：「ほんと。お世辞じゃなくて。」

くるみ：「でも、冬ママの料理にはきつとかなわないの」

舞　：「冬ママのこと知ってるの?」

詩音　：「ちょっとだけね。冬子さんはこっちにもいるけど、全然印象違うよ。」

くるみ：「そうなの。対世界だからといって必ずしも同じとは限らないの。多分、二人の冬子さんは全然違うの。」

確かに。詩音を見ると自分と同じ性格とは思えない。詩音は喜怒哀楽がはつきりしていて、あっけらかんとしている。

舞　：「そうそう、さつきくるみさん大学教授って言ってたけど、どこの大学なんですか?」

ポッチ：「舞ちゃん、実はくるみさんの姿見てこんなほほんとしてて若い女性が大学教授なんてありえない。どこの物好きな大学なのかか思ったでしょ。」

舞　：「そ、そんなことないよ。」

詩音：「アメリカのスタンフォード大学だよ。」

舞：「それって、すごい有名な大学じゃない？」

くるみ：「なのなの。いい大学なの〜」

桜井：「わかるわ、舞ちゃん。くるみも外見と中身の落差が激しいからね。ぜんぜん、イメージわかないけど、こんなでも最年少ノーベル賞受賞者よ。」

舞：「はあ。」

詩音：「向こうのくるみちゃんはどうなの？ やっぱりいつも一緒なの？」

舞：「それが、会ったことないんです。私が生まれたときからずっと海外にいます。」

くるみ：「やつぱりなの。舞ちゃんがむこうの私の雰囲気がないからそうじゃないかと思ったの。」

詩音：「それって、私ものほほんとしてるって意味？」

くるみ：「え？ えっと。なのなの〜」

詩音：「笑ってごまかすな」

くるみ：「そうそう、舞ちゃんきたのなら、色々渡したりするものがあるわね。ちょっと取ってくるの。まってるなの。」

そういつと逃げるようになってみるみは外に出て行った。

：「今まで私のいた世界と全然違う世界。病気とか死とか関係のない幸せな世界。こんな世界もあるんだ…」

舞　：「お話が少し変わるけど、ポッチもロケットとか作るの？」

ポッチ：「えっ？」

いきなり話を振られてポッチがビックリする。

舞　：「私の世界の神崎さんはロケット作るから。」

ポッチ：「ああ、なるほど。私は作らないよ。お手伝いならしたところあるけど。」

詩音　：「あの事件ね。もう、プロジェクトの許可なく手伝えないけどね。」

舞　　：「プロジェクト？」

舞はまたプロジェクトが出てきたのが気になった。

ポッチ：「プロジェクトの子がロケット作ったんだけど、うまく飛ばなくてね。それで私がまっすぐ飛ぶように改造したんだけど。」

詩音　：「うまく飛びすぎるようになったのよ。音速突破して、ソニックブーム起こして、パーンって衝撃波の音がして、ご近所大騒ぎ。」

舞　：「それって、水で飛ぶロケット？」

ポツチ：「まあ、水で飛ぶことには変わらないわね。」

詩音　：「液酸液水ロケット。確かに水を噴射して飛んでくロケットだけだね。そのお友達が作ったんだ。私たちと同じ小学2年生。」

舞　　：「はあ。変わった子ね。」

詩音　：「まあね。プロジェクトはそういう子の集まりだから。他にもロボット作ってる男のとかいるしね。」

舞　　：「そのプロジェクトってなあに？」

詩音　：「正式名はエンジンプロジェクト」

ポツチ：「国の秘密機関」

詩音　：「私たちがいたずらしてもかばってくれる所」

舞　　：「????」

ポツチ：「ベクトル空間をこっそり研究してるどころ」

舞　　：「ああ、なるほど」

ポツチ：「こつちに世界でもベクトル空間のことは秘密なんだ。だから、限られた人しか知らせないための研究機関なの。」

舞　：「なるほど、その研究者がくるみさんと詩音で、ここがその秘密研究所なのね。」

詩音　：「ピンポン。だから、このことも、ベクトル空間のこととも内緒。もっとも、話しても信じてくれないけどね。」

舞　　：「それで、ポッチはロケットの何のお手伝いをしたの？」

ポッチ：「ロケットの姿勢制御。その子のロケット、すんごくスピードは出るんだけど、安定してなくてどことぶかわかんないのよね。」

舞　　：「姿勢制御？」

ポッチ：「うん、まっすぐ飛ぶ仕掛け。ちょっとおもしろいものを見せてあげる。」

そういうとポッチは鉛筆みたいなものを取り出した。

そして、鉛筆を握り、そのあとゆっくり手を離した。

舞　　：「うそ!？」

鉛筆はまるで空気に糊づけされたようにその場にとどまる。その後、ゆっくりとまるでスローモーションを見ているようにテーブルに落ちて行った。

つづく

5・3・スタビライザー（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5 - 3 ・スタビライザー

ポッチが握っていた鉛筆から手を放す。

すると、カタッて落ちるはずの鉛筆がまるで空間に貼り付けられたように数秒間その姿勢を維持する。そして、ゆっくりとテーブルに近づいていく。

カラカラと鉛筆がテーブルの上で転がり出す。

舞　　：「なにこれ？　宙に浮いてた。　どうして？」

ポッチ：「スタビライザー。」

詩音　：「ポッチの発明品。物の姿勢を維持する仕組み。慣性の法則とか角運動量保存の法則とかを使うの。」

舞　　：「特別な仕掛けがこの鉛筆にあるの？　ずいぶんちっちゃいけど。」

詩音　：「うん、現実世界の仕組みはちっちゃいんだけど、本体はベクトル空間にあるリニアジャイロ。この3次元ジャイロがベクトル軸方向にすごい勢いで回転していて、この鉛筆を　軸方向から磁石みたいにくっつけてるの。」

ポッチ：「まだまだ試作品でうまくいかないけどね。」

詩音　：「高温超電導コイルの容量不足？　それともリニアジャイロに摩擦が発生してるとか？」

ポッチ：「どっちも考えられる。うーん。色々試してみないとわからない。」

舞：「ちょっと、何難しいこと言ってるのよ。わけわかんない。」

詩音：「そうだよ。高温超電導って言われてもわかんないよね。ちゃんと説明するね。高温といっても、マイナス180度くらいで発生する超電導なんだ。絶対0度と比べて100度近く高温。液体窒素で冷やせるから簡単にできるんだ。さすがに常温超電導は無理。」

詩音：「超電導コイルは電池の役割をするの。コイルって電池の役目もできるんだけど、実世界では電気抵抗があるからあつという間に電気をたべて電池が無くなってしまふ。でも、超電導なら電気抵抗0だから電池として役立つ。」

詩音：「しかも、時間の流れないベクトル空間だから、超電導状態がいつまでも続く。」

舞：「わかんないわよ。それがどうして鉛筆が宙に浮く説明なのよ。」

詩音：「だからジャイロによる角運動量保存の……」

ポッチ：「これ、持って見て。」

ポッチが詩音のわけのわからない説明を遮り、丸い金属でできたボールを渡してくれた。

ポツチ：「重い？」

舞：「それほどでも。」

ポツチ：「じゃあ、そのボールを手のひら包んでぐるぐる回してみ
て。」

舞はボールを回りに見る。中にもう一つ小さなボールがあるようで、
それが外側のボールの中を回っている。

舞：「重くなったみたいを感じる。動かすにくい！」

ポツチ：「そう、それがジャイロスコープ。回っているものは重く
感じて動きが鈍くなる。そのままの姿勢を維持しようとするの。ス
タビライザーはそれを応用してるの。」

舞：「へ〜」

舞は何となくではあったがわかったような気がした。

舞：「だけど、これ、なんの役に立つの？」

ポツチ：「いろいろ。」

詩音：「え〜、世紀の大発明だよ。舞ちゃん。例えばね〜。うん
と、自転車につければ転ばないとか。」

舞：「!」

ポッチ：「バランスが維持されるからね。」

詩音：「スタビライザーって安定化装置って意味だよ。」

舞：「おもしろそ〜。」

詩音：「だけど、まだまだ研究段階だから実用化には時間がかかる。舞ちゃんも色々手伝ってね。」

舞：「うん！」

舞はこの時安易な約束をしてしまった。この約束のおかげで色々奇想天外な実験に参加させられ、苦勞することになる。その話はまた別の機会に。

- - - - -

それから、くるみさんが帰ってきた。手には白い天使の羽根のついたリュックサックを持っていた。

くるみ：「これ、舞ちゃんにプレゼントなの。色々大切な大切なものが入ってるの。それと、この世界で過ごすための注意事項を説明するの。」

そういつて、くるみはリュックの中から薄いプラスチック製の四角い板をとり出した。

舞：「なにこれ？」

くるみ：「え？ アンドロイド端末なの。」

舞：「ロボット？ 物語なんかででてくるやつ？」

くるみ：「あは、でも、違うの。携帯電話なの。」

舞：「ええ、こっちではこれが携帯電話なの？」

くるみ：「うん、そうなの。これを舞ちゃんにあげるの。」

舞：「え、こんないいものいらないよ。それに電話のかけ方しってるよ。電話BOXからかければいいから、大丈夫。」

くるみ：「だめなの。」

舞：「え？」

詩音：「舞ちゃん、ちょっと来てみて。」

そう言つて、詩音は舞を連れて外に出る。

詩音：「周りをよく見て。」

私はあたりを見回す。いつもの商店街だ。でもどこか雰囲気が違う。

詩音：「電話BOXとか公衆電話つてないでしょ。」

舞：「あ、あれ？」

この道はよく冬ちゃんと通る道。いたるところに公衆電話があった

はずなのに。」

詩音：「みんな、携帯電話を持ってるから公衆電話はなくなっちゃったの。」

舞：「はあ。」

詩音：「同じようで微妙に違うの。だから、この世界で過ごすにはこの世界のことを知って、あわせないとだめよ。」

再び店に戻る。

くるみ：「このアンドロイドは舞ちゃんの身を守るために必要なものなの。持ってきてください。舞ちゃんがこちらの世界に来た時に、舞ちゃんがいる場所が自動的にわかる仕組みになってるの。万が一、迷子になっても探し出せるの。」

詩音：「それに、このアンドロイドは地図を兼ねてるの。こうやると地図がでるでしょ。そして、この真ん中が現在位置。これは、そっちの世界でもでも使えるよ。」

くるみ：「そして、重要なのはこの携帯はお財布を兼ねてるの。この世界では徐々に現金を使わなくなってるの。多くのお店では電子マネーという架空のお金で支払いが可能。こうやって、携帯をかざすと『ピッ』って音がするの。これで、支払完了。」

舞：「すごい。」

くるみ：「お金は、プロジェクトの方で自動的に補充するの。でも、使いすぎはだめ。といっても、小学生が使いきるには大変なほど補

充されるの。」

詩音：「こうすると、電話帳が表示されるわ。ほらね。その詩音というところ押してみて。」

言われたとおりにする。すると電話が詩音にかかる。

詩音：「こんな感じ。」

舞：「おもしろーい。これで電話できるんだ。」

くるみ：「うん、一応電話機。」

ポッチ：「くるみさん、あと、生活の注意事項。」

くるみ：「そうそう、ちゃんと話しておかないとね。舞ちゃんが詩音ちゃんと一緒に片方の世界にいられるのは一回に今のところ半日くらい。それ以上は同時にいてはだめ。一度戻ってほしいの。徐々に慣れてきたら時間延ばせるけど、最初のうちはその時間を守ってほしいの。」

舞：「どうしてですか？」

くるみ：「対世界のバランスが崩れるから。バランスが崩れたら二度といけなくなってしまうかも。」

詩音：「だけど、二人がお互いの世界に行っていて、一緒にいないのなら何日いても大丈夫。バランスが保たれてるからね。」

くるみ：「それ以外は、向こうの世界と同じはず。でも、細かいと

「ころ違うから気をつけてね。私たちも気付かないところがあるから。」

舞　：「エアカーとかどこでもドアとかないんですか？」

ポッチ：「ないない。」

舞　：「学校とかなかったり。」

詩音　：「それが困ったことにあるのよね。」

舞　　：「同じなんだ。」

詩音　：「うん、ほとんどおんなじ。だから困っちゃうの。何が違うかよく見ないとわからないから。一応、生活するうえでの注意事項をまとめたしおりも入れておくれ。」

そう言つて、「エルベの歩き方」と書かれたコピー用紙に印刷されたしおりも入れられた。

詩音　：「そうそう、重要な忘れてた。この木箱も入れておくれ。この木箱じゃないとこちらの世界にはこれないの。少し、ベクトル空間のバランスが崩れてるみたい。でも、この木箱があれば舞ちゃんの世界にも行けるよ。行く時はベクトル空間の『詩音の部屋』で舞ちゃんの世界に向かって『ファンダルシア！』って言ってボタンを押せばいけるよ。」

舞　　：「ファンダルシアね。」

ポッチ：「気分の問題。別に呪文じゃない。『エルベ！』って言う

てもいける。大事なものは木箱を向ける方向とボタンを押すこと。」

舞　　：「なんだ。」

ポッチ：「それと、詩音はつきりずるい。私も渡すものがある。さつきの鉛筆もいれておく。それと、木箱も。これは詩音の木箱を改良したもの。詩音のはただの箱だけど、私のはオルゴールにもなっている。だから実用的。」

そういつて、ポッチはリュックに詰めた。リュックが一杯に膨れ上がる。

舞　　：「こんなにいっぱい持っていけるかな。」

詩音　：「大丈夫。これくらいなら。うん。さて、そろそろかな。あんまり遅いと冬ちゃん心配するかも。送ってってあげるね。」

こうして、私の記念すべきエルベの初日が終わった。そのご何度も訪れるエルベだったけどその日の思い出だけは忘れられない。

つづく

5・3・スタビライザー（後書き）

ポツチ：「ポツチこと神崎美鈴です」

詩音：「詩音こと楠木詩音です」

ポツチ：「別にわざわざ『詩音こと』なんてつけなくても同じじゃない。」

詩音：「何よ、合わせてあげたのに。そういう細かいところ突っ込まないの」

ポツチ：「はいはい。ところで、この後枠も久しぶりよね」

詩音：「うん、やっと主導権を舞ちゃんから私たちに持てこれそうだからね」

ポツチ：「5章はこんな感じ？」

詩音：「前半はね。今は2年生の3学期の話だけど、こっちの2年生の2学期の話がないでしょ。そのあいだ結構重要な話がぼこぼこ抜けてるから、それを埋めないかね。」

ポツチ：「なるほどでね」

詩音：「それに、舞ちゃんの世界にはいない人いるでしょ。ママとか番井先生とか。そういう人も紹介しないとね。」

ポツチ：「師長とかね」

詩音：「師長は生きてるよ。舞ちゃんの世界でも。でも、同一人物とは思えないけどね。」

ポッチ：「うんうん。あそこまで常識外れだとね」

詩音：「ということで次回、『看護師長』は第5話『課題展開』です。」

ポッチ：「みなさんお楽しみに〜。って、違う小説紹介してどうするのよ」

詩音：「だって、話の流れでその方が自然だと思っただし。」

ポッチ：「はあ、まったく。次回は5章第4話『バンパイア先生』です。」

詩音：「お楽しみに〜」

5 - 4 パンパイア先生（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5 - 4 . パンパイア先生

次の日、ちらちらと雪が降り始めた商店街を舞は急ぎ足で歩いていく。

舞　：「こんにちわ」

舞が喫茶ファンダルシアの扉をあける。

流美　：「いらっしやうい。舞ちゃん」

マスターが声をかける。

舞　：「あれ、マスター、詩音たちいないの？」

流美　：「まだ来てないよ。でも、そろそろ来るんじゃないかな。ちよつとまっつてみて。飲み物はホットココアでいい？」

舞は「うん」と返事をして、カウンター席に座る。カウンターにはお客さんがひとり座っていた。女性のお客さんだ。年は冬ちゃんやくるみさんよりも上って感じの落ち着いた女性だった。サンドイッチを食べながら本を読んでいる。そして、カウンターには薬が置いてあった。きつと食後に飲むだろう。舞が興味深そうにみていると、視線を感じたのか女性は舞の方を見た。

女性　：「あら、見かけない子ね。こんにちは。ここにはよく来るの？」

舞　：「ううん、この間から。詩音に連れてこられたの。」

女性：「ああ、詩音ちゃんのお友達ね。」

舞：「うん」

女性：「お名前は？」

舞：「楠木舞です。」

女性：「舞ちゃんね。いいお名前ね。」

舞：「ありがとうございます。えっと」

女性：「ああ、私ね。バンパイア先生。そう呼んでいただいてかまわないわ。」

舞：「バンパイア先生？」

流美：「うん、この人はね女医さんなの。近くの花の丘病院に勤めている先生。」

舞：「へ〜。でも、どうしてバンパイアなの？」

女医：「バンパイアっていうのは吸血鬼って意味なの。私は血の病気を治するのが専門で、それで、血液検査のために採血ばかりしてるから、血を吸う先生って意味でバンパイア先生ってよばれるの。失礼しちゃうわよね。」

口では失礼といってるけどまんざらではないんじゃないかと舞は思った。

女医　：「それで、花の丘病院に週に一度お勉強を兼ねて応援に来てるの。あの病院には血液専門の先生がいないからね。」

舞　　：「へへ。私、いろんなお医者さんにあってるけど、血液専門のお医者さんって初めて。」

女医　：「そうね。あんまりいないわよね。」

そういうとバンパイア先生はにっこり笑った。

流美　：「はい、舞ちゃん、ホットココア。」

舞　　：「ありがとう。」

舞は出されたココアをおいしそうに飲む。

舞　　：「こんな寒い日はホットココアを飲むのが一番。」

そんな舞をバンパイア先生がじっと見ている。そして、突然、とんでもないことを言った。

女医　：「あなた、ラインベルグ症候群ね。」

舞　　：「へ？ え？ は、はい。でもなんでわかったんですか？」

女医　：「そりゃ、私も医者だもん。それくらいわかるわよ。でも、大丈夫？ あの病気はこんな寒い日はあったかくしてないと悪化するわよ。」

舞　：「ええ、でも、今年は大丈夫みたいです。それに、もし再発したら薬がありますから。」

女医　：「そんなはずないわよ。ラインベルグ症候群は難病指定されるほどの病気よ。薬なんかないわ。」

舞　：「ええ、難病指定されています。でも、去年、薬ができました。キロニーネって薬なんです。まだ、日本ではちゃんと認可されてないんですけど。」

女医　：「へ〜。タイムラグの薬ね。ちょっと興味があるわ。」

舞　：「でも、あんまり、この話言っちゃだめなんです。草薙先生との約束。いっちゃだめだって。」

女医　：「あら、残念。でも、わかったわ。ここだけの話にするわ。」

舞　：「ありがとうございます。じゃあ、私も先生に話があります。」

女医　：「あら、何かしら。舞ちゃん。」

舞　：「先生、潰瘍性大腸炎ですよ。もう寛解されてるようですが。」

女医　：「！」

舞　：「なんでわかったのって顔してます。それは簡単です。そのサンドイッチ、潰瘍性大腸炎にも優しい食材が使われています。乳

製品も控えられています。そして、そのお薬、トリチル酸製剤ですよ。あとステロロカイド。この薬ならクローン病か潰瘍性大腸炎です。でも、クローン病なら、過酷なお医者さんを続けるのは難しいです。だから、潰瘍性大腸炎。」

舞　：「そして、今は寛解されているけど、潰瘍性大腸炎はそのまま再発する可能性が高く、寛解維持のためお薬を飲み続けないといけない。それに食事にも気をつけないと行けない。もし、再発すると出血性を伴う下痢や腹痛に苦しめられます。」

女医　：「うそでしょ。正解。信じられない。あなた天才よ。」

舞　　：「ありがとうございます。」

舞が照れながらお礼を言う。

女医　：「でも、どうして、そんなにくわしいの？」

舞　　：「普段、病院でボランティアしてるんです。それで詳しくなってきたんです。」

舞はそういって、普段、病院の外来の待合室を回って、もしかしてと思う子を見つけてること、そうやって見つけた白血病の女の子に絵と占いを教えてもらったこと、時々、松井先生の相談を受けてこっそり教えてることを話した。

女医　：「信じられない。病院でボランティアしてるだけどうしてそこまで。」

舞　　：「大したことないです。それでなんです、トリチル酸製

剤もステロカイドも対処療法で症状を和らげることはできますが根本治療にはなりません。」

女医　：「まあ、そうね。所詮、対処療法。完全に治すことはできないわね。」

舞　　：「はい、潰瘍性大腸炎の原因は免疫過剰にあります。この原因を取り除かないと治らないです。」

女医　：「その、免疫過剰を治す方法はないわ。」

舞　　：「そんなことないです。免疫過剰の特効薬があります。それがこのキロニーネ。先生にお近づきのしるしにこのキロニーネ上げます。一錠飲めば、あしたから食事制限も何も要らなくなるはずです。」

女医　：「ちよ、ちよっと」

舞　　：「大丈夫です。このキロニーネは本来人間が持つべき免疫のレベルに抑える薬です。それに、ちゃんとエビデンスがあります。アメリカでは実際に潰瘍性大腸炎に効果がてきめんにあるって実証されています。一錠飲めば大丈夫です。それに私は草薙先生から薬もたもらえます。」

バンパイア先生が茫然として薬を受けとる。

カラカラーン

喫茶店の扉が開く。

詩音：「あ、舞ちゃん。やっぱりいた。お外雪が積もりだしたよ。せっかくだから、花の丘公園で雪だるま作ろう！」

舞：「うん、いまいく。マスターココアありがとう。そして、バンパイア先生お大事に。」

そういうと舞は詩音と一緒に喫茶店を出て行った。そして、入れ替わりにエプロン姿で保育園の先生みたいな女性が入ってきた。

つかさ：「ああ、先生、やっぱりここでサボってる。松井先生が話があるそうなので。」

女医：「ああ。わかった。師長。今行く。」

つかさ：「それはそうと、今の舞ちゃんですよ。どうでした？」

女医：「とんでもない天才だ。一発で私の持病の潰瘍性大腸炎を見抜いた。」

つかさ：「うそ！」

女医：「しかも、特效薬まで置いていった。」

つかさ：「え？ あの病気に特效薬があったんですか。」

女医：「ああ。驚きだ。」

つかさ：「やっぱり規格外です。さすが対世界の詩音ちゃんですね。」

女医：「化け物だ。赤井夢君の白血病も早期に見抜いて化学療法だけであっさり治したらしい。我々は発見が遅れ、あれだけ大変なハプロ移植でなんとか一命を取り留めたのだ。向こうではもう退院して学校に通っているらしい。」

つかさ：「はあゝ。どんだけ〜って感じ。でも先生、欲しいんですよ。」

女医：「ああ、なにがなんでも欲しい。春彦なんかにはもったいない。私が育てたい。」

つかさ：「ふふ、やっぱり。」

女医：「うん、我々が目指す病院改革に絶対必要だ。うん、さてもどるか。師長。マスターごちそうさま。」

そう言ってバンパイア先生とつかさは喫茶店を後にした。

つづく。

5 - 4 バンパイア先生（後書き）

詩音：「ねえ、ポッチ、ハプロ移植ってな〜に？」

ポッチ：「三座不一致の骨髄移植。血液型が合わない輸血のようなもの。」

詩音：「そんなことして大丈夫なの？」

ポッチ：「もちろん、普通にやったら大変になる。だから、番、じゃないバンパイア先生は特別な方法を使って免疫を抑えて治療したのだけど、それでも拒絶反応みたいのものとの戦いが大変な見たい。」

詩音：「ふ〜ん。ポッチ良く知ってるね。」

ポッチ：「まあ、この病気についてはね。でも、だから、夢さんの病気を早期で見ぬいた舞ちゃんってすごいよ。」

詩音：「向こうの世界にはバンパイア先生いないから助からなかった。」

ポッチ：「そういうこと。」

詩音：「舞ちゃんやるなあ。」

ポッチ：「本人は自覚ないみたいだけどね。」

詩音：「うんうん。」

ポツチ：「さて、次回のトリックエンジェルは？」

詩音：「『ハロウィン』です。」

ポツチ：「季節がらやっぱり触れないとね。」

詩音：「私たちのいたずらの物語だよ。お楽しみに。」

短編ハロウィン(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

短編ハロウィン

「トリック・オア・トリート」

そう言つて詩音とポッチは私の前に現れた。今日は魔法使いの黒いマントと黒い帽子をわざわざかぶつて現れた。

響子：「はあ〜…」

私は長いため息をつく。

響子：「確かにね、今日はあなたたちのためのイベントっていうのはよくわかるの。これ以上つて無いつてくらいはまってるわ。だけれどね、どうしても、今ここで、私の前なの？」

詩音：「え〜、だつて、この日は去年も、その前の年も、その前の年も響子先生にこう言ってるよ。『トリック・オア・トリート』つてね。今年だけやらないなんて変じゃない。」

響子：「確かに、一昨年と先一昨年は幼稚園でハロウィンやりました。去年は幼稚園にせっかく訪ねてきてくれたのでお菓子あげました。でも、今年は違うでしょ。」

詩音：「継続は力なりだよ。響子先生。」

響子：「使い方間違ってます。いい？ ここは学校の職員室。そして、放課後になったばかり。少しは場所とか気をつけようね。」

詩音：「でも、さっき校長室に行つて校長先生からお菓子もらっ

てきたよ。ほら。」

そう言っつて詩音はお菓子を見せる。

ポツチ：「教頭先生にもお菓子もらった。」

そういつてポツチがお菓子を見せる。

詩音：「教頭先生、ちょっと震えてたけどね。」

響子：「はあ。」

校長先生の許可をもらつて、教頭先生脅してきたのね。相変わらず用意周到なこと。

響子：「はいはい。わかりました。しょうがないわね。はい、お菓子。」

そう言っつて私は二人に用意していたお菓子を渡した。

ポツチ：「ありがとう!」

詩音：「響子先生、大好き。」

そう言っつて二人は次なるターゲットとなる先生のところに行つた。

実は、ある程度予測していたことである。こんなチャンスの日にふたりが行動しないわけがない。しかも、今回は、対応方法が簡単である。お菓子をあげればいいのである。

「教育上問題だ」

とか

「一部の子供のひいきをしている」

とか言われるかもしれない。だけど、お菓子を上げることで彼女たちのいたずらを未然に防ぐことができる。だから、ここは黙って、大人の対応をするのが一番。

どうせ、「そんなことしちゃダメって」いつても、ポツチあたりが

「これから恵まれない子たちへのプレゼントとイベントにボランティアで行くんです。なんで、先生たちは協力してくれないのですか？」

とかいって言い訳するに決まっている。

だったら、ここはおとなしくお菓子を上げるのが大人の対応だと思う。

案の定、他の先生も、「触らぬ神にたたりなし」と言わんばかりに二人にお菓子を与えている。いつもはこわもての体育教師もびくびくしながら、詩音たちにお菓子をあげている。

響子：「（そりゃ、入学式事件を目の当たりにしてるからね）」

入学式に彼女らのいたずらをとがめた教師は全員ここにいない。そんなことしたら国家権力の介入があることを何となく理解して、穏便に済まそうとしている。

しかし、ここに勇氣ある先生が現れた。

浅野　：「あなたたち、ここは小学校の職員室ですよ。そんなことする場所じゃありません。そんなのは幼稚園までです。さつさと職員室から出て行きなさい。」

浅野先生は音楽の先生だ。音楽の先生のなかに時折いる芸術肌の先生で、空気を読むとか苦手な方だ。

詩音　：「は〜い。」

そういつて二人は今までで一番うれしそうな顔をして職員室を出ていく。

ポッチ：「ご協力ありがとうございました。頂いたお菓子は、これから特別支援学校でのハロウィンイベントで配ってきます。また、来年もよろしく願います。」

詩音　：「えっと、お預かりした善意はトリート15にトリック1です。ありがとうございます。」

そう言つて二人は意気揚々と出ていく

響子　：「（あちゃ〜）」

やっぱり。

体育教師：「浅野先生、勇氣ありますね〜。」

浅野　：「え？」

教頭　：「浅野先生、勘弁してくださいよ。もう少し、周りの雰囲気読んで頂けると助かるのですが。」

浅野　：「私何か間違っていましたか？」

教頭　：「これで、彼女たちは特別支援学校に行つて、『うちの学校の先生は多くは賛同してくれましたけど、一部ハロウインのボランティアは好ましくないと云つた先生がいて賛同得られませんでした。』といわれるんですよ。」

学年主任：「しかも、教育委員会まで彼女たちなら筒抜けです。」

正確には文科省まで筒抜けだけどね。私はそう思った。

浅野　：「そんな、彼女たちそんなこと一言も言っていないじゃないですか？」

学年主任：「校長と教頭がお菓子をくれたつてことを不思議に思わなかつたのですか？　それに、先生、一方的にあの子たちを非難してましたよね。ちゃんと理由を聞けばいいのに。」

浅野　：「そんな……」

教頭　：「ああ、また、今年の入学式の再来になる。教育委員長になんて謝れば。」

響子　：「大丈夫ですよ。教頭先生。浅野先生。そんなことにはなりません。」

教頭　：「泉先生。何を気楽なことを。どんな根拠があるんですか？」

響子　：「だって、トリック・オア・トリートですよ。お菓子上げなかつたんですから、嬉々としていたずらするだけですよ。そつちが本当の目的です。」

「なるほど」

周りの先生が納得する。

響子　：「彼女たちにとってこんなチャンスないですよ。堂々といたずらができるんです。」

教頭　：「たしかに。浅野先生。すまなかつた。ちよつと大げさに言つてしまった。後はよろしく頼むよ。校長先生には私から報告しておく。いや、びっくりした。」

そついつて、教頭先生は校長室に向かつた。

浅野　：「なんだ、先生たち脅かさないでくださいよ。まあ、子どももいたずらなんてかわいいものね。」

浅野先生がほつとした顔で話をする。

体育教師　：「え？」

学年主任　：「知らないんですか？」

確かに浅野先生は2学期からこの学校に来た。だから、知らないのも無理はない。

先生方が今までの二人の武勇伝を話し始める。担任の先生にバケツで水をぶっつけた事件、運動会の綱引きを妨害した事件、入学式を妨害して警察沙汰になった事件、遠足の目的地を変更してしまった事件、テレビ局の取材を強引に自分たちのインタビューに変えてしまった事件。つい最近ではまたもや運動会で私が踊らされた事件。

今までに二人の教師が退職して、二人の教師が配置転換させられている。配置転換された教師は今、コンビニのない街に赴任していると噂では聞いている。

浅野先生の顔が青くなる。

浅野：「しりませんでした。もしかして、とっても不味い事態では。」

体育教師：「かな〜りね」

響子：「（いやいや、私が受けたいたずらに比べればかわいいもんですよ。）」

去年の夏のウシガエル事件や今年の夏の音楽室のお化け事件、さらにはポッチのシマヘビ事件を思い出しながらつぶやいた。

川上：「大丈夫ですよ。ご安心ください。そんな彼女達のいたずら対策のエキスパートがいます。ね、泉先生」

響子：「はい？」

学年主任：「そうですね。泉先生はあの子どもたちの担任でもありませんし、浅野先生をサポートしてくださいね。」

浅野先生が、私を祈るようにみつめる。

響子：「ちょ、ちょっと。」

第三者的に傍観者を決め込んでたのに。結局巻き込まれる羽目になった。

- - - - -

響子：「傾向と対策といっても、奇想天外なことをやってくるから、事前対処のしようがないのよね。」

浅野：「そんな。助けてください。」

響子：「助けてあげたいのだけどね。」

浅野先生が青い顔をして私を見る。

響子：「とりあえず、波には注意が必要ね。」

浅野：「波ですか？ あの海の波？」

響子：「いえ、そっちの波でなく音波とか電波とか光とかです。理科全般に得意だけど、音とか光とか使ったいたずらは猛烈に得意だからね。」

まあ、本当は時空間のコントロールまで得意そうだけどそこまではやらないでしょう。

浅野 : 「といわれても」

響子 : 「そうよね〜。想像つかないのよね〜」

浅野 : 「はあ。」

響子 : 「あ、場所は多分音楽室。もしかしたら視聴覚室。音楽室と視聴覚室は光と音をコントロールするのにいい環境だからね。」

浅野 : 「音楽室。私の管理下ですが。」

響子 : 「それでも、やられる。それと、時間は放課後。授業中も考えられるけどまずやらない。他の児童を巻き込むことは少ないわでも、その裏をかく可能性があるから無いとは言えないけど。」

浅野 : 「はあ。」

響子 : 「取り合えず、場所と時間を絞って気をつければ見抜けるかも。」

浅野 : 「はい。頑張ってみます。」

響子 : 「ほかに、特徴があつて、事前警告することがあるわ。」

浅野 : 「どんな感じですか」

響子：「過去には『このボタン押すべからず』『この先立ち入り禁止』こんな感じかな」

浅野：「え？ ならばそれを守ればいいのでは。」

響子：「その通りなの。でも、その警告を守れない状況をあのこたちは作り出すわ。それで、『警告を無視したのは先生です。私たちが悪くありません』っていいのがれるわ。」

浅野：「あの、ごういうと失礼なのですが、もしかして先生、なんどもひっかつかってます?」

響子：「……」

この先生、ほんと空気読まないわね。そこは気付いてもスルーするところよ。

響子：「あ、ちょっと、待って。確かにそうかも。うん、きっとそう。」

私はその話題から離れる。

浅野：「何かわかったんですか?」

響子：「今回のいたずらの主担当。」

浅野：「はい?」

響子：「彼女たちのいたずらはどちらかが発案して担当するの。ここんとこ詩音の科学的ないたずらばかり続いてるわ。だとすると

今度はポツチね。」

浅野　：「ポツチはどんないたずらするんですか？」

私は身震いしながら言った。

響子　：「生物的ないたずら。カエルとか先生に見せるとか。ヤモリ捕まえてきて背中に入れるとか。男の子が女の子にやるようないたずらを想定した方がいいかも。」

浅野　：「そ、そんな。で、でも大丈夫です。私生き物強いです。カエルとか平気です。」

響子　：「じゃあ、意外と楽勝かも。あんまり事前に気に病むことはないかもしれないわね。」

そう話しつつも私は嫌な予感がした。

- - - - -

次の日、浅野先生は放課後音楽室に向かおうとした。しかし、階段の下に「立ち入り禁止」と立て札が立っていた。

浅野　：「早速来たわ。」

浅野先生は職員室に戻り、泉先生や、前山先生たちを呼び音楽室に入って行った。

響子　：「特に何もないわね。」

響子が音楽室の壁に掛けられている肖像画を調べながらつぶやく。

前山：「音楽室ではないのでは。」

響子：「わざわざ立て札立ててるのに？ 明らかにここよ。」

川上：「本人たちを締めあげれば早いのでは？」

響子：「証拠もないのに？ 川上先生、コンビニのない街でのんびり暮らす？ それも人生としては有意義だけど。」

控えめに警告したつもりだけど川上先生が青くなる。もし、本当にそんなことしたら、彼女たちならだれも知り合いのいない対世界に送り込んで精神病棟に閉じ込めるくらいしかねないわよ。

響子：「とりあえず、何もないわ。そもそも、これがいたずらの可能性があるわね。あんまり気にしちゃ駄目よ。」

そう言って、立て看板を撤去してその日はお開きになった。

次の日、やっぱり、立ち入り禁止の立て看板が音楽室に立っていた。再び教師たちが確認する。しかし、何もなかった。

響子：「心理戦による消耗を狙う気？ やっぱり、私たちが大騒ぎしてるの陰でこっそり見てるのね。」

私は和恵に電話をかけた。

和恵：「どうしました？ 響ちゃん？ また、詩音ちゃん悪さし

ました？」

響子：「いや、二人は今どうしてるかなって？」

和恵：「おやつ食べてます。ふたりでおいしそうに食べてます。」

響子：「そう、それならよかった。また、こんどゆっくり電話するわね。ちょっと相談したいことあるの。」

そう言って電話を切る。

響子：「やっぱり、心理戦のようね。気にしすぎよ。」

そう言って、その日もお開きになった。

.....

次の日、やっぱり立て看板が立てられていた。

浅野：「もう、引つかからないわ。」

そうやって、浅野先生が音楽室に入っていく。詩音とポツチは視聴覚室で泉先生と話をしている。大丈夫だ。

音楽室にはいつてもいつもと何も変わらない。普段の光景があるだけである。

浅野：「ふっ」

生徒用の椅子に腰かけて息を吐く。

浅野　：「確かに、小学校の割には設備の整った音楽室よね。」

特にグランドピアノが目を見張る。意味もなく真っ白なグランドピアノ。特注品であることが分かる。

…自動演奏機能が付いているから驚かないように…

泉先生からもアドバイスをいただいている。

ポロン、ポロン

ピアノが鳴りだす。

浅野　：「(きた!)」

だけど自動演奏は想定内。とりあえず無視しておく。

しかし、自動演奏はとても音楽とは言えない音を出している。

浅野　：「聞くに堪えないわ」

そういつて、ピアノに向かう。そして鍵盤のふたを開ける。

浅野　：「キヤー!!」

そこには鍵盤の端から端まで伸びる青く細長いへびがいた。その青いへびはゆっくり鍵盤の上を這って、ところどころで音を鳴らしている。

浅野 : 「いや〜!」

そのまま、音楽室の出口に向かう。扉は内側からカギが閉まっている。あわてて、開けようとするが手が震えて、うまくいかない。

「シュー。シュー。」

近くで嫌な音が聞こえる。

何とか鍵を開けてドアを開いた瞬間、それがおっこつてきた。

さっきのへびよりも太くてグロテスクなへびだった。大人の腕よりも太くて褐色の色に斑紋が付いている。その蛇が足に絡みつき上ってくる。そして、大きく口をあける。

「シュー。シュー。」

浅野先生はそのまま気を失った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

悲鳴を聞いて先生たちが駆けつける

音楽室のドアを開けると浅野先生が気を失って壁によりかかって倒れていた。浅野先生の膝の上には30cmくらいの小さなへびがかわいらしく這っていた。

前山 : 「浅野先生大丈夫ですか?」

壁にもたれかかって伸びている先生の肩をゆすって、起こしにかか
る。

浅野先生がゆっくりと目を覚ます。そして、前山先生の顔を見てほ
つとする。そして、ゆっくりあたりを見回したのち思い出したよう
にせきを切って話し始める

浅野：「前山先生、音楽室にこんな大きくて太いへびがとぐる
を巻いていたんです。その蛇が上からおっこつてきて私を襲つてき
たんです。太さが20センチくらいあって、10m位のへびです。」

川上：「もしかして、このへびですか？」

川上先生は浅野先生の膝の上のへびをさす。

浅野：「キヤー!」

川上：「落ち着いてください。大丈夫です。このへびは毒蛇じゃ
ないです。おとなしいコーンスネークというよくペットで飼われて
いるへびです。かまないし、おとなしいです。」

浅野：「え？」

浅野先生があらためて自分の膝の上を見る。

浅野：「もっと、大きかったです。もっと太かったです。信じて
ください。」

川上：「模様は同じですか？」

浅野 : 「ええ、たぶんこんな感じですよ。よく覚えていませんが。」

前山 : 「なら、錯覚ですよ。きつと目の前に現れたんですよ。だから、大きく見えた。10mで太さ20cmのへびだったら今頃食べられてますよ。」

浅野 : 「そんなあ。あ、ピアノ鍵盤の上にもすんごい長いへびがいたんです。」

川上先生が確かめに行く

川上 : 「あ、いますね。確かに鍵盤の上に。」

浅野 : 「でしょ。信じてもらえますよね。」

川上 : 「やっぱり、同じくらいの大きさのコーンスネークですが。」

そういつて、川上先生は尻尾を持ってみんなに見せる。

前山 : 「いたずら娘のいたずらですね。まったく、先生に対して失礼な。」

教頭 : 「でも、昔を思い出しますな。よく、1mくらいのシマへび捕まえて、友達や先生に自慢したもんです。」

前山 : 「ほんと、あいつら男の子みたいだな。」

川上 : 「今じゃ、野生のへびなんか捕まえられないですからね。」

「こうやってペットショップで売ってるコーンスネークとかでいたずらするんですね。」

教頭：「ある意味、さみしくなりましたな。」

浅野：「いや、本当にこんな太いヘビがいたんです。テレビで出てるコブラなんかよりもっと太かったです。それに、鍵盤の上のヘビは鍵盤の端から端よりも長かったんです。」

前山：「先生。私たちは悲鳴を聞いてすぐ駆けつけました。でも、いたのはこのヘビ2匹です。」

教頭：「そうですね。あまりおおげさに騒ぐのはいかなものでしょうか？ ハロウインのいたずらということで大目に見てやってはどうですか？」

前山：「あの二人なりに手加減したんですね。」

川上：「ええ、泉先生なら今頃ヘビに食べられてましたね。」

あははと男の先生たちが笑う。

そのとき、噂をすればという感じで、泉先生が詩音とポッチを引きつけてくる。

響子：「ほら、あんたたちごめんなさいは？」

詩音：「ごめんなさい」

ポッチ：「ごめんなさい」

響子：「この子たち、浅野先生が爬虫類とか平気と聞いて、大丈夫だろうと思つてやつたんです。担任の私からも謝ります。」

3人が頭を下げる。

その姿を茫然と浅野先生が見つめる

教頭：「ほら、許してあげなさい。ちゃんと謝ってるじゃないですか。」

浅野：「は、はい。ええ。私も大人げなかつたです。たかが八口ウインのイベントを許してあげられなくつて。」

教頭：「じゃあ、仲直りのしるしに3人で握手。」

そうやって、浅野先生は詩音とポッチと握手して一件落着となつた。

響子が視聴覚室にポッチと詩音を連れていく。

ポッチ：「なんで私たち謝らなければいけないんですか？」

詩音：「そうよ！ トリック・オア・トリートつて言ったじゃないかい？」

響子：「はいはい」

詩音：「今回は響子先生の顔を立てたけど貸し一だからね。」

ポツチ：「まったくです」

響子：「はいはい」

詩音：「全く、大人ってこれだから。ポツチ。帰ろう。もうやんなっちゃう。」

二人が帰る準備をする。

響子：「ところで、『ツートン君』はどうやって連れて帰るの？」

二人が「ギクツ」として足を止める。

詩音：「な、なんの話？」

響子：「だから、ボールニシキヘビの『ツートン君』をどうやって持ち帰るのか興味津津なの。」

ポツチ：「ボールパイソンなんてヘビ知りません。」

響子：「あら、私はニシキヘビって言ったけどパイソンとは言うてないわよ。」

二人が固まる。

響子：「はい、ふたりとも、ここに座りなさい。」

二人はランドセル椅子の背中につけ、スポーツバックを足元に置い

て響子と向かい合って座る。

響子：「話を聞いて、すぐにピンとききました。ちょっと大げさだけど、浅野先生が見たのはボールニシキヘビでしょう。」

詩音：「ニシキヘビなんて持ってこれるわけじゃないじゃない。あんな大きくて凶暴なヘビ。」

響子：「そうね。普通はそうね。でも、ボールニシキヘビなら簡単じゃない？ 全長1.5m 普通のニシキヘビに比べて確かに短いけど太さは十分あるわ。」

詩音：「でも、かまれたりしたら大変よ。」

響子：「ポールニシキヘビは、ニシキヘビのくせに性格は臆病。人を噛むなんてめつたにしない。しかも毒を持っていない。そして野生でなく人間の手で繁殖させたものはある意味犬よりも飼いやすい。」

詩音：「うう」

響子：「だけど、姿かたちはニシキヘビ。だから見た人はパニックになるわ。」

ポッチ：「なんでそんなに詳しいんですか？」

響子：「そりゃ。和恵に聞いたのよ。ポッチが『ツートン君』ていうとつても太いボールニシキヘビ飼ってること。それに、今回はポッチが主導権にぎると思ってヘビについては勉強したのよ。」

ポッチ：「あつ。」

響子：「さらに言うと、ピアノの上にしたのは青大将の『おおちやん』でしょ。去年、ポッチが『身近な動物を持ってきましょう』
と行って連れてきたヘビ。青大将もおとなしくて飼いやすいヘビよね。」

ポッチ：「ううう。」

詩音：「でも、悲鳴を聞いてすぐに駆けつけたんでしょ。そしてそこには小さなヘビが2匹しかいなかったんでしょ。どうやってそんな短時間で取り換えたのよ。」

響子：「簡単よ。本当の悲鳴は瞬間逆位相装置で消せるわ。そして、ゆつくりヘビを小さいのに取り換えたのち、ボカロフで悲鳴を再生すればいい。」

詩音：「あつ。でも、証拠がないわ。」

響子：「ええ。ないわ。でも、このトリックには大きな問題があるの。今はもうすぐ冬の季節。青大将なら平気だけど、ボールニシキヘビはこの寒さは耐えられない。だから、青大将は簡単に隠せても、ボールニシキヘビは常に温度の管理下に置かなければいけない。そして、あんな大きいヘビ、簡単には持ち運べないわ。だから、それなりに温度管理のできる大掛かりな隠しておく装置が必要。どこにその装置作ったの？」

ポッチ：「すごい！」

響子：「さあ、白状しなさい。どこにいるの？ 音楽室？ それ

ともこの視聴覚室？」

ポツチのスポーツバックから音もなく何かが這いだし、響子の足元にゆっくり近寄る。

詩音：「さすが響子先生。教えてあげるわ。」

響子：「観念したわね。」

響子が勝ち誇った顔をする。

ポツチ：「先生の足下。」

響子：「え？」

足下に太い褐色の色をしたヘビが這っている。そのヘビがゆっくりと足に巻きついてくる。ちろちろと舌を出して響子の足をなめる。そして、大きな口をあける。

「シユー、シユー」

響子：「ギャー！」

そのまま、響子は意識を失う。

詩音：「ふう、所詮、座学よね。知識先行型で実際現れたらどうなるか考えなかったのかしら。」

ポツチ：「響子先生、爬虫類大の苦手なのに。」

詩音：「推理はよかったのにね。」

ポツチ：「ほんと。もうだめかと思った。」

詩音：「でも、ツートン君、人懐っこいよね。」

ポツチ：「人は危害を加えるって思っていないのよね。だから、すぐ人の足とか手に巻きついて、気持ちよくあくびする。リラックスしすぎ。」

詩音：「ほんとよね。さて、帰りましょう。」

ポツチ：「うん。こういうときボールパイソンって便利よね。」

詩音：「うん、先生、なんでボールニシキへびって言われるかまでは調べなかったのかしら。」

ポツチ：「そうみたい。大きい割にはボールのように丸まって頭をとぐろに突っ込むってこと知らなかったのね。スポーツバックに簡単にはいつっちゃうのに。」

詩音：「きつと、大型のケースが必要と思ったのよね。温度管理の必要な。」

ポツチ：「まさかくるくるって丸まって手持ちできるとは思わなかったのよね。温度管理も常温過冷却水使えば簡単にできるのに。」

詩音：「全然学習しないのよね。これじゃいつまでもプロジェクト見習いだよ。じゃあね、先生。じゃあ。」

二人は響子の膝の上に小さなコーススネークを置いて視聴覚室を後にした。

.....

響子：「ですから、こんな大きくて太いニシキヘビだったんです。」

校長：「はいはい。それで、その大きなニシキヘビはどこへ行っただんですか？」

響子：「ポッチと詩音が手持ちで持って帰ったんです。きっと」

校長：「持ち帰る？ 先生？ ニシキヘビですぞ。そんな大きいヘビ小学生がどうやって持ち帰るんですか？ それにニシキヘビ持って歩いたら街中大騒ぎですよ。」

教頭：「第一、この季節、ニシキヘビなら温度管理が必要です。そんな大掛かりな装置どこにあるんですか？。それに、先生の上にはこの小さなヘビしかいませんでしたよ。」

響子：「信じてください。校長先生。教頭先生。」

.....

詩音：「そういや、ポッチ、『あおちゃん』は？」

ポッチ：「いっぺんに持って帰れないから、隠しておいた。」

詩音：「どこに？ 他の子に見つかったらやばいよ。」

ポッチ：「大丈夫、見つからないように教室の響子先生の持ち物がある戸棚にしまっておいた。」

詩音：「ああ、あそこなら大丈夫ね。ほかの子供たち絶対あけないしね。開けるとすれば響子先生だけか。ちょっとかわいそうだけど、ま、いつか。」

ポッチ：「だね。」

詩音：「これからどうする？」

ポッチ：「舞ちゃんのふりをして、向こうの響子先生驚かすってのどう？」

詩音：「すごくいいアイデア。さっそく準備しましょう。」

ポッチ：「おー！ ツートンもうちょっと付き合っただけ。」

そうやって二人は意気揚々と花の丘公園に向かって行った。

おしまい

短編ハロウィン（後書き）

ポッチ：「やっぱりへびってかわいいよね。おとなしくて、人になれやすくて、飼いやすいしね。」

詩音：「いや、あの、それはポッチさんだけが思ってるんじゃないでしょうか？私も今はなれたけど、最初は怖かったよ。」

ポッチ：「そう？ でも、これで来年の家庭訪問の楽しみできた。うち中総出で迎えないとね。」

詩音：「・・・」

ポッチ：「さて、次回のトリックエンジェルは？」

詩音：「『天国からの手紙』だよ。」

ポッチ：「舞ちゃんが冬ちゃんや向こうのあきらパパにエルベの話をするんだけど、信じてもらえない。そこで証拠の品を探したらとんでもないものが出てきちゃった。」

詩音：「ということ、お楽しみ～」

5・5・天国からの手紙（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5・5・天国からの手紙

舞　　：「こんにちは」

舞が喫茶ファンダルシアのドアを開ける。今日は「パーティのため貸し切り」と書かれてなかった。

詩音　：「こんにちわ、舞ちゃん」

ポツチ：「よ！」

詩音とポツチがあいさつをする。

舞　　：「あれ？　今日は、くるみさんはいないの？」

詩音　：「うん、毎年恒例の講演会。」

舞　　：「そつか、やっぱり大人って忙しいよね。」

詩音　：「うん」

舞　　：「50人くらいの講演会？」

詩音　：「もうちょっと多いかな」

舞　　：「百人くらい？」

詩音　：「そんなもんかな」

舞　　：「なるほど。一杯人がいて緊張しないかな？」

詩音：「大丈夫。緊張するってくるみちゃんの辞書にはないから。」

ポッチ：「うんうん」

舞がクスって笑う。しかし、舞は詩音の適当な回答にごまかされたいた。実際には3000人を超える講演会で、それでも、チケットが手に入らなく、日本で一番チケットの手に入れにくい講演だと知るはすつと後のことだった。

ポッチ：「じゃあ、そろったね。今日は何する？」

詩音：「うん、うちに来ない？ ママにホットケーキ作ってもらおう。」

ポッチ：「そうしようか。ホットケーキはやっぱりはちみつだよね。」

詩音：「え、いちごジャムだよ」

ポッチ：「はちみつ」

詩音：「い・ち・ご・じゃ・む」

ポッチ：「舞ちゃんはどっと思っ？」

でも、舞は固まっていた。

詩音：「どうしたの？」

舞　：「ママって和恵ママだよな。」

詩音　：「うん、そうだよ。それがどうかした？」

ポツチ　：「詩音…」

詩音　：「あ、ごめんなさい。」

舞　　：「ううん、こっちこそ。まだ、心の準備ができてない。」

ポツチ　：「やっぱり、うみの母親って会ってみたいもの？　冬ちゃんじゃダメなの？」

詩音　　：「ポツチ！」

舞　　：「ううん。慣れてるから、産んでくれたお母さんのことを質問されるのも、冬ちゃんのことを質問されるのも。私にとって冬ちゃんは大事なお母さん。一緒にいても楽しいし、優しいし。でも、産んでくれた和恵ママのことを思うと、胸が締め付けられるの。」

詩音　　：「ポツチ、舞ちゃんいじめてどうするの？」

ポツチ　：「別にいじめてない。私のお父さんも生まれる前にお母さんと別れたから同じだと思って聞いてみただけ。」

舞　　：「そっか、確か、今のお父さんは再婚したんだよね。」

ポツチ　：「うん、小学校に上がる前に再婚した。でも、とつても私

に対して優しいし、大切にしてくれる。だから、本当のお父さんに別にあつてみたいと思わない。お母さんを捨てた人だから。」

舞　：「そうだったんだ。でも、私を産んでくれたお母さんはお父さんとケンカして別れたわけじゃない。だから、産んでくれたママとあつてみたい。でも、ポツチが言うように、冬ちゃんは私を大切にしてくれる。だから複雑。」

詩音　：「そうだよ。もう少し待ってもいいよね。」

ポツチ　：「あら、詩音にしては珍しく強引じゃないのね。てっきり、無理やり会わせて楽しむのかと思った。」

詩音　：「そんなひどいことしないわよ。他人の嫌がることをするのはどうかと思うわ。でも、じゃあ、今日はどうしようっ。」

ポツチ　：「じゃあ、啓蟄けいちごっ。」

詩音　：「あは、それ面白い。」

舞　　：「何それ？」

詩音　：「地面を掘るの。ところで、舞ちゃん、カエルとかヘビとか得意？」

舞　　：「ぜんぜんだめ、カエルなんか触れないし、ヘビなんか見たくもない。」

舞が身震いをする。

詩音：「ママと同じ。だったら、舞ちゃんにうつってつげの遊びだよ啓蟄じつじつて。さあ、一緒に行きましょう。」

そういつて、3人は花の丘公園に向かった。

3人を見送りながらマスターがつぶやく。

瑠奈：「人の嫌がることはしないんじゃないかなかったけ？ 詩音ちゃん。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ここ2〜3日娘の行動がおかしい。あんなにふさぎこんでいたのに急に明るくなった。それはいいことだ。どうやら、この頃新しい友達ができて遊んでいるらしい。

しかし、行く度に何かもらってきている。羽根の生えたりユック。空中に浮くボールペン。妙なデザインの木箱。本人は隠しているつもりだが、かまぼこ板のような電子機器をもっている。そして今日は冬眠中のかえるだ。

元気を取り戻した舞を見て俺と冬子は最初は喜んだが、2〜3日様子を見て、さすがにこれ以上は放置できなくなった。

あきら：「舞、俺と冬子にうそは無しだ。誰とあつてるんだ。」

舞 ……」

冬子 ……」舞ちゃん」

舞 ……」言わなきゃダメ？」

あきら ……」ああ、おれも、冬子も心配してる。」

舞 ……」信じてくれる？」

あきら ……」ああ、俺たちは特別な親子だ。信じるぞ。」

舞 ……」あのね。詩音ちゃんに会ってるの。」

冬子 ……」詩音ちゃん？ どの子ですか？」

舞 ……」対世界の楠木詩音ちゃん。不思議な風景の世界の先に住んでるの。」

あきら ……」はあ、詩音ちゃんに会ってきただど?! もう一人の自分に会って来たっていうのか？」

…」とうとう、ショックで現実世界から逃避してしまったか…

舞 ……」パパ、今、私がとうとうおかしくなっちゃったと思ったでしょ。顔に出てる。信じるっていたくせに」

あきら ……」いや、そんなことないぞ。信じてるぞ」

舞 ……」うそっばい」

舞　：「それにくるみさんにも会ってきた。」

あきら：「くるみ？　どんな感じだった？」

舞　：「ふわふわ」とした人。にこにこしてとても大学教授とは思えない人。」

そういつとかまぼこ板みたいな電子機器に画像を映す。画面を見ると4人が映っていた。そこには舞とそっくりな女の子、知らない女の子、そしてくるみが映っていた。

舞　：「これが詩音ちゃん、こっちがポッチ、そしてくるみさん。マスターがとつてくれたの。」

あきら：「でも、確かにくるみだ。日本に帰ってきてたのか？　でも大学教授？　くるみはまだ大学教授になっていないはずだ。というかあの若さで大学教授などなれないだろ。」

舞　：「でも、スタンフォード大学の教授だって言った。」

あきら：「スタンフォード大学？　くるみはマサチューセッツ工科大学のはずだ？」

舞　：「マサチューセッツ工科大学？　そんな大学きいたことない。後ノーベル賞受賞してるって。」

あきら：「え？　今までに日本人女性でノーベル賞受賞した人なんかいないぞ。」

あきら：「あ、待て。」

思い当たる節があり、本棚を見る。そこにはくるみエッセンシャルが置いてある。その本を取り出してみてあらためて見てみる。確かにノーベル物理学賞受賞。スタンフォード大学教授と書かれてる。

舞：「それとその本、返してほしいって。」

この本にはたしかにこの世界には同じような世界があり、その間を特別な空間でつないでいると言っている。つまり不思議な風景の世界のことだ。くるみはこの世界の謎を解いたというのだろうか？

あきら：「他には何か言っていなかったか？」

舞：「これ。」

舞はポツチからもらったボールペンを取り出した。

そして、宙に浮かべてスイッチを押した。

舞：「えい！」

そのまま手を離す。ボールペンはしばらく宙に浮いたままだった。

俺と冬子は茫然と見つめる。

冬子：「どっいつことでしょうっ？」

舞：「詩音ちゃんがいうには『あるふあべくとるくうかんのりにあじゃいる』がうんたらかんたらとか」

冬子：「さっぱりわかりません。」

俺は鳥肌が立った。

あきら：「ジャイロで安定させてるのか。そしてリニアなのか？
ということは超電導コイルか?!」

舞：「うん。『高温ちようでんどう』とかいってた。マイナス
180度なのに高温っておかしいよね。」

あきら：「液体窒素で冷やすのか。高温超電導を起こす物質は発見
されているが、それを使って実用化されたなんて聞いたことがない。
」

冬子：「ごめんなさい。冬子、信じられません。まだ、神様に会
ってきたって言われる方が信じられます。」

あきら：「でも、ここまで証拠があるとな。しかも、向こうの方が
少し科学が進んでいるようだ。」

他にもかまぼこ型携帯電話なども見せられると納得せざるを得ない。

冬子：「でも、くるみさんの性格を考えると素直に受け取れませ
ん。今にもドッキリカメラの看板持って出てきそうです。」

あきら：「ああ、大のいたずら好きだからな。」

くるみはあの、天然ボケの顔をしながら、かなりの策士だ。これく
らいのことはやってもおかしくない。

冬子：「そして、この、写真の喫茶店見たことあります。これは駅前の……」

あきら：「喫茶エルベだ。」

冬子：「はい、何回か行ったことがあります。小さいけれどとてもアットホームでいい雰囲気のお店です。それで覚えています。」

舞：「ふぁんだるしあっていう喫茶店だった。名前が違う。」

あきら：「他にはないのか？ 何か決定的なもの。」

舞：「これなんかどう？」

舞は別のものを探した。木箱を取り出ししてきた。

舞：「ポツチからオルゴールももらってきた。」

冬子：「わあ、かわいい木箱です。お星様が付いているのがグッドセンスです。開けてもいいですか。」

舞：「うん、いいよ。」

そういつて、冬子が木箱をあける。

パーン！

中から何かが飛び出した。

冬子　：「キヤー！」

舞　　：「びっくり箱……」

あきら　：「うまい」

ドッキリの落ちとしてはまあまあだ。やっぱり、くるみが舞の状態を気にして元気づけたのだろう。

冬子　：「舞ちゃん、『ドッキリ』ですね。大人を担ぐものではありません。やっぱり、本当はどこに行ったのか教えてください。くるみさんと会っていたんでしょ。」

舞　　：「本当に対世界に行ったんだって。ポツチの奴、なんで、オルゴールがびっくり箱なのよ。これじゃ台無しじゃない。」

舞がいつになく真剣に訴える。嘘を言っているとは思えないのだが。舞がごそごそとリュックの中を探してる。そして、中から手紙が出てきた。

舞　　：「くるみさん、気を利かせて書いてくれたんだ。助かった」

舞　　：「はい、手紙があります。きっと、ここに事情が書いたあると思う。」

そういつて舞は手紙を俺に渡した。宛先は「楠木あきら様、冬子様」になっている。

俺はくるみが事情を説明するために書いた手紙と思い受け取った。

あきら：「くるみも日本に帰ってきたのなら、寄ってくれればいいのに。薄情だな。」

しかし、俺は手紙の差出人を見て固まった。差出人はくるみではなかった。

あきら：「まさか」

冬子：「どうしたんですか？」

あきら：「差出人・・・」

冬子：「差出人が変な人なんですか？ 実は神様とか？ え？」

あきら：「うそだろ。」

その手紙で俺たちは舞を疑ったことを恥じた。決定的な証拠だった。

- - - - -

冬ちゃん、あきらさん

楠木和恵です。

こんにちは。お元気でしょうか？ ご無沙汰しています。

いきなりで、ご迷惑かと思いましたが、舞ちゃんの力になれたらと思ひ、手紙を出させていただきました。

お友達がなくなられて2週間たちましたが、相変わらず、舞ちゃんはベクトル空間でボーとしていることが多いようです。話を聞いてちょっと心配です。

舞ちゃんのおかれている状況を聞いて大変ショックでした。仲の良いお友達を立て続けになくされるなんて。小学2年生にとって過酷な運命すぎると思います。私も泣いてしまいました。本当は今すぐにでもそちらに行つて抱きしめてあげたいのですが、くるみさんに聞いたら、まだ、無理とのことでした。残念です。

きっと、冬ちゃんもあきらさんも舞ちゃんの側について、しっかりと心のケアをされていると思います。でも、舞ちゃんのことですので、きっと、心の傷を表に出さず、自分で溜め込んでるんじゃないかと思っています。

時がたてば解決するのでしょうか、今の舞ちゃんを思うと不憫ではありません。それで、みんなと相談してみました。舞ちゃんがどうしたら元気になるかです。

それで、実は一つアイデアがあります。舞ちゃんが立ち直るきっかけになってくれればと思います。そのアイデアとは「アニマルセラピー」です。一人っ子とか、精神的な傷を負った子の心を落ち着かせる治療法です。字を見ておわかりかと思いますが、動物と触れ合うことにより心を穏やかにさせる方法です。

本当は猫とか犬とかを飼うといいのですが、それはそれで世話が大変かと思っています。

でも、いい方法があります。近くの牧場でホースセラピーを行つて

います。ホースセラピーは未就学児や児童を相手に馬に餌を上げたり、馬と一緒に歩いたり、馬に乗ったり触れ合うことにより、心の傷を癒していく療法です。

その牧場、普段は観光牧場ですが、相談してくれば特別に対応してくれるそうです。この前、遊びがてら行ってきましたが、牧場の方々もいい人ばかりでした。多分、そちらでも同じだと思います。

是非ご相談してみたいかがでしょうか？ 舞ちゃんもきつと喜ぶと思います。

子育てがんばってください。私も決して人様のことは言えないのですが。私も娘のことで苦労ばかりでいつも悩んでいます。自信をいっもなくしちゃいます。でも、楽しいです。いつもそばに居てあげたいです。

そして、舞ちゃんのパパは冬ちゃんとあきらさんだから。自信をもってくださいです。

悩みがあったら、遠慮なく相談してください。3人とも自分で抱え込みそうなので心配です。手紙を舞ちゃんに持たせて娘に渡してくれればとどきますので。

私や娘も舞ちゃんのことを応援しています。そして、いつかお二人にお会いできる日を心待ちにしています。

和恵

P S ・冬ちゃんへ。

あのとときの二人の約束は守れませんでした。あきらさんと生まれてくる子と幸せに暮らすという約束です。ごめんなさいです。でも、冬ちゃんがあきらさんと舞ちゃんを幸せにしてくれてとても安心しました。遠慮とか気遅れとかする必要はないです。それが和恵の望みですから。

- - - - -

俺は読み終えてしばし呆然としていた。

あきら：「和恵…」

冬子：「天国からの手紙…」

その書き方といい、気の回し方といい和恵そのものだ。

冬子：「天国から和恵さんが手紙をくれました。」

あきら：「ああ。」

冬子：「最後の文章は冬子と和恵さんだけの秘密の約束です。この手紙書いたのは本人です。誰かが代わりに書いたんじゃないかもしれません。本物の和恵さんです。」

あきら：「字も間違いなく和恵の字だ。」

舞：「天国のママからの手紙？」

あきら：「ああ。和恵からの手紙だ。」

そう言つて俺は舞に手紙を渡した。舞は手紙を大事そうに胸に抱えた。

懐かしい思い。忘れていた幸せな思い。でも、幸せな思いとともに恥ずかしさを感じる。

冬子：「天国から和恵さん見ていて、それで、舞ちゃんを助けられない冬子を見て手紙をくれたんです。」

あきら：「ほんとだな。俺たちは親としてダメダメだ。」

冬子：「冬子はやっぱり、舞ちゃんのお母さんになれないのでしょうか？ 生みの親の和恵さんには勝てないのでしょうか？」

あきら：「ああ。」

冬子：「…」

あきら：「いや、違う。」

俺は何か違和感を感じ、その原因に思い当たりため息をついた。

あきら：「母親になつたんだな。和恵。」

冬子：「え？」

あきら：「もう、母親になつて何年もたつたんだな。俺が知っている和恵はもつと頼りなく、折れてしまいそうな人だった。こんなにしっかりした人ではない。」

冷静に考えたら天国からの手紙なんてあるわけない。

あきら：「この手紙は対世界の和恵のものだ。本当にあるんだな対世界は。ごめん、舞、疑って悪かった」

舞：「う、うん」

舞も茫然としている。

もう、舞が対世界に行つたとか行かないとか疑うレベルではない。親として恥ずかしかつた。舞を信じてあげられなかつたこと。舞を元気づけられなかつたこと。俺たちが行うべきことを向こうの和恵たちがやってくれている。毎日会っている俺たちよりも、会つたことのない舞のことを理解している。詩音ちゃんの母親だからといえばそれまでだが、母親らしい手紙だつた。俺が覚えていた和恵よりももっと成長した感じの大人の女性になっている。

あきら：「そして、冬子、俺たちと向こうの和恵さんと比べてもしようがない。向こうは母親になつて8年も年季をつんでいる。俺たちは、本当の意味ではまだ数年だ。そんなの比較してもしようがない。向こうも自信を持つてつてちゃんと書いてある。」

冬子：「はい、少し気が楽になりました。実は、冬子、和恵さんが怒っているかもと心配でした。舞ちゃんをとってしまった。でも和恵さんが許してくれました。認めてくれました。舞ちゃんのパパは冬子だつて。」

あきら：「そうだな。最後のところはまるで天国の和恵が認めてくれたみたいだつた。ちよつと情けない両親だけだな。」

舞　：「和恵ママの手紙。うれしい。」

舞は手紙を読んでそう言った。

あきら：「会ってみたいか？」

舞　：「え？」

あきら：「和恵に会ってみたいか？ 今日の話だと会うのは簡単だぞ。向こうの詩音ちゃんの家に行けばいい。」

舞　：「うん、でも。」

舞は冬子の方を見る。

冬子　：「冬子のこと気にして遠慮することはありません。」

舞　：「うん、でも、やっぱり今はいい。私にとってママは冬ちゃん。」

あきら：「ああ、そうだな。舞のママは冬子だ。」

舞　：「うん！」

舞が和恵に会うのはまだ早い。俺はそう思った。

あきら：「そうだ、手紙にも書いてあったように週末に牧場に行くか？ 馬に乗せてもらえそうだ。」

舞　：「うん、美鈴も誘っていい？」

あきら：「ああ、みんなでいこう！」

あきら：「（血の繋がってない、新米の親子。でも俺たちは本当の親子なんだ。和恵、ありがとう。そしてごめん。）」

冬子　：「あきらさん、この手紙の返事出してもいいですか？」

あきら：「ああ、もちろん。ちゃんとお礼言わないとな。」

冬子がうれしそうな顔をする。冬子にとっても和恵は大切な友達だった。きつと、いろいろ話をしたいだろう。

「話をしたい」それは俺も同じこと。でも、会って、何を話すんだ？ 冬子と結婚したことを謝るのか？ 冬子はそのときどう思う。向こうの和恵にも旦那がいる。

あきら：「難しく考えるのはやめよう。」

俺はそう自分にいきかせた。

つづく

5・5・天国からの手紙（後書き）

ポツチ：「舞ちゃん、良かったね。信じてもらえて。やっぱり、和恵ママって偉いよね。他の人は信じてもらえなくても、和恵ママは信じてもらえる。」

詩音：「あら、だれかさんのビックリ箱がいけなかったんじゃないかしら？ あれさえなければ素直に信じてもらえたんじゃない？」

ポツチ：「テヘツ。」

詩音：「ったく。さて、次回のトリックエンジェルは？」

ポツチ：「『短編職員室』です。」

詩音：「前山先生と川上先生のお話です。」

ポツチ：「詩音が二人をとっちめる話のような。」

詩音：「コホン。それじゃ、またね。」

短編職員室（前書き）

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

私の教師人生など確かにそんなに長いほうではない。ベテランの20何年の教師なんかと比べれば10年目なんて若造である。それでも10年の経験があり、いろんな児童を見てきた。だが、今まで見た事のない、そしてこれからも見ることはないだろう児童は彼女だけである。空前絶後、史上最凶、一言で言えば「ありえない、以上」って感じである。

そう、楠木詩音である。

彼女は学校でも有名な問題児である。問題児って言うとは暴力をふるうとか授業を抜け出すとかそういう問題児ではない。ただ、想像を絶するようないたずらを仕掛けてくる。入学早々、報知器を押したたかほかかわいい方である。侵入警報装置を無効にして、幼稚園のペットを持ち出す、入学式するとき校長先生のおでこに鏡を使って光を集めるとかとても小学2年生とは思えないいたずらを実行する。

おっと、今日はそんな話をするのではない。純粹に啞然としたことを話したい。

彼女が小学校2年生の3学期だったと思う。

川上先生が新任のときだった。俺も今年からこの学校に赴任したこともあり、川上先生とは新参者同士でけっこう仲がいい。川上先生は数学おたくというか、小学校の先生よりも高校で数学の先生をやったほうが良かったのではないかと思うような感じである。

その川上先生が時々先生たちに数学の問題を出す。でも、小学校の先生が大学数学レベルの問題など解けるわけがない。そこで、そこそ興味のある私にもつぱらターゲットが絞られる。

川上　：「前山先生、今日はこの問題です。」

黒板に問題が書かれた。円周率が 3.05 より大きいことを証明せよ。

なんだコリヤ。とっかりすらつかめないぞ。

川上　：「この問題は東大入試にでた有名な問題なんですよ。」

そんなの地方私立大の私に解けるか！

そのとき後ろで声が聞こえた。

響子　：「詩音、あんだね元気なのはいいけど、また音楽の先生困らせたんですってね。いい加減にしなさいよ。」

詩音　：「はい」

ぜんぜん、反省してない声で返事をする。

響子　：「まったく良くこんな仕掛け次から次へと考えつくわね。」

ああ、今日は音楽室のいたるところに共鳴する仕掛けを置いたらしい。どんないい和音も不協和音にして、しかも大音量で流す仕組みらしい。きれいなピアノがバイオリンを大音量でギーギー言わせる

ような感じらしい。

原理は簡単でピアノの固有振動数にあわせて反響、共鳴する仕掛けを音楽室のあちこちにしかけたのだ。

詩音：「え、だって、ただの和音だと男の人飛ばせないみたいなんだもん。それで、実験のため不協和音を作る仕組み作ったんだけど、たまたまスイッチ切るの忘れてただけだもん。」

響子：「んも〜！ わざと忘れたんでしょ」

詩音：「そんなことないよ〜」

でも顔にはわざとやりましたと書いてある。

響子：「ポッチもポッチです。仲のよい友達がいいことです。でも、友達だからこそ止めるべきでしょう。それを一緒になって協力してはいけません！」

ポッチ：「は〜い」

こちら反省の色はない。

この学校名物の悪友コンビである。数々のいたずら武勇伝はこの二人のなせる技である。本当に女の子か？ 本当に小学2年生か？ たちが悪いのは二人ともこの学年で1、2といわれるほど成績がいい。

川上：「どうです。降参ですか？」

前山：「むむむ、まてまて」

自慢げな川上先生。ここは先輩の威厳を見せねば、わからなくても考えている振りをしないと。

響子：「いいですね、今度やったら二人のお母さん呼びますからね。」

詩音：「はい」

ポツチ：「はい」

響子：「全くもう。今日は帰ってよろしい。」

詩音：「はい」

ポツチ：「ありがとう、先生大好き」

ああ、このコンビは末恐ろしい。

川上：「ま・え・や・ま・先生」

前山：「おお、これはだな、円を長方形と見立てて考えるんだ。」

楠木と神崎が横を通り帰っていく。

前山：「そのとき、長方形の短編が半径、長辺を円周の半分とする。」

川上がニヤニヤしてる。このとき方は違うのか。楠木がチラッとこっちを見る。向きを変えこちらにやってくる。

詩音 : 「それじゃ解けないよ」

前山 : 「は？」

詩音が黒板に書き出す。円とその中に内接する正八角形を書いて中心点にO、八角形の頂点ふたつにA、Bと書いた。

詩音 : 「この8等分されたピザみたいな部分に着目するの。」

詩音 : 「この中心部分の角度は45°。360÷8だからね。そして、中心からAまでの長さを1と仮定するの。中心をOとするとOAの長さは1ね。そして、円だからOBの長さも1。」

詩音 : 「そして、この縁の丸い部分の弧ABの長さは8等分に切った円周の長さでしょ。円周の長さは2πつまり2π×1なので、この部分の弧ABの長さはその8分の1だから、 $2\pi \times 1 \div 8$ でπ/4でしょ。」

前山 : 「ふむふむ」

詩音 : 「ここで弧ABと直線ABに注目するの。弧ABと直線ABだとどっちが長い？」

前山 : 「そりゃ、弧ABだ。丸い分だけ余計に長くなっている。」

詩音 : 「そうだよな。ということは弧AB > 直線ABを証明すればいいの。」

前山 : 「なるほど。」

詩音：「次に余弦定理を使ってABの長さを求めるの。」

詩音：「余弦定理だと $AB^2 = OA^2 + OB^2 - 2OA \times OB \times \cos AOB$ 。だから。」

詩音：「 $\cos 45^\circ$ は $2/2$ 。よってABの二乗 $= 2 - 2$ 。」

詩音：「 $2 < 1.415$ だから $AB^2 > 2 - 1.415 = 0.585$ でしょ。」

詩音：「ここでABより縁の弧ABの方が丸い分長いでしょ。だから弧 $AB^2 > AB^2$ も成り立つわけ。つまり、弧 $AB^2 > 0.585$ 。弧ABは $\sqrt{4}$ だから弧 AB^2 は $\sqrt{2/16}$ 。」

詩音：「つまり $\sqrt{2/16} > 0.585$ 。移項して $\sqrt{2} > 0.585 \times 16 = 9.36$ 。」

詩音：「最後に $3.05^2 = 9.3025$ だから、 $\sqrt{2} > 9.36 > 9.3025$ になるの。は0より大きいから $\sqrt{2} > 9.3025$ が成り立つわ。あるいは $\sqrt{9.36} > 3.059$ でもいいけどこっちだと電卓使わないとだめでしょ。」

詩音：「以上、証明終了。」

あぜんとする俺と川上先生。

詩音：「中学生の問題よね。簡単、簡単。」

ポッチ：「詩音、こんなところで道草しないで帰ろう！」

詩音：「ごめん、ごめん。じゃあね、先生。」

二人が職員室を出て行くのを見送る川上先生と俺。

前山：「ああ、確かにルートや三角関数は中学生だ。」

川上：「余弦定理は高校生です。」

前山：「でもこの問題は東大入試だよな。」

川上：「そんなの中学だとか高校だとか東大だとかどうでもいいです。彼女がまだ小学2年生なのが問題でしょう。こんな小学2年生いるんですか？」

呆然としているところに担任が寄ってきた。

響子：「ほんとですよ。でも彼女にしてみればこの問題、微分積分も虚数も自然対数も使っていない初歩的な問題なんですよ。」

川上：「はあ？ 楠木は微積や対数も判ってるんですか？」

響子：「この前、算数の時間、みんなが九九やつてるときに、つまんなそうに一人でノートに何か書いてたんですよ。何だと思えます？ 偏微分方程式といてたんですよ。もう、それ見たら自由にさせるしかないかなって。」

前山：「ふう。」

思わずため息をついた。天使のように可愛いくせに、性格は悪魔。

そして頭はノーベル賞級。とんでもない子を教えてるとあらためて思った。

.....

尚、この話は後日談がある。

川上先生がよせばいいのに「円周率が3・14より大きいことを証明せよ。」

と問題を出した。これに対して、詩音の友達3人が臨んで、一生懸命円に内接する多角形の辺の数を増やしていった。それぞれ6角形、8角形、12角形で臨んだ。だが、皆解けなかった。

詩音は、つまんなそうに黒板に書いた。

フーリエ級数において

$$\| 4 \quad \{ (- 1) ^ m / 2 m + 1 \}$$

よって $m < 10000$ において計算すると $> 3 \cdot 1414$ に収束するので3・14より大きい。

【証明終了】

詩音：「やっぱりフーリエって天才よね。」

そついい残してみんなを残して教室を後にした。

ポツチ：「おめでとう。川上先生」

川上：「何がおめでとうなんだ。あっさりとかれたぞ。」

ポツチ：「だって、詩音がフリーエ使ったもん。初めての本気モ―ドだよ。」

川上：「もしかして、今までは土俵にすら乗ってなかったのか．．．」

ポツチ：「うん、頑張ってたね。」

そういつてポツチも職員室を出る。

おしまい

短編職員室（後書き）

ポツチ：「浅野先生、やめるかもしれないって。」

詩音：「どうして？」

ポツチ：「児童を指導していく自信がなくなっただんですって。」

詩音：「芸術肌の先生だからね。教えるのより自分で極めたいんだよ。」

ポツチ：「ま、しょうがないよね。」

詩音：「それで、新しい音楽の先生誰が来るんだろう。」

ポツチ：「西野先生ってうわさ。」

詩音：「西野先生って、くるみちゃんのご両親のお弟子さんで、つかささんの同級生の？」

ポツチ：「こそ」

詩音：「プロジェクトがらみ？」

ポツチ：「たぶんね。今の浅野先生がプロジェクトに非協力的だからね。それで、睨まれて、いやになっただんじやないかな。」

詩音：「なるほどね。大人の世界はやっぱり怖いね。」

ポツチ：「うんうん。さて、気を取り直して次回のトリックエンジン
エルは？」

詩音：「数学の天才です」

ポツチ：「私出てこないんだよね〜。」

詩音：「まあまあ、その分次次回は主役だから。」

ポツチ：「ということでお茶のしみに〜」

5 - 6 天才少女(前書き)

この物語にでてくる薬名、治療法、一部の病名、一部の物理法則はフィクションです。

5 - 6 . 天才少女

まだ、9月の残暑厳しい頃の話。舞がアメリカに行く直前のある日のことである。

舞　：「それじゃ、草薙先生、私たち、今日は帰るね。」

舞が冬子と一緒に帰りのあいさつをしに私のところに来た。

草薙　：「ああ、気をつけて帰れよ。」

舞　　：「うん、先生はまだ、帰らないの？」

草薙　：「ああ、もう一人、特別に女の子の患者さんが訪ねてくるんだ。なんでも、ラインベルク症候群らしい。」

舞　　：「ええ！ それじゃ大変じゃない！ 即入院？」

草薙　：「いや、全然軽いらしい。別に熱もないらしい。ただ、東京の淳典堂病院の紹介状を持ってらしい。そこで、私のうわさを聞いたらしく、念のため、見てほしいということなんだ。」

舞　　：「な〜んだ。じゃあ、心配しなくてよさそうね。それじゃ、先生、あんまり無理しないでね。」

そういうと二人は帰って行った。その二人を見送りながらつかさが言う。

つかさ：「それにしても、いい子ですよ。舞ちゃん。健気とい
うかなんというか。あんなに不幸な生い立ちなのに。」

草薙：「ああ」

つかさ：「でも、もし、舞ちゃんのお母さんが元気で、舞ちゃんも
病気がなかったらどんな子になってたんでしょうか？ただでさえ頭
のいい、いい子なのに、もっと頭のいいいい子になっただんじょう
か？」

草薙：「どうだろうか？ 舞ちゃんはあんな環境だからこそいい
子に育ったかも知れないね。恵まれた環境だったら、逆に甘えてし
まいもつと聞き分けのない悪い子に育ってたかもしれないよ。」

つかさ：「そうですね。きつと、口ばかり達者で、大人の言うこ
とにかずに、好き勝手に生きるような子で、成績だけはそこそこ良
くって、先生たちにとっても扱いにくい子になってるかもしれ
ませんね。」

草薙：「大いにあり得そうだな。」

そういつて、私とつかさは笑いあった。

私は、患者がくるまでの少しの時間、休憩がてら本を読んで待つて
いた。患者さんの担任の先生が貸してくれた本で「ザ・良問」数学
編」という本だ。過去の大学入試の問題で良問と呼ばれる問題を
集めたものだった。貸してくれた先生は、小学校の先生ながら数学
大好きで、児童のお見舞いの時に先生が読んでいたのが気になって、
のぞいていたら貸してくれた。

結構、簡単に思えて難しい問題もある。その中のひとつの三角関数の問題にてこずっていた。

つかさ：「川上先生が貸してくれた本ですか？」

草薙：「ああ、結構難しいんだ。」

私は生返事で答える。

つかさ：「何が面白いのか私にはわかりません。草薙先生、ちょっと周産期センターに届け物してきますね。」

そういつて、つかさがナースセンターから出ていく。

草薙：「ああ。」

しかし、私はこの問題を解くのに夢中になっていた。それほどレベルの高くない大学の問題なのに解けない。半分意地になって解いていた。

女の子：「こんにちは。あ、川上先生の本。」

オーバーオールを来た見慣れた女の子が入ってきた。そして、私の本を覗き込む。

草薙：「なんだ、舞ちゃん、忘れものか？」

私はちらっと舞を見て、再び本に目を戻す。

女の子：「6分のだね。」

舞は私の質問に答えず、そう答えた。

草薙：「は？」

女の子：「だから、その問題の答え。」

草薙：「うそだろ。」

私は回答欄を見た。本当に6分のだった。

女の子：「余剰定理を使えば簡単に解けるよ。」

私はまじまじと舞を見た。どこから見ても舞である。

舞は、私から本を取り、パラパラとめくる。

女の子：「あ、この証明問題も難しいよね。でも、ここに補助線を引けば簡単。」

私が解けずに残しておいた問題をあっさりとく。

女の子：「うーん、複素平面上の問題かあ。でも、これもXYの二次元に置き換えてこうやって三角形を書けば簡単。後は外接する円を書いて中心点をもとめれば、ほらできた。」

あっけにとられる私を尻目につきつきと勝手に解いていく。

女の子：「この回転する立体の問題は難しいよね。暗算じゃ解けな

い。ちょっとペン貸して。」

女の子は右手にペンを持ち、積分の式を解いていく。うそだろ。小学生が積分をすらすら解くなんてありえない。だが、目の前でありえない光景が繰り広げられている。

女の子：「最初に外側の立体の体積を求めて、後で内側の立体の体積を引けば簡単に解けるわ。24立方センチメートルね。」

私はそのとき初めて舞のしぐさに違和感を感じた。いつも見ている舞ではない。そして、その違和感の正体に気づいた。

舞は左利きだ！ 右手にペンは持たない！

草薙：「君は誰だ！」

女の子：「あは、やっぱりばれちゃった。」

女の子はにつこりとわらう。

女の子：「楠木詩音です。番井美雪先生の使い魔です。」

草薙：「はあ？」

彼女が今日の患者だった。

.....

そのあと彼女から聞いた話は信じられないことばかりだった。

詩音：「これ、紹介状です。」

その紹介状の紹介者を見てびっくりした。そして私は、彼女をとなりのカンファレンスルームに誘った。周りに聞かれてはまずいと判断したからだ。

紹介状の中には手紙と小さなDVDが入っていた。手紙にはDVDを見ると書いてあった。

DVDをPCに入れて再生をする。そして、そこには信じられないことに美雪が映っていた。

美雪：「どうせ、春彦のことだから信じないだろうと思って、このDVDを持って行ってもらったわ。詩音ちゃん私の患者よ。どうやらラインベルグ症候群のようね。残念だけどこっちは薬も治療もなく治せない。だから春彦に見てもらおうと思って、この紹介状を書いた次第。よろしく頼むわね。」

目が点だった。大学入試をあっさりとく小学生。死んだはずの婚約者の美雪。ありえないことだらけだった。

美雪：「そうそう、彼女が舞ちゃんじゃないことを証明する方法を教えてあげるわ。彼女に大学入試の数学の問題を出してあげるといいわ。すぐといちゃうから。間違っても大学院の数学とか物理とかの問題だしちゃダメよ。春彦のほうが回答理解できないから。稀代の天才少女なんだから大切に扱ってね。あ、あと、詩音ちゃんは口ばっかり達者で、大人の言うときかずに、好き勝手にいたずらするから気をつけてね。」

詩音：「番井先生、ひどい。私初対面の人にはいたずらしないわ。それにちゃんと予告するわよ。」

でも、舞のふりをしてたよな。私は心の中でそう突っ込んだ。

美雪：「この後は、プライベートの話だからうちに帰って、ゆっくり見てね。」

そう言って、ビデオの中の美雪はバチツとウインクをした。

あつげにとられながらも、いったん止めて、詩音と名乗る子に向き直った。色々聞きたいことがあった。

草薙：「ところで、どうやって天国から来たんだ？」

詩音：「天国じゃないよ。対世界。時間の十二音階の平均律を使って時空共鳴させてベクトル空間を抜けてやってきたの。ベクトル空間は、もう一軸の時間しか流れない空間で、くるみちゃんの一場の理論で判明した空間だよ。」

草薙：「はあ？」

詩音：「この世界が10次元の世界だって言うのは知ってるでしょ？ そのうちの少なくとも二つは直行する時間軸じゃない。それでアインシュタイン方程式を発展させて、5つのテンソルにして…」

草薙：「まで、やはり質問内容が悪かったようだ。」

まるでどこか心の病のように支離滅裂なことをしゃべる女の子の口

を止めた。相当頭がいいのだけはわかった。そして、頭に浮かんだのは先ほどのつかさとの会話の疑問だった。

草薙　：「お母さんは元気にしてるかい？」

詩音　：「うん、和恵ママ元気にしてるよ。」

草薙　：「詩音ちゃんは、病気で長いこと入院したことあるかい？」

詩音　：「ううん、去年、お熱でて入院したけど、草薙先生の薬で3日で退院した。」

私は首を振った。さっき思ったことが間違いだと気付いた。環境が良くて也不必ずしも才能が開花しない？ とんでもない。舞と同じレベル、あるいはそれ以上の天才少女だ。

ともかく、私は気を取り直して診察した。やはり、ラインベルグ症候群の疑いが濃厚だった。去年キノーネを飲んでるから重症化しないようだった。しかし、このままでは悪化するかもしれないので薬を渡すことにした。

草薙　：「とりあえず、一錠飲んでおきなさい。急に悪化しないとも限らない。」

詩音　：「はい。」

草薙　：「今日のところはこんなもんだ。正確な検査結果は来週までに出てくる。また、来週来れるかい？」

詩音　：「うん、またこれる。だけど、明日も来るね。それと私が

来たことを舞ちゃんはもちろん、他のみんなに言わないでね。もし、私が出来たことが他の看護師さんたちに疑われたら、いとこが出来たって言うってね。それで、心配掛けさせたくないから舞ちゃんにだまってるんだって言い訳してね。」

草薙：「構わないけど。どうしてだい？」

詩音：「それは、お家に帰ってDVDの続きを見てね。そうしたらわかる。」

そういつて詩音ちゃんは帰って行った。

自宅に帰り、DVDの続きを見た。続きは、なぜ手紙を書いたのに返事をくれないのかとか、この間見た映画が面白かったから今度見えてみて、感想をDVDに録画して詩音ちゃんに持たせるとか、たしかにプライベートの話だった。

あんまり、くだらないので、途中で切ろうかと思ったが、それもなんなので最後まで付き合うことにした。そして、最後までみてよかったと思った。その内容は衝撃的すぎる内容だった。

- - - - -

草薙：「秋本先生、こちらへ。」

秋本がカンファレンスルームに呼ばれる。

草薙：「かのんちゃんの治療の件で相談したいことが。」

秋本が顔をしかめる。

秋本：「もう、我々でできることはないでしょう。後は上川ごども病院に託すしか。」

草薙：「ああ。」

秋本：「それとも、画期的な治療法でも見つかりましたか？ 例えば実は舞ちゃんは天使で天国から番井先生が現れて治療方法を提示したとか。あはは。」

私は渋い顔をして秋本先生を睨む。

秋本：「失礼。悪乗りですな。」

草薙：「このDVDを見てほしい。」

そう言つてDVDを再生し始める

番井：「やあ、秋本先生、久しぶりだな。元気にしてるか？ それはないよりだ。」

秋本が口をあけて草薙を見る。

秋本：「番井先生、うそですよ。本当に天国からDVDが送られてきたんですか？」

草薙：「俺だって信じられない。」

番井：「春彦は心臓のことはわからないというので、秋本先生に

話をしてほしいと聞いてびっくりした。秋本先生は淳典堂病院から花の丘病院に来てるのだな。」

秋本：「どういうことですか？」

草薙：「後で話す。でも、今はそのまま聞いてほしい。」

番井：「私も心臓のことはそれほど詳しくないので、専門医を連れてきた。秋本先生どうぞ。」

秋本：「????？」

DVDには信じられない人物が現れた。

専門医：「秋本です。よろしくお願いいたします。」

秋本：「あわわわ。」

草薙：「まさか、天国からご自分が現れるとは思わなかったでしょう。」

専門医：「斎藤かんの治療法について提言があるので、参考までに聞いてください。彼女は免疫抑制剤についてアレルギーを持っていません。多少の免疫抑制剤だったら大丈夫ですが、大量投与というのは危険性があります。そのため、カナダでの心臓移植を我々は検討しましたが、危険性があるので取りやめています。」

専門医：「それで我々は別の治療法を実施を検討しています。『血小板交換法』です。」

秋本　：「血小板交換法！　むちゃくちゃな。」

専門医　：「そう、びっくりされたと思います。なにせ、血液全取っ換えですからね。しかも、15歳以下でのエビデンスはありませんでも15歳以上なら実績があります。ここからは免疫学の番井先生に話してもらいましょう。」

番井　：「びっくりしただろう。もちろん我々が現れたことでなく、治療法のほうだ。我々は彼女の拡張性心筋症の原因は免疫過剰だと思っっている。そのため、いくら心臓を治療しても、根本原因たる免疫過剰を直さない限り解決しない。」

番井　：「多分、効果があると思われるが、残念ながらこちらの世界ではエビデンスがないため実施できていない。しかし、そちらの世界ならと思いDVDにしたためてみた。」

番井　：「質問等があれば、また、DVDに焼いて天才少女に持たせてくれ。」

DVDはそこで終わる。

草薙　：「パラレルワールドの美雪と秋本先生だ。向こうの舞ちゃんがこの世界と向こうの世界をつなぐ方法を見つけたんだ。」

秋本　：「まさか。でも、その話が本当かどうかは別として、この治療法は確かに真実味があります。血小板交換法は私も聞いたことがあります。直ちに淳典堂病院と上川こども病院に相談してみましよう。免疫抑制剤のアレルギーも気になります。」

草薙　：「ああ、できれば、かのんちゃんと両親も呼んで話をしな

いとな。」

秋本：「本当に番井先生から連絡来るとは。かのんちゃんのお母さんも大喜びでしょう。」

草薙：「そのまま、言えるか。こんなむちゃくちゃな話。とりあえず、検査と事実を淡々説明するしかないだろう。」

こうしてかのんは急遽北海道から呼び戻されて検査を受けることになった。

- - - - -

次の日曜日の夕方。私の前には女の子がにこにこしながら座っている。

名前は楠木詩音。むこうの世界の舞だと名乗っている。

舞そっくりな風貌。しぐさ。外見で見分ける方法は効き腕だけ。

ただし、中身が違う。舞の頭の良さもすごいが彼女の頭の良さは計り知れない。小学生のくせに大学入試の数学をすらすら解く。ありえない。

そこで、今日は隠れて川上先生と前山先生に来てもらった。川上先生が数学オタクなら、前山先生は物理オタクである。この子が実は「サ・良問〈数学編〉」を解法毎丸暗記していることを期待したからだった。小学生でも、それくらいはできる子がいるかもしれない。いわゆる意味はわからなくても丸暗記できる子であることを期待し

た。

それと同時に、本当に天才少女で理解して話をしているのなら、美雪がいうことも本当ととらえられる。そこで、数学と物理の質問をいくつかしてみることにする。

草薙：「詩音ちゃん、ちょっと教えてくれないかな。実は、知り合いから問題をだされて困ってるんだ。」

詩音：「どんな問題？」

草薙：「 $3 \cdot 14$ より大きいことを証明せよっていわれてるんだ。」

詩音：「とても、良問とは思えないひどい問題だわ。エレガントに解けることができない。しょうがない。これで証明するか。」

そう言って詩音ちゃんは が入る級数の式で解を導き出す。

詩音：「この式で、 $3 \cdot 14$ だろうが $3 \cdot 1415$ だろうが $3 \cdot 1415926$ だろうが証明できるわ。」

私は茫然とした。なぜ、証明できるのかさっぱり分からなかった。美雪が言っていた「出題者が理解できない」禁断の領域に入ったからか。

草薙：「じゃあ、次の質問。高度 1500 km で地球の周りを回っている人工衛星の時計の針は地球から見えて進んでる？遅れてる？」

詩音：「約 1000 億分の 1 秒進み続けてる。」

即答だった。

草薙 : 「それはおかしいよ。だって、猛スピードで飛んでいる人工衛星はウラシマ現象を起こすから、遅れなきゃおかしい。」

前山先生もむちゃくちゃだ。いきなりアインシュタインの相対性理論を質問に出している。

詩音 : 「それは特殊相対性理論だけで見てるわ。速度だけでなく加速度も考慮しないと。つまり、重力場を無視してる。地球の重力を計算した一般相対理論のことも考えないなきゃ。そう考えると、重力の影響の強い地球では時間が遅れるから、人工衛星のスピードで遅れる時間よりも、重力から解放されることによる時間が進むことのほうが大きいわ。」

何を言っているんだかさっぱりわからなかった。したかがないので、次の質問に進んだ。

草薙 : 「じゃあ、なんで時間は遅くなったり早くなったりするんだい？ 時間は一定じゃない理由は何だい？」

相対性理論の基本となる光速が一定で空間が曲がるというのが正解だ。

詩音 : 「それは時間に向きがあるからよ。」

草薙 : 「え？」

詩音 : 「誰が時間はスカラーだと決めたの？ 時間はスカラーじ

やなくてベクトルだよ。だから、絶対値は変わらなくても射影は変わるよ。だから時間は相対的なんだよ。そうしないで空間が曲がってという風に解釈すると、ブラックホールのシュバルツシルトの半径内の時間の流れが説明できず、特異点ができちゃうじゃない。」

草薙：「もう少し、詳しく教えてくれないか？」

詩音：「これ以上はこの世界では教えられないわ。ベクトル空間のバランスがこわれるから。」

そう言っつて質問タイムは終わったとばかり席を立とうとする。

前山：「ちょっと、まって！」

詩音：「やつぱり、前山先生隠れてたわね。川上先生もいるでしょ。でてきなさい。」

ふたりはしおしおと姿を現した。

詩音：「質問の内容がいつもの二人の質問とよく似てたから、だいたいわかったわ。まったくもう。」

そう言っつて詩音は腰に手を当ててぶんぶん怒る。

草薙：「あの、先生方、質問と回答の解説してくれるかな。」

川上：「信じがたいのですが、彼女は円周率をフーリエ展開して求めたんです。高校で習うレベルではないので大学入試では出てきません。まさか、フーリエを使うなんて。大学で理系を専攻してる子でも解けないレベルをあっさり解いています。」

一方、前山先生はまだ茫然としている。

前山：「そうだったのか。そういうことか」

一人つぶやく。

草薙：「前山先生？」

茫然としている前山先生の目の前で手を振って気付かせる。

草薙：「前山先生！」

前山：「ああ、ごめんなさい。歴史的瞬間を目の前にしたんです。許してやってください。」

草薙：「歴史的瞬間？」

前山：「この子、アインシュタインの相対性理論をきれいに否定したんです。」

草薙：「はあ？ でも、この子はアインシュタインの相対性理論で人工衛星の問題を解いたぞ。」

前山：「天動説と地動説の違いです。どちらも惑星の動きを説明できる。だけど、細部に問題がある。彼女は、それを地動説のように解いたんです。」

詩音：「さすが。前山先生、話わかる。こうすればシュレーテインガーの猫の問題も解けるでしょ。時間の向きが一定の方向の時

だけ観測可能で、電子の位置は確定するわ。でも、それ以外の時は観測不可能で確率的に位置を推定するしかない。単純でしょ」

前山先生が目を見開く。

前山：「うお〜！！ 現代物理学の矛盾が解けてる！」

草薙：「前山先生、この子の言ってることのレベルってどれくらいなんですか？ 大学院レベルですか？」

前山：「とんでもない。ノーベル賞級です。しかも、史上最高のレベルです。本当に君が考えたのかい？」

詩音：「まさか。私じゃないわ。ノーベル賞学者のくるみちゃん。統一場の理論をひもといたの。」

前山：「統一場の理論。TOEを解いたのか。それならここにいう理由もわかる。でも信じられない。」

草薙：「そんなにすごいのか？」

前山：「はい、少なくとも、彼女の話していることは、今地球上にいるどの物理学者よりもレベルが上です。アインシュタインとかニュートンとかに比類します。今彼女が説明したことは、現代物理学の最先端である相対性理論と量子力学の矛盾をあっさり解決しています。」

草薙：「正直さっぱり分からないんだが。」

前山：「もしかして、プランクでエネルギーがとびとびの値をと

るのも!？」

詩音：「そ、観測可能な時間の時だけエネルギーを計測できるから。」

前山：「うお。俺は今猛烈に感動しているぞ!」

私の質問に答えず二人で勝手に盛り上がっている。

詩音：「でも、これ以上はだめ。」

前山：「最後に教えてくれ。そのノーベル賞をとったくるみちゃんは今何を研究しているんだ?」

詩音：「ワープとタイムトラベル」

草薙：「そりゃいくらなんでもうそだろ。」

詩音：「ま、そう思っていただけで構いません。」

前山：「うそだろ、どうやって」

詩音：「最後の質問に回答しました。だからダメ。じゃあね」

そうやって詩音ちゃんはカンファレンスルームを出て行った。車いすの女の子がいるロビーの方に向かって行った。

草薙：「本当に本物なのか?」

川上：「数学は間違いなく本物ですね。」

前山 : 「物理は間違いなくだれも測れません。ニュートンの時代にアインシュタインの話をしているレベルです。」

草薙 : 「パラレルワールドも存在しているかもしれないのか。」

前山 : 「まさか。科学とおとぎ話は混同してはだめです。」

彼らには美雪のDVDのことは話していない。私の頭を疑われてしまつ。

草薙 : 「でも、美雪の言っていることは本当ということか。」

私は、かのと話をしている詩音ちゃんをみて美雪の提案受け入れを真剣に考え始めていた。

しかし、その提案は結局受け入れられることはなかった。

- - - - -

年が明け、再び天才少女は私の前に座っている。

詩音 : 「残念な結果だったけどね。私たちの存在も治療方法も突飛過ぎたからね。聞き入れてもらえなかったの当たり前。」

草薙 : 「…」

詩音 : 「運命としてあきらめるしかないね。」

草薙　：「天才少女にしては割り切ってるな。俺たちに隠してることあるだろう。かのんちゃんのことだ。不自然すぎる。」

詩音　：「そりゃ、私だってかわいそうだと思う。でも、私は医学のことはわからない。それに準備不足もいいところ。もう少し時間をかけられれば両方のかのんちゃん救えたんだけどね。」

草薙　：「現実はそのなにごくわかないか。」

詩音　：「死者にまどわされ生者にきづかず。」

草薙　：「？」

詩音　：「なんでもない。そろそろ、舞ちゃん、院内学級ボラんティアに復帰させていいでしょ。」

草薙　：「ああ、大分元気になったな。さすが自分に任せろいうだけのことはあるな。」

詩音が得意げな顔をする。

詩音　：「でも、まだ夜になると思い出して泣いてるみたい。やっぱり、最後にこの場所と向き合わないと解決にならない。」

草薙　：「でも、ハードル高くないか？」

詩音　：「もちろん、作戦考えてあるわ。」

詩音が草薙に作戦の中身を話す。

草薙　：「なら、許可しよう。お手並み拝見だな。女王様の使い魔さん。」

詩音　：「ありがとう。ちょっと派手にやるけどよろしくね。」

詩音はそついつと舞とおそろいの羽根のついたリュックを背負って帰って行った。

つづく

5 - 6 天才少女（後書き）

ポツチ：「もしかして、草薙先生あのこと知らないの？」

詩音：「うん！」

ポツチ：「うわゝ、ばれたら大変だよ。」

詩音：「詩音悪くないもん。うそ言っていないもん。」

ポツチ：「しかも、ご丁寧ヒントまで出してるから、気がつかない方が悪いってことか。」

詩音：「そゆこと。」

ポツチ：「ま、いつか。じゃあ、次回のトリックエンジェルは？」

詩音：「『詩音のミニコンサート』だよ。」

ポツチ：「また、予告の題名が変わったりしないようにね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045m/>

トリックエンジェル

2011年12月11日11時48分発行